
東方恐怖録

このこな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方恐怖録

【Nコード】

N3505M

【作者名】

このこな

【あらすじ】

昔々の遙か昔に放り出されてから自由に生きるものの何かと巻き添えを喰らったりしてしまう。

しかしその中で微々たる心情の変化や、自分を知ってゆく事で得たものを使い、争いたくないのに何故か争いで解決するはめになってしまったり、波瀾万丈な生き方のしてきた大妖怪の少女のお話。

自己とは何だろうか（前書き）

東方の2次創作ですが前半はあまり東方な住民は出てきません。

知識が至らず設定など不自然な点があるかもしれませんが、あらかじめご了承ください。

自己とは何だろうか

遙か昔、世界が創られてゆく中、各世界に1つ、形はどうあれ『恐怖』をおかれた。

ある世界では邪神、魔物、呪い、そして妖怪。

とある世界で妖怪とおく時、どうしても必要なものがあつた。

人格。

それを最も近い平行世界から連れて来た。

ある日の放課後……とは言っても自分の仕事が残っていたただけだが、1人寂しく帰ることになった。

普段は友達が一緒だが、居残りだから先に帰らせた。

もう空も暗くなり始め1番星が光ろうとしていた。空も朱から青黒く染まりつつあった。

とぼとぼと歩いていると、ふと気が付いた。

静かすぎる。

鳥の声、人の声、風まで黙っていた。

その静かさに恐怖を感じ始めていた。

人が見えた。

「あの……すみませ……ん……」

止まっていた。

落ち着いて周りを見ると、みんな止まっていた。

違う。

自分だけが動いている。

そう分かった時、今まで小さかった恐怖が孤独感とともに爆発した。

誰かいなか。

誰もいないか。

探した。

見付からないかもしれない。

走った。

いない。

いない。

いない。

自分しかないない。

「は……はは……」

言葉が出なかった。

地面に座り込み、適当に寄り掛かる。

そして、そのまま眼を閉じ、寝てしまった。

眼を開けると星空が映った。

いつの間に地面に転がったんだろうか？

寝相は悪くなかったはずだった。

「あ……」

風の音がした。

木々を揺らすその音は快いものであった。

ふと気が付いた。

寝た時に周りに木があっただろうか。

あったかもしれないが鬱蒼と茂ってはいなかったはずだ。

森だった。

「(っ)……どこ？」

そう、自分の声を聞いて違和感を持った。

高い、幼げな声。

呂律が辛うじて回る程度。

そういえば、木が大きく見える。

ゆっくりと立ってみる。

地面が近い。

自分が小さかった。

「こんな、小さかったかな？」

少なくとも自分は学生で……………

自分は……………

誰だろう。

分らない。

けれど、とりあえず落ち着こう。

まず、自分はなぜか少し大きい着物を着ていて、見た目は……女の
子ではあるだろう。

たぶん、歳は10に満たないだろう。

髪は長く、腰まであり、その色は……暗くて分からない。

さて、自分は何者だったか。

改めて考えよう。

分からない。

忘れてしまった自分に少し恐怖を感じた。

『恐怖』を。

その時、今の自分を理解した。

今の私は妖怪であり、恐怖そのものであること。

私には『恐怖を操る程度の能力』があること。

具体的には

対象の恐怖を知ること

対象の恐怖を具現し、操ること

今まで知った恐怖を操ること

他にもあるだろう。

それが分かった途端、ある『恐怖』が私に流れて来た。

『死』だ。

どうやら、たくさんある恐怖は自然と対象になるらしい。

私は暗闇でも少しは目が利くが、とりあえず朝まで待つ事にした。

日の出だ。

眠れなかった。

とりあえず耳をすませ水の音を探した。

自分を見たかった。

水に映るかは分からないが喉も渴いたので探す。

見つけた。

その方向に駆ける。

速かった。

どうやら身体能力が高くなっているようだ。

成長するだろうか。

身体はしてほしい。

閑話休題。

川を見つけた。

けれど水が清んでいて私を映す事はなかった。

ただし、髪の色は黒い事は移動中に分かった。いやでも視界に入るから。

お腹が空いた。

しかし、生き物の気配がしない。

そういえば、ここまでの移動中に生き物に遭遇していない。

もしかしたら私が恐怖そのものだから本能的に避けられているのかもしれない。

とりあえず、私は不慣れながらも妖力を抑えた。

しばらく川沿いを歩いていると猿のような生き物のコロニーがあった。

見るといくらか食べ物貯蔵してある。

私は盗む訳にもいかないので、同じ物を探してきて食べた。

2度目の朝。

目を開けると簡単な服をらしき物を着た人らしき生物が私を囲んでいた。

「メシ……」

「えっと……」

何だか私が食べられそう……。

「タベル……」

じりじりと近寄って来る。

「こ、来ないで!!」

咄嗟に妖力を開放し、放つ。

ドサリ、と、当たった奴が倒れた。

私は分かった。

死んでいる、と。

その時、私の中で妖力が大きくなった。

当たらなかった者達が私に恐怖したから。

恐怖は伝染する。

語り継がれ、それは大きくなる。

今日は、誰も近寄って来る事はなかった。

しかし、翌日、私は目を疑った。

文明とは排他的である

目が覚めると、やたらと騒がしい。

「村が……いや、街が出来てる……」

都会とは言い難いが、たしかに多くの人の気配がする。

私は、そこから少し離れた位置で寝ていた。

だから気づき難かったのだろうか。

つい昨日まで狩猟耕作生活であったのに、機械を使い農業を行い、加工食品工場まである始末だ。

私は何千年眠っていたのだろうか。

いや、一晩だ。

裏付ける事が今見えた。

ビルが数時間程で1つ、また1つと出来ている。

によきによきと。

見ると一挙一動全てが速かった。私も同じくらいだけれど。

さらには、ここが私の知る世界とは別であるだろう、と推定できる。少なくとも一晩で古代から色々とすつ飛ばして現代になる程に発展は早くない。

私は興味本位で街、いや、都市へと降りた。

「お嬢さん、変わった服を召していますね」

どこでも軟派はいるものか……。

私の身長はたぶん120cm。相手は170cmはあるだろう。

「このロリコン……」

「何か言ったかい？それよりも僕と遊ば」

「お断りします」

「そ、そうかい、じゃあ……」

軟派は去っていった。

さらに歩いていると、豪邸を見付けた。

表札には

一八意一

なんて読むんだろう？

「あら、お客さん？」

後ろから話し掛けられ私が振り向くと、女の子がいた。

「この家の？」

「そーよ」

私より（少し）見た目は大きいくらいか。

「あなた、ここらへんでは見ないわよね？」

「まあ、その森にいたから……」

「変わってるのね」

人じゃないしね。

「この人間は話すのが速いはずなのに、あなたは遅いのね」

「え？」

「え？あなたは知らないの？この住民は生まれてから能力持ちに個人の時間を早めてもらって、薬で寿命を引き延ばすのに」

「知らない」

私は初めて、この場所に來たから。

「まあ、それもそろそろ終わるわ。その能力持ちも寿命だろうし、これだけ文明も発展しているからね」

「色々勉強になったよ、ありがとう」

私は正直にお礼をした。

私たちは以来、頻繁に顔を合わせることになる。

とある日のこと。

「そういえば自己紹介はまだだったね」

「そうね。私は八意＊＊よ」

ん？名字は『やごころ』と聞こえたけど……

「名前はなんて？」

「＊＊。……あなたには発音出来ないらしいわね。稀にいるのよね。……まあ、いいわ。不便だろうから永琳、と呼んでちょうだい」

「えーりん……か……。……名字は『やごころ』とは読めないよな……」

私は呟いた。が、えーりんの耳に入っただけらしい。

「あなた、文字が読めるの？」

「まあ、読めるけど……」

「あなたに興味が湧いたわ。」

「なんで？」

興味が湧かれるような事はあっただろうか。

「後で詳しく教えるけど、ここの識字率は高くはないの。読めるのは一部の高民層とかだけ。書けるのは、その中で一部。そこら辺の森からぽつと出たあなたが読める道理がないわ」

えーりん頭いいよね、絶対。

「そういえば、あなたの名前を聞いてなかったわ」

名前……？

名前……か……。

「ない……」

「ない……？変わった名前ね」

「いや、名前がない……」

「冗談よ、冗談。産んでくれたの親はいないの？」

親……か……。今の私にはいないかも……。強いて言うなら、この世界か理か……。

「はあ……」

私は溜息を零した。

その時だった。

大きな何かが消えた。

それは、この都市に薄々感じていた力。

「えーりん、街から何か消えた!!」

「じゃあテレビ見ましょう」

えーりんは携帯電話みたいな物を取り出す。

『速報です。たった今————が亡くなりました。これによつて私達は都市の外からの敵に対して自衛が必要で……』

「大変だわ」

「どうしたの？」

「ここに結界を張っていた人が亡くなって、外部と遮断がされなくなったわ。これで色々と変わるわ」

都市で徐々に死の恐怖が増えてゆくの分かる。

同時に私にもたくさんの恐怖が襲う。

森で様々な恐怖が妖力となり形を成してゆく。

私以外のたくさん妖怪が生まれた。

「うあっ……」

私を吐き気が襲う。

「あなた、大丈夫!？」

とめどなく恐怖が連鎖し、伝染して、大きくなる。

私は、私を抑えるのに必死になった。

力が……抑え……られない……。

「えー……りん……、逃げて……。ワタシ……は……」

「あなた、何を言って……。っ!？……あなた、髪が朱く……目も……」

まだ恐怖は強くなる。

「これを飲んで。効くかは分からないけど」

えーりんから錠剤を渡されたので藁にも縋る思いでそれを飲み込んだ。

すると不思議と苦しみがなくなり、髪（と、たぶん目）が黒に戻った。

「ありがとう……。それで、さっきの何？」

「能力の暴走を抑える薬ね。あなたが能力持ちなのも分かったし、一石二鳥だったわ」

「ねえ、えーりんも何か能力を？」

「あらゆる薬を作る程度の能力よ。知識と材料はあるけど」

「じゃあ、えーりんが作った薬か……」

「あなたの能力は？」

「私の能力か……」

「私がさっき何で暴走したと思う？」

「質問し返す。」

「えーりんは少し考えてから身震いをした。」

「永琳は『不安を操る事』を恐怖した。それを感じ吸収した。」

「えーりん、私は不安を操る事はしてないよ。不安からくるもの……、それが私の許容を超えてしまったただだから」

「あなたの能力は恐ろしいわね……」

「ありがとう」

「しつこいようだけど……あなたの名前は？」

今、えーりんのお部屋にいます。

「だから……まだないの！！」

「本当に？」

「だから……」

こんな会話をあれこれ半日は続けている。

からかわれてる気もするけど。

ちなみにえーりんの部屋は歳にはあわず、壁は厚い本だらけで、とても同年代には堪えられないような光景だ。

閑話休題。

自分の名前を自分で考えるのは難しい。今の私の場合名字も必要で苦労は2乗となっている。

「名字は後でいいと思うわ。名前よ、名前。名字なんてなくてもいいもの、名前と違って」

それもそうだ。うん、そうしよう。

「とは言ってもね」

「朱色……夕日……宵闇……赤……血……化け物……かゆうま……。
ダメだわ、思い浮かばないわね」

えーりん、『かゆうま』って……。私は妖怪ですよ？……化け物だ
ろうけどさ。そもそも、えーりんには言っていないし。

「名は体を表わすのだから見た目から考えないとダメよね……」

「その言葉は名前から人の本質云々じゃないっけ？」

「あなたという人物はもうできてるから本質云々から名前をつける
しかないじゃないの」

そーですね。

「まあ、今日は遅いし、どうせ家もないでしょう？泊まる？」

外を見ると既に真っ暗になっていた。

「よろこんで」

それから名前が決まるまで10日間、私は泊めてもらった。

恐怖は渦巻き、いずれ形を成してゆく。

自我を持ち始めたそれらは人を襲うようになっていった。

人々はそれらから恐れ、また、対抗手段を練り上げていった。

人々は恐れ弊害を恐れるが、それは第三者にも降り懸かる。

妖怪と関わりのない人たちと……

「また……人が物騒な物を作ってくれたよ……」

「しょうがないわ。妖怪からの自己防衛よ。菓飲む？」

「ああ、慣れてきたから大丈夫」

他でもない私だ。

ちなみに散々悩んだ結果、私の名前は決まった。

私の名前は陽奈^{ひな}。名字はまだない。

文明とは波である

あれから数年経った。

妖怪からの人への被害も年々増加し、また、妖怪も力のないものは消されていった。

妖怪も篩にかけるように強いものが残り、対して人は戦略兵器を次々と開発。

えーりんは治療薬の精製と多忙になった。

「妖怪は何でいなくならないのかしら」

ふと、えーりんが愚痴を零す。

「んー、妖怪って人がいる限り発生し続けるから。妖怪の力の源と根源は生物の負の感情だし、全ての生き物を絶滅させないと……」

「そうなの？」

えーりんが手を止める。

「そうそう。現に私だってさ……、ここの人たちの恐怖を糧にしてるし」

「あなた、妖怪だったの？」

……しまった。

えーりんは妖怪には特別な嫌悪感はないものの悪いものとしては見ている。

「てっきり人間かと思ってたわ」

そう一瞥して作業に戻る。

「通報とかしないの？」

「陽奈は害がない妖怪なもの」

「ありがとう。……あ、それ手伝うよ」

私は今日は森にいる。

たまに私から訪れるのだが妖怪が集まり、人間対策部、といったかんじの組織を作り、会議や指示をしている。

「なー、陽奈さん」

「なに？」

話しかけてきたのは『あらゆる武器を扱う程度の能力』を持った、
都さん^{みやこ}。

ちなみに彼女の能力は武器がないと使えない、あしからず。

「陽奈さんの力でどーにかなるんかと思ってなー。不安やら恐怖やら操って防御に専念させられへんの？」

周りも頷く。

妖怪は人間を全滅させるとこちらも危ういのが分かっているので基本は守りだ。稀に食事に行く奴もいるけど。

人間って美味しいのかな……？

まあ、いいや。

「で、不安や恐怖云々ね。私もしてみたけど誰かみたいに戦闘好きだったり、攻めも守りのうち、とか考えてる奴は一層攻撃してくる」

と、角が一本の鬼、紅蓮を見る。

彼は『切れない程度の能力』、刃物で傷をつけられない奴だ。だが、彼自身が刃物で人を切れない事でもある。もろ刃な剣だったりする。

あと、引き裂いたりはできるらしい。

ちなみに頭もキレない奴でいつも力押し、けれどムカつくとすぐにキレル、戦闘狂、といった鬼らしい鬼だ。

「正面から突撃がしたい」

「ダメ。紅蓮はこの前ミサイルで死にかけたでしょう？」

「リベンジしたい」

「じゃあ正面からは最終手段ね。もう少し待ってて」

「む……、分かった」

紅蓮は素直に黙り込む。どうせ、その時の妄想でもしてるのだろう。

「せやけど、どーするの？」

都さんの問いは返し難いものであった。

「じゃあさ……」

「えーりん、今日は森にいてくれない？」

「何を考えてるの？」

う……、えーりんは騙せない……か……。

「今日から妖怪は仕掛ける。えーりんには死んで欲しくないから」

「そう。まあ、落ち着いて。どちらにせよあなたはこの家にはいられないのよ」

「どうして？」

「ばれたわ。近頃、妖怪に情報が漏洩。妖怪が都市にいないかを探ったら、よく素性の知れないあなたがあぶり出されたわ」

冷や汗が止まらない。

「じゃあ、えーりんが危ないだろうから私は森に帰るよ」

「ありがとう、陽奈。また、会いたいわ」

その夜、時は満月。

戦争だ。

いまや、異常に発達した文明、名残惜しいが壊す。

「妖怪風情がああ!!」

人間に容赦なく切り捨てられる。

けれど……

「あなたは私に恐怖した。だから私には勝てない」

私は人間に死を与える。恐怖ではない、そのものを。

「ひーなー、こいつらどっから沸いて来るん？」

「知らないよ」

都さんが人の頭を口にしながら聞いてくる。

ミサイルが飛んできた。

やべー、怖いなー。

「効かないよ……」

私は打ち出されたミサイルに直撃した。

「陽奈!？」

「おー、痛い痛い」

彼らは元気な紅蓮を見て“ミサイルが効かない”と恐怖してしまった。

「ロボットでも連れて来い!!」

私は撃った奴らにミサイルを直撃しながら近づき、気絶させた。

「あとは任せたよ、都さん」

ちなみにミサイルはその後に都さんが弾切れまで使っていた。

徐々に人間側が押され、どこまで逃げようとも追い掛けた。

結果、有能な人間どもは空へ……月へと逃げた。

逃げた人にはえーりんもいたが、前日に暴走を抑える薬をいくつか貰い、別れを告げた。

さらに、えーりんからの情報によると、

他にも村などはあるが未だ狩猟を糧にしている。

ここだけが異常な発達。

との事。

つまり、ここを潰せばいいだけで人間は他にもいる、ということ。

ここは全滅させよう。

元々、私はえーりと暮らしている時から妖力を抑えていた。けれど恐怖を糧にはしていた。

その中で私の妖力は限界のない蓄電池の如く蓄積され、甚大なものになっていた。

私が妖力を久し振りに全力にすると木々が、空気が軋んだ。

「あれ、陽奈って髪は黒かったよな？」

そう、都さんが近付いてくる。

「来るな!!」

私は叫んだ。

その私の朱い髪が妖力の異質さを物語っていた。

「なんでー？」

まだ来る。

都さんの動きが途中で止まる。

「あ……、ひ……な……。私、死にた……」

私はすぐに妖力を抑えて都さんに駆け寄った。

「だから言ったのに……。私は力は使いこなしていないから恐怖も無意識に漏れちゃうの。だから……」

「すごく……怖かった……」

「私は一人で頑張るからみんなをよろしく」

「陽奈、頑張ってなー」

都さんは明るい笑顔で言ってくれた。

再び妖力を全開にする。

髪が、目が、朱く染まる。

もう、ここにはえーりんはいない。

私は街に恐怖を振り掛けた。

自殺する者、殺し合う者、確実に数は減っていった。

恐怖は恐怖を生み、私の力は尽きる事はない。

しかし、ある程度まで死ぬと効かない奴らが抵抗してくる。

私は直接、死を撃ち込む。

しかし、こちらはすぐには効かないが即死させる、けれど相手はレ
ーザー砲。

ぶっちゃけ勝てません。

それでも数は減っていった。

ほとんどが私と都さんと紅蓮によるものだけけれど。

そして、遂に人と妖怪は決着がついた。

都市には、ある一人の狂人がいた。

彼はただ狂気を受け入れ、そのままに動き、当然、捕まった。

判決は死刑であつたが殺されなかった。

一挙一動で人を殺す術を知っていたからだ。

そんな彼に転機が訪れる。

突然、釈放された。

とある武器を持たされ、妖怪を根絶やしにしてこい、と、そうしたら一生自由だ、と。

彼は自由を求めた。

抵抗する人間は、もう目の前で最後だった。

無抵抗な人を殺したりはしない。逃げたら襲わない。どうせ、飢え死にだから。

「こいつら潰したら宴会しよう」

「紅蓮は宴会好きやな」

今まで核やら水爆やらも使われたが人々の恐怖から学んだ私がどうにか処理した。

おかげで『放射線を操る程度の能力』とか『威力を操る程度の能力』とか手に入れてしまった。

前者ともかく、後者は運動エネルギーや化学エネルギーを操れるが物体そのものは変えられない。刃物で刺されたら、刺さり方は弱くとも刺さる。耐久性は変わらないからだ。あと、毒とかは勿論効く。そして、ゼロにはできない。

余談はさておき、目の前の人間がみんな切り捨てられる。

「おい、陽奈。人間が人間を殺した」

たった一人の人間がその中で立っていた。

彼からは恐怖を感じとれなかった。

「あいつ、危険だよ」

「そうか。俺は相手が強ければそれでいい」

相手の獲物は刃物だし……

「でも、陽奈が危ない言ってるんや。注意せーやー」

「おう」

紅蓮はその男に歩み寄る。

男はけらけらと笑い出した。

「鬼かぁ……、お前も俺のものになれよ……」

「俺の名は紅蓮。残るはお前だけ。さあ、楽しもうじゃないか」

紅蓮は名乗り出る。

「ああ、俺も名乗るのか……。俺は名前はない。捨てられた。……
：お前も俺の『殺した奴の身体能力を追加する程度の能力』の糧になれ」

ニタァ、と笑った。

狂ってる。精神も、能力も。

「さて、いざ尋常に……」

「シネ……」

紅蓮の両腕が切られた。

「なっ……。……ぐああああああ」

あの紅蓮が切られた。

そのまま流れるように刃は胸に吸い込まれた。

「都さん、死なないでよ!!」

私はあらゆる恐怖を解き放ち、彼を襲った。

「髪の色が変わるなんて、さすが妖怪だ」

効いてない!!?

「あいつ、また強くなるよ……」

これで紅蓮が死んだら男は鬼の力を得る。

最終手段だ。

「みんな、目を閉じて!!」

「陽奈、大丈夫なん？」

「うん、今思い付いた」

私は『放射線を操る程度の能力』で男の周りの空気を何億倍、何兆倍へ汚染させた。

妖怪ですら命を落とすレベルにまで。

終わった……。

男は笑いながら体中の穴という穴の全てから血を吐き出し死んだ。

あまりにも気持ち悪い光景だ。

武器は紅蓮に刺さったまま。

私は空気を清浄にして、火力を最大にした鬼火（妖力で灯す炎）で男を焼却した。

「みんな……、終わったよ……」

私はゆっくりと告げた。

私たちはゆっくりと紅蓮に近付いた。

「俺の相手……奪うなよ……」

虫の息なのに……

「もう喋らないでいいからっ……」

「……ごほっ……陽奈の黒い髪は綺麗だな……、今初めて知った……」

そんなことはいい。誰か……

「俺は、もう……。都、最後に……。俺を切った武器は何だったか

……教えて……くれ……」

「うん……、………んっとな、触れた面を分解して引きはがす。それによって切断したかのように見せる。そんな武器や」

切れなくとも、切られる……か……。

「そうか……。よく……わから……ん……なあ……」

ゆっくりと紅蓮は目を閉じた。

しかし、まだ終わってはいなかった。

しばらくして小妖怪が私にあることを伝えに来た。

都市から出られない。

透明な壁が私たちを閉じ込めた、と。

嫌な予感がした。

バリアだ。しかし、何の為に？

まあ、人間がいれば何とかなる。

バリアまで行ってみたが機械制御。しかも壊せない。装置も外。

そして、何かのカウントダウンをしている。

“N・B・爆破まであと〳〵”

兵器だ。

だけど、何だ？

「都さん、これがどんな兵器か分かる？」

「む……、う……」

ヤバイ兵器なのは分かるが、核も水爆も効かなかった。

これからは残留している恐怖も読み取れない程に薄い。

「陽奈、分かったわ。でも、ちゅーせーし爆弾でなんや？爆弾なのは分かったけど」

今、な、ん、て？

「中性子爆弾!？」

「なんで、そんなに驚くんや？陽奈ならどうにか出来るんやろ？」

「分からない……」

野郎……、機械に作らせたな。道理で恐怖を感じ取れないわけだ。

中性子爆弾。それは別名サイレントボムと呼ばれる、爆発音のしない爆弾。

原子核を構成する中性子を飛ばすことで組織の接合を破壊し、生物を確実に死に至らしめる。

どんな遮蔽物も中性子の前ではトンネル同然。効果範囲から逃げる以外に助かる方法は、ない。

事前に止めればいいがそれもできない。

最後の最後に残しやがった……。

事前に人は避難した、と。

空だ。

「飛べる奴は、みんな出来る限り高く飛んで!!」

だが、それも意味はなかった。

透明な天井がある、と。

私の『威力を操る程度の能力』でも莫大な原子未満の動きは操れない。

「陽奈、どないしたん？」

「都さん、みんなを任せたよ」

私は爆弾へ足を運んだ。

力技でブッコワス。

それが私の考えた手段。

利き腕の右腕を犠牲にして、ドデカイの一発。どうせ、私は妖怪だからすぐに生えるだろう。ちょっと不便だが妖力があれば大丈夫だ。

私は莫大な妖力を生死のぎりぎりまで削り、それを一発の威力に注ぎ込む。

喰らえ、渾身の一発。

「威力無限大、殴打一撃!!」

音を置き去りにして殴った結果、爆弾は粉々に碎け散り塵も残らなかったが、私の腕も肩から粉々に碎け散り塵も残らず血が弾けた。

私は、そのまま痛みと妖力の枯渇で意識を手放した。

「ん……………」

私はどれほど気を失っていたのだろうか。

「あ……陽奈、起きたんだ……」

都さんにひざ枕をしてもらっていた。

けれど様子がおかしい。

「あのあとね、陽奈……が……倒れて……る間に……人間たちがやつ……………て来て、ほ……………とんど殺さ……………れ……………てもう……………た……………」

都さんの妖力が徐々に失くなっていき、死が近付いているのが分か

った。

「なんで私は無傷なの？」

「たぶん、最終兵器を……壊したから殺せないと恐怖された……んじゃないかな？」

私は自分の持つ恐怖を探した。

『殺されない程度の能力』

これを都さんに振り掛きたい。

でも、できない。

自分が憎かった。何も出来なかった自分が。

「生きてーや、陽奈……」

死にたくなった。

私は泣いた。

泣いて、泣いて、

ずっと泣いて、

そのまま眠りに落ちた。

目が覚めたら……

私はまた寝ていたのだろう。

けれど、どれほどの時が経っているのかは分からない。

今、分かることは……、

「ここ……どこ……？」

腕は、もう生えている。

そして、ここは何かの小さい建物の中だ。

とりあえず私は湿気くさい場所から出た。

崇められた。

私がいた場所は祠だった。

どうやら神様扱いされていたらしい。

なんでも、私の周りにいると動物が寄ってこないし、天災などみんなが恐れるような事が起こると私の髪が朱くなって収まるとか……。

「あなたさまは何千という四季の移り変わりの中、今と変わらぬ姿であった、と伝えられております。さらに我々を降り懸かる災厄からも守ってくださいました。ですから、あなたさまを神として崇めたのです」

お歳を召した老人が私に説明してくれた。

「私は化け物だよ。神でも人間でもない」

「で、では、あなたさまは……」

「私の名前は陽奈。恐怖を操る妖怪……」

「妖怪……ですか……?」

「そう、妖怪」

変だ。

人間ならば妖怪と聞けば逃げるか退治、抹殺するのに。

「不老の妖怪もいるのですか」

「えっと……?」

どうやらこの村は少数だが妖怪もいるらしく、当然ながら半人半妖もたくさんいるらしい。

「あなたさまは……」

「陽奈でいいよ」

「陽奈様は少なくともこの村が出来る前からは生きていらっしやる。妖力は歳に相当して強くなるはずですが……」

「弱い、って？」

初耳なんですけど、それ。

「はい」

「まあ、抑えてるから」

「では一度だけでもいいので実力を見せていただけませんでしょうか？」

何をしろと？

目の前には金髪ショートで全身黒服の少女がいる。

村で一番の実力者と戦えと言われ、この少女が呼ばれた。

「私の名前は陽奈。恐怖を操る妖怪」

「そーなのかー」

「いや、そっちも名乗ろうよ」

「ルーミア。宵闇の妖怪なのだー」

闇か……。

万人が恐れるもの。

だから彼女が強い、と。

「しょーぶなのだー」

周りが闇に包まれてゆく。

昼間なのに。

すぐに暗闇に包まれてしまった。

「すきありなのだー」

後頭部にぽすつ、と何か当たった。

取りあえず掴んでみる。

「捕まったのだ」

闇が晴れてゆく。

これで終わりか？

「まだ終わらないのだ」

突然ルーミアの腕の感触が無くなった。

闇だ。ルーミアの腕が闇に変わった。

反則じゃないの？

「いくのだ」

闇とは無限の質量とゼロの質量を持っている。

闇が私にのしかかる。

避けた部分の地面に小さな穴が空く。

隙なく、細かな闇が飛んできて私の頬を掠めた。

対して、私が頑張って近付いて殴っても空をきる。

「いい加減にしろー!!」

私は今まで抑えていた妖力を爆発させた。

例の如く朱くなる。

爆発の余波が闇に当たると闇が掻き消えた。

「弱点みーつけた♪」

私はルーミアに、飛ばしてくる闇を妖力で相殺しながら、近付いて、

「わるいここには……お、し、お、き♪」

威力を幾分か上げた妖力の籠ったデコピンを額に一発。

「ううー、負けたのだー。痛いのだー」

ルーミアは額を押さえて涙を浮かべている。

デコピンをしたらルーミアが錐揉み回転しながら幾つかの家を貫通

して、ぶっ飛んで木に激突した。

一同と私はア然としたよ、うん。

「ごめんね、ルーミア」

私は幾らか妖力をあげて、治癒力が上がるように促した。

「ルーミアは陽奈に弟子いりなのだー」

「どうしてそうなる!？」

「全力のパンチが効かなくて、奥の手も破られて、何より優しいのだー」

パンチって、あの、ぽすっ、てやつか？

「分かった。お姉さんが師匠になろうではないか」

るーみあかゝ
なかまになった。

事実、ルーミアは強かった。

闇を操るわけだから昼間ならともかく夜は気付かぬ内に術中に嵌めることができる。

だが、活かしきれていない。

身体能力が低い。能力に依存していたためなのか他が疎かだ。

身体能力の向上は基礎であって、勝敗の大きな要因となる。

それですは……

「村を百周走る！！ただし、飛ばないこと、能力を使わないこと！」

「わかったのだー」

元気に走るルーミア。

ほほえましい光景だ。

「陽奈様、私にも何か教えてほしいです」

少女が1人寄って来た。

「何を？」

聞いたら黙ってしまった。

「じゃあ、陽奈様のお話を聞きたいです」

「昔話か……。たぶん、難しいだろうな……」

「何がですか？」

「昔はね、ほとんどの妖怪が人に勝てなかったんだよ」

小妖怪は雑草のように狩られたな……。今とは違う。

「でも陽奈様は……」

「人が今より強かったんだよ。一人でルーミアなんか倒せちゃうよ」

ルーミアは良く評価すれば中妖怪レベル。中の下だ。

「ルーミアを“なんか”だなんて！あの娘は自然発生した妖怪ですよ！？」

「ルーミアは誰が育ててた？」

「それはもう、村長が我が子のように……」

「妖怪の中でも純粋な奴らは学ばないと育たないんだよ!!」

私がどれほど小妖怪の育成に苦勞したか……。

「すみません……」

「ごめん。昔話だっけ？」

そうして平和な日々は過ぎてゆく。

「ししょー、終わったのだー。くたくたなのだー」

ルーミアも体力は大分ついたようで今やノルマを上げて300周させているが時間は初めの半分以下にまで縮まっている。

「じゃあ、お昼ご飯にしようか」

「わーい」

私たちは家に帰った。

初め、この村に住んでいた時は家がなく、ルーミアと村長の家に世話になっていたが、さすがに悪いと思いルーミアと作った家だ。

いろいろと細工をして、かなり丈夫に作ったためか、私が全力で殴るくらいしないと壊れないだろう。

「今日は夜食も行きたいのだー」

ルーミアが家に入る前に言った。

ルーミアは普通の妖怪だ。だからこそ、妖怪としての食事も必要であって、どこかの黒髪の恐怖妖怪とは違う。

私は食べる必要はない。

周りに恐怖があればいいから。

というか食べたくない。

だからこそ、目の前で食べるなどと言わないが毎日は食べないように月に1〜3回にしている。

つまり、まとめると夜食＝人間。

前回行ってから2週間ほど経っているため良いだろう。

「今夜にでも行こうか」

「やったのだー」

「じゃあルーミア、今回はあの人ね」

私は夜な夜な明かりもなしに歩いている槍を持った男を指差す。

ルーミアには食べる人を指示している。

実力者のみ。なぜなら、その方が実践的であり、食べたら力がつくからだ。それと一般人への将来的な被害削減も。

一般（妖怪）的には力の強い者の方がお腹が満たされる、と都さんが言っていた。

「今までより強そうなのだー」

霊力が滲み出ているのが分かる。小さな妖怪を本能的に寄せ付けて殺したいのだろう。

霊力は一応妖怪にもあるけれども妖力に隠れる性なのだが、さすがに（たぶん）何千万も生きていれば妖力を極限まで抑えて霊力をある程度引き出せるだろう。

現に私もそうしている。それによって力だけを見れば人間の實力者だ。

「行ってくるのだー」

ルーミアが闇を広げる。

「来たな、妖怪!!」

今までで一番早くルーミアに気が付いた。

「ばれたのだー。ひーな、どーするのだー？」

ええい、私に振るな!!

「妖怪が……に、人間か？」

ばれたじゃないか。

「妖怪だけど人は襲わない主義だから。そっちが襲って来るなら容赦しないけど」

「か、変わった奴だな……」

「じゃあルーミア、頑張れ」

「わかったのだー」

ルーミアが抑えてた妖力を解いた。

「見た目はガキでも中の上か……」

男が手にする槍に霊力を纏わせて呟いた。

余裕が見られる。

ルーミアが闇で男を拘束しようと闇をしかけた。

男は槍でそれを払い飛ばしルーミアを突いた。

「もう、終わりか？」

「まだなのだー」

刺された部分からルーミアは霧散して夜の闇に溶けた。

「厄介な……」

この状態のルーミアには本体のある闇に強烈な一撃を与えるほかない。

「いくのだー」

周囲の闇が幾つか凝縮し、槍の形を象ってゆく。

危険を察知したのか男が動いた瞬間、男のいた場所へ飛んでいき半径2 m弱のクレーターが出来た。

「どのように殺れというのだ……」

男は倒し方が分からないと。

「そうだな……」

男は空に霊力を集中させ闇を結界へと閉じ込めた。

それを圧縮してゆく。

「や、やばいのだー」

ルーミアは必死に抵抗しているがどうにもならない。

「はい、ストップ」

私は結界を叩き割ってルーミアのくびねっこを掴んだ。

「何をする!!」

「死なれたら困るもの」

「せまかったのだ」

「ルーミア、攻撃禁止!! 今回は負けたので食事はお預けです!!」

「ううー、やだのだー!!」

ルーミアが私の手から離れ、夜空に逃げる。

「あの……、手伝うか？」

「帰っていいよ。私が責任をとる」

「変わった妖怪だな……。实力を見たい」

男はそのまま立ち去らずに私に視線を向けた。

私は妖力を出す。

「髪が……。朱く？それにしても凄まじい……」

私は無視して、遙か遠くのルーミアに一言。

「……消えたいの？」

呟いた。

辺り一面が恐怖で凍り付いた。

するとルーミアが泣き顔でへろへろと帰って来た。

「ぐ……めゝん……なざい……」

「おー、よしよし。また今度頑張ろうね」

男はア然としている。

「实力は見れた？」

「戦わなくて済んで良かったと思っている」

その後、私は男と情報をやり取りしてルーミアを帰らせ、また、男も帰った。

「それでさ、覗くなら自信持った方がいいよ。まあ、私以外には気付かれなかったようだけどさ」

私は虚空へと話し掛ける。

反応がないな……。

「引っ張り出すよ」

私は再び妖力を解いて空を掴む。

そして、無理矢理に手を入れて傍観者を引きずり出した。

「きゃあ」

まあ、なんて可愛い声なこと。

「今までで初めてよ、私をここから出したのは……」

「それより誰さ」

私が聞くと尻餅をついたまま、金髪の少女は胡散臭い笑みを浮かべた。

「ひーなーさん？ 貴女の様な大妖怪を初めて見ましたわ。お初にお目にかかります、私はスキマ妖怪の八雲紫と申しますわ」

やけに礼儀がいいな……。

「んじゃ、私も自己紹介を。妖怪の陽奈、名字はないよ。陽奈とも読んで。あと、変に礼儀いいけど気持ち悪い」

「そうなの？ 悪かったわね。ところで貴女は何の妖怪なの？」

「……恐怖？」

私にも良く分からないな……。

「私は『境界を操る程度の能力』を持っているわ。貴女も何かしら能力があるのでしょうか？」

「『恐怖を操る程度の能力』を。紫が隠れている時の不安から見つけ出して引っ張り出した。どう？ 納得した？」

「つくづく恐ろしいわ」

紫はさらに笑みの胡散臭さを上げる。

「ところで」

いきなり態度が変わった。

「なぜ、貴女は人間を食べないの？妖怪の本能に抗ってないかしら？」

言われると何だか食べたく……

「何かしてる？」

「食欲の境界を弄ったけれどもダメだったわね」

「次やったら、あんたを喰らうからね」

軽く圧力を与える。

「まあ、触れないわ。触らぬ神に……、と言うもの。では、何故あの妖怪にも強制するのかしら？」

「人間がいなかったら妖怪は存在しない。それにルーミアの将来性を考えた結果だから」

「そうね。でも陽奈、果たしてそれが正しいのかしらね」

そう言うと紫はスキマに帰って行った。

日光に当たらないとビタミンが不足する

帰路に付き村も近くなった時、ルーミアが慌てて飛び戻って来た。

「た、大変なのだー!!」

わたわたとして落ち着かないルーミア。

どうやら、ルーミアは村人がいないことを恐怖に感じているようだ。

「村に何かあったの!?!」

「そーなのだー!!」

慌てるルーミアを引っつかみ、全速力で村へ向かった。

村がなかった。

あるにはあるが、家々は壊され、人はいなく、残っていたのは死霊と恐怖と何かの力。

たった数時間で村が1つ壊滅した。

私たちの家を除いて。

煤がついてるだけで傷はない。

さて、村人を死に追いやった力の正体を恐怖から読み取るか……。

正体はつきりしてれば使えるようになるんだけどな……。

……ん？

妖力では……ないな……。

霊力でもない。

妖力のまがまがしさと霊力の純粹さを足して半分にしたかのような力だ。ふわふわした曖昧な力。

……使えるようにはなったけど訳の分からないものは使わないのが賢明か……。

近くに同じ力を持った奴がまだいる。

「ルーミア、見付けた!!」

「そーなのかー!? みんなのかたきなのだー!!」

ルーミアは在らぬ方向へ飛び出す。

「違う、こっち」

「あーうー、そーなのか」

私はルーミアの首ねっこを掴んで引きずって向かった。

ここか……。

一見、あばら家。けれど材料は恐らく合金。

この（およそ縄文〜弥生であろう）時代にはおかしい金属。この時

代には精製なんか出来ない。オーバーテクノロジーもいいところだ。

けれど、硬そうだけど、えーりんのいた頃のよりは脆いはず……。あれはマジで硬かった。

「ルーミア、下がって」

「わかったのだー」

さて、

「威力無げ（略）の8割引!!」

思い切り（?）殴った。

どんがらぐっしゃーん

壊れた。

どうやら合金板の接合部は甘かったらしい。

けれども驚くべきは合金板だ。

傷1つない。

逆に私の手が赤くなった。

「ひーなー、すごいのだー」

「でも、不在みたいだね」

力は残留しているが姿が見えない。

「誰か埋まってるのだー」

ルーミアが誰かを見付けたようだ。

私は上の（あばら家だった）瓦礫をどけて引っ張り出した。

「むきゅ」

何！？この紫の可愛い奴！！

「だ、大丈夫！？」

「けほっ、……………だ…いじょう…………ぶ…………」

「よかった…………」

「ちよっ…………と、待っ…………て…………」

何やらぶつくさと呟いたかと思うと足元に幾何学模様が出てきて私
たちを囲んだ。

「やっぱり不便ね。これ」

「何が不便かは知らないけど村を襲ったのはあんたでしょ」

私は失礼と感じながらも聞いた。

「あながち間違えてはいないわ。私の使い魔が言う事聞かなかったの」

使い魔……、たまに人間が式神を使い魔とか言ってるな……。本来は魔法の産物なのに。

魔法……？

「ちょっと話変えるけどさ、あんたの使ってるのは魔法？」

「なに？身体から恐ろしい程ほとばしらせている奴が言う事なのかしら？ちなみにさっき使ったのは翻訳魔法。話が通じないのは嫌なもの」

マジで？

「すまなかったわ」

いきなり謝られた。

「あの小悪魔には、ちゃんと罰を与えたわ。命と秤にかけられるほどの」

よく見ると隅っこに小さな悪魔らしい風貌のが一人泣いていた。

「罰って？」

「名前を与えない事よ。悪魔との契約で名前を謎解きにするのがあるのよ。謎が解けたら悪魔は自由。けれど名前を与えなければ……」

「謎も解けないまま使い魔であり続ける、か……」

紫色の人は頷く。
うなづく

「それでもゆるさないのだー」

ルーミアが闇で剣を作り、振り上げる。

「会話の邪魔よ」

突然、地面から生えて来た植物にルーミアは成す術もなく絡め取られる。……ちよつとエロい。

「ぬけられないのだー」

「あれ、何よ」

「妖怪」

私は即答する。

「そう。貴女は？」

「妖怪」

「違うわ。名前は？」

「陽奈」

「パチュリー・ノーリッジよ」

「パチェは何の用で？海の方こうから来たんでしょ？」

「妖怪の血液が欲しいのよ。どうやらここら辺に何億年も生きている妖怪がいるらしいの」

うん、あだ名の事は無視ですか。

と、というか私じゃないの？

「そんな妖怪知らないかしら？」

・・・。

「知らな……」

「陽奈なのだー」

厄介事に確実に巻き込まれるな……。

「ルーミア？余計な事は言わないの」

私は笑いながらもルーミアに恐怖を向ける。

「ごめんなさい」

ルーミアは泣いて謝った。

けどパチェの興味が完璧に私に向いている。

「貴女なの？」

「いや、違うけど……」

冷や汗がほとばしる……。

「貴女なの？」

「ち、ちが……」

「貴女でしょ？」

疑問から断定に！？

腹を括るか……。

「正解。でも、私の妖力なんてこんなものだから力は貸せないと思うよ」

妖怪退治の男に会った時くらいに抑えている。……まあ、デフォルトだけ。

「そうね……。魔法を知らない様だから色々教えようと思ったけど、残ね……」

「手を貸そうかな」

「あら、ありがとう」

私、弱いなあ。

「パチエ、何を作ってるの？」

結局、ルーミアには（やや）力づくで納得させ、パチエを家に住まわせている。

「賢者の石よ」

「すごいのか？それ」

「五大元素の木火土金水の陰陽を永久機関として組み込まれた魔法物質の集大成ね。バランス内から溢れた余剰分の力を利用するだけなのに……………」

「待って……………」

「何？」

「意味わかりません……………」

元素？永久機関？余剰分？

「つまり、およそ無限のパワーを得られるのよ」

なにそれチート？

「賢者の石があれば、卑金属を金属に変え、どんな病も治せ、ご飯に振り掛けると美味しくなる、と言われてるわ」

なにそ（ry

こうして賢者の石について延々と語られた。

パチエと一緒にいて数年、パチエは本ばかりにくつつき、家から出ない。

当然、私たちも道連れに。

妖怪な私たちは気まぐれに人を襲いに出てはいたが、それでも外の情報に乏しいには違いなかった。

パチェが来た時には小さかった芽も今や立派な木に育っている。

「ルーミア、あれ取ってちょうだい」

「わかったのだー」

そして、今や私たちはパチェの雑用。いや、悪くないけどさ。魔法を教えて貰ってるから。

けれど流石に閉鎖された状態には飽き飽きしていた。

「ねー、パチェ。暇だから出掛けていい？百年単位で。どちらかと言えば旅に近いけどさ」

「いってらっしゃい。気をつけて」

パチェは私に一瞥もくれずに言葉を放つ。

「ルーミアも行くのだー。陽奈と別れて旅をするのだー」

「いってらっしゃい。気をつけて」

「パチュリー様も素直ではないんですね」

と、小悪魔。

悪魔らしい悪魔の外見から、いつの間にか赤っぽい髪の少女の姿になっていくが気にしない。……別に気にしない。

……スタイルがいいからって、背が高いからって、胸があるからって、くびれがはっきりあるからって、外見大人っぽいからって脚が長いからって、……全然気にしない。……気にしない。

「小悪魔、飯抜き……」

パチュエが顔を本で隠しながら呟いた。

「ひう……。酷いですよ、パチュリーさまあ」

「じゃあいつてくるのだー」

ルーミアは飛び出した。

さて、私も……

「陽奈、待つて。これを付けてから行ってちょうだい」

パチュエが裾を掴んで引き止める。

渡されたのは薄紫のリボン一枚。

「髪留めにでもして付けてちょうだい」

とりあえず付けてみる。

「魔力を抑えるようにしてあるわ。そんな大きな魔力をばらまかれ
たら人里がお陀仏よ。この森の植物にみたいになるわ」

ふと、外を見ると花がルーミアを襲っていた。

魔法植物ってやつだ。

ぬるぬるした蔦がルーミアに絡み付いていて凄くエロい。

私も襲われた事がありました。

「それじゃあ、ありがたく頂戴するよ」

私はポニーテールを作ってから

「んじゃ」

「いってらっしゃい」

スキマの狭間

ある時、それは何時なのかは分からないが、私は生まれた。

物と物との狭間、見えない物に対しての恐怖、それらから、私、スキマ妖怪は生まれた。

私には『境界を操る程度の能力』がある。

けれども操るのが困難で膨大な知識も伴う。

私は自分の為に放浪する事にした。

「お腹が空いたわね……」

私は何千という年を過ごしている間に能力を昇華させていった。

初めは生と死、それから徐々に調整の困難なものへと。

それと、『スキマ』を開けるようになった。

ここからは様々なものが見えるし、見えない。曖昧な空間。

私はそれを用いて人を食べたり、と、様々な事を行った。

それと、不便なので私は八雲紫と名乗る事にした。

風の噂で妙な話を聞いた。

どうやら、とある村の神が妖怪で人間最悪らしい。

妖怪は本能で人を襲い、喰らう。

私は事を確かめるべく、情報を頼りに村の付近へとスキマを開いた。

実力のある人間が1人、妖怪に目をつけられていた。

近くの少女が言うには、名はルーミア、宵闇の妖怪。

そして、少女も妖怪であった。

名前は、ひーなし、と聞こえた。

「妖怪だけど人は襲わない主義だから。そっちが襲って来るなら容赦しないけど」

確信した。彼女だ。

私は男とルーミアの闘いを見守った。

闘いが強制的に終わり、ルーミアが逃げた。

彼女にはルーミアを捕まえられるらしい。

ルーミアを決して弱い妖怪ではなく、彼女の实力では到底無理であ

ろうと、私は先程の闘いから思っていた。

しかし彼女の髪が朱くなり始めた頃から、それは撤回する事になった。

考えられない程、濃密で膨大な妖力。

「……消えたいの？」

ただ、その一言で私は彼女に恐怖した。

見付かるのではないか、見付かっているかもしれない。

そう思った矢先、妖力がふと消え、泣きじゃくったルーミアが戻る。

彼女の髪も黒く戻っていた。

その後、様々な会話をした後、彼女はルーミアだけを村へと帰した。

「それでさ、覗くなら自信持った方がいいよ。まあ、私以外には気付かれなかったようだけどさ」

と、私の方を向いて話し掛ける。

見えないはずなのに……。

「引っ張り出すよ」

彼女の妖力が再び少し大きくなったかと思うと、スキマを越えて掴まれ、スキマから引きずり出された。

「きゃあ」

尻餅をついた。……痛いわね。

「今まで初めてよ、私をここから出したのは……」

「それより誰さ」

私はそれも一興と思い、自己紹介をする。

「ひーなーさん？ 貴女のような大妖怪を初めて見ましたわ。お初にお目にかかります、私はスキマ妖怪の八雲紫と申しますわ」

「んじゃ、私も自己紹介を。妖怪の陽奈、名字はないよ。陽奈とも読んで。あと、変に礼儀いいけど気持ち悪い」

ひーなー、ではなく、陽奈というらしい。

うっかり間違えてたわ。

「そうなの？ 悪かったわね。ところで貴女は何の妖怪なの？」

「……恐怖？」

「私は『境界を操る程度の能力』を持っているわ。貴女も何かしら能力があるのでしょうか？」

「『恐怖を操る程度の能力』を。紫が隠れている時の不安から見つけ出して引っ張り出した。どう？納得した？」

「つくづく恐ろしいわ」

納得した。

「ところで」

態度を変え、私は改めて聞く。

「なぜ、貴女は人間を食べないの？妖怪の本能に抗ってないかしら？」

そう言いながら私は彼女の『本能の境界』を弄った。

「何かしてる？」

「食欲の境界を弄ったけれどもダメだったわね」

恐らく、彼女が抑えてるであろう事として、嘘をついた。

「次やったら、あんたを喰らうからね」

軽い圧力が襲う。

「まあ、触れないわ。触らぬ神に……、と言うもの。では、何故あの妖怪にも強制するのかしら？」

妖怪としては疑問である事。

「人間がいなかったら妖怪は存在しない。それにルーミアの将来性を考えた結果だから」

「そうね。でも陽奈、果たしてそれが正しいのかしらね」

そう言うとは私はスキマに帰った。

彼女の言う事は正しく、重みがあった。

けれど、正しい事とは何なのか。

妖怪に、人間に、神に、正しいとは問えない。

答えは、どれも正しく、誤りであるから。

私は彼女の真意を考えつつも、また、別のスキマを開いた。

神遊びは、まにまにと

まずは人里を探す事にした。

私は空に飛んで森を俯瞰した。

所々、きしゃー、と言う声が聞こえるのは空耳であってほしい。

辺りを見回しても森しか見えない。

思い切って上空高くまで移動した。

移動し過ぎた。

空気が殆どない。

でも、1つ分かった。

いた場所は日本だ。

そうと分ければ少しは楽だ。

そうだ、京都に行こう。

そう思った矢先、長野辺りで大きな恐怖を感じた。

得体の知れない、ただ恐怖以外の力の方が大きかった。

私は湖付近に降り立った。

そして、近くにあるでっかい神社に向かうことにした。

人がたくさん吸い込まれているから。

「行列ってレベルじゃないよ、これ」

私はふと呟いた。

もはや、バキュームだ。

さて、せっかく来ましたし私も参拝しますか。

私が鳥居を潜った瞬間、数多の蛇が巻き付いて来た。
感じるのは死の恐怖。

殺しに来てる。

しかもこれは今までとは違った力。

力の発生源を辿ると……

「鳥居の上？」

凄い形相で変な帽子を被った少女が鳥居の上から力を使ってくる。

「落ちたら危ないよ」

犯人と分かっているながらも、恐らく人外だろうが、注意しておく。

一瞬、周りの人から痛い目で見られたが無視しておく。

その少女は飛び降りたかと思うと私にフラフラプみたい鉄の輪を投げてきた。

私は避けようと地を蹴る。

ゴン

が、絡み付いた蛇によって盛大に転んで石畳に後頭部を強打、そのままお腹に鉄の輪が命中。

私は相当頑丈なのだが不覚にも打ち所が悪くてだらだらと出血した。

「いたた……、血が出ちゃったよ」

私は少女を見るが、顔が驚きすぎて目が点になっている。

そこで初めて少女が口を開く。

「あんた、何者なのさ。人間？妖怪？それとも落ちぶれた神様？」

最初に仕掛けた無礼者はそっちだから普通はそっちから名乗れよ、などと思いつつも私は自己紹介をすることにした。

「あーうー、ごめんね」

彼女の名前は洩矢諏訪子。

土着神（土地神）の頂点。

蛇の正体は諏訪子の操る祟り神。

私には効かなかったが、もっと力が強ければ私は祟り殺されていただろう。

「まとめると、陽奈は人間的な妖怪なんだね」

「そういうこと……なのかなあ……」

ちなみに初めに言われた事、何者か、について。

霊力で人間、妖力で妖怪、信仰の名残から神様、と。

神になったつもりはないが村で崇められていたのが原因だろう。

まだ、膨大な神力は残っているらしいが信仰がゼロの為に消費されるだけらしい。

もっとも、村は全滅、ルーミアは崇めてはいなく尊敬、よって供給ゼロな訳だが、現状、諏訪子の3〜4倍らしい。

使わなければ減らないとか。

普段から神様たちは豊作やら国の守護やらでの使用があるが、私はしていないため溜まっていたらしい。

「陽奈は何の妖怪なの？」

唐突に聞かれる。

「何だろうねえ」

私も分からない。

「諏訪子ってさ、その帽子は何なの？」

「た、だ、の、帽子だよ」

いや、目とか貴女と同期してるようにしか見えません。

「それって……」

「た、だ、の、帽子だからね」

私は諏訪子に少し恐怖を覚えた。

ある時、私が諏訪子とお茶を啜っている時、諏訪子が突然立ち上がった。

「あーうー、来ちゃったよ」

「何が？」

「前からみんな（土着神たち）から聞いてたんだけどね、どうやら大和の神が攻めて来るらしいのさ」

諏訪子が溜息をついた、その時、

「ごめんくださーい」

神様が一人、私たちのいる本殿に闖入して来た。

「来たね……、八坂神奈子……」

「おや、私の名前を知っているんだねえ？ 洩矢諏訪子」

私も諏訪子に鍛えられたから分かる、まさに諏訪子は蛇に睨まれた蛙に近い。

相手の神力は私くらいある。

しかも、信仰で得ている分、化け物に近い。

まずは諏訪子が私に巻き付いたのと同じ蛇、ミシヤグジ様をけしかけた。

和解した後聞いたが祟り神の一種で大量に巻き付かれると祟り殺されるらしい。

私には鬱陶しいだけだったが。

神奈子の近くでミシャグジ様が動きを止めた。

「対策しないと思ったのかい？」

どうやら、背中の上のしめ縄が近付けさせないらしい。

「なら、これならどうさ!!」

諏訪子が鉄の輪を投げる。

現在の技術では最先端である鉄器。それに神力を付加して投げている為、それは岩をも砕く。

「それも……対策済みだよ」

どこからか細い蔦がのびてきて、鉄の輪を絡めとる。

「なっ……」

鉄が錆び、輪が崩れ落ちる。

どれほど強かろうが崩れては何もならない。

「まだやるかい？」

「あーうー、負けだよ。……でも、そう簡単にはいかないと思うけどね」

事実、諏訪子の支配力は甚大だ。

刃向かえば確かに祟り殺される、が、信仰していれば恵と安全をもたらせる。

神奈子が勝った程度で信仰対象を変えたりはしないだろう。

と、私は神奈子に説明した。

「それもそうだねえ……」

結果、洩矢を改め守矢とし、表向きは神奈子、実際は諏訪子、と二分する事で、つまり国の者などは諏訪子、国の外には神奈子、と信仰を二分する事が出来た。

「で、諏訪子、いつになったらこの妖怪を退治するんだい？」

「陽奈は悪くないから退治しないって言ってるじゃん」

あれから、二人は喧嘩はするものの仲は悪くなく、三人でお茶を啜っている。

「でも神社の、しかも本殿に妖怪は……ねえ……」

二人の闘いの後、神奈子に勝負をしろ、と言われたが、うっかり口を滑らせて、妖怪の私は関係ない、と言ったばかりに痛い目にあつた。

人間同様の気配を出していたつもりではあったが、諏訪子に疑われたのだから神奈子にはヒントを与えてしまったので、ばれない訳がない。

オンバシラで殴られた。というか石畳にめりこんだ。

「いーじゃん、私が人を食べた？襲った？国の人からは神様の友達の“人間”って思われてるんだよ？」

「妖怪を退治する妖怪なんて考えられないしねえ」

「そーだよ」

神奈子の言葉に諏訪子が納得する。

この前、国に小妖怪たちが来たのだが何故か私が近付いただけでぴちゅーんした。

実力のある妖怪退治屋だとも思われているが、私にも原理がよく分からない。

誰か師匠がいたのか、などと聞かれる事もあったが、私が退治されてしまうではないか（棒読み）。

「じゃあ、一回戦ってみる？」

「私は見てるよ、神奈子、頑張れ」

神奈子が諏訪子の頬を少し引っ張ってから私の元へ。

「私だって仮にも軍神さ。一介の妖怪には負けたかないね」
どうやらやる気らしい。

「じゃあ、私が止めたらおとなしく止めてね」

と、何故か審判な諏訪子。

私たちは頷いた。

「じゃ、始め」

「……妖力は開放とかしないのかい？」

「ん？ ああ、徐々に」

私は準備運動をしながら自分の中にある恐怖の中で使えそうなものを探す。

『威力を操る』

これだ。

他にも記憶にないが『天候』やら『台風』やら『災害』やらとあったがぶっちゃけ使えない。

神奈子がオンバシラで叩きに来る。

私は威力を極小（ゼロには出来ないから）にして直撃する。

コン

乾いた音がした。

やり過ぎたか……。

「なっ……そ、そんな事があるかい！！」

神奈子は私をオンバシラで乱打、乱打、乱打。

コンコンコンコンコン

コンコンコンコンコン

コン、コン、コン……

「あの……」

「こ、これで決めるよ！……オンバシラー！！」

オンバシラを二本投げて来た。

ココン

ドンドスン

淋しそうに風が一度、声を鳴らした。

「退治は出来ないのはよく分かった。諦める」

「ふう……」

「ただし、やっぱり置いてはおけないねえ」

「神奈子！？」

「いや諏訪子、神奈子は正しいよ。まあ、私もぼちぼち旅に出るさ」

私は最後に神社にいる宮司さんたちに別れを告げて……

「ま、まったー」

諏訪子に引き止められる。

「これ持って行って」

渡されたのは道中安全のお守り。

「ありがとう」

私は諏訪子に感謝し、はにかみながら旅路に出た。

ぶらり日本旅

なんだか暇だったので危険な妖怪っぽく振る舞って、人里近い洞窟に子供をさらって来て、村に帰さないような事をしていた。

けれど取って食うような事はしない。

だって、可愛いもん。

三食しっかりあげて、朝早く起こして身体を動かし、昼はお勉強、夜はぐっすりと眠らせる。時には軽い労働を私と一緒にしたり、と。

来てから三日くらいは泣いていたりするが、みんなの楽しそうな様子をを見ると涙もなくなる。

夜の安全は私が受け持っていたり、と不自由はないが村にだけは帰さない。

「みんな、今日は川に魚を捕りに行こう」

「「やったー」」

小さい子は私や、大きい子におぶらせて川へと向かう。

注意する事は村の大人に見付からない事。

「ねえ陽奈ちゃん、何でよーかいなのに私たちを襲わないの？」

と、最初にさらった女の子、ちいが聞いてきた。

「強いから。私たち妖怪からは人間は弱い存在なんだよ。でも私は弱い存在を傷付けて悦に浸る事は出来ないの。人間というか、みんなというのが楽しいから」

「弱いよーかいは襲うって事？」

「うーん、お姉ちゃんよく分からないな……」

強くても人を食べる紫みたいなのもいるからな……。

「弱いってなんだよ！俺は強いぞ！」

と、男の子、カイが話に割り込んできた。

「うん、カイは強いね」

私のところに来た頃に泣く事もなく、また、夜に珍しく妖怪が来たのを退治していたら教えてくれと言われ、教えたら才能を発揮。

それ以来、カイ以外にも簡単な妖怪退治の方法は教えているが未だカイ程の才は見つからない。

「何てったって、俺はさいきよーだからな!!」

「じゃあお姉ちゃんとやる？」

「いや、陽奈には敵わないって」

魚をたくさんとって洞窟に戻ると何故か紫がいた。

「はい、久しぶり」

「紫に食べさせる為の人はいないからね」

「ひ、陽奈ちゃん、お友達？」

子供たちが怯えながら私の後ろに下がる。

「妖怪の、ね。紫、帰って」

「あら、せっかく情報を持って来たのに……」

「……何が欲しいの」

紫は等価交換と称して何か貰っていくことが多い。

「何もいらないわ。みんなを村に帰してあげなさい。村が危ないわ。
じゃね♪」

紫はスキマに帰って行った。

「みんな、村に帰りたい？」

みんなは首を横に振る。

……困ったな。

「嫌でも帰るよ」

村は特に何もないように見えた。

「子供たちが帰って来たぞー」

村に入ると大人たちが、わんさか。

「おのれ、妖怪め」

と、村長。

「陽奈ちゃんは悪くないよ、父さん」

と、ちい。というか村長の子供だったのか……。

「そう……なのか？」

「そう。なんか、友人の妖怪から村が危ないから、って聞いて……」

「あの鬼です」

村長さんが指した先には泥酔したロリ鬼が。

「酒寄越せー、と」

私はとりあえず歩み寄る。

「んあ？人間？酒は？」

「炒った豆を投げてあげようか？」

「ちよっ……待った待った！それだけは勘弁してよ！！」

いきなり目が覚めたように慌てるロリ鬼。

「あのさ鬼さん、酒飲んでないで私とちよっと手合わせしない？私が負けたら文句は言わないけど勝ったら村から出ていくって事で」

「あの鬼がそんなことを聞いてくれると……」

「いいよ！！」

やべえ、目がキラキラしてる。

「私の名前は伊吹萃香。見ての通りの鬼さ」

「私は陽奈。今年で何万歳だろ？」

「へー、長生きなんだー。人間じゃないんだね」

「そう、妖怪」

「それじゃあ……相手として不足ではないね」

萃香がいきなり拳を私の腹に一発。

反応出来ず、そのままくらって村の外の木々を折りながら飛ばされている。

久しぶりに目茶苦茶痛い。

「痛いなく。骨折れたりはしてないけど……」

「じゃあもう一発。今度は本気だよ」

目の前に萃香がいた。

ドゴン

地面に私を中心としたクレーターが形成された。

私は諏訪子から教えてもらった神力での回復をする。小匙程度で全快だ。

「今度は私からいこうかな」

私は『天候』を操り雷を萃香に落とす。そのまま威力を上げた拳を……

萃香が霧になった。

「私は『密と疎を操る程度の能力』、密度を操れるのさ」

私は萃香の恐怖の対象である炒った豆を具現して

「おにはーそとー」

霧に投げた。

「痛い、痛いからー」

霧が萃香に戻った。

「むう、反則だろー」

「反則なんて定めてないじゃん」

その後、豆を滝の様に萃香に降らせたら倒れた萃香が出て来た。

豆はどうしたか？元々は私の妖力だから消えます。

鬼退治をして、なんか行くあてもないから一回神社に帰ろうと思った。

道中、昼は霊力、夜は妖力を出していれば、まず襲われないが……

昼間、

「女の子じゃねえか、一人で何をしてるのかな？」

旅のチンピラに捕まった。

「やっちゃんおうぜ」

「やっちまおうぜ」

私は両腕を掴まれて押し倒された。

「幼子はええの」

「だ、黙れ!!」

わざとらしく抵抗する。

「すぐに気持ち良くしてやるかグボア」

つい、反射的に金的攻撃を……。

「この女郎!!」

私は飛んで回避し、そのまま一言。

「妖怪襲ったら危ないよ、おにーさんたち」

軽く脅した。

泣いて逃げるのを笑いながら見たのはいい思い出です。

夜間、

「貴様が村を襲った妖怪か!？」

「違う違う、妖怪違いだって」

私は即座に否定する。

「けれど妖怪は放っておけぬ。生憎、そんなに強くはないらしいな」

それは私が小妖怪並に抑えているから。

「小さい内に、その芽を摘ませてもらおう!!」

「こんな女の子襲って罪悪感はないんだね……」

私はわざと涙目で訴える。

「それも作戦か!？」

「あ、ばれた?」

「嘗めおって!!」

この退治屋さん、怖いなー。

「だいたい、こんな夜中に女子が裸足とはおかしいだろう?」

ん? 裸足?

何年も生きてて今まで裸足だって気がつかなかった。

「うっかりしてた」

「小妖怪め、退治して……」

「いただきます」

いきなり、でっかい妖怪がそいつを食べた。見た目は熊。

ざまあ。

「おおっ！女子までいるではないか！」

「消えろ」

いらっ、としたから妖力を眼だけ朱くなるくらい開放して殴り飛ばした。

さて、そんな事をしながらも守矢神社に辿りついた。

「おひさー、神奈子」

「あ、ああ。今は本殿に立入禁止だから行くんじゃないよ」

「なんで？」

「諏訪子がオトリコミ中だからさ」

何をしてるんだろう？

私は神奈子の言葉を無視して本殿へと向かった。

「あああー、いいよ」

聞こえたのは諏訪子の嬌声。

「ナ、ナカでびゅうううつてえ」

私は何も聞こえない。

[illegible]

ガラツ

「ふう、
いい汗か……いい……」

「あ……」

諏訪子と目が合い、空気がパーフェクトフリーズ。

「あーうー……」

諏訪子の顔が真っ赤になってゆく。

私は逃げ出した。

後に聞いたが妊娠したと。

さて、それから卑弥呼を見に行ったり、奈良の大仏を見に行ったり、そこで鑑真さんに会ったり、中国から来た人たちを（妖怪として）驚かせたり……etc。

特に大きな事もなく、遊び回っていた。

ここって日本なんだな。

とはいっても当時は白米はなく、基本玄米だから……白いのが恋しいよ。

一時期だが仏教が流行った時に漢語の文しかなくて困っていた人が。

基本は簡単なのに。

何年前の記憶か知れないが漢文は読み方を知っていた。

この時代、漢文を読める人は読めない人に指南している為、私も指南役に抜擢された。

何故されたか？

カッコつけようと思って悩んでいる人の後ろから読んだら、私がいる事ではなくて読んだ事を驚かれ、悩んでいた人がお偉方様だったからだ。

まあ、当時上流層にしか読めなかったものを一介の少女が読んで驚かない奴はいないだろうけど。

さらに時が過ぎ、なんか朝廷に偉い僧とかが口を出してきたので都を平安京へ。

これが794年の出来事。

それより半世紀程前に私にとって大きな出来事が訪れた。

ぶらり日本旅（後書き）

ケロちゃん好きの方々まことに申し訳ありませんでした。

翁は飛びません、念のために

今は昔、竹取の翁という者ありけり。野山にまじりて竹を取りつづよろずの事に使いけり。

平安時代以前。

妖妖跋扈として、また、それを撃つ者ありき。それら陰陽師といわゆるる。

平安時代頃ときたら貴族だろう。

藤原氏が有名だ。

何の因果か昼間に（喧嘩して）妖怪をばこつてたら連れさられた。

この時代、稀に妖怪も昼間に出て来て、また、付喪神も増えて来ている。単に人が様々な道具を扱い、飽き、忘れられるからだ。

で、藤原屋敷に妖怪退治、陰陽師として居座る事になったが、なにぶん私は妖怪な為、陰陽師の武器である霊力の扱いには慣れていない。

なので同僚の陰陽師に色々と指南してもらっている。

この時の藤原氏は、まあ私の雇い主は藤原不比等ふじわらのふひとという人物でお転婆過ぎな、だからこそこの隠し子がいた。

隠し子の彼女と私は気が合った。

旅の話をする目と目を輝かせる。

彼女は貴族という窮屈な環境は嫌いなようだ。

この時代、覗かれ、また覗くチラリズム的な状態が普通な世の中。簡単にいえば、美人にはストーリーカーがつくし、美人さんはストーリーカーがいるのを承知でドキドキしてるわけだ。

理解できない。

また、彼女も理解できないらしい。

貴族間ならまだしも平民間でしたらボコられる。

彼女の名前は藤原妹紅。

顔立ちは整っていて美少女だ。

ただし、今の世、私の美人と世の美人の感覚にはズレがある。

一重瞼に小さい目、腫れぼったい顔が美人だ。

私の考えとは180度違う。

妹紅の父親は、子供がありながら女を侍らせる世の中の男たちとは
違い妹紅や妻を大事にしている。

「いい父親じゃん」

「とはいっても鬱陶しいですよ」

「私は悲しいぞー」

「黙れ！変態父上！！」

そんな悶着が日課になりつつあった時、

「なんか竹細工作ってる爺さんのところに美人さんがいるらしい！
！」

と、不比等さん。まあ、ここまではいつものことだ。

「求婚してくる！！」

「「は？」」

妹紅と妻Loveな人がこの言葉を発するとは思えなかったが……

「その爺さんの名前って『さぬきのみやつこ』？」

私が聞くと

「そうだ。私が忘れる訳なからう」

まあ、不比等さんは帝（天皇）からも、一度見た物は忘れず聞いた物は全て言葉とできる聡明な者、と評判を受けているし、

「何故知っている？」

「さあね」

じゃあ美人さんはさしずめかぐや姫か。

「私もついていっていい？少し興味あるんだけど」

「父上を虜にした……一度、私も見てみたいです」

「ダメだ」

その日、彼は帰らなかった。

夜、かぐや姫を一目みようと思ひ込んだ。

呆然と月を見ては泣いている。

「月の世界が恋しいの？」

私は後ろから歩み寄った。

「!?!?!?!?!貴女は？」

「陽奈」

「聞いた事ある気がするわ、その名前」

そうなのか……。

「月でどんな罪を犯したの？月の世界ってどんななの？」

「貴女に話す事ではないわ。得体の知れない地上の人間よ」

「私、妖怪なんだけどな……」

正体をぶっちゃけた。

「なっ……。まあ、いいわ陰陽師を呼べば……」

「もういるよ」

かぐや姫はキョロキョロと辺りを見回す。

その仕草で長い髪が揺れ、綺麗だと感じてしまう。

かぐや姫の外見は私基準でも綺麗に見える程に美しい。清らかなり。

「どこにいるのよ」

陰陽師が見つからないご様子で尋ねてきた。

「私だけど。藤原家の陰陽師の一人」

・・・

「ふふっ、変わってるのね」

「まあね。人は呼ばないんだ」

「呼んでも意味ないでしょう？」

それもそうかもしれない。

「月の様子とか教えてくれない？昔、友達が月に行ったから」

「月に？まあ、貴女になら話しても問題ないでしょうね。月には“穢れ”、物が腐ったり寿命の原因となるものがないのよ」

「つまり……不老？」

えーりんも生きているのでは？

そう思ったが言うのを止めた。

私は姫と二人で月を見ては溜息をついていた。

「んっ……」

いつのまにか寝ていたのか……。

「あら、おはよう」

「うん、おはよう。何で身体が動かないのかな？」

理由は分かるよ。藤原家の陰陽師がみんな私に術をかけてるから。

「あんた、妖怪だったんだ……」

と、妹紅。何でいるのかは知らないが。

「まさか、妖怪で陰陽師がいるとは思えませんがね」

と、凜々しい男の声。

「誰？」

私から見たら美男子。なんか弱そう。

「私は安倍清明と申します、陽奈さん」

めっちゃ強かった！！

やばい、抜けないと……。

私は妖力を最大まで開放して抜け出そうとする。

「ぬ、抜けられない……」

「うーん、予想以上ですね。私も封印出来るか分かりませんね……」
ちよっ……封印！？

「ちよっと待って！何でもするから許してよ！！私なんて無害だからさ」

「ほう……。なら、質問に答えて貰いましょう」

質問？

「いいよ」

「貴女は人を襲った事がありますか？」

「ない。……いや、あるかな？ただ、自分が殺されそうになった時

「以外は殺してない」

私は妖力を抑えた後に正直に答えた。

清明さんは妹紅を見る。すると、妹紅は頷いた。

「そうですか……。貴女の言った通りのようですね。はい、みんな、術は解いて〜」

パンパンと手を鳴らして術を解いてくれた。

「貴女への頼みはもう一つだけです。貴女の妖気は常軌を逸しています。これでは貴女の身近な人間や妖怪にも直に影響を及ぼすでしょう。ですから強力な封印札を後でお渡ししますのでそれを身体のどこかにつけていただきたいです」

「はあ……。うん」

「何か要望などは？」

「長めの布で作ってほしいな」

後に聞いたが陰陽師にも忙しくなってほしいと。小妖怪が最近あまり発生しなくなっているらしく、原因が私から漏れている妖気、もとい妖力らしい。

当然、妖怪の数も減り、陰陽師は名をあげられなくなり、立場に困る。

断る理由はなかった。

「姫さん、報告したのはあんたでしょ」

「そうよ」

呆れた。

さて、かぐや姫は妹紅の父親を含めた五人にそれぞれ難題を与える訳だ。

その難題は

- ・絶対に壊れないという『仏の御石の鉢』
- ・燕が時折産むという『燕の子安貝』
- ・荒々しい海流の宝『龍の頸の珠』
- ・決して燃えないという『焰鼠の皮衣』
- ・稀有な植物の『蓬萊の玉の枝』

不比等さんは一番最後。

ちなみに私は同行者その1。

かぐや姫は各々にヒントを与えている。

「では、最後に……」

「はい」

「あなたへの手ほどきは……ありません」

「はい？」

「あなたの側には長生きな方がいるでしょう？」

姫は私を一瞥する。

えっ？私？

「頼む、陽奈。特別に何かやるから教えてくれ」

「私の知識ならタダであげますよ」

その時、姫から僅かに不安を感じた。

もしかしたら知っているのでは、実在するのではないか。

それだけで作り出す材料と成り得るが、まずは不比等さんに教えよう。

「蓬萊の玉の枝。別名は憂曇華と呼ばれる植物。仏、まあ釈迦が持っている」とされている（たしか）300年に一回花を咲かせるといわれている。姫の求めるような銀や金、瑠璃なんかない。というか実在しない」

「そう……なのか……」

目茶苦茶に落ち込んだよ……。

「それで、姫の想像したのはこれ」

私は不安から恐怖へと昇華させ、蓬萊の玉の枝を具現する。

ちなみに場所は姫の目の前です。

その後、不比等さんはきっぱりと諦め、また姫は自分の生い立ち云々を手紙で帝へ。

次の満月の時に迎えが来るらしい。

明日ですね。

帝は多くの、また様々な戦力をかき集めた。

いや、勝てないだろ。相手は遙か昔に原爆に水爆、中性子爆弾まで作れたんだから。

いやー、原爆は痛かったな。衝突した衝撃が。

当然、私も駆り出された。しかも清明さんの推薦。

退治している（とはいっても雑談して逃がしているのがほとんどだが）数がそれなりに多いから、らしい。

私にとって陰陽術はそんなに難しいものではなかった。

パチエから教えてもらった魔法に似ていたからだ。

私がパチエから教えてもらったのは火水木金土の属性。日と月は特殊だから無理だった。

で、陰陽術は木火土金水。

陰陽術、魔法と、ともに陰と陽があり、属性が同じ。

違う点は魔法は攻撃や変化、陰陽術は防御や封印に特化している。

まあ、私は霊力は並よりはあるが少ない方なので専ら魔法を応用し

ているが。

けれど、月の人たちには効かないだろう。

姫の罪の重さは知らないが仮に下っ端であろうと太刀打ちは不可能だ。

時は満月。

そして、夜。

いきなり昼間の様に明るくなった。

月の使者が……

「姫、迎えに参りました」

銀髪に整った聡明な顔。

少し声がわりしているが忘れもしなかった声。

「えーりん……」

月からの他の使者が様々な事を行っている間、私はえーりんを見つめていた。

えーりんが私からの視線に気付き、こちらを向く。

ふと、私に寄って来た。

「あなた……名前は？」

「陽奈。あなたの知っている妖怪の陽奈」

えーりんの顔が驚きを隠せない様子へと変わり、また、安堵の息をこぼした。

「陽奈……なの……？」

「そうだよ。何年ぶりだろうね」

「まあ、××億××××万××××年ぶりね」

「億？」

「億よ」

なんてこった。

「貴女がいて安心したわ。これで目的も果たせる」

えーりんが言うには、

姫は月に帰りたくない。

←

他の使者を殺す。

と。

「手伝え、と？」

えーりんは頷く。

人間たちは抵抗心を無くしてしまっているが、うん、私は大丈夫だ。

まずは私が使者Aを突然殴る。

「な、なぜ!？」

人間から抵抗心を取り除こうとも妖怪まで考えなかったのは決して浅はかではない。

えーりんの計画だった。

初めはえーりんは私の敵（の演技）だった。

けれど途中で反旗を翻し、使者を一人、一撃で葬った。

「永琳、あなたは何故!？」

と使者B。

「それが姫の意思だからよ」

「おのれ、妖怪が……」

「私はえーりんの味方だから」

また一人、一人と使者を潰す。

たまに余波が人に当たるが死にはしないだろう。

その時、使者Sくらいが放った一撃、まさかの近代兵器レーザーが一本、私の横を掠めていった。

えーりんは残り一人の使者S（仮）をすぐにこの世からさよならさせてから私の後ろを指差した。

私も振り返ると血まみれの不比等さんが。

「えーりん、葉は!？」

「ないわ……」

まさか、よりによって彼に当たるとは……。

「陽奈……」

不比等さんが私を呼んだ。

「はい」

「妹紅を……任せた……」

明くる日、私は妹紅と富士山の山中にいた。

これから帝の兵ご一行は蓬萊の葉、つまり不死の葉を焼きに行くらしい。

蓬萊の葉。

それは穢れを取り込む事により、本来魂が肉体に依るものという関係を逆転させる。

結果、魂を消されない限り不死という葉だ。

と、えーりんから聞いた。

蓬萊の葉は姫の能力を利用して、えーりんが作った葉。しかし、その葉には月にはあるはずのない穢れが含まれていた。

穢れを生み出したという大罪を犯したとして姫を殺そうとしたが『永遠と須臾を操る程度の能力』のためにすぐに本人として生まれる。そのため、地上へと流刑された。

永遠とは勿論永く遠い時間、須臾とはほんの一瞬の事らしい。

何故、富士山にわざわざ赴いたかというと、妹紅のためだ。

いずれ来る事を予期し、月の民に父の復讐をしたいらしい。

まあ、その前に地上で逃げる事を選択した姫とえーりんを殺しに行きたいのだろうが。

地上に伝承される姫の話はえーりんが情報操作をしたものになって

いる。

主に私の存在と逃亡を隠す事。

えーりんは、かぐやひめは、ぶじに、つきへと、かえりました、と
聡明な頭を使って操作した。

さて、薬を手にいれるために襲わなければならないが、殺しはして
はいけない。

したら、清明さんに封印されかねない。

そして、私のポリシーにも反する。

私はゆっくりと近付き一人ずつばれないように気絶させてゆく。

さてはて、十ばかり気絶させたところでさすがにばれた。

私は抽象的な恐怖を向け、精神的ショックで気絶させた。

初めからこうすればよかった……。

「終わっただんですか？」

「うん。はい、薬。私は忠告はしたからね」

悠久の時を生きるという罪は一生償えるものでもなく、また、とても辛い事だ。

まあ、何億年も寝ていた自分が言える事ではないが。

妹紅は壺をゆっくりと傾け、壺の中身を飲み込んだ。

「ううあああああああ」

今、妹紅にのしかかるのは永遠という名の罪。それがどれほどの激痛であるかは予想できない。

ただ、分かるのは魂までも焼かれる痛みであろう事だけだ。

「はあ……はあ……」

「妹紅、髪の毛と目……」

その目は朱く、髪は白へと色が抜けていた。

私は妹紅に容姿の変化を話した。

「うわっ、絶対に淘汰されますよね」

「うーん。そうだね……」

「でも、目は本気の陽奈と同じですね」

「私は黒く戻るけどね」

これからどうするかが最重要課題になった。

とりあえず私が妹紅を連れて清明さんのところへ。

「まずは陽奈さん、こちらを」

赤く、白い模様の入った長めの布だった。

「ちょっと注意しないとね」

私は、まず紫のリボンを外した。

途端に魔力が放出するのを精一杯抑え、赤と紫のリボンで左右それぞれを括り、ツインテールに。

「ふう……」

「すごいですね……。普通であれば大妖怪でも触るのが厳しい布を簡単に……」

あれ、そうだったの？

「陽奈はどこまで強いんですか……」

「さて、次は貴女ですね、妹紅さん」

ついでに妹紅の件についても相談する事にした。

「私はどうすれば……」

「陽奈さん、貴女はこれからどうするのですか？」

「もう少しここにいようかな、と」

私がそう言うと清明さんは、ある提案をした。

「私から離れないように。あと、声でばれないように口調は変える事」

「はい……じゃなくて、うん。ですが、何故私が妖怪扱いされなければなら……いけないんだ？」

清明さんとの取り決めは、私はそこそこ名が知れた陰陽師なのを利用し、妹紅を妖怪とし、監視する名目で私の側に常においておくというものだった。

立場上は私が人間で妹紅は妖怪、実際は逆という奇妙な二人組がここに出来た。

UFG 未確認幻想少女

さて、陰陽師として京に住むこと数年、ついに平城京は平安京へと朝廷を遷した。

今は清明さんに妹紅と一緒に指南してもらっている。

が、妹紅はどちらかというと霊力よりも妖力の扱いの方が素質があるらしく、どのような要因が妹紅に妖力を与えたかは定かではないが、清明さんに力の扱いの効率をよくする指導を受けている。

私は妖怪だから必要はないが。

私は陰陽術を教わっているが、なかなか調整が難しい。

下手に強めると相手を傷付け、弱いと効かない。そんな境界がわかりにくい。

紫がいればなあ……。

そんな私でも一つだけ使えない系統の術があった。

お札を使う術だ。

とはいっても陣を敷いたりは出来る。

構築の式も完璧だ。

攻撃用のお札の式は妖怪に反応して展開する。

式に靈力を込めると私に攻撃が飛んできてしまう。自分の靈力で自分を傷付けてしまう。

相手に使う前に自分の手の中で展開してしまうのが原因だ。

だから私は滅法防御のみ。

攻撃は他の力を使っている。

さて、たまに有害な妖怪が歩いていないかを見回りし、妖怪と話したりして情報交換もしているのだが、どうやら正体不明な強い妖怪が、人こそ喰らわないものの何かしらの恐怖を与えているらしい。

ちなみに夜の見回りは妹紅が寝ている時間に、妖怪が謳歌出来る時間帯にしている。

さて、正体不明はさておき後者には癩癩を起こした。

それ（恐怖を与える事）は私の役割だ。

自らのプライドとの公私混同だが退治を決めた訳で、探してはいるのだが

「おどろけ〜」

なんだ、唐傘お化けか。

「おどろけ〜」

・・・。

「おどろけえ〜（泣）」

「わー、すごいびっくりしたー（棒読み）」

「な、なんで、あちきに驚かないの？」

絡まれちゃったぜ☆

「妖力だもれ。姿が見えてる。影に隠れて、いきなり出た方がいいよ」

「し、師匠!」

「帰れ」

さて、茶番はおいと置き、本格的に探す事にする。

まずはどのような式を構築するかを考える。

相手は正体不明な恐怖を得ている。

なら、私の専売特許な恐怖を逆探知できるのではないのだろうか。
そうになると式は構築する必要はないが。

私は集中して、正体不明な恐怖の集まりを探す。

見つけた。

私はふよふよと飛んで向かいながら考えていた。

そんな感じの有名な妖怪がいた気がする。

尻尾が蛇で頭は猿、足は狸で……みたいな伝承もあれば、頭が3つで龍の顔、足は虎で……、やら。

ただ鳴き声だけは共通して、どの動物のものとも形容し難い、おどろおどろしい声である事。

……………鵺か。

そう思っている間に目的地に着いた。

建物の屋根に黒い靄がある。

「妖怪の鵺は……………あんた？」

けれど、反応がない。なんか変な声が出てるだけ。

正体不明と銘をうつのだから、ばれる恐怖も持ち合わせているはずで、私はそれをぶつけた。

「あ、女の子だったんだ」

「!?!?!?」

あ、反応した。

「な、なんでばれたんだ?!?! みんなに知られる前に、ここで死ね

「!!」

本気の殺気が私に襲い掛かる。

うーん、強いな。

知らないもの、正体の知れないものに対する恐怖というものは誰もが抱く恐怖。それ故にそれで生まれた妖怪は純粋で強大な力を持つ。

鶴もその一人。

「あんたは正体不明に自信を持っているだろうけど、その反面ばれる事を恐れている。それがばれた事の原因」

「どうやって……」

「私は恐怖を操る。ただそれだけだよ」

「わ、私だって『正体を判らなくする程度の能力』が……」

私は少し笑ってから一言。

「年の功かな？」

まずは陰陽術で縛り上げる。

清明さん直伝だ。そんな簡単に解ける訳もない。

パキン

あ、力を測り間違えた。

「何したの？」

「いやー、動けなくしようとしたけど失敗したなー、と」

私は面倒なので叩きのめす事にした。

まずは目一杯強い結界を辺りに張る。

さて……、

「あんたに本当の恐怖を見せてあげる」

私は妖力を最大まで開放する。

清明さんのリボンで目が朱くなるまでしか開放出来なかったが十分だろうか。

「私がばれるなら……」

鵜が地面に向けて無作為に蛇みたいなものを飛ばした。そして何か
が浮かび上がって来た。

よく判らない、何かが。

しかし、嫌な予感がしなくもない。

それが私へと飛んで来た。

私は何となく避けると建物に当たった“それ”が判明した。

大岩。恐らく庭園にあった物だろう。

そうすると蛇みたいな物は正体を判明できなくするものか……。

と、なると

「何が飛んでくるか判らないじゃん」

「そうだよ」

ケラケラと鵜が笑う。

得体の知れないものは避けざるを得ない。

私が様々な方向で避けていると

「私を忘れてない？」

鶴が三股の槍で上から突いてきた。

私は咄嗟に威力を落とすものの刺さらない道理はない。

「くっ……痛っ」

ちょっと痛みで集中が途切れ、

ゴン

何か硬い物に衝突。

その後、次々と数多の何かが私に襲い掛かる。

“ばれる恐怖”をぶつけるも、物自体は恐怖を持たない。つまりは無駄。

1つは石、また1つは防具、また1つは剣。

ありとあらゆる物が私を殴り、刺し、貫いてゆく。

私はそのまま地面へと落ち、背中から衝突した。

私は意識が安定しない中、防御の物理的な結界を張る。

私は神力で傷を癒しながら考えた。

「一発で決めればいいんじゃないかね？」

私は恐怖を強めに全体に広げる。

と、鵜が怯んだ。

今だ。

威力を底上げして火属性魔法を一発。

それから木金の複合魔法で、木を出してとりあえず動きを封じた後に金属でがっちり四肢の自由を奪った。

「さて、どうしようか……」

「や、やめろ！！来るな！！」

私はそんなものを聞く気もなくにじり寄る。

「とりあえず簡単に封印しておこうかな」

私は落ち着いて札に式を構築して霊力を込める。

「や、やめろ……、私を解放しろ……」

鵜はがたがたと震えて泣き出していた。そろそろ失禁するんじゃない？

「あんた、名前は？」

私は札を使う前に聞いておきたかった。

「ぬえ。名字なんてない」

「じゃあ、ないもの同士仲良くしない？ 私は陽奈、名字はない。恐怖を操る妖怪」

私は、ぬえにお札を使った。

それからぬえは私の小間使いとしておく事にした。

条件は、私がばらさない事。

妹紅は

「誰、コイツ？」

私は応じて

「見ての通り妖怪でしょ」

それもそのはず、ぬえの容姿は、ちょっと癖のある黒髪ショートに背中からは赤と青の奇妙な羽、この時代にはそぐわない黒のワンピースか、あるいはスカート。

手には三股の槍。

「私は封獣ぬえ」
ほうじゅう

と、自己紹介する。

「名字はなかったんじゃ？」

と、私が聞くと

「お前に不意ながらも仕える事になったんだ。人に仕える獣や妖怪を人は封獣と言うから。そんなもんでいいの、名字なんて」

成る程……、そんな手もありか。

「私は藤原妹紅だ。こんな身なりだが人間だからな」

「ふん」

ぬえは妹紅が握手の為に差し出した手をパン、と払った。

それから私と妹紅、ぬえが三人で行動するようになった。

京の人は更に私の実力が上がったのでは、と喜んでいたが、反面、

妖怪とグルなのではないか、と考える者もいた。

グルではなくて、私自身妖怪なのだけれども。

妹紅はなんだかんだ言っただけでぬえと仲は良い。

よく喧嘩しているが実力差の為に妹紅が殺されるが死にはしない。
妹紅は薬で死なないからだ。

喧嘩する程仲が良いのか、その時以外はじゃあって雑談しまくっているが。

まあ、妹紅に鬱憤が溜まらないはずもないのだが、妖怪退治でオーバークルしている。

まあ、おかげで妹紅の性格は荒れていったのだが。

「妹紅、退治すべき妖怪なんて多くないんだからさ」

「そうだ。襲われる人間も襲う妖怪も悪いがお前は殺り過ぎだと思う」

中妖怪の死体を塵も残らず鬼火で焼き尽くした揚句、寄って来た小妖怪や中妖怪まで塵も残さないととなると………ねえ。

実力があるのは悪くはないけど……。

「私は本当は月の野郎どもにしてやりたいんだ。でもアイツらは逃

げた」

「理由になってない」

「月の野郎ども？」

私は簡単にぬえに説明した。

「うーん、私は親はいないから分からないな、その気持ちは」

「まあ、妖怪には分かりにくい感情だからね」

「お前も妖怪だろ」

こうして、ぬえは私たちにはまるい性格に、妹紅は妖怪に対しては、いや、月の民に対する恨みは残酷になっていった。

妹紅のそれは、いずれ時が解決してくれるだろうと私は信じた。

虎と僧侶と陰陽師

ある日。

私は、とある噂のある寺へ向かっていた。

なんでも怪しいくらいに親切丁寧に悩みを聞いてくれるらしい。

しかも黄色と黒のシマシマの服を羽織っているとか。

さらには毘沙門天であって女性であるとか。

興味があつたので向かう事にした訳だ。

ぬえはまだ寝てるし、妹紅に任せて一人で来た。

いつも通り空から俯瞰すると、とんでもない程の行列が見える。

小山の頂上に寺はあるのだが、階段の中腹付近まで並んでいる。

私は仕方なくゆっくりと降りて列の最後尾についた。

背が高ければ寺の屋根が見えるであろう位置まで着いた時、前に並んでいる男の人に話し掛けられた。

「後ろにはお嬢ちゃんがいたのか……。長く掛かるのに偉いね」

「いえ、ここのお寺は有名ですので一度お願いをと思ひまして」

「何か大事な物でも失くしたのかい？」

「え、あ、はい」

失くした物を見付けてくれると。

「なくした……。ものか……。…」

都さんに紅蓮、あの村の人たち……

「お嬢ちゃん、暗い顔しちゃって何か嫌な事思ひ出させちゃった？」

「いいえ、大丈夫です」

私は笑顔で応えた。

「次の方……。最後ですね。でもこんな小さい子が……」

頭になんか蓮みたいなりボンを付けて虎柄一色な黄色の髪の女性がいた。

虎って毘沙門天よりはその使いなんだと思うんだけど……。

「夜遅くにごめんなさい。どうしても聞きたい事があったので」

日は暮れ、明らかに小さい子は歩けない時間帯。怪しく思うのが普通だ。

私は周りに誰もいない事を確認してから

「ここは妖怪がお願いを聞くお寺なんですか？」

明らかに妖力を感じる。寺としてはおかしい。

「貴様、何者だ!!」

敵意を剥き出しにされた。

「落ち着きなさい、星」

柔らかな女性の声。

「差別はいけませんよ」

長く伸びた黒い髪に優しそうな目。

「初めて、私は聖白蓮ひじりびやくれんと申します。陰陽師の陽奈さんですね、どうぞよろしく願います」

「こちらこそ、名を知ってもらいたい光栄に思います」

「あら、貴女はもう少し軽い性格と聞きましたが」

「ああ、そうなんだけどね。なんで私が分かったの？」

「はい、聞いていた特徴通りの見た目でしたから」

黒髪ツインで上は和服を着ていて下は今見てみると……スカート、で、ちっこい。

確かに判断を誤る事はないだろうね。

「聖さんは何故妖怪を？」

「私が不在の時に代わりにいてもらっているのです。彼女は人を襲う事はありませんので」

私みたいだな。

「では、聖さんは人妖が分かり合える世を目指しているのですね」

「はい。貴女も……ですか？妖怪が怖かったりはしないのですか？」

「あはは、私は妖怪だよ。かなり高齢だけどね」

「聖もババアですけどね」

ゴン

星が呟くと聖さんに殴られた。

「これから船幽霊を助けに行くのですが、良かったらどうでしょうか」

殴った後もニコニコとした笑みを浮かべている聖さんが少し怖い。

「私は帰らないといけないから。最後に一ついい？」

「はい」

私は今までの人とは違う違和感を聖さんから感じ取っていた。

「失礼だけども、今、何歳？」

多くの霊力に混じって妖力と魔力も感じる。

しかも死に関する恐怖が普通の人より多い。普通の人たちよりも死を恐れている。

「見ての通りの歳ですよ」

「二百歳くらい？」

私は軽く聖さんを睨んだ。

と、聖さんの雰囲気が変わった。

「南無三！！」

いきなり殴ってきた！！

「危ないな」

あともう少しで頭に当たってたよ。
避けたけどさ。

「陽奈さん、聖に歳の事を聞かないであげ……」

あ、殴られた。

私はぬえと同様に聖さんを魔法で拘束した。

「何でそんなに死を恐れるの？」

「貴女には関係ありません!!」

パキン、と乾いた音がして金属が割れ、拘束が解けた。

力技で抜けられる代物ではないはずだ。あのぬえでも抜けられなかったのに。

「私は聖さんよりも長く生きてる。長年の知恵を借りるのも悪くないんじゃないかな」

「どうせ、同じ、くらいでしょう」

そのまま、ひたすら殴りにくる。

私は避けながら聞く。

「いくつなの？」

「貴女の言った通りです」

聖さんは大きな一撃を繰り出した。

今まで当たらなかったのに当たる訳無い。

私は落ち着いて彼女の拳の威力を落とし指を一本立てた。

「なっ……！？」

「私は何億歳か覚えてないよ。いいね、歳を覚えていられる若さって」

私は一発だけ聖さんに喝をいれた。

「先程は申し訳ありませんでした……」

「いーよ。あ、お茶がない。おかわり」

落ち着いてから寺の離れの茶の間でお茶を啜りあっている。

「なんで私が……」

私は星に湯呑みを差し出す。

「自分で入れてください」

星に怒られた。

私が仕方なく自分でお茶を注いでいると聖さんが話し始めた。

「私には……弟がいました」

ほうほう。

「彼は大変優秀な僧侶でしたが年老いて私に法力を伝えてくれた後に亡くなりました。力は強く名も知れていましたし、知識もたくさんありました。しかし、死を免れる事は出来なかったのです。私は弟の死から死を恐れ、我欲の為に若返る術を手に入れようとした」

「それで妖怪を保護し始めた、と」

「はい。さらには魔界に行き魔法を学び、私は人間ではなくなりました。それはたいした問題ではありません。私は妖怪を助けてゆくうちに思ったのです。なぜ、妖怪が人間に虐げられなければならないのかと。そこで人にはばれないよう、退治と称しては救済してきました。妖怪も人も同じ、悪は直し善は救わなければなりません」

私はそこまで聞いて一つ思った。

「よくばれなかったね」

陰陽師なら確実に分かる程の妖力を放っている。

「はい。魔法でごまかしていますから」

あ、さいですか。

その後、私はこっそりと、ちょっとだけ彼女に取り巻いている死の恐怖をおいしくいただいて帰路についた。

結局、私は何をしに赴いたんだっけ？

帰ると妹紅とぬえがいつも通り喧嘩していた。

私はそれを眺めながら晩酌をしていた。

いつも通りの日常。けれどそれも長続きはしない事を私は薄々感じていた。

私の周りは変わらない。

けれど周りは次々に変わっている。

ある時、陰陽師仲間から遂に聞かれた。

なぜ、年をとらないか。

私くらい小さければ人間なら既に三十路程の見た目になるほど陰陽師を続けていた。

初めのうちは、まだごまかせた。

でもさすがに一人の人生分（30〜50年）は無茶があった。

清明さんは数年前に亡くなり、私の正体を護ってくれる人間はいなくなつた。

そこで日々募っていた私への疑問、妖怪ではないか、という事柄が姿を現し始めた。

私が妖怪とグルのではなく、妖怪である事の方が私を潰す事に都合が良かった。

藤原家の陰陽師の皆さんの中にも私の正体を知る者はいるが、藤原家も衰退してきていて、それどころではなかった。

京の陰陽師たちは、何年もの間変わらぬ姿で名をあげる私が厄介になったのだ。

しかし、まだ私はそんな事を知らなかった。

今日、陰陽師の総会みたいなものがあるらしい。

どうやら清明さんの後継人を、つまり新しい総まとめ役を決める会議らしい。

当然、私も呼ばれた。

ぬえと妹紅も連れ、私はとある屋敷へと向かった。

「妹紅、なんだろうね、これ」

「明らかに陽奈を敵視しているだろう？」

私が入室した途端、剣幕な空気に切り替わった。

「人間たちを殺しちゃう？」

ぬえが物騒な事を言ったおかげで悪化した。

「なんだ、あの妖怪は……」

「言う事を聞かないではないか……」

「ぬえ、謝って」

「何で人間なんか……」

「いいから謝れ」

「すみませんでしたー」

「では、始めます」

司会をするのは清明さんのところにいたナンバー4くらいの人。

「意見を聞いていききたいと思います、では……」

順序よく、人が指名されてゆく。

みんな、腕組みまでして考えている。

「では、陽奈さん」

「あ、はい。私は………」

こうして会議も終わり、後継人は私になった。

この時代、貴族間では何かと理由をつけて宴会をする事が多い。

今回もその例に漏れる事はなかった。

「では、陽奈さんに乾杯!!」

「乾杯!!」

私はちびちびと水をいただいていた。

一応、子供。酒はダメ、絶対。
と世間には言っている。

誰も見てなきや飲むけどね。あまり酔わないし。

「お酒は飲まないのですか？」

「うーん、ちよつとなー」

「では、少しでもよいので。人妖共々、無礼講といきましょう」

と、妹紅とぬえにもオチヨコが渡され酒が注がれる。

「じゃあ、今日だけね。あんまり飲むと身体に悪いしさ」

こうして私は酒も貰い、宴会を大いに楽しんだ。

いつの間に眠っていたのだろうか。

頭が痛いし身体も動かないし……、

「陽奈、起きろ!!」

妹紅の怒声が響く。

「この餓鬼、余計な事を……」

私は自分たちのおかれている状況を理解した。

私は陰陽術で縛られてる。

なに？この既視感。

妹紅は普通に無理矢理拘束されていて、ぬえは眠っているが私同様に縛られてる。

私を宴会の主役にし、酒を飲ませ眠らせる事が目的だったのか。そもそも総会が最初から仕組まれていた罠だった訳か。

「陽奈さん、やはり妖怪だったんですね？それと彼女、何者なんですか？」

と、妹紅を指す。

「妹紅は人間だよ。特殊な、ね」

さて、抜け出さなきゃいけないけどどうにもならない。

私は少し言ってみる事にした。

「あのさ、私の髪の毛の赤いリボンあるじゃん。これ、清明さんの強力な封印がされてるの。これで清明さんは妥協した訳」

「それほどまでに強いのか。ならば封印しなければな」

封印!!? 清明さんがいないからなんとかなるかも知れないけど…

「封印受けてるのにこの状態な私をあんたらが封印出来るとは思えないんだけど」

私は不安を煽る。

不安を大きくすれば恐怖に昇華する。

いや、させる。

「ふん、そんな嘘を信じると思うか」

焦ってるな…。

「嘘じゃないよ。本気出せばこんなの振り解けるもん」

周りが一瞬だが恐怖に包まれた。

けれど私はすぐに抜けようとはしない。

ぬえが目を覚まさなければ逃げられないからだ。

「ぬえ、目を覚ませ!!」

私は叫んだ。

妹紅は口を押さえられているから私しか起こせない。

「陽奈?……ここは?」

「ばれてたんだよ。私が妖怪だって事が」

「はあ!?! お前どうするんだ?」

「逃げるよ。妹紅を助けるからぬえは邪魔者をお願い!!」

私はここでぬえと自分の拘束を破った

「妹紅!!」

私は妹紅の拘束を解き、そのまま引っ張って逃げ出した。

「ぬえ、早く!!」

「分かった。最後に小細工をする」

ぬえが蛇みたいな物を飛ばす。

正体を判らなくするやつをだ。

それを全員につけた。

攪乱させるという時間稼ぎ。

その少ない時間だけでも十分だった。

京の山中で私たちは足を一度止めた。

「ここからは別れよう。一網打尽にされたらたまったもんじゃないから」

「そうだな。私も京とはおさらばしたい」

「私は人の多い所に逃げようかな？」

三者三様の意見。

「じゃあ、解さ……」

「いたぞ!!」

早いよ!?

「私がまた足止めする。逃げろ」

ぬえが私たちを突き飛ばす。

「私一人の封印だけでも時間はかなりかかるだろう？」

「ぬえ!!」

「行くぞ、陽奈」

私は妹紅に引っ張られその場を離れた。

また、失った。

「妹紅、私、また大事な人を……」

「しょうがないさ。ぬえだって必死だったんだ」

「しょうがなくなんか……っ！」

妹紅が……泣いてる……。

「私だって助けたかったさ。でも私にはどうしようもなかった。ぬえは封印されるんだろう。死んでないなら……」

「また………会える」

今回は失ってはいない。

少しの間の別れだ。

私は自分に言い聞かせ、妹紅とも別れた。

虎と僧侶と陰陽師（後書き）

ぬえの口調とか分かりませんでした。

聖は何となく分かりますが星もなかなか分かりません。

ナズは不在だったという事で。

平安編はこれにて終了です。

古参妖怪は他に何がいたか……。地下にでも潜らせましょうか……。それともゆゆさまかな？

秋の放浪（前書き）

タイトルは洒落ですので気にしないでください。

秋の放浪

京を出て数年、私は宛もなく放浪していた。

そうだ、家に帰ろう。

「あら、陽奈。帰ったのね」

「パチエ、まだ生きてたんだ」

「勝手に殺さないでちょうだい」

いや、別れてから千年以上経ってるけど互いに見た目が変わらないし。

「私、帰国しようと思ってるのよ」

パチエが唐突に言い出した。

「帰国？」

「家にある本と今の成果を比較研究したいのよ」

「賢者の石はどれくらい完成したの？」

「八割くらいかしら」

パチエはふよふよ浮いた奇妙な虹色の結晶を私に投げた。

「あげるわ、それ。データはとってあるから。まだバランスがうまくとれてないから取り扱いには気をつけて」

どことなく力が不安定だが確かに半永久的なエネルギーは感じ取れる代物だ。

「これさ、属性毎に分けて作れないかな？」

混ぜったエネルギーから特定のものを取り出すのは非常に困難だろう。

「なぜ？」

「混ぜてると使いにくいじゃん」

「なるほど……」

パチエは暫く黙り込んでいた。

「小悪魔、手伝って!!」

「はい!!」

いきなりいそいそと作業に取り掛かり始めた。

「陽奈、あなた天才よ。その発想が大事だわ」

はて？

「五つの属性を分けて結晶にして同期させればいいのよ」

「はあ」

「無理に混ぜようとするから失敗したんだわ」

「ふーん」

それから数時間後。

「やりましたね、パチュリー様！！」

「そうね」

「出来たの？」

「理論上では完成したわ。あとは材料だけよ。結局、帰国しなきゃ

ダメだったわ」

何か力になれるかな？

「何がいるの？」

「吸血鬼の血とかよ。この国にはいないでしょう？」

そうですね。

パチエは荷物を最低限だけ持って、ふよふよと小悪魔と飛んで帰って行った。

部屋に残ったのは山積みの本と棚いっぱいの本だけ。

私は棚に本を全て戻してから、また放浪し始めた。

ある時、妙な話を聞いた。

九尾の狐が里を襲っている、と。

なぜ妙かという、襲った翌日には襲われる前の状態に戻るといふ。

私は化かしてるんだと思うけど。

「里を代表して来た？」

はい、九尾の前に私は立っています。

迫力あるなー（棒読み）。

「何の為に里を襲うのかを教えてください!!」

子供らしく、子供らしく。

「暇潰しだ。実害は出してはいないだろう？何の問題があるんだ」

その発言が問題だ、と言いたいが我慢する。

「それでも……、襲われた時の恐怖は簡単にはなくなりません!!」

「じゃあ、お前が暇潰しの相手になってくれるのか？」

私のほっぺたをつんつんと指で突いてきた。

爪が刺さるから止めてほしい。

「何を……なさるのですか？」

其一

頓知

「ここに私の描いた狐の絵がある。これを捕えてく」「じゃあ、まず絵から追い出してください。待ってますから」

其二

なぞなぞ

「上は大水、下は大火事、これな」「お風呂か海底火山」

其三

数問答

「100の饅頭がある。これを17の者にちぎったりせずに均等に

分け与えるといくつか余りが出る。あといくつ饅頭があれば余らなかったか」

「むう……」

計算面倒だな……。

「どうした？ 解らぬか？」

「2つ。ちなみにそれぞれに5つずつから6つずつになる」

終了。

「九尾さんたいしたことないですね」

「人間ごときが……」

これはいつも通り、戦闘パターン？

「私と戦え」

「やだ、戦うまでもありません。弱いそうですし」

私はここで妖力を開放する。

九尾は驚いている。面白いな、この反応。

「貴様、人間では……」

「うん、妖怪」

「騙したな!!」

「騙すも何も私は何も言ってないし」

「ぐっ……」

さて、散々おちよくったし、

「威力無限だ（略）!!」

鈍い音が山中に響き渡った。

のびた狐を放置しておくのも気が引ける。

……そうだ。

「紫ー、下僕ほしくないー？」

私は虚空に向かって叫んだ。

「そうね、ちょうどいいわ」

後ろにスキマから半身だけ出した紫がいた。

「前から出て来てよ」

「あら、いい狐ね」

話をそらされた。まあ、いいか。

「式が欲しかったけど人格の構成が面倒臭いのよ。この狐のを貰いましょう」

「じゃあ、ついでに教育してあげて」

「分かったわ。じゃあね、陽奈」

胡散臭い笑みを浮かべて紫はスキマに九尾を引きずり落としてから帰った。

お気の毒に。

また宛もなくふよふよと漂っていると大きな山が視界に入った。

ただそこに盛るようにある山だからこそ一際目立つが、それだけならまだしも妖怪だらけだ。

まるで山が妖怪に見える程、妖力に溢れている。

今は霊力主体で出してるから人間と思われ襲われかねない。

行きたいという好奇心もある反面、面倒とも思う。

うん、なんか知ってる妖気もいくつか感じ取れる。

さて、別の場所に行こうか、と思っていると私の前に一人の妖怪がもの凄い速度で飛んで来て止まった。

「あやややや、人間さんどこに行くんですか？」

「ごめん、取材拒否させて」

私は全速力で逃げ出した。

しかし回り込まれてしまった。

「逃がす訳には行きません。話を聞かせてください」

「断る!!」

私は全速力でまたもや逃げ出そうとした。

「逃がしません!!」

妖怪に羽交い締めにされた。

「はーなーせー」

「いーやーでーすー」

体躯の差からか無駄な抵抗になっている。

しょうがない……、面倒臭いけど妖力を開放して

「放せ」

私は静かに、声色を変えて言った。

妖怪は咄嗟に離れて私から距離をとった。

「あやややや、よ、妖怪でしたか？……やっぱり人間？」

私はすぐに妖力を引っ込めたものの、妖怪の身体は恐怖に震えていた。

「こ、これは緊急事態です。山に行って報せないと……」

明らかにパニックになっている。

やり過ぎたかな？

まあ、いいや。

「別に襲う気はないから」

「そうなんですかぁ……。では人間が何の用で？」

「鬼と……酒盛りかな？」

あのあと、妖怪の少女とは打ち解け、鬼のもとへ案内してもらっている。

彼女の名前は射命丸文。烏天狗らしい。

想像している烏天狗とは全然違って、ただ高い下駄を履いて黒い羽があるくらいの少女だ。

「陽奈さんは何故鬼と知り合いなんですか？」

「それは……、鬼に聞けば？」

「あやや、鬼は苦手です……」

文が手帖を出してはしまつてを繰り返していた。ネタ帳の類だろう。一度、見てみたいものだ。

「陽奈さんは人間なのに、よく鬼が平気ですね。妖怪の私でも……」

私はその言葉を遮って

「私は妖怪だけど？」

「えっ？」

「うん」

しばし、沈黙が場を支配した。

「あやややや、陽奈さんみたいな妖怪がいるのなんて初めて知りました」

手帖にもの凄い勢いで何かを書き込みながら言葉では驚いている。

文は飛ぶのも速いけど手の動きも速かった。何をそんなに書いているんだろうか。

「種族は何ですか!？」

種族？私は仲間とかたぶんいないから……、

「一人一種族の妖怪だと思う」

私のその言葉に文は一瞬固まった。

それから一言

「聞いた事ありません」

私は私みたいな妖怪が自然発生する事云々を文にいつの間にか話し

ていた。

文の手帖の頁が残り僅かになったところで鬼の住家についた。

そこにはやはり見覚えのある鬼がいた。

「ヤッホー、萃香。また会ったねー」

山中なのでクライマーズハイなのかは知らないけれども私はテンションがやけに高かった。

「げっ、その声は陽奈」

萃香が露骨にも嫌そうな顔をする。

豆か、炒った豆なのか？

それが原因か？

「大丈夫、今日は豆は使わない」

私は宣言した。

鬼の弱点を用いずに、ただ全力で相手をしようと。

「じゃあ私から……」

私は萃香の言葉を遮る形で

「ただし、手加減は出来ないよ」

言った。

私は妖力を出せる限り出してゆつくりと萃香に歩み寄る。そう、ゆつくりと。

あの時、私は攻撃を受けてばかりで私からの攻撃はなかった。だからこそだ。

私の場合は相手を怯えさせてこそ真価を発揮出来る。抑えられた状態でも鬼たち全員の妖力を上回っている。そんな力の塊が近付いて来れば、いくら鬼であろうと恐怖を感じない訳がない。

そして、その恐怖が私を強くする。

萃香が勢いよく私を殴ってきた。

「もらったー！」

私に拳が触れる。

私は威力を最小にして手で受け止める。

「ざーんねん」

そのまま威力最大、運動エネルギーも最大でぶん投げた。

萃香は地面と平行に飛んで行って岩に衝突。その岩と当たってそれが壊れてもなお飛び続け、木々を二、三本折ったところでようやく止まった。

大丈夫かな……。

「おこったぞー！！」

びっくりして見直すと角が一本折れた萃香が激昂していた。

「ミッシングパワー！！」

なんか萃香がでっかくなった。

密度を操れると巨大化できるらしい。

なんて暢気な事を考えていたら殴られた。

私も萃香同様に飛ばされるものの運動エネルギーを減らして衝突は

免れた。

「ありゃ、飛ばないな」

と、萃香。飛ばされてたまるか。

「じゃあ、こっちからいくよ」

今度は私が殴る、蹴る、と鬼顔負け張りにラッシュ。けれど手応えがない。すかさずかする。

密度を減らせば透り抜ける、って？

なら、別の手だ。

私は萃香の攻撃を避けながら陰陽術を練っていた。ばらばらならば

……

「今だ!!」

隙を見て遠ざかり、萃香をすっぱり結界で包み込む。

「出せー!!」

ゴン、と鈍い音が何度かするものの出る事は不可能。

それから内部に大量に魔法陣を展開、攻撃魔法の雨霰。当然、萃香は密度を減らして避ける。

それを待っていた。

私は結界を圧縮してゆく。ルーミアにした時同様に押し潰す。

どこまで密度を下げていられるかな？

「だ、だせー。潰れるー!!」

微かにそんな声が聞こえた気がする。

うん、ぷちつとやっちゃうかな？でも可哀相だから……、このままにしておこう。

「はい、次の相手は？」

萃香には抵抗する術はないので私は次を要求した。

「私がやろうじゃないの」

ザッ、と前に出て来たのは姐御肌の鬼だった。

上は体操着みたいなもので下はスカート。

一本しかない赤い角には星が見える。

「萃香を解放してくれないかい？もう勝負はついているじゃないか」

「嫌……って言ったら？」

「あんたを倒す」

いきなり蹴ってくる。

私は慌てて避けるものの余波で飛ばされる。なに!?!この馬鹿力。

「待った、名乗ってからでしょ!?!」

「あんたからね」

攻撃を止めてくれた……。

「私は陽奈。『恐怖を操る程度の能力』を持つ妖怪」

「私は星熊勇儀。『怪力乱神を持つ程度の能力』さ。さあさて、萃香の仇は撃たしてもらおうかね」

勇儀が拳を空に突き出す。

その衝撃が私を吹き飛ばす。

「は、はん……そく……じゃない?」

私はいつの間にか腰が抜けていた。

勇儀の場合、自分の力に揺るぎない自信を持っているのだろう。中途半端な自信は恐怖を生むだけだが勇儀にはそれがない。

むしろ、強者への出会いに嬉々としているのか。萃香を破り私が勇儀に強者と認められたのか。定かではない。

けれど、厄介な相手に対峙しているのは変わらない事実だ。

鬼は見た目とは裏腹に身体能力がずば抜けている。それに加えて勇

儀は怪力の能力。

勝てるのか？

そう考えていたら勇儀の姿が見えなかった。

「ほうけてたらいけないねえ」

目の前には勇儀の姿。

やば……

「降参しなっ！」

私の身体全体に鈍い衝撃が走った。

何が起ったか分からないが視界が一色に変わってゆく。

私は意識を保ち、神力で回復した。

殴られた事が分かった。

「あら、丈夫だねえ。萃香も倒れるのに」

首を掴まれ持ち上げられていた。

「でもこれでどうだいっ!!」

拳がまたもや飛んできた。

私は自分の威力を上げ、勇儀の威力を出来る限り下げて、拳をぶつ
けた。

私の腕が砕けた。

「威力を下げてはまず……」

「私の能力を忘れたかい？ 私も腕が痺れたさ。びっくりしたよ」

怪力乱神、つまり……無限大。

私の右腕はもう動かない。治せばいいけど時間が掛かる。

おとなげないけど……、

「一回、放してくれない？ 本気出したいから」

この言葉に勇儀の顔が驚きを隠せなくなった。

「本気じゃなかったのかい？」

「あ、うん。このリボン外さないとダメなんだよ。これが私の重い
枷になってるの」

勇儀は私をゆっくりと降ろすと

「外しなよ」

「見物してる小妖怪と弱い鬼は下がって。死ぬよ」

私が少し死の恐怖を出すと言う事を聞いてくれた。

「あと、リボンに触らない事」

私はゆっくりとリボンを解き、長い髪を下ろした。黒い髪がふわりと重力に従って下りた。

「なんだ、変わらないじゃないか」

勇儀の言葉を見殺して私は妖力と魔力を探る。……うん、さらに強くなっている。

「口だけだったら興ざめだよっ!!」

勇儀が私に拳と蹴りを乱打してくる。

私は『怪力乱神を持つ程度の能力』に対する周りからの恐怖を吸収していた。

リボンを外してからそれを理解した。

「勇儀、力に絶対はないよ」

私は妖力を全開にして勇儀の拳を左手で受け止めた。そう、受け止める事が出来た。

「なっ!?!」

勇儀が怯んだ。拳を受け止めた事が衝撃的だったのか。

理由は簡単だ。触っていないから。

紫のリボンを外しただけで魔力が膨大。

木属性は風も生み出せる。圧縮された空気はあらゆるものよりも硬い。私は掌にそれを固定して発生させただけ。

私は様々な魔法を打ち出しながら拳に妖力を集中させていった。

勇儀の傷が増えてゆく。

「撃ってばかりは卑怯じゃないかい？」

「そうだね」

私はゆっくりと降りて、勇儀に歩み寄る。

いつの間にか私の髪は朱くなっていた。

「私が怖い？」

「さあね」

内心怖がっているのは目に見えていた。

「私ね、勇儀が強い事を知ったよ。けれど、頭を使わないと、そして、自信を持ちすぎると……負けるよ」

私はただ一発、勇儀の腹に拳を撃ち込んだ。

反応すらさせない。

勇儀に後ろに飛ぶ事すら許さない。

私の中の恐怖はそれが出来た。

「萃香は解放するから勘弁してね」

今、思い出したが萃香を捕えたまま、ハンデを持って戦っていた。

何とも否めない……。

勇儀は目をぐるぐるさせて気絶してるし、やることもなくなったので、リボンを付け直して右腕を治し始めた。

「いや、お前さん強かったねー」

勇儀が目を覚ました後、なんだかんだで酒盛りになった。

「勇儀、バシバシ叩かないで。痛い」

「おっと、ごめんごめん」

「陽奈は鬼じゃないんだから考えなよ」

あはは、と笑って呑んでいるものの何だかぎこちなかった。

酒の肴に観戦とは……、鬼らしいな。

「陽奈、雑魚の戦いつまんなーい」

「まあ、そう言わずにさ」

とは言うものの、確かにつまらない。組み手をしているかのように見える。そう、戦いに見えない。

私たちの戦いを見ていたためなのか、他の鬼たちも興が冷めていた。酒の肴がないと酒もうまくはない。

「陽奈、もう一回やるかい？」

「却下。腕も完治してないし」

「それは残念だねえ」

私はあんたら鬼みたいに丈夫じゃないの。

「話くらいなら出来るけどね」

私は昔話を少しばかりした。

事の初めは村で目が覚めたところから今までを。少しなのは分からないが肴にはなったようだった。

妖怪から見ても長い年月を生きている私の話は鬼たちをひき付けて

いた。

その後に質問タイムと、暇だったので答えるのも悪くはなかった。

まあ、でも、酒を呑みながらだったので当然私も酔う訳で、最後は支離滅裂だったり退行していたりしていたらしい。(勇儀談)

うん、自分が駄々こねてたりするのとか、ないわ。

で、朝起きたら萃香が寝てて起こしたら

「陽奈、積極的なんだね」

勇儀も起きて来て

「陽奈は激しいやつだった……」

と。

私は何をした!?

問い詰めたかったけど、何となくやめた。

「いやー、陽奈は昨晚積極的だったねー（酒の呑み具合が）」

「本当に激しかった……（酔った後の言動が）」

鬼二人は少女の妖怪にばれないようにひそかに溜息をついていた。

秋の放浪（後書き）

グダグダな話になってしまいましたね……。

早く霊夢とか出ないかなー、とか思っていますが……、まだまだな
んですよね……。

妖怪と少年（前書き）

今回は大事な大事な閑話です。

妖怪と少年

私は鬼たちと戯れた後、また放浪していた。

それにしても

「あゝづ……いゝ……」

陽射しが痛いくらいに暑い。蝉すら鳴かない程暑い。卵が茹で上がるんじゃないかと思うくらい暑い。

私は着物（下はスカートみたいなものだが）一枚の服装で風通しはいいが、それでも暑い。

川とかに入って涼みたいが、以前、おっさんたちからの視線に嫌悪感を感じて以来、昼間は我慢している。

笠でも買おうかな……。

あー、ふらふらする。

なんか視界がキラキラして真っ白に……

「はっ！」

いつの間にか倒れていたのか。

妖怪でも熱中症とかになるんだ。

ところで

「知らない天井だ……」

いつの間にか私は布団に寝かされていて濡れた手ぬぐいが額に乗っかっていた。

質素な感じだが一般民家ではない。

私はふらふらと立ち上がって外へと出て行った。

「神社？」

山中の神社だった。人はあまり来ないだろう。

「あつ、起きたんだ」

声の主は男の子だった。

「君が？」

「あ、うん。歩いてたら急に前を歩いてた女の子が倒れたから……」

「ありがとね」

私は彼に微笑んだ。

彼はこの神社の事実上の神主だった。

彼の家系は代々妖怪退治を生業としている神社の家系らしいが今や何の神を奉っているかは分からないらしい。

さらにこんな山中にあるものだから人も来ない。賽銭もない、金もない。

彼の両親は大妖怪や外法の人間やらを命からがら封印したらしく、独り身らしい。

あまりにも災難だと思い、私はしばらく居候しようと考えついた。

彼の名前は白嶺^{しらみね}界人^{かいと}。職業は神主、兼、妖怪退治。

けれど私と彼は気が合った。

そんなある日、

「町の方でなんか妖怪が出たらしい」

「行くの？」

「もちろんだ」

いつも通り、妖怪退治に行く。

退治に行くのだ。

今の時代、まだ妖怪は殺すものであったりする。しかし、彼の場合は退治で済ませるらしい。

妖怪は一度退治すれば当分は自重するし、なによりも

「可哀相だろう？」

と。彼は人妖特に差別はしない。ただ、悪い事したら懲らしめる。逆に益な事をすれば褒める。

平等で優しい人物だ。

つい私は長い間、彼と時間を過ごしていた。

何年か経ち、界人は少年くらいの年頃になっていた。

「界人、話って？」

ある日、私が境内の掃除をしていると界人から呼ばれた。

「ひ、陽奈？」

「うん？」

「あ、あのな、俺は……」

界人の顔が赤くなっていった。

「熱でもあるの？ 顔赤いよ？」

私は界人の額に額をあてる。すると遂に茹でダコになってしまった。

「大丈夫！？」

「あ、ああ。あのな、陽奈、俺、好きだわ」

「え、何を？」

「だーっ!! お前の事が好きなんだよ!!」

今、コイツ、何て言った？

「もう言わないからな」

あ、そう。

「その言葉は心からの言葉なんだよね」

界人は俯いたまま黙って頷いた。

「でもダメ」

「な、なんでだよ！」

「私の事、分かってるの？」

そう、彼には私の身の上はなにひとつ話していない。

「優しくて、たまに厳しくて、いつも近くにいてくれる可愛い女の子としか……」

か、かわ……可愛い!？

「そ、それじゃあ、分かってにやいんじゃない」

噛んだ、盛大に噛んだ……。

「陽奈はいい人だと思うよ」

「違う」

私は言わなければいけない。界人のためにも。

「界人、私は……、うん、確かに私も好きだよ。でもね、私は……
よう……い……だから……」

そう、私も界人に惹かれてはいた。けれど、一緒にはいられない……。

「陽奈、何が言いたいんだ？」

「私はね、界人、人間じゃない。妖怪なんだよ。だからダメなの」

「じゃあ……！……俺が死ぬまで側にいてくれないか」

「いいの？私、妖怪だよ？」

「陽奈が何だろうと関係ないだろ」

私は……我慢できずに飛び付いていた。

「界人、大好き……！」

そんな私が彼と初めに行った事は道具作りだった。

どんな妖怪でも退治出来るものを。

あらゆる妖怪やらに反応して、死なない程度に加減して攻撃する術を私と界人で施す。ただし、私には攻撃出来ないようにしておく。

二人で着々と複雑な術を組み込んで、最後に二人掛かりでそれを形にした。

陰と陽の八卦の術を組み込んだそれは白と黒の二色で出来た球体となった。

これをこの神社に代々伝える事で力の弱い後継人でもある程度は退治出来るだろう。

伝えていく事が目的なので私と界人の血を継ぐ者しか使えない術も組み込んだ。

「陽奈、久しぶりね」

紫か……。

私がいつも通り境内を掃いていると紫がスキマから出て来た。ちょうど界人は買い物に行っている。

「なに？冷やかにでも来たの？」

「陽奈がまさか人間とそこまで仲良くなるとは思わなかったわ。ま
ずはおめでとう」

「何がおめでたいのさ」

「ご懐妊おめでとう」

紫はクスクスと笑って私を見ている。

「えっ、何て言った？」

「貴女、子供がいるのよ、ここに」

私の腹を指差し、紫がまた笑った。

マジで？

「お幸せにね、白嶺陽奈さん」

「ただおちよくりに来ただけでしょ」

紫はそのままスキマに帰って行った。

何がしたいんだか……。

ふと見ると紫のいた位置に何かが置いてあった。

……なんだ、結構いい奴じゃん。

そこには安産祈願のお守りが一つ。

程なくして、私は子供を一人産んだ。

マジで死ぬかと思ったよ、あれ。痛いってレベルじゃ……。

子供は女の子で名前は知佳^{ちか}。才ある良い子に育って欲しいという願いを込めた。

知佳は私と界人の子供だから半人半妖なのだがマジで才能があった。

ちょっと霊力の操作を教えたら翌日には空を飛んでいたからびっくりした。

そんな知佳ももう十歳になった。

なんか見た目がものすごく私に似ている。

まだ背は私の方が高いが越されるのも時間の問題だろう。

「なあ、陽奈。知佳ってお前に似過ぎじゃないか？」

「うん、同感。見ていて気持ち悪いくらいにね」

「おかーさん、おとーさん、よーかい捕まえた!!」

「「返して来なさい」」

今日は珍しく妖怪退治の依頼が来た。相手は小妖怪だが強いらしい。普段なら私か界人が一人で行くのだが夜でないと現れない妖怪らしく、夜に強い私が行く事になった。

が、いざ飛び立たんとする時に

「おかーさん、どこか行くのー？」

知佳が起きた。

界人はいびきをかいて寝ているし、知佳は好奇心旺盛でついてくるだろう。

が、昼間に退治する時とは違い、夜は妖怪パワー全開で仕事をする。そっちの方が早くて効果的だからだ。

知佳は私が妖怪とは知る由もない。

「妖怪退治行こうかな……と」

「あたしも行きたい!!」

「じゃあ、私も行くけど知佳に全部やらしてもらおうかな」

「うん!!」

知佳は早速、例の球体を持って来て早く行こうと張り切っている。

「じゃあ、行こうか」

知佳は妖怪に容赦なかった。

視界に映った瞬間に奇襲。強襲してフィニッシュ。

話を聞く気はまるでないようだ。

「ごめんごめん、もうSぐばあ……」

「知佳、やりすぎ」

「おかーさんとおとーさんは甘すぎだよ。しっかりと骨の髄まで刷り込まないと……」

育て方……間違えたかな？

「もう、悪い事はしないようにね」

私は妖怪を逃がす。

「おかーさん、よーかいの味方なの？ よーかいは悪い事を何度もするんだよ？」

味方も何も妖怪なんだけど……。

「知佳、私はね知佳には優しい人になってほしいの。人も妖怪も同じ生き物なんだよ。ご飯食べる時に、いただきます、って言うでしょ。それはね、命を分けてくれてありがとうって事なんだよ。人が野菜や兎とかを食べるのも、兎が草を食べるのも、妖怪が人を食べるのも同じなんだよ。」

「それは少し違うわね」

「うん、少し違うけど……」

「おかーさん、誰と話してるの？」

「えっ？」

「あら、陽奈。せっかく子供の顔を見に来たのに気付いてくれないのね」

なんだ、紫か。

「むっ、よーかい！おかーさんに何の用だ！！」

「知佳、敵わない敵に会ったら逃げるのも作戦だからね。紫は私の友人だから襲わないよ」

「おかーさんは何者なの？」

「知佳のお母さんだよ」

「あら、ようkむぐう……」

私は、まだ知佳には私が妖怪だって言っていない、と目で伝える。

「厄介な人よね、妖怪にとって」

「おかーさんは強いもん！！」

「そうね。私もそう思うわ。じゃあ、退治される前に帰らなきゃいけないわ。じゃあ、またね、陽奈」

紫が知佳に言った。

「陽奈は私だっ!!」

絶対わざと間違えたんだろう。

そして翌日の昼、

「おとーさん、おかーさんは何者なの？」

昼ご飯中に知佳が聞いてきた。

界人は私を一瞥するが私は首を横に振る。

「おかーさんはよーかいの友達がいるんだよ」

界人は、まあいてもおかしくないだろう、という顔をしている。

「そういえば、今夜は満月だね」

「ああ、そうだな。知佳、今夜お母さんと出掛けて来なさい」

「夜はよーかいがいっぱいだから危ないんじゃないの？」

「大丈夫だ。お母さんは怖いから」

そして、夜。

「じゃあ、界人、帰りは朝になるかも」

「いってきまーす」

「おかーさん、どこ行くの？」

知佳が少し震えながら私に抱き着いてくる。

「ただの散歩」

しばらく歩くと広い場所に着いた。まあ、今日はここでいいだろう。

私は持って来た酒を置くと

「呑もうか」

知佳に言った。

「呑もうか……って、おかーさん、ここじゃよーかいがいっぱい来ちゃうよ!？」

私は無視して

「月が綺麗だねー」

晩酌をする。

「おかーさん、よーかい退治は？」

「むこうから来てくれるから」

と、また一杯。

「夜は妖怪が活発化するけど満月は特に活発化させるんだよ」

「危ないじゃん!おかーさん、大丈夫なの!？」

なんか界人にいつまで焦らすんだ、って言われそうな気がする。

「大丈夫だよ、お母さんも今夜は強いから」

「ねえ、おかーさん」

「なに？」

「よーかいがいっぱいいるけどいいの？」

「大丈夫、悪い奴はいないから」

いつの間にか晩酌から宴会になっていた。

「最近、人を襲ってる妖怪知らない？」

「ああ、あいつ」

名前も知らない妖怪に尋ねると、彼は一人の妖怪を指差した。

そこには小さい子供が一人。

「君が人を襲ってたの？」

「ああ」

「そうか」

私は笑顔で軽く殴った。

「ここらへんで昼間には人を襲うな、って言ったよね？」

「いてーな。ほっとけよ人間が。喰うぞ」

「喰ってみてよ。雑魚妖怪」

「おかーさん!？」

「知佳、大丈夫。いくら強かろうが私には敵わないから」

私は初めて知佳の前で妖力をしっかりと出した。

「おかー……さん？」

「ごめんね、私も妖怪なんだ。界人も知ってる。知佳には私みたいな人を襲わない妖怪も知って欲しいから」

そんな事言ったら逃げられた。

まあ、また会ったら懲らしめよう。

「おかーさん、よーかいだったんだ……」

「うん、そうだよ……」

私は知佳を抱きしめていた。

翌朝帰ると界人が仏頂面で待っていた。

「いやー、ごめんごめん」

「ぼけー」

あのあと知佳はずっと上の空だし、飲み明かしてしまった。私以外酔い潰れたけど。

「ただいま、おとーさん……」

余程衝撃的だったのか、元気がない。

「まずは朝ご飯だな」

「じゃあ、おかーさんは強いよーかいなんだね」

「そうだね」

私は自分の昔話を二人にした。

私の年齢を聞いた時の二人の反応は面白かった。

「おかーさん、若い……というか子供なままだもんね」

「子供とは失礼な」

「陽奈は子供じゃないか」

「界人!!」

「ごめんごめん」

けれど、楽しい時間は長くは続かない。

それから十数年、知佳には婿さんが数年前に。

知佳はあの夜以来、妖怪に容赦ない性格は徐々になくなっていった。

今の知佳の見た目は私をもう少し大人にした感じた。

半分人間だがもう半分は妖怪なので成長は遅いし、寿命も長いだろう。

界人は……数年前に。

あの時の約束は守れたけど悲しい事には変わりなかった。

だがいつまでも引きずらないのが妖怪クオリティだ。今はこれから生まれるであろう孫を待つ日々かな？

ちなみに私は未だにほとんど成長していない。身長が0.2cm伸びた。誤差じゃない事を祈りたい。

「お義母さん、手伝いましょうか？」

つまり、筆筒の上に手が届かない。上機嫌で掃除をしていたら、はたきが手から抜け飛んで筆筒の上に……。

一応、飛ばば取れるし、魔法も使えば簡単だが、婿さんの前では使にくい。

「あー、お願いします」

私は持ち上げてもらう。

「軽いですね……」

「重いとは言われたくないけどね」

私ははたきを手中に収めてから降ろしてもらった。

「ありがとう」

「いいえ」

「ねえ、私の事どう思う？」

私は唐突に聞いてみた。というのもいつかは話さなければならぬ事がたくさんあるからだ。

「お若いと……思いますよ？」

「本音を言っていていいよ」

「何故……歳をとらないんですか？」

「それは老けないって意味でいいんだよね？」

「はい。自覚はあったんですか？」

「知ってるし。見た目、私何歳に見える？」

一度聞いてみたかった。妖怪として長い年月を過ごしているから人間的な見方を忘れている。

「すみませんが10歳くらいです」

「そうなんだ……」

人間でいうと第二次性徴早期以前。そうか、界人はロリコンで私はロリータか。

まあ、まだこの時代珍しくない。

「あの……お義母さん？」

「ん、いや、ありがとう」

「いや、そうではなくて……何者なんです？」

うーん、言うべきか？

「おかーさんたち、ご飯出来た!!」

夜ご飯も食べ、婿さんが入浴中なので知佳に聞いてみた。

「私が妖怪だ、って言っても大丈夫かなあ？」

「うーん、どーだろ？」

そうだな……。

……………。

「じゃあ、知佳から言ってくれない？ 私は里帰りというか……家出する！」

「おかーさん、何考えてるの！？」

「気が向いたら帰って来るからさ。子供は産みなよ。後継者がいないと大変だから」

「あっ、おかーさん待って！！」

私は夜空に飛び出した。

いつかは親離れをしなきゃいけないんだ。神社は若者に任せて老人は去るべきだ。

「元気でね、知佳……」

私はそう呟いて飛び立って行った。

その時、私の頬に涙が一滴だけ流れていたのには誰が気付いたのか……。

妖怪と少年（後書き）

名字確定。

白嶺陽奈となりました。

さて、気付くかなー？とかひそかに思っております。

次回は東方の史実から（やっ）と話題を出します。

早く主人公組とかとドンパチさせたいですね。あと何話で現代になるんでしょうか？

はるですよー(前書き)

某妖精は出ません。

はるですよー

勢いで飛び出したのはいいものの行く宛てなど特にはなかった。

鬼との宴会も悪くはないけど体中痛くなるのは必死だ。

じゃあ………家に帰るか……。

「あら、久しぶりね」

ボタン

誰かいたような……。

私はゆっくり扉を開けてみる。

誰も……いないな。

「人の顔見て扉閉めるなんて失礼ね」

「わきゃあああああああ。……なんだ、紫か……」

いつの間に後ろに移動したんだよ。

「ふふっ、貴女の驚き方は面白いわね。……ところで、暇してないかしら？」

また紫は胡散臭い笑みを浮かべる。まるで私の心情を理解しているかのように。

「もしかして、何か頼みがあるんじゃないの？」

「あら、口に出した覚えはないわよ？」

「じゃあ、あるんだ」

「たぶん、貴女しか出来ない事よ」

スキマを出ると、そこはお屋敷だった。

だが、みよんに静かだ。人の気配がまるでしない。

「くせ者!！」

いきなり、白髪……というより銀髪の爺さんが刀で襲い掛かって来た。

目茶苦茶な速さで抜刀して切って来るが

「止めなさい。私の客です」

一つの声によって阻まれた。

「ですが……、妖怪でござい……」

「黙りなさい。妖怪であろうと客には変わりありません。……まあ、日傘をさした方だけですが。その小さい子は切り捨てても構いません」

えっ……？

「かしこまりました」

目茶苦茶速くて見えない刀を避けろというのか。妖怪でもこんなに速く切る奴はいない。

しかもこの刀、ただの刀じゃない。

業物だけど破魔か何かの力もついでる。

当然、そんなものに耐性はないので避けざるを得ない。

「紫、助けてよ」

「え、紫のお友達？」

「まあ、そうね」

くつくつと紫が笑う。

謀ったな……。

「止めなさい！その方も客人です」

「先程は申し訳ありませんでした」

「気にしてないから……」

今、爺さんに謝られている。

この爺さん、名前を魂魄妖忌というらしく、この屋敷、西行寺家に代々使えてる半人半霊らしい。

「家来の失態は私の失態でもあります。そもそも私が全て悪いんです……」

「紫、お嬢さんの周りにどす黒いオーラが……」

「それが彼女、西行寺幽々子の悩みよ。あれは能力の一部」

「幽々子さんの能力とは？」

「『死に誘う程度の能力』よ」

幽々子さんの能力は元々は『死霊を操る程度の能力』だったらしい。けれど、妖怪桜こと西行妖との共鳴作用みたいなもので能力が変質してしまっただけらしい。

西行妖、それはとても綺麗な桜の木。しかし、その美しさ故に自害する者が集まるようになっていった。やがて、その死霊たちは桜の木に徐々に恐怖を集めさせた。そして、妖怪桜へ変質した桜は人を死へと誘うようになってしまった。

そんな時に生まれたのが幽々子さんだ。

同じ力を持つが故に近づく事が許された人間。ただ、共に力は強くなっていっていった。

で、現在に至る。

「私に何をしろと？」

「貴女なら西行妖を無力に出来るのではないかしら？ 恐怖がまとわ

りついて妖怪になったならば取り除けばいいと思うの」

簡単に言ってくれる。

「お願いします……」

と、幽々子さん。

力がここまで強いと、桜を直したところで幽々子さんの方に引っ張られて戻ってしまうだろう。もはやシンクロに近い状態。片方が欠損すればもう片方が補ってしまう。

「一応、やってみるか……」

凄く……大きいです。

桜なんて子供が登れるくらいのものを想像していたけど、そんなレベルじゃない。

けれど、一度恐怖に目を向けると真っ黒だ。

「どう……ですか？」

「やってみる」

私は試しに少し恐怖をいただく。

濃くて強い、恐怖の根本の“死の恐怖”。

私はもっと欲しくなった。

ふいにグンと引き寄せられる。

私の力を盗ろうとしているのか？

徐々に強くなってゆく。これは……ヤバイ。

私はどうにかしようと魔法で炎を出すも消された。

「紫、この桜、私を吸収する気だよ。予定変更、私が引きずり込まれる前に思いっきり恐怖を奪い取るから紫は私と桜を幽々子さんと同期する前に結界か何かで繋がりを切って。私がどうにかする」

「分かったわ。でも陽奈、貴女が引きずり込まれる、ってどういう事？」

「わざと吸収させて吸収し返す気だったんだよ。自分のものなら入りやすい。私に十分吸収させて自分に近い者にさせるのが狙いだっただよ」

さらに力が強まる。

「いくよ、紫。もう限界……だから……」

私は大量の恐怖を奪い取り、そのまま精神を西行妖に引きずり込ま

れた。

暗い……。

どんどん落ちてゆく……。

温床となり増幅するだけの存在になってしまった怨念たち。今、何を怨んでいるの？ 何に怯えているの？

死ぬ事を恐れているの？

でも、もう恐れていないじゃない。

愉しんでいる。

縛られて言いなりになっていいいの？

私が君達の恐れているものを全部受け止めてあげるから。

自分の手で掴もう？

負の連鎖を断ち切ろう？

あなたたちも私たちも、生きていても死んでいても、存在には善悪はないんだよ。

ただ、不自然な状態がいけない事。

死んでもからも逃げちゃダメだよ。

逃げたら次はやって来ない。

恐怖の鎖を解いてあげるから、還ろう？

目が覚めた。

私は桜にもたれ掛かっていた。

恐怖は完全にいただいて、怨念は大半が成仏し、この桜に残っているのはまがましい妖気のみ。

しかし数百年放っておけば、また力を得てしまうだろう。

私がしたのは進化を止める事だけ。

最終的には半永久的な封印を施さなければいけないだろう。

「紫、ただいま」

「おかえりなさい。その様子だと大丈夫なのかしら？」

「実はかくかくしかじかで……」

「それもそうね……」

通じた！？ かくかくしかじかで通じたよ。

「あの……いったい何があったんですか？」

「つまり、超弱くしたけど封印しないと戻っちゃう、って事」

それから桜は人をあまり襲わなくなったが、まだ幽々子さんの力に衰えはない。

人里に出てしまえば、みんな死んでゆく。

屋敷に人が来てもまたしかり。

幽々子さんの能力に対して、紫は境界を操ってるらしいし私も相殺している。妖忌さんは半分幽霊だから影響がないらしい。

人に会わないと人間はどうなるか。

神経衰弱に陥る。

ただ、私たちも妖忌さんもいるから、それはほとんどない。

ただ、触れる人数が少ない。

そう、少なすぎた。

ある春の日、満開の桜のもとで幽々子さんは自害していた。

ただ、隣に封をした手紙とともに……。

自害しに行く幽々子さんを妖忌さんは黙って見送ったそうだ。

手紙にはこうあった。

前略。

これを読んだということは私は自害しているでしょう。

親愛なる紫と陽奈にお願いです。私は貴女たちに会いたい、と未練を残します。私の肉体を要として西行妖の封印をしてください。私の身体はこの世から離れなくなりますが構いません。私の魂一つで多くの人が救うのが罪滅ぼしとなればと思います。

結果はどうなるか分かりませんがよろしくお願いします。

西行寺幽々子

私たちは早速作業を始めた。

紫の封印は能力を使わなければならないため不採用。よって私の知識と術を使う事にする。

紫は、まず境界を操り様々な措置を施す。必要な措置は私の指示によるものだ。

魂と肉体と桜についての結び付きやは紫の仕事。私は何も出来ない。

封印に用いる陰陽術は五行、つまり木火土金水の流れを組む。桜を殺さず、力を抑えるには生の循環を止める事が必要だ。

まず、春を象徴する木は完全に陰。

次に、夏を象徴する火は成長を促さない程度に陽、あとは破壊の陰

を組み込む。

土は保護と季節の変わり目、外からの隔離に陽を少しと変わる事のない季節をおくために陰を残りに。

金は完全に陽。秋を象徴するから滅びとして。

冬を象徴とする水は命の誕生も司るため陰陽のバランスが微妙。

そうやって細かく術を組んでゆく。

簡単に書けば二元一次式みたいなものだが今回は複雑すぎて札がほとんど真っ黒になった。

「紫、これ貼れば大丈夫だと思う……」

「札が黒く見えるのは気のせいかしら？」

「私も組んでからびっくりした」

札も設置して、あとは霊気を込めるだけ。だけど……霊力足りるかな？

とりあえずやってみた。

・・・

やべえ、力がどんどん使われてゆく。かつてない脱力感が全身を襲う。

ふと身体が軽くなった。

霊力尽きました。お疲れ様でした。

「紫、助けて!!」

術が壊れかけている。

「私は何も出来ないわよ。普通の妖怪は霊気は人間未満だもの。貴女だけよ、人間を超えてるのは」

「で、でも、崩壊を止める事くらい出来ない？」

「無理よ。複雑すぎるわ。貴女、いろいろな力を持っているんだから何かで代用出来ないの？」

生憎、私には力の変換機構はない。

そしてたぶん、妖気は無理だ。

魔力は………いけた。

私はリボンを外して、見栄え悪いのでポニテにしてから、魔力を注ぎこんだ。

が、歓喜したのも虚しく底を尽きた。

術に対しての効率が非常に悪い。

私はまた髪型を元に戻して、切り札的なもの、神気を使った。

「なんとか終わったよ……」

実に効率がいい代用力だった。初めの霊気と同じ分を満たすのに雀の涙ほど。

それでも全体の半分くらい消費したが。

出来れば使いたくはなかった。

他の力と違って回復しないからだ。

私には信仰がないし。親交はあるけど。

それが半分くらいなくなった。

今の私は力の量から2割が純粋な神で8割が純粋な妖怪。けれどリボンをつけてるから半神半妖くらい。

「紫、私、寝る……」

疲れたら眠くなる。

「おやすみなさい」

その時の紫の笑みからは胡散臭さが感じられなかった。

それから数日後。

幽々子は亡霊のまま姿を顕現している。

私が起きた時は既にそうだったのだが。

まず、性格が物凄く明るくなった。それと、幽々子さん、と呼んだら、堅苦しい、と言われ呼び捨て状態だ。

幽々子の成仏しなかった理由が私たちな為、名前とか忘れなかったらしいが桜の封印については覚えてないらしい。もしかしたら覚えてるかも知れないが桜を見て頭に疑問符を浮かべていた（春なのに枯れているから）ので、やっぱり忘れていたのだろう。

紫との審議の結果、話さない事にしたが書物には残しておく。

私が寝ている間に紫は閻魔に会ったらしいが、子供に説教された、と嘆いていた。ちなみにまた来るらしい。

来た理由は今回の封印について。

次に来る理由はこれからについてらしい。

私も久しく説教されるかと思うと怖くなった。

「逃がさないわよ。また来る理由は貴女が寝てたからなのよ」

泣いた。

またいくらか日が過ぎ、三人で団子を食べながら話していると一人の訪問者があらわれた。

「私はおさらばするわ」

「させませんよ」

凜とした声、緑の髪にゴツイ帽子、ちっこい見た目の少女が立っていた。

「八雲紫、貴女も聞かなければなりません。ところでそちらの方が陽奈さんですか？」

「そうですわ」

紫が敬語モードだ。

まさか……

「初めまして、閻魔をしている四季映姫と申します」

「私は白嶺陽奈です。どうぞよろしくお願いします」

私は会釈した。

「さて、西行寺幽々子の今後ですが……」

こうして決まった事はこの屋敷を冥界の白玉楼という場所に移し、あの世へ行く幽霊の一時的な管理など。

一通り話が終わり、屋敷の移動の為にもう一仕事あるからと映姫さんが泊まる事になり暇が出来た。

「陽奈さん」

「はい」

そして呼ばれた。

「この際です。貴女の事も見ておきましょう」

「はあ……」

映姫さんが手鏡を取り出した。

「それは？」

「これは浄玻璃の鏡といいます。これで貴女の罪を映し出すので反省しなさい」

と、私に鏡が向けられる。理不尽だ……。そう思った時、

パリン

鏡が割れた。

「えっ……?」

「割れ……ましたよ?」

「だ、だいたい貴女は長生きし過ぎる」

「普通に暮らしていましたよ?」

「そ、そもそも貴女という妖怪は……妖怪は……」

映姫さんが棒を取り出した。

「それは?」

「これは悔悟の棒。貴女の罪の大きさに重さが変わります。罪人の頭を叩く棒です」

と、映姫さんが棒に何かたくさん書き込んでいる。

「叩かれるんですか?」

「叩かれるんです」

映姫さんの書く手が止まる。

「で、では……」

両手で顔を真っ赤にして持っている。

頑張っ て 振 り か ぶ っ て ……

ズドン

……そのまま倒れて床に穴が空いた。

床を貫通して地面にめり込んでる。

「ちよつと棒持たせて」

「だ、だめですよ……」

無視して持ち上げ………られない。

しょうがないので魔法を併用してでも持ち上げた。

「あの……、こんなもので叩かれたら顔が吹き飛びますよ？」

「そう……ですね。はい。貴女を死なせたら私が罪人になってしまいますね」

この後、あまりにも映姫さんが謝るので何だか申し訳ない気持ちになった。

無事に屋敷も白玉楼に移って、映姫さんは帰って行った。

「私、あの閻魔苦手だわ」

紫と幽々子が声を揃えて言ったので笑ってしまった。

説教くさいんだと。

それから映姫さんに聞いたけど亡霊となった幽々子さんは『死を操る程度の能力』になったそうだ。これによって近付いた人を無差別に死に誘う事はなくなったらしい。

まあ、この冥界に人が来るかは知らないけど。

私や紫は生者だ。半分幽霊や完全幽霊な方々と違って冥界にずっといていいものではない。

つまりだ。

帰宅しよう。

私と紫は幽々子と妖忌さんに別れを告げ、それぞれ帰路についた。

ちなみに妖忌さんがお土産にくれた大福と饅頭がとてもおいしかった。

た。

はるですよー（後書き）

映姫は、まだその地が幻想郷ではないのでヤマ（略）はつきません。
本当は何かつげようとしたがやめました。

ちなみにヤマザナドゥとは幻想郷の事で、ザナドゥとは楽園を意味
するとか……。

闇と闇

数日で家に帰ってからやることもないので本を読む事にした。

パチエの置いていった本でところせましと埋められてしまったため本には困らない。

それにしてもいろいろな本がある。魔法関連はともかく何でガーデニングとかもあるのか不思議だ。

さて、読むか。

少女熟読中・・・

やっと全部読んだ。何年かかったは知らないけど。

身体を伸ばして、凝り固まった身体を解した。不眠とは言わずとも食べてはいなかったからお腹は空いた。

別に食べなくとも、私は妖怪で恐怖を糧にしてるから余程の事が無い限りは死にはしない。それでも身体は鈍った気がするけど。

本を読んでいて捨食の魔法というものを見つけた。食べなくても魔法を糧に出来るというものだ。私にはあまり必要ないけどパチエによるマークが他の魔法より目立つようにしてあったので覚えておいた。

気分を変えたいし時間を考えずに本を読んでいたため、私は久しぶりに外出する事を決めた。

まずは神社だ。改めて向かうと結構近かった。

「知佳、いるー？」

「あ、おかーさん。久しぶりだね」

「何年くらい経った？」

「うーんと……、百と数十年くらいだよ。おかーさん何してたの？
もう私の曾孫の代になっちゃったよ？」

「……本を読んだ」

百何十年も引きこもってたのか……。

途中、紫の介入とかもなかったから気付かなかった……。

知佳も苦笑いしてるし……。

「おかーさん、一つ聞いていい？」

どうやら話を変えたいそうだ。

「何でも聞きなさい！」

「子供がみんな女の子なんだよ。毎回婿をとってるんだよ」

ばーどうん？何て言った？

「女の子しか生まれないんだよ」

「ごめん、理由は分からない……」

生命の神秘はすごい!!

はい、逃げました。すみません。

心当たりもないのでどうしようもないけど。

「そーいえば……おかーさんに頼みがあるんだけど」

「うん？」

私は今、孫たちを愛でているが……成長遅いと思う。知佳もやっと母親みたいな見た目だし。妖怪の血は薄くなっているけども残るんだと感じた。

「……さん、おかーさん、聞いてる？」

「あー、うん」

どうやら知佳の話によると、最近神社の近くで大妖怪がうろついているとか。

しかも人を頻繁に食べるらしい。

もつとも、夜は危険だが昼間はあまり姿を現さないらしいが。

「で、退治してくれと？」

「うん。子供たちも怖くて外で遊べないし、夜遅くだったら里に泊めてもらうしかなくなっちゃうから」

「でも里も安心は出来ないんじゃないの？」

「うーん、それがね？どうにも人里とか居住地に襲いには来なくてね、森を歩いたりしてると襲って来るんだって」

……変わった妖怪だな。普通の妖怪なら里を全滅とかあるのに。

「しかもね、妖怪退治の人とか強い人ばかりが犠牲になるの」

「じゃあ今晚に二人で行こうか。子供と婿さんも神社の中なら大丈夫なんですよ？」

そして夜。

私と知佳は森を歩いていた。

あからさまに多くの靈気をまとい、妖気は隠す。これで襲われる条件には合致するはずだ。

「ねえ、おかーさん、よーかいの容姿を聞いてないよね？」

知佳から他愛ない話題が出る。

「それは出会えば分かるだろうし」

大妖怪はまよっている雰囲気も妖気も全然違うし。

「おかーさんすごいねー。でもさ……」

突然、辺りが暗くなった。

夜なので当然暗い訳だが、それでも月や星は瞬いていた。それすらも掻き消す闇。

「知佳？」

「おかーさん、油断しちゃダメだよ」

知佳に腕を掴まれた。

そこから私を闇が侵食してゆく。

私は慌てて腕を振り払った。

「うっ……」

掴まれていた部分を中心にえぐられていた。

「知佳……じゃないよね？」

「あー、ばれちゃったのかー。私を退治するにはこの身体を殺さなきゃダメだけど」

クスクスと知佳の顔が笑う。

けれど、溢れる妖気は知佳のものではなかった。

「知佳の意識はあるの？」

「ないよ？殺しちゃったから。自殺に近かったけど。自分で潰れたの」

私はそれを聞いて安心した。もう、知佳は死んでいる。つまり、幽々子や映姫さんに聞けばいい。

「そうか……。知佳は死んじゃったんだ……」

「そーなのだー」

「じゃあ、その身体は関係ないね」

私は瞬時に魔法陣を展開して一斉射撃した。

やったか？

「私は後ろだよ？」

いつの間にか背後をとられていた。

知佳の身体で闇を握り、剣として私に刃を向ける。
私は咄嗟に回避した。

掠った部分が闇に侵食されなくなる。

私は神力で快復しておく。

「どうしたの？ おかーさん」

「うるさい」

「ねえ、おかー……」

「黙れ」

私は妖気を思い切り開放した。

してしまったのだ。

「ありがとう」

相手はニヤリと笑うと闇を広げ私の溢れた妖気を喰らい尽くした。

敵に塩を贈るとはまさにこの事だ。

感情に任せて相手に妖力を与えてしまった。今の私は限りなく人間に近い強さだろう。

妖怪の私は、それこそ様々な力を持っているが妖力が主な力だ。他の力と違い、枯渇は生命に関わる。

「陽奈、約束は守ってるよ」

相手が言う。

「私は村とかは襲わない。なのに何で退治をするの？」

約束？

私はあなたを知っている？

なぜ、私の名前を知っているの？

「バイバイ、陽奈。楽しかったよ」

闇が私を包んでゆく。

……そうだ、忘れていた。

私は久しぶりにリボンを解いた。

私はどれだけ間抜けなんだ。自分にした封印をも忘れていたなんて。

私の身体の隅々まで妖力に溢れてゆく。

相手は何かを感じたのか、私から離れてくれた。

「あの時より……強くなってるのだー……」

私は一度した失敗はしまいと、全力の妖力を無理矢理に身体に押し込んだ。他の力も一緒に外には力を放出しないように。

「ここからが本番だよ……」

私はこの時不思議な感覚を体験していた。

闇を恐れていなかった。

全てが見えた。

この闇は妖力に操られているが、根本は能力だ。闇を操る能力の持ち主が知佳を襲った犯人。

相手は闇による双剣を作りだし、私に切りかかる。しかし、単純な剣筋で避けるのには苦勞しない。

ふと思った。私には攻撃手段はあるのか？

魔法は闇を盾に防がれるだろう。試しに様々な魔法を闇に撃つとなくなってしまった。

では、恐怖は？

私は死の恐怖を、そして“死”そのものを相手に。けれど闇がそれらを掻き消した。

……攻撃手段がない。

防戦が続き、私の体力も大分なくなってきた。

「避けてばかりは卑怯なのだー」

闇の大鎚が私に襲い掛かる。

様々な武器を使ってくるものの洗練されていない動きは無駄が出る。
だから見切るのも簡単だ。

私はそれを受け止めた。

「あれ？」

私はしっかりと受け止めていた。

「お、おかしいのだー」

そして、触れた時に分かった。

私は闇に妖力を、ある恐怖を付加させてから注いだ。

相手は慌てて闇を手放した。

闇が象ったのは一本の刀。

「これで互角かな？」

私はそれを握った。

私は妖忌さんから少しだけ教わっていた剣術で相手を攻める。相手の剣は基礎がないため私が勝つ。

闇と闇がぶつかり、闇の波を生み出す。

それが何度も繰り返された。

私はその間に周りの闇を自分のものにしていった。

相手の攻撃が止んだ。

いや、攻撃が出来ない。

私が辺りの闇を乗っ取り、使えなくした。

既に相手のストックは手に持った剣だけだった。

「何をしたのだー!？」

「あなたの真似事だよ」

私は躊躇いなく、知佳の身体を両断した。

「陽奈、躊躇わないのだー。さすがなのだー」

すると、切った所から大量の闇が噴き出した。

何故、名前を知っている？

私は名乗ってはいない。

「あなたは……誰？」

帰って来た言葉は私を戦慄させるのには十分過ぎる名だった。

「私は……ルーミア。陽奈、久しぶりなのだー」

「陽奈は何も変わってないのだー。私は陽奈に負けないように強くなったのだー。………あー、子供っぽい喋り方は止めるよ。それで、実力のある者を襲って、時には育てる。色々な事を学んだ。人間とは、妖怪とは、そして自分とは何たるかを。闇は夜の、影の闇だけじゃない。私は闇なら何でも操れる事を知った。心の闇でも…

…」

ルーミアが闇へと変わり、私に迫る。

「ねえ、陽奈の心の闇も見せてよ」

私は抵抗しようと手を振るうものの虚しく空を切るばかりだった。

そして、ルーミアである闇が私を包んだ時、私の意識は闇へと落ちた。

……私はどこにいるの？

暗闇？

温かい。

これは……？

私はゆっくりと目を開けて温かいものを見た。

それは紅。

「ひ……な……」

誰？

「お……れ……は……」

紅蓮が血まみれで四肢を八つ裂きに……。隣にいるのは……間違いない、都さんだ。けれどそれはもはや原型を留めていない。ただの肉塊。

やだ……。嫌だ……。

「お前が俺達を殺した」

私の視界が闇に染まった。

もう、見たくない。何も……。誰も……。

怖い。

怖い。

消えたい。

私は何で生きているの？

「陽奈さん、死んじゃダメや」

「そうだ。お前は死ぬな」

えっ？

「都さんと……紅蓮？」

「そやで、陽奈さん」

「うむ」

都さんはニカツと笑った。
紅蓮も相変わらずだ。

「でも……どうして？ 私は……」

「言っとくけど本物やで？」

「じゃあ、私も死んじやったの？」

「死んでへん。あのな、ちっこい閻魔さんが慌てて私らを陽奈さんのところに寄越したんや。あんまり言っちゃいけないのやけど陽奈さんが今死んでまうといういろいろ大変なんや。だから生かすために繋がりが強かった奴らと呼ぶって考えたらしいで」

「らしいぞ」

紅蓮は理解しているのだろうか、いやないな。

「転生とかはしなかったの？」

「出来ない訳ではないらしい。けどな、私ら魂強すぎて記憶を消せないらしいんや。せやから奨めにくいし、それに……身体を作れないんやと。陽奈さんくらいの強さの妖怪の身体じゃないと私らの魂入れられないんや。でもな、理由があって作れへんらしいんや。……まあ、私らの役割は済んだし、そろそろ還るわ」

「死ぬなよ。まだその時期じゃないらしいからな」

「最後にな、私らほとんど妖力いらんのや、死んだから。せやからあげるわ」

「俺も鬼だからあんまりないが足しにしてくれ」

そう言うと二人は光の粒子になって消えた。

これ以上、妖力増えても……、溢れる妖気抑えるのが大変なだけだけど……。

まあ、おいておこう。

陽奈の心を闇に染めてから数刻経った。

心が動かなければ、私は身体を操れる。副産物的作用だけど有用ね。

魅力なのは妖力の膨大さ。何でも出来そうだわ。なんでこの力で餌（人間）どもを支配しようとか考えなかったのか不思議すぎるわね。

まあ、これだけあれば大丈夫かしら。

まずは手始めに誰か妖怪を襲おうかしら。

私はこの時浮かれ過ぎていたのか、それとも些細な事だと思ったのか、二つの魂が身体に入った事には気付かなかった。いや、気付いていたのかもしれないが見逃したのか……。

それが自分の首を絞めるとは誰も思わなかったわ。

私が入里に向かって数刻、陽奈の身体に違和感を感じ始めたわ。最

初はただ、調子が悪いだけだろう、と考えていたの。

けれど、私が人里を視界に捉えた辺りで違和感は異変へと認識が変わったわ。

闇に落としたはずの心が、また輝いている……。

「困ったわね……」

私は闇を一層深めたけれど、その太陽は強まる一方だったわ。

そして、私は陽奈の身体から追い出されてしまったの。

身体が動く。

ごく当たり前の事だが懐かしく感じる。

「うう……どうしてなのだー？」

「それは、今のルーミアには分からないと思うよ……」

「どーいう意味なの？」

ルーミアは心の闇を吸収してしまっているのだろう。それがルーミアを悪い方向に染めてしまっている。

「闇は奪うためのものじゃないんだよ」

「違う。私は闇なの。だから……」

「無理しないでいいんだよ」

分かった……。ルーミアは変わっていない。ただ、暗いものに触れすぎたから……。

「私は……闇だから人を、みんなを怯えさせる事しか出来ないの。それで人を……殺したりしないと……」

ルーミアは無茶をしているのだろう。

人を殺す……生命に対して自分なりに努力はしたのだろう。

「私は自分から子供とかは襲わないの。まだ、未来もあるし……。でも妖怪が人間を襲うのはしょうがない事。じゃあどうしようか考えたの……」

「私も……。ルーミア、辛かったよね」

私はルーミアを抱きしめていた。

見た目は私と変わらない身長だけど、私の腕にすっぽりと入った。

ルーミアは私の背中に手を回して、そのまま私の背中に刺した。

「えっ？」

私の口に血が逆流する。

「陽奈は勘違いしてない？私の答えは……妖怪の絶滅だよ。そのために陽奈を超えなきゃ、誰よりも強くなきゃ。……だから……死んでくれるよね」

油断していた。

「ごめんね、ルーミア」

「……何で謝るの？私は今から陽奈を殺すんだよ？」

私は魔法で赤い妖力を抑えていたりボンを引き寄せる。

そして、それをある程度切り取り、封印の術式を幾多にかける。

「ルーミアのやっている事は雨が降ったら雲を消せばいい、って考えと一緒に。妖怪はいなくならないんだよ」

私はルーミアにリボンを着けて

「ごめんね……」

封印した。

ルーミアは地に伏して気絶している。

「紫、後処理を頼む」

私は虚空に話し掛ける。

・・・。

私はスキマを開いて紫を引っ張り出した。

「あいたた……、相変わらず人遣いが粗いわね……」

「境界を弄って。ルーミアが封印を破れなくなるように」

「本当に貴女は後悔しないのかしら。あれほど嫌っていた、未来を

摘む、という行為を貴女は促しているのよ」

そう、後悔しない訳がない。

私は本当はしたくない。

「お願いします……」

紫はスキマに重いこ……軽やかに腰をかけると境界を弄り出した。

「ときに陽奈」

「ん？」

「どうやってスキマを開いたの？確かに私は見ていたけど別のスキマから引きずり出されたわ」

「なんとなく出来る気がした」

「貴女は面白いわね」

クスッ、と紫が笑った。

「それより何で助けてくれなかったの？」

「助けられなかったのよ。あんな戦いの最中にいたら消し炭になっちゃうわよ」

紫はふう、と溜息をついた。

「だいたい今陽奈には近付きたくないのよ。何故か本能で避けなくなるのよ。お願いだから妖気を抑えてもらえないかしら」

私は無言でリボンを二つつけた。

「抑えたけど……、背中の風穴をどうにかしないといけないんだけど……」

ルーミアに刺された部分だ。見事に貫通してしまっている。

「私は治せないわよ」

「うん、期待してない」

紫が、それは残念ね、と呟いているけれど気にしないで神力で治す。

「そういえば陽奈、私は貴女の考えを試してみたいと思ったのよ」

唐突に話題をふってきた。

「私の？」

「人間と妖怪の共存する世界、ってやつよ」

「実現は？」

「貴女のおかげで少しは楽が出来そうだわ。あの狐……私の名字と藍って名前をあげただけど、彼女が手伝ってくれるらしいわ。じやあ私は藍が怒る前に帰るわね」

「うん、頑張って」

人間と妖怪の共存か……。

もう少し早く、ルーミアが聞いていれば……。

私はそう思いながら倒れ続けるルーミアを一瞥して、この場を離れた。

闇と闇（後書き）

現在の西暦は1500～1700程度と考えてください。

さて、次回ですが……詳しくは活動報告にありますので。
随時募集中です。

西暦から見ても、吸血鬼姉妹が生まれるでしょうが国外なので誕生話は書きません。

拡張Project

今日は紫に呼ばれた。

私の理想とかいう所を作る為にやる事があるらしい。

“妖怪拡張計画”

そう呼ばれたものは、ここら辺一帯を境界で囲み、内部を外からの幻の世界と位置付けする事によって各地に散り散りになっている妖怪を内部へと無意識下で誘導し、妖怪を集めるとともに認識を霞ませるものだ。

さらには流行らなくなった無生物なども引き寄せるらしいが今はおいておこう。

しかし、この行為には世界のバランスを著しく崩す可能性がある。

何せ、ここら辺を世界から隔離する訳で、その弊害は計り知れない。

が、紫も考えていたらしく（散々説教された揚句）閻魔などに許可を得たらしい。

よく頑張った、紫。

で、様々な大まかな手続きは済ませたらしく、肝心の境界（結界）をこれから張るらしいが紫の力では力不足らしい。

「陽奈には役不足だと思うのよ」

「いや、私に世界を変える程の力はないから」

「あの説教くさい小さくていらいらする閻魔が言うには貴女が適任らしいの。……あー、忌ま忌ましい、あの餓鬼」

どんなに嫌ってるのさ。

「ま、まあ、落ち着いて。私は何をすればいいのかな？」

「そうね、貴女には妖力を私に提供してもらおうと思っていたのよ」
思っていた？何故に過去形？

「でも貴女には境界を弄ってもらうわ」

「で、でもさ、私ってそんな事出来る訳ないじゃん。紫の専売特許じゃん」

私には境界を操る事なんか出来ません。

「そうでもないわよ。貴女はルーミアと戦った時に何をしていたかしら？闇を操っていたわよね」

「あー、そういえば」

ふと頭に、ある仮定が浮かぶが有り得ないので取り消す。

「さらに、私をどうやって引っ張り出したかしら」

「それはスキマを……」

「その時も行っただけど私はスキマをその場に設置していなかったわ。直接は見ていなかったもの。貴女はスキマを開いて私を引きずり出したのよ」

私がスキマを？

「いやいやいや、ないでしょ。有り得ないでしょ」

「でも事実よ」

私の消した仮定が事実だという事が判明した。

「で、でもさ」

「今は使えないよ、でしょう？」

もはや紫には勝てない。

認めるしかないのか？

「紫には負けたよ」

諦めた。

「あら、貴女ならもう少し抵抗するかと思ったのに」

「やめたよ、面倒臭い」

「あら、心外ね」

「じゃあ胡散臭い」

「それは否定出来ないわね」

自覚はしていたらしい。

「それで？ 私は境界を操れるかも知れないけど扱いは慣れてないから無理だよ」

「そこは境界を間接的に弄って0を1にする程度にしたわ。細かい調整はいらないわ」

うん、ありがとう。

私は早速、リボンを片方外した。

溢れる妖気を体内に内包し軽く確認をしてから境界を弄った。

弄るのは大変ではない。

ただし、私だからだ。

動かすエネルギーに妖力が消費される。

今回は世界全体に影響する訳で馬鹿にならなかった。

「さて、しばらく妖怪が集まるまでは休憩ね」

「それは私の台詞だから……」

それから数年後、また紫に呼び出された。

「何の用？」

「ある程度集まった妖怪をいったんみんな集めるわ。ルールを作るのよ。小さな領域なのだから無差別に人間を襲われては困るもの。それと……」

「妖怪の紛争対策も、でしょ」

これだけ妖怪が集まれば嫌われている能力を持つ妖怪もいる。幸い、そいつらはほとんどは仲がいいのでごっそりどこかへ移せばいいだろう。

あとは鬼の処遇も。

「だけどどうやって集めようかしら……」

集める……か……。

得意な奴がいたな……。

「紫、極上の酒を用意して。打ってつけの奴がいるから」

「というわけで、よろしく」

「んにゃ、いいよ」

萃めるといえば萃香だろう。

「紫と陽奈はいい奴だあ」

「「いいからやって」」

「もお、やってるよお。昼までには集まると思うよお」

かなり泥酔してるけど、まあ、やってくれてるから文句は言えないか……。

数刻後……。

なんか宴会みたいになっているがだいたい集まったので話を始める事にする。

魔法で拡声器みたいに声を響かせて……、

「えー、皆様には話を聞いてもらう為に集まってもらいました。詳しくはスキマ妖怪の八雲紫さんから……」

私は紫を小突いて話をさせる。

「簡単に申しますと規則を設けたいの。具体的には人間を居住地域とかでは襲わない事よ。ただ、それだけよ。山とか暢気に歩いているのは襲っても構わないわ」

紫の発言に当然、異義を唱える者もいた。

「聞きなさい。妖怪の根源は恐怖よ。ただし、ほとんどの恐怖は人間がいないと成り立たないの。人間がいなくなったら、ここにいる妖怪の大半は消失するわ」

その言葉に一同はざわめき始める。

「あと、悪いけど疎まれている妖怪は揃って地下に潜って欲しいの。」

ただとは言わないわ。旧地獄の管理を頼もうと思うの。代わりに生活に不自由はさせないわ」

当然、不満の声が飛び交う。

「しょうがないわね……。じゃあ今、この陽奈を倒せれば地上に残ってもいい事にしましょう」

「えっ？」

ちょっと待って紫さん。

周りが躍起になって襲って来ようとしていますよ。

「止めなさい。彼女は戦いを望んではいません。それに多対一は卑怯です。あなたがたの一番の実力者が戦えばよろしいではないのですか？」

一同は静止した。

私はその声の発生源を探した。

紫がかった髪にカチューシャらしきものをつけていて、彼女はまるで何でも見通しているかのように無感情な表情で淡々と述べたのだ。

「おや、貴女は私をご存知ないようですね。私は古明地さとりと申します。さとり妖怪……まあ、心が読めるだけです」

私はとりあえず静止してくれた事にお礼を……

「ありがとうございます、ですか」

「あ、うん」

やべえ、私が話さなくても会話が成立してる。

「気持ち悪いでしょう？ 私も地下に行くべき妖怪だと不本意ながら思うのです」

「じゃあ、地下の管理を任せるわ。貴女なら事前に防ぐ事も出来るでしょう？……それと、陽奈は貴女の事をどう思っているかしらね」

うん？

「陽奈は第一印象で相手を決め付けないわよね」

「えっ？ それ常識でしょ？ 妖怪なんてみんな常識外れなんだからそんな簡単にはかれないし」

「じゃあ、地下への連絡係は陽奈にして後は封鎖するわ」

「そうしてちょうだい」

勝手に話が進んでいます……。

「あと、鬼も一緒に連れて行きましょう」

「そうね、文句があるなら……陽奈に勝ちなさい」

話が進みすぎて分からないけど……、地下に行きたくない鬼が睨んでるのは分かる。

「待ちな。陽奈は私より強いんだ。まず、私に勝ってからにしな」

勇儀が話に割り込む。

鬼は強さが全てだ。勇儀より強くなければ従わざるを得ない。……まあ、宴会とかのは別だが。

とりあえず、勇儀、助かった。

さて最終的には、さとりは地下の旧地獄（閻魔とかの問題は済んでいるらしい）へ。

山には天狗が多いが妖怪がいっぱい。

などなど……。

キリがないので挙げないが、（人里などに関する）ルールに異義があるなら私か紫に勝ってからにしろ、ということになった。

それと旧地獄へは例外（私）はあるものの基本的に妖怪は介入など禁止。

ルールに従わなかったら実質私刑（周りは我慢しているのにしなかったために）。

だが、問題は人里に誰が伝えるか。

「やっぱり陽奈よね」

「だよね」

「私もそう思います。とても嫌がってはいますが」

何で私なんだろう？

「疑問ですか？ なんとなくですよ」

「陽奈、任せたわ」

紫が私の足元にスキマを開く。

私は重力には逆らえず、落下した。

拡張Project (後書き)

長いので次回に続きます

人里と冥界と

「いたたた……。紫め、あとでしめてやる」

さて、ここはどこだろうか。

ってどう見ても人里です。ありがとうございました。

「おや、小さい女の子が夜に出歩くなんて危ないぞ」

は、話し掛けられた！
しかも女の人だ。

「こ、こんばんは」

落ち着け、私。くーるになるんだ。そうだ、k o o lだ。びーくーる、びーくーる。（※正しくは“c o o l”です）

「こんばんは。ほら、危ないからお家に帰れ。最近は襲わないが妖怪が出ないとは限らないからな」

「は、はい、ありがとうございます。で、でも私はここの者ではないので帰る家はないんです」

「そうか、なら今夜は私の家に泊まるという」

「わ、悪いですよ」

「構わないさ」

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

私は彼女について行った。

「さて、何の用事があったろうついていたんだ？」

「え、えーっと……」

冷や汗が流れる。

私は妖怪です、とも言えないし……。

「だいたい、君のような小さい女の子が夜に出歩いたら妖怪には喰われるし、好き者（変質者）には強姦とかも考えられる」

強姦って………

「お姉さんは外に出歩いていてもいいんですか？」

「私はいんだ。並の妖怪なら退治出来るしな」

貴女の目の前に私という大妖怪がいるんですけど……。

「へー、強いんですね」

「さて、脇道に逸れたが何をしに来たんだ？」

ばれたか……っ。

「妖怪が会議らしいものをしていて、自分たちは人間のおかげで存在しているから人間が住んでいる所などは襲わないようにしよう、って言うのを聞いて伝えに来たんです。人間の私がばれなかったのは幸いでした」

我ながら完璧な言い訳だ。

「それは本当か？」

「あ、はい」

私が妖怪という以外に嘘はない。

「嘘だな」

「なぜばれたし……」

あ……。

「だいたい無理があるんだ。君のような小さな女の子が妖怪に気付

かれずに盗み聞きする事とあともなく出歩く事が、近くの他の集落でも大人が二晩かかる程の僻地に用事がある事が」

ですよねー。

「それに……君からは常軌を逸した歴史がある。何をしに来たんだ、妖怪」

「それよりもあなたが何者か教えるべきだよね」

歴史？何で人の事が分かるんだろう？

「済まなかったな。私は上白沢智音、かみしらさわともね正確には違うが妖怪みたいなものだ」

「私は白嶺陽奈。妖怪だけど安心していいよ」

「そうか。では、私の“歴史を見て創る程度の能力”で少しばかり真偽を確かめるが……」

「いたく……しないでね……？」

「ああ、もう見た」

畜生、スルーされた。

「妖怪の話し合いは本当らしいな。みんなに伝えておこう。それより君は何歳なんだ？歴史が深すぎて見えなかったんだが。それにいつまで髪を結っているんだ？くつろいでも構わないんだぞ」

そう言って智音さんが赤いリボンに触れた。

バチッ

「な、なんだ、これは!？」

智音さんが触れた瞬間、封印が手を弾いた。咄嗟に手を引いたようだが赤く腫れていた。

「これで力を抑えてるの。普通の大妖怪ならたぶん消し飛ぶよ。それと私の年齢は……………」

えーっと、えーりんから教えてもらった時がアレでそれからアレくらい経って……ルーミアが言っていたのが酷い誤差があったから……

「どうした？」

「計算が面倒臭い!!」

「そうか。でも見た目よりは長生きなんだろう？」

「そうだね、1億以上は生きてるよ」

「そ、そうか……。例の件は伝えておくからもう寝てくれてもいいぞ。家があるとしても戻るのに苦労するだろう？」

「あ、うん。じゃあおやすみ」

私は話を切り上げられた感があるが黙って布団に潜った。

眠ったか……。

それにしても先程の妖怪の少女は本当に何者だったのだろうか。

長年の間、人妖と様々な者に知恵を与え、その者の歴史を見てきたが、この者は霞む程に多く抱えていて私でも見切れない。

さらには一億以上という有史以前から生きていると言うのだから力も強く、書き換えたりなどの私の力が及ばない。

彼女の歴史は見れた範囲だけならば安全とはいえるだろう。

まあ、危険ではない、という結果に落ち着くな。

私も今夜はもう寝るとしよう。

明日も子供たちの相手をしなければいけないからな。

翌日、私は智音さんに連れられて朝からある場所にいた。

「ここが寺子屋だ」

「智音さんが？」

「そうだ」

私はもう寺子屋があったのか、と思いつつも門を潜ると、既に子供がたくさんいた。

「ほら、席につけ。授業を始めるぞ」

「「はい」」

元気な返事だ。

「今日は特別な授業だ。道具はしまっていていいぞ」

そう言って私に目配せする。

「私？」

「そうだ」

「せんせー、その人だれー？」

「今日の先生だ」

「どーみても私より年下だよー？」

「小さい言うな!!」

こんなに悪意の感じられないダメージは初めてだ。

「わー、かわいいー」

一人の女の子が頭を撫でてくる。

「ううー、なでるなあ……」

「まあ、それくらいにしてやれ。今日はいろいろと教えてもらうんだからな」

「はぁーい」

ふう、やっと止めたか……。

「で、私が何を教えられると？」

「君は平安に陰陽師をしていただろう？」

まあ……してたけど、

「素質ありそうなのはいいね」

「何か教えられる事はあるか？」

何か……ねえ……、

智音さんが目をちらちらと向けてくる。

あれか。

「里にいれば妖怪は襲わない、って事かな。最近決まったからまだ不安だけど、それなら私がここにいればいいし」

「でもどれくらい強いのー？」

どれくらい……か……。

「なんだかんだで負けてないかも……」

「すごい」

子供って純粹でいいな。

「そーいえば、あなたは誰なの？」

そういえば自己紹介もしてなかった。

というか子供はすぐに話題を変えるな……。

「私は……」

あれ？私が妖怪って事は言っても大丈夫なのかな？

「どうした？」

「いや、どこまで言っているのかな？」

「じゃあ、私が代わりにしてあげよう」

私は肯定を示す為、軽く頷いた。

「コイツは白嶺陽奈という。私みたいに人を襲わない妖怪だ。……さて、あとは出来るな」

「ああ、うん。というわけで私は妖怪で君らよりは年上だけど気になくていいよ」

ああ、子供たちの目が輝いている。
妖怪って事に興味を持たれたな……。

「何が出来るの？」

「おしえてー」

わっ、と群がって来る。

「こら、やめろお……。私はおもちやじゃないい……」

撫でるな、愛でるな、抱き着くな。

「席に着け!!」

「「はいっ!!」」

子供たちが慌てて席に戻った。

「お前らがあまりにも言う事を聞かないから更に予定を変更するぞ。今日は算術だ。試験をする。正解した者から今日は自由だ。自由な者同士で遊んでいても構わない」

数名が嬉々とした表情を浮かべるものの、多くは苦い表情をした。いつの時代でも数字を扱う学問は嫌われているようだ。

「もちろん、陽奈も解けるまで自由はない」

私もその一人だった。

えっと？ 難しくないですか？

一地面のある地点から木の根本まで二十四間、頂上まで二十五間あった。木の高さは何間か求めろ――

「ねえ、智音さん」

「なんだ？」

「みんな同じ問題なの？」

「いや、それは陽奈だけだ。降参か？しょうがないな。それならもつと……」

「7でしょ」

難しいと思うよ、10にも満たない子供なら。三平方の定理（直角三角形において斜辺の二乗は他辺の二乗の和に等しいというピタゴラスの定理の事）なんて。

25の二乗は625で24の二乗は(25-1)二乗 $\parallel$ (625-25 $\times$ 2+1) $\parallel$ 576。625-576 $\parallel$ 49で $\sqrt{49}\parallel$ 7。

私が人間の学生として生きていた頃には当然過ぎる中学レベルの定理だが。

「わ、私の考えた難問が……」

そうか……、まだ日本に伝わってないのか。とは言え、求める方法は智音さんが言う事には確立はしているらしいけど。

「さて、私も手伝うから早くみんなで終わらせよう」

「そうだな……」

この後、当分の間智音さんが沈んでいたのは言うまでもない。

しばらくすると次々と自由になる者が出始めた。

「陽奈ちゃん、あそぼー」

「あそぼー」

そんな感じで寄って来る。

「おれと勝負しろ!!」

ただし例に漏れず、こんな奴はどこにでもいるようだ。

「喧嘩したいの？」

「そうだ。せんせーが言っていた事がほんとーならつよいんだろ？」

いきなり殴って来ました。

私は手で受け止める。けれど、その後、お腹に軽い衝撃が走る。

「硬いな。さすが妖怪か……」

おかしい。

何で私は気付かなかった？

「君、何者？」

私は魔法で探りをいれる。

「そいつは私も分からないんだ。なぜか歴史が見えない。陽奈とは違って空虚なんだ」

それはおかしいだろう。

私から見てもただの人間の子供にそんな高尚な技は使えないはずだ。

「すきあり!!」

後ろから突如に頭に蹴りが飛んで来た。

バチィ

「うあああああっ」

彼の足がリボンに当たると足が消し飛んだ。

「そうか……、君、妖怪なんだね」

普通の人間なら触れたところで何の問題もないし、当然身体が弾かれる事もない。

「な、なんなんだ、その布は!？」

「これ? 教えない」

私は悪戯に笑みを浮かべる。

「1500年くらい生きているがお前みたいなのは初めてだ!! おれの能力は“隠れる程度 of 能力”だが不意打ちすら効かないなんて反則だろ!!」

……若いつて、いいね。私は君の十万倍以上生きてるよ。

「ねえ、平安の都の陰陽師に小さな女の子がいた、って聞いた事ない?」

「何だ? いきなり話を変えて……。それなら当時の妖怪の誰もが知っている事で天才陰陽師で妖怪からは恐怖の術師という事で有名だったじゃねえか。殺された、って話だったが……」

そうか……。私は歴史上では死んだのか……。

「それ、私だから」

「はあ?」

「それでもまだやるの?」

私は大量にお札をちらつかせる。一つ一つが中妖怪を塵も残さず殺せるレベルの物を。

「やりません」

よし、いい子だ。

「ただし、お仕置きは必要だな」

智音さんはゆっくりと立ち上がり、彼の肩をホールドして

ドゴン

「ふぎゃあああああ!!」

頭突きした。

智音さんが言うにはこれでも手加減しているとか。

空気が振動するくらいで手加減してるとか……ないわ。

ちなみに彼のけがは治しました。

智音さんの頭突きは喰らいたくない。

「陽奈、少しいいか？」

寺子屋も閉め、今日も智音さんの家にお世話になる事になった。

「私は君の歴史がよく見えないと言っただろう？所々に穴が空いているんだ」

「例えば？」

「大妖怪と戦っている最中が特に顕著だ。それと平安以前の君の歴史が見えない」

うーん、おかしいな……。

「私はな、正確には聖獣という枠組みの中にいて世界でいうと妖怪よりは格が上なんだ。陽奈が会った事のある閻魔とかは私より上だから私の能力は及ばない。妖怪ならば私より下だから見えるはずなんだ」

なるほど……。

「私が妖怪なのか、って事？」

「そうだ」

「そこでだ。髪留めを外してみてくれないか？」

「あ、うん。妖気を開放しちゃっていい？最近外しても抑えてばかりだからさ」

「ああ、好きにしてくれ」

私はリボンを外してリラックスした。
ふう……久し振りだな……。

「どお？智音さん」

「君の顔がだらけ切っているのは明確だ。そして予想通り、君の歴史は見えない」

「そーなのかー？」

「ああ。これで分かった」

何がさ。

「君は妖怪ではない」

私は耳を疑った

「詳しくは閻魔に聞いたらいいだろう」

私が妖怪じゃない？

それはおかしい。

私の力の根源は妖力だ。

「待ってよ、じゃあ私は何なの？」

「私には分からないんだ。許してくれ」

じゃあ閻魔の所に向かうしかないか……。

……どこに行けばいいんだろう？

地獄への行き方は分からない。冥界？……心辺りはなくはないが最終手段にしておこう。

「ねえ、智音さん」

「なんだ？」

「今、閻魔がどこにいるか分かる？」

「そうだな……、冥界だろうな。閻魔の歴史は知らないが仕事をしているならば冥界かそこにいる誰かに聞くのが適当だろう」

「ありがと。行ってくる」

私は結局、白玉楼へ飛んで向かった。

白玉楼に付近に着いた私はゆっくりと地面に降りた。
桜が咲いていなくとも桜並木は絶景だ。新緑に埋め尽くされ、隙間からは日が漏れている。時折吹く風が木の葉をさざめかせ、また、さらさらと響いている。

ここ……、冥界か？

そんな事を思いながらしばらく歩みを進めっていると白玉楼にたどり着いた。

「おじゃまして……」

「くせもの!!」

ペチペチ……

小さい白髪の子が私を竹刀で叩いていた。
その女の子はおかっぱみたいなショートヘアであり、また、その子の近くには大福みたいな何かが浮いていた。

「何事かと思えば陽奈殿でしたか……」

慌てたように妖忌がやって来てため息をつく。

「妖忌さん、お久しぶりです」

「こちらこそ。また一段と美くなりましたな」

「あはは……、お世辞はいいですよ。そちらこそ凛々になりましたね」

「これは陽奈殿の方が一枚上手でしたな」

私自身、あまり外見が変わった気はしないからね。

「妖忌、お客さん？」

幽々子が屋敷から叫んでいる。

「お客様がお出でになりましたー」

「じゃああげてちょうだい」

「では、いきますぞ」

私は未だに竹刀で叩いて来る女の子の

「みょん!？」

首根っこを掴んで後についていった。

屋敷の部屋に通されると幽々子と緑の髪の女の子が大福を頬張っていた。

「あつ、ひなひゃらいろ（陽奈じゃないの）」

「お嬢様、飲み込んでからおっしゃってください」

「そうですよ、幽々子さん。行儀が悪いです」

その女の子は幽々子に妖忌同様に注意した。

「えっと……、どちらさま？」

「私ですか？……私服じゃ分かりませんか………四季映姫ですよ」

そして、また大福をはむっと頬張る。

目的を探す必要はなかったようだ。

「今日は休暇をとったので久し振りに赴いたのです」

閻魔の休暇なんぞ知らないが運がよかった。

「では、私はこれで。御用がありましたらまたお呼びください」

そう言い妖忌さんは会釈をして下がって行った。

「今日は何をしに来たの？」

のんびりと一緒に大福をいただいている場合じゃなかった。映姫さんに用事があるんだった。

「実は……映姫さんに用事があって」

「はみゆはみゆ……。私ですか？」

「はい。どうやら私は妖怪ではないらしいんですが……」

「けほっけほっ……。だ、誰ですかそれを言ったのは」

映姫さん、何故むせる。

「ハクタクです」

「そうですか。で、ですが私は何も知りませんよ？」

「教えてください」

「知りません」

「教えてください……」

「知りません」

「おし……」

「ダメです。………あ」

どうやら彼女は知っているようだ。

「い、今は休暇なので。それは私の“仕事”なんです」

「はぁ……」

「それよりも貴女は妖怪としての本分を忘れすぎています。もう少し妖怪としての自覚を持って日々を過ごしなさい。貴女は仮にも妖怪なのです。人を襲っても節度をわきまえれば問題はないのです。むしろ襲いなさい。殺せ、とは言いません。怖がらせるだけでもいいのです。そもそも貴女は恐怖を操るのだから人をもっと恐怖に陥れなさい。貴女は見聞を広め恐怖で人々を包み込みなさい。それ以前に……」

「すみません、何故……」

「まだお話中ですよ!! そもそもふがつ……」

あまりにもうるさいので私は映姫さんの口で大福を押し込んだ。

「映姫さん、私に説教をする為に休みをとったわけじゃないよね」

「すみません、つい職業病が……」

「夕食の準備がととのいました。陽奈殿と映姫様は如何致しますか？」

しばらく談笑していると妖忌さんが呼びに来た。

「あら、もうそんな時間なのね」

「私はいただく訳には……」

「それじゃあ私も。映姫さんについていかないと……」

「食後に甘味も準備しております」

「「いただきます!!」」

私たちは迷わず御馳走になる事を決めた。

びっくりした。

「これ、多くない？」

「私もそう思います……」

大きな机に所狭しと並べられた料理。
種類も多く和洋中と様々だ。

……洋食？

なぜ、この時代に西洋料理が？

「初めてみる料理が様々です」

「美味しいから大丈夫よ」

とりあえず私たちは食卓を囲んだ。

私に映姫さんに幽々子に妖忌、その隣にはみよんな子供。

「妖忌さん、その子供って……」

「孫でございます」

「孫!？」

いつの間に!？

私はじっと孫娘さんを見る。

確かに孫には見えるが、見た目が変わらず何年も経ってるのに孫なのはいささか違和感を感じる。……曾孫の孫くらいだろ、人間なら。

もつとも、彼は半分幽霊だけど。

「こ、こんぱくようむでしゅ……」

すっかり萎縮しちゃってる。

「じゃあ妖夢も自己紹介終わったから……」

いただきます。

食後の甘味はケーキでびっくりした。

自分の事と人里と

翌日、私は映姫さんに連れられて裁判所みたいな場所へ赴いた。

彼女の仕事場であって何よりも

「陽奈はん、久し振りやな」

「久しいな」

紅蓮と都さんがそこにいた。

「なんで!?!」

「いやな、映姫さんのところで働かしてもらったんや。陽奈さんの家の近くを管轄しとる閻魔ちゃんのとこで働けば会える機会もあるかと思うて志願してみたらず推されてもうたわ」

「彼らには助けられます。魂が強いですから疲れ知らずでして」

「精神しか疲れへんしな。おかげで休みは二週間に一日、一日36時間労働や」

あれ? 一日ってそんなにあったっけ?
労働基準法とかないの?

「嘘はいけません。6時間労働の週休二日です!!」

なんだ、普通か。

「こほん……。陽奈さん、今日は貴女についてでしたね。まず、前回鏡が割れてしまった事ですが……。当然の結果でした」

私の頭に疑問符が浮かぶ。

「分からないようですが私が全て話してから質問をしてください。……私の憶測ですが貴女が生まれた時、貴女の他に妖怪はいなかったのではありませんか？」

少なくとも私のいた近辺にはいなかったね。

私は軽く頷いた。

「次です。貴女は月の民を知っていますね。では彼らに初めて会った時、あるいはしばらくして何か変わりましたか？」

「都市の結界が破れた時に安全も減少して恐怖が飽和して私は暴走しかけた、くらい？」

「貴女の周りに妖怪が現れ始めたのは？」

「その時」

「現在貴女は他の妖怪の力を使えるはずですよね？」

「なんでわかるの？」

「推測です」

たぶん、彼女は私が何かは知っているのだろう。

「最後の質問です。貴女は人を襲わないで何故生きていけるのですか？」

「私が周りの様々な恐怖を糧にしているから」

長い沈黙が場を支配する。

「質問は？」

「まだありません」

「はつきりと言います。貴女は妖怪です。ただし原初の妖怪、他の妖怪とは少し異なります」

私が初めての妖怪、という事か？

「貴女は妖怪の中でも世界に創られた妖怪です。貴女以外の妖怪は人間や他の動物の恐怖から生まれています。

私は詳しくは知りませんが少し歴史の話をしましょう。

私たちがいる以前の時代に混沌期と呼ばれる時代があるといわれています。その時代は長い間混沌で埋め尽くされ月に逃れた者や特定の場所にいた妖怪以外は何らかの影響を受けました。そして神話時代、世界各地の神話が事実であった時はとても長いといわれています。そして現在です。

しかし、都さんが伝えるまではここまで明確ではなかったのです。混沌期以前は不明でしたから。

では、貴女の事です。簡潔に言うと貴女は妖怪の祖です。そして世

界と同格なのです。私は貴女に説教は出来ませんが裁けません」

まとめると……、

私は1番最初の妖怪

世界と同格

←

最強？

「私って映姫さんより偉いの？」

「はい、そうです。今までの無礼をお許しください」

「いや、無礼な事なかったでしょ……」

自分という存在を改めて自覚すると変な気持ちになる。

今までの様々な疑問が一気に解消したけど……。

意識したら結構凄い事が出来る。

というわけで当分は自分の能力の考察だ。

まあ、とりあえず人里へ。

「ただいまー」

「誰かと思えば陽奈か。どうだった？」

智音さんの家に。人里には私の家はないからしょうがない。

「妖怪ではあったよ。ただし普通じゃないらしいけど」

「そうか」

その言葉で察したのか、深入りはしてこなかった。

「明日は歴史の授業をしたいんだが陽奈もどうだ？」

「うーん、智音さんの授業を受けてみようかな」

「そうか」

夜中、智音さんが寝てから私は自分の能力でいろいろと試してみる事にした。

まずはリボンをつけたまま。

私は“恐怖”を主に飛ばしていたが、ではそれからなるものを集めてみたらどうなるのだろうか。

まずは最も原始的な“死”を集める。すると徐々に形が定まってきた。私がさらに集中させるとそれは蝶となった。

私が試しに鬱陶しい蠅に当てると紐が切れた人形のように撃墜した。

……死んでる。

人に当たってもこのような結果になるのは何となく想像出来るので止めておこう。

結果は主に物体などを操る形になる恐怖はそれが顕現する。抽象的な場合は何か動物をかたどる。

ただそれだけだが。

とりあえず今夜は寝る事にした。

翌日。

「今日は歴史の授業だ」

智音さんが張り切って言った。

それもそのはず、口頭で言っていた授業が楽になるからだ。

智音さんの背後には大きな黒い板。手には白い石灰質の細長い棒。教室には必ずある黒板とチョークだ。

私が五行魔法でパパッと作った黒板。それは黒いが立派に機能するはずだ。

黒板消しは持ち手付近を木に、またチョークは念のために大量に（白しかないが）作った。

オーバーテクノロジーなのもいいとこだが気にしてはいけない。

「では始めるぞ。今日は遥か昔に起こった神の戦争、諏訪大戦だ」

智音さんは黒板にいろいろ書きながら説明し始めた。

「まず、守矢神の治める守矢王国というものがあった」

守矢と書いて丸で囲む。

「そこに大和の神が侵略してきた」

大和と書いて矢印を書く。

「守矢神は当時の最新鋭の鉄器を用いて対抗したものの激闘の末に破れ、大和に支配された。その激闘が守矢神のいる諏訪という地域で起きたのが名前の由来だ。質問はあるか？」

一人だけ手を挙げた。

「どうして大和の神様は侵略したの？」

「それは……何故かは本人に聞かないと分からないだろう。特に文章にあれば分かるが……」

私は口を開いた。

「私は知ってるよ。そもそも神様は信じられる事で自分がいられるんだけど、たくさんの人から信じられると力が強くなって、神様の力が強くなる。また、信じてもらえないと最後には死んじゃうの」

「陽奈、どういう事だ？」

「私も少し神様やってた事もあるし」

「いや、何故大和の神の思惑が分かるんだ？」

ああ、それか。

「私は見てたから」

教室が静まりかえる。

「守矢って漢字が違うよ。さんずいの“洩”」

私は黒板に向かい、書き直す。

「えっと……、洩矢神の名前は洩矢諏訪子。大和の神は八坂神奈子。諏訪子は土地の神様の頂点で崇りの神様だった。けど崇りの対策も鉄器の対策もしていたからあっさりと負けた。これが諏訪大戦と呼ばれてるもので大戦って程ではないよ」

へえ、と子供たちが聞いている。

「陽奈……」

「な、なに？」

智音さんが暗い……。

「私の役目をとらないでくれ……」

「ごめん……。今度出来たら諏訪子と神奈子連れて来るから許してよ」

「ああ……そうだな……」

この日、智音さんのどんよりオーラは中々治る事はなかった。

夜、私は森を歩いていた。

ただ歩きたかった。それだけだ。

そもそも大半の妖怪は夜行性だし。

私は今、試験的にリボンへ供給する霊力を強めている。当然苦しくなる訳だが好きでやる馬鹿はいない。

最近気が付いたが、無意識の内に霊力を送っていたようで意識的に調整が少しは出来るらしい。

それで限界を調べている訳だ。

そもそも妖気というのは無意識で恐怖を与える。私としては嬉しい事でもあるが相手が妖怪でない時にどうしても距離をおかれる。

それが嫌だった。

だから私は妖気が漏れないように抑えていたが自分で抑える場合、気を抜くとダメだ。それに比べると封印を強めた方がいい。

苦しくはなるが気を抜いても大丈夫だからだ。

余談はさておき、雰囲気的性質が人間に限りなく近くなる行為を何故妖怪の巣窟で行うかという、能力持ちの強い妖怪に遭いたいからだ。

誤字にあらず、遭遇したい。

私の能力のもう1つ、相手の妖怪の力を使う事だ。

とはいっても自分を封印している限りはそれが出来ないのだが。

これから毎日、やってみようかと思ったが今夜はもう帰る事にした。

それから数年間、智音さんの家に世話になりながらも、夜には森を徘徊するのを続けたが弱くなったルーミアくらいしか見る事はなかった。

そもそも怯えもせずに夜道を小さな子が歩いているのなんて少し強い妖怪なら考えれば怪しいと感じるはずだ。だから寄って来ない

まあ、ルーミアは例外だ。顔見知りだから寄って来る。

「また外を出歩いていたのか」

帰ったら智音さんが立っている事もあった。

「子供たちが真似をしてしまうだろう？ 今日こそは許さんぞ……」

ガシツ、と音がする程に肩をホールドされた。

「陽奈には手加減はいらないな」

ドゴン

「みゃあああああああああ」

頭突き……された……。

「痛いじゃないか！」

「私だって痛いんだ」

「この石頭!! 舌嚙んだじやったから痛いし……」

「すまん。だがこれに懲りて止めてくれ」

「だがことわ……」

ドゴン

「しゅみません。もうしましえん……」

私は智音さんの頭突きには敵わない事を学んだ。

そしてある日。

「大変だ!! 村の外から来た妖怪退治屋が先生と陽奈さんの正体を聞いて退治しに来た!!」

と数年前に寺子屋を卒業した男がいきなり戸を開け叫んだ。

「「えっ?」」

私たちの着替え中に。

「「とりあえず出てけ!!」」

「それで妖怪退治屋だったか?」

「はい、そうです……」

彼を正座させ私たちは話を聞いている。

「緊急だったから許すけど普段だったら智音さんから頭突きだよ?」

「私がか!? …………… ああ、そうだな」

彼の話からソイツは村にある広場で待っているそうだという事が分かった。

「じゃあ行こうか」

広場につくと少女が一人、男に縄で縛られていた。

「あーれー、捕まっちゃたわー」

「ふざけてるんじゃない!!」

「きゃー怖いわー」

私もふざけてるかと思う。
棒読みだし。

「紫……………、何やってるの？」

「あら、陽奈♪」

何でこんな知り合いがいるんだろうか……。

「お前が白嶺陽奈か。ではそっちが上白沢智音だな」

と男が言う。

「妖怪を一人捕えたがみんなこうなのか？」

「いや、一緒にしないでほしい」

私と智音さんの声が揃った。

「ところで何故貴様ら妖怪どもは襲わない。何もしないならこちらから行かせてもらおうぞ」

札を一枚投げて来た。

私はそれを構わず手で掴み捨てた。

「ここら辺の妖怪は人里では襲わないから。戦うなら村の外でね。あと、いくら牽制ようだとしても術式が甘すぎるよ」

私は術式を強化した札を男に渡して村の外へ向かった。

妖怪が蔓延っていると噂で聞いた村に先程ついた。しかし、妖怪は見掛けるもののどうにも様子がおかしい。

人を襲っていない。

とりあえず寺子屋に在るといふ二人組を呼び出す事にした。

「おい、どうすればその二人を呼べる」

俺はさっき捕まえた女の妖怪に聞く。

「この里では有名だから誰かに頼めばいいと思いますわ」

その妖怪の助言通りに事は進んだ。

そして暫く待つと二人の女がやって来た。

一人は子供だ。

そして奴らが探していた二人だった。

すると捕まえてた妖怪が何か叫んだ。
果てしなくふざけているかのようだ。

「みんなこうなのか？」

奴らは声を揃えて否定した。

「ところで……」

俺はこの里に入ってから疑問と共に、牽制として札を一枚弱そう
な小さな女の子の方に投げた。

この里に妖怪が紛れているが何故動いてないのか疑問だった。

「ここら辺の妖怪は人里では襲わないから。戦うなら村の外でね。」

あと、いくら牽制ようだとしても術式が甘すぎるよ」

質問の答えと一緒に返された札はあまりにも緻密で精巧な式が掛かれていた。もはや芸術に近いもので靈力はなんの抵抗も感じずに流れる程のものだった。

俺は唾然としたが、とりあえず奴らの後を追った。

私は少し歩いて森の開けた場所に至った。

退治屋もついて来てくれた事なのでちょうどいいここで足を止める。

「ここでやるのか？」

「ちょうど開けた場所に出たから。気まぐれだけどね」

別に人里の外ならどこでもよかったのだ。

「そうか。二人で来るのか？」

「いや、私は遠慮する。陽奈の方が戦いに長けているはずだ」

「そうか」

智音さんに押されて私は前に出た。

「しかし、本当に妖怪か？妖気が感じられないぞ」

「じゃあ弱いかもね」

私は札を数枚投げた。

どれもが妖怪が痺れる程度の弱さだけど。

当然避けられた。

「なめているのか？」

彼はお札を雨の様に投げてきた。

私は結界でそれを防ぎ、式神を一枚飛ばした。

「ふざけるな」

彼の放った霊弾で撃ち落とされた。

「貴様……」

「そもそもさ、君の相手に私は相応しくないよ。せいぜい中妖怪に善戦する程度だろうしね」

そんなに難しい術式も使えず、無駄も多い。そして遅いし弱い。

「それならこれを防いでみる……」

彼は術を組み始めた。

それは今までにない程のもの。

彼の切り札なんだろう。

「破っ!!」

彼の術が私に襲い掛かる。

「逆転術式……」

が、私は相殺した。

「何故だ!!」

「君が弱いだけ」

逆転術式とは、術に使われている式の逆式に陰陽を逆比にしたものを合わせる事で対象の術などを相殺が出来るという、高等技術。清明さんが理論上発見した対術式用の方法だ。

「紫、コイツを里に」

「分かったわ」

いつの間にか縄を解いている紫に頼んで、彼を里にポイして貰った。

「なんであの人がアレを使えるんだろう……」

彼の最後に放った術は既にロストテクノロジーなはずだ。

「使えたからこそここにたどり着いたのよ」

紫が言う。

「紫は何か知ってるの？」

「あの術はもう貴女以外には完璧に使える者はいなくとも細い線でも残っていたのよ。しかし、彼以外には知る者は隔離されたここら辺にいる貴女だけよ」

隔離した境界には、外で忘れられた物が流れ着く、という作用もあるからか。

「正解よ」

「あの……、心読まないで」

「ごめんなさいね」

紫はいつも通りの胡散臭い笑みを浮かべていた。

「貴女は彼の技術が惜しかったから殺さなかった。違うかしら」

「もともと殺す気はないけど」

紫とはイマイチ意見は合わないようだ。

「そう」

紫はそのままスキマに帰って行った。

「陽奈、帰るぞ」

あ、智音さんまだいたんだ。

自分の事と人里と（後書き）

後半、智音さん空気でした。

とりあえずこれで一段落です。

前半がメインで後半は蛇足みたいなものです。

次回からはやっと別のお話となります。

私、渡欧するよ（前書き）

タイトルの元ネタを知る人はいるのでしょうか？
「分かった、僕、渡米するよ」
です。

全く東方は関係ありません。

私、渡欧するよ

私は人里で数年間、智音さんと教鞭を振るっていたが、久しぶりに帰宅する事にした。

森の中の小屋な訳だが、家の周りには魔法植物やら化け茸やらがたくさんあるので普通に歩いてたら孢子やら花粉やらで仏になる。しかも私が来る度に増している。

今度対策しておこうかなあ……。

玄関部分を二重にして、初めのフロア、土間を外から隔離と空気清浄でもして休憩所にしよう。

家の建っている位置が森のやや奥だからちょうどいいかもしれない。

もちろん居住スペースは隠蔽。

そんな事を考えながらも家にたどり着く。

私は扉を開け、

むにゅ

何かを踏んだ。

慌てて飛びのくと赤い髪に小さな蝙蝠の羽、ワイシャツらしきものの上には黒のブレザーらしきものを着て、黒いスカート。

改めて見ると真っ黒だが、小悪魔だ。

どうやらパチエはいないようだが。

何でいるのかは起きてからで聞けばいいものの、倒れている理由は見れば明らかだ。

顔がほんのり紫色で息もとぎれとぎれ、非常に苦しそうだ。

治療をしよう、そうしよう。

とりあえず魔法で治療かな。恐らく森のおかげでこうなったから効き目はよくないが、私の圧倒的魔力で強引にやる。

ついでに、ここを休憩所にする（確定）なら治療薬を作っておこう。

「A h . . . w h e r e ? （あ……、ここはどこ）」

「あ、起きた？」

小悪魔が目を覚ましたようだ。

「あ、すみません。お久しぶりです、陽奈様。先程は言語を間違えて……」

小悪魔はそのまま立ち上がろうとした。

私は小悪魔が起きないように魔法で拘束する。

「何故動けなく……」

「まだ安静にしてない！」

まだ身体は十分には動かないはずだ。そうすると厄介になる。

「あ、ありがとうございます」

「ところでパチエがいないけど……」

小悪魔がいればパチエもいるはずだ。

「はい、そのことなんですけど……、パチュリー様は一緒ではありません。陽奈様を連れて来いと言われました」

はあ、どこに？

「今、大変困っているので助けていただけませんか」

最近暇だしな……。

私も人里で教える事はなくなってきた。史実を智音さんが述べ、実体験などを織り交ぜ興味を持たせる。だが、話とは継承されるもの。そろそろ私の話もいらなくなってくる。

あと、簡単な術も教えた。原理も記した。妖怪が仮に襲ってこようにも大人ならば追い払う程度は出来るだろう。

人助けとしますか。

旧友であるパチエの頼みでもある。断る理由は微塵もない。

私は小悪魔にその旨を伝えた。

「一刻を争うので今すぐにも出ましょう!!」

バタバタと暴れ出したのでとりあえず落ち着かせる。

「そんな状態で大丈夫なの？」

「だいじょ……こほっこほっ」

しょうがない。

一刻を争うのであれば、

「こほっこほっ……。……あれ？治りました!!」

神様パワーの治療だ。治らない道理はない。

「じゃあ早急に案内して」

「はい」

私は家を休憩所にする作業を諦め、小悪魔を追って飛び立った。

「どこまで行くの？」

しばらく飛びっぱなしなのでさすがに聞いた。

「海を越えますよ。このペースだと一月で着きます」

すごく……遠いです。

そういえばパチュは帰国するって言ってたな。

魔法の起源はヨーロッパあたりだから……。一万五千kmくらい飛ぶの!?

「小悪魔、私につかまって」

「何故ですか？」

「スピードを上げるよ」

世界地図は頭の中にある。

準備はいい。

小悪魔、シートベルトは（ないけど）締めたかい？

ぎゅっと掴んでいますか、はい。

「あーゆーれでい？」

「Well...OK」

私は運動エネルギーを操りまくって小悪魔が落ちないように爆進した。

途中、境界を抜けた時に大量の恐怖が流れて来て少し減速したが八意印の薬で抑えて再加速した。

最近は魑魅魍魎に対する恐怖もあるが戦への恐怖、銃火器への恐怖も増えているみたいだ。

織田家が導入したといわれる鉄砲は改良を加えられ、また精錬技術の工場も相成り銃弾も改善、創意工夫による針弾や砲弾なども。

火薬は発破と花火にだけ使えばいいのに。

話がそれた。

世の中に新たな恐怖が生まれるたびに私は取り入れなければいけない。そんな気がする。これが私の本能なのかは分からないけれどそれに任せる事も必要だ。

しばらくして私たちは休憩をする事にした。
飛行機で半日以上かかる距離をどうして行けるものか。まだ、そんな飛行機はないけれど。

「あの……陽奈様、服を脱いでくれないでしょうか」

「えっ、何で？まさかソツチの趣味？」

いきなり小悪魔がびっくりな発言をした。

「ち、違いますよ！！下はまあ、スカートですから大丈夫でしょう。けれどその和服は明らかに目立ってしまいます」

なるほど。

「それで……私のお下がりですが着てください」

渡されたのはカッターシャツに赤いブレザー。幾分目立たないとは思うけど。

私が固まっていると

「やっぱり脱いでください」

「だから何で！？」

びっくり発言だ。

「いえ、どのように着るのが分からなくて動かないのかと思います。ならば手取り足取り教えて差し上げようと……」

「ありがとうございます、自分で着れるから心配しないで。……こっち見んな」

「す、すみません」

小悪魔がそっぽを向いたところで着替え始める。

肌着とかないのかな？直にシャツを着るとなんか嫌だな……。

「肌着とかないの？擦れて嫌なんだけど」

「和服に重ね着すればいいのではないのでしょうか？」

うん、そうだね。

着替えたが少し大きかった。袖から指しか出ない。
大きめの制服を買ってもらった子供みたいだ。

「ちゃんと着れていますね」

小悪魔からも合格をもらった。

「あとはこれを」

小悪魔は黒い靴と白の靴下を取り出した。

「裸足はさすがにまずいですから」

数日飛ぶと小悪魔が降りるように言った。まだ街の外れなのに。

「陽奈様は普通の人間の前で降りるんですか！？殺されてしまいますよ!？」

・・・。

普通の人間は空は飛べないな。

「殺されるかは分からないけど厄介事になるかも知れないから降りるよ」

しばらく歩くと街に着いた。

「なんか全部の家に十字架がかかってるんだけど……」

「当たり前です。この街では魔女狩り、バンパイアハントが行われていきますから。時には冤罪で街の人が拷問もされます」

「パチエって……」

「魔女です。陽奈様も一応そうですよ」

なんてこったい。

「でもそれなら何でこんな所に？逃げればいいじゃん」

魔女狩りのしている危険な場所にわざわざいる意味はあるのだろうか。

「私たちは教会に目をつけられています。今逃げたら正体をばらすようなものです。ですからいつそのこと教会の過激派を消そうと」

パチエ……、自分でしろ。

そんな事を言える訳ないが思うだけなら自由だ。

そんな中、数人に捕まえられ、連行されている女性を見た。

「小悪魔、なんて言ってるの？」

ちなみに言語はあまりわからない。

「止めて私は魔女なんかじゃない、と」

その時、そのうちの一人が私たちの方に来た。

小悪魔に向かって何かを言っている。

「陽奈様と妙な言語で話していると疑われました。なので他国の方、と事実を言っておきました」

どうやら言い方一つで私たちも危なかったようだ。しかしなあ……、あの女の人はずただの人間だよな……。

「助けるか……」

「えっ？陽奈様！？」

私は小悪魔を振り切って駆け出した。

「止めなよ」

「Who are you? (誰だ)」

あ、日本語通じないんだった。

（以下英語）

「止めなよ」

「何だ貴様は」

「先程妙な言葉で話していた奴の一人だ」

「私は確かに街の外の者だけど罪のない奴を目の前で殺されちゃた
まらないよ」

「こいつは魔女だぞ！」

「そうやって罪のない人を殺すの？」

「魔女は我々を脅かす!!」

「今まで何をされたの？」

「突然、雨が降ったり、はたまた晴れたり。病人が数日さらわれたり」

「それで？」

「それだけでも脅威と言えるだろう」

ああ、アホなのか。

「誰か死んだりしたの？」

「いや、まだだが……」

「なら殺す必要ないよね。この街には自警団とかいるんじゃないの？ わざわざ人の目の前でさうような事はしれないと思うし。それに私は魔女に会った事あるの。魔法でやられそうにもなったから魔力の感じが分かるんだけど、その人からは感じられないよ」

「魔女の肩を持つとは……」

「まあ、よせ。……そこの餓鬼」

私か。

「この女は人間なんだな？」

リーダーみたいな奴が私に言う。

それに対し、私は頷く。

「では、あと数日で一度本部の者が来るのでそれまでは許す」

「だが……」

先程までうるさかった男が弱々しく反対している。

「黙れ！何もここで殺さなければならん訳ではない。帰るぞ」

彼は女性を置いて教会の奴らを連れ帰った。

ちなみに助けた女性からは大変感謝された。

しばらく歩くと小悪魔が小屋の前で立ち止まった。

「ここです」

私は扉を開け……びくとしなかった。

「下手に開けられると困りますから魔法で鍵をかけているんです」

小悪魔が、鍵は簡単な言葉ですから、と付け加えた。

「えっと……、ひらけごま？」

まさかそんな日本語な訳ないよね。

ガチャン

・・・。

ものすごく重厚な音がしたんだけど……。

「さあ、入りましょう」

裏側から見ると鍵がいつぱいついていた。

「パチュリー様、ただいま帰りましたー」

「そう。陽奈、久しぶりね」

パチエは相変わらずだった。

「パチュリー様、陽奈様にはこの街について説明しました」

「気が利くわね。陽奈、貴女を呼んだのは二つ頼みがあるからなの」

小悪魔が積まれた本を片付けている間にパチエは現状から説明してくれた。

吸血鬼を求め、この地にたどり着き無事に会合を果たした。

その吸血鬼は街の者から慕われていた。吸血鬼には典型的な強情ぶりだったが、貧しい者や病人を館で擁護し稀にパーティを開いたり街の者に不満はなかった。

パーティの際や擁護の代わりに血を少し貰う程度。彼らはそれだけで十分だった。

そんな日々が続いていたある日、宗教改革とやらで街の教会に過激派が住み着いてしまった。横暴で刃向かう者を魔女や吸血鬼と称し、殺すようになった。

吸血鬼とパチエは館を捨て、街に隠れる事にしたが見つかってしまう。彼らは必死の抵抗の末に敗北。野ざらしにされ太陽によって焼かれてしまった。

ただ、パチエに託した二人の子供たちの幸せを願いながら。

街の者は悲しんだが表には出せず、パチエたちを守るために十字架を家に掲げた。もちろん吸血鬼には効かないという事は知っていたが過激派は知らないようで騙す事は簡単だった。

一般的に知られる間違った知識でも十分に効果を発揮したのだった。

その吸血鬼の子供たちはもちろん吸血鬼だが直接的な弱点は太陽と聖水くらいしかない。

流れる水の上は渡れず、豆のような細かい物を撒かれると数えなくなるが直接的な死亡原因にはならない。

「それで頼みたいのは無事に私たちを逃がす事と、逃げた先を考える事よ」

恐らくこの地に留まる事は永久に目をつけられる事に等しいからこそその選択だろう。

「パチュリー様、その事なのですが……、教会本部がこちらに向かっていて戦いは避けられません」

「なっ！？ どうしようかしら……」

「私が相手をする」

私は自ら名乗り出た。

「貴女にも勝てないわ。彼らの恐ろしさを知らないもの」

「私はその恐ろしさを糧にするんだよ。負けると思う？」

「それもそうね」

パチェが子供たちに私を紹介したいらしい。奥の部屋にいるらしいが夜までは待たなくてはならない。吸血鬼だから。

「じゃあ先にこっちを紹介するわ」

出て来たのは緑のチャイナに軍帽、赤い髪のアジア系の女性だった。

「紅美鈴ほんめいりんです。お嬢様方のお世話係です。どうぞよろしく」

子供は女の子らしい。

しかし……、彼女からは明らかに妖気が感じられる。

「私は白嶺陽奈。同じ妖怪どうし仲良くしよう」

「あ、はい。ところで何故パチュリー様に呼ばれたんですか？」

「陽奈は戦力になるからよ」

「えっ……、まだ子供ですし力もそんなにないと思いますけど……」

まあ、そうか……。

「その子は貴女より長生きよ」

「将来がですか？」

「現在進行形で」

「この子ですか？信じられません」

美鈴に頭をぐしぐしと撫でられる。

「ううゝ、撫でるなあゝ……」

「明らかに子供です」

「まあ、言動とか見た目は否定出来ないわね」

「いいたいことばかりいうなあ」

何で抵抗しないんだ私！？

美鈴はさらに撫でてくるが私は全然抵抗出来ない。

「めーりん、なでるのはいいとしてあかいりぼんにはさわらないほうがいいからね」

もういいや。

私はつい目を細めてしまっているがいい気分じゃない。断じてない……はず。

「陽奈、妖気を少し解放して美鈴に見せ付けちゃいなさい」

それもそうか……。

私は抑えるのを少し緩めた。

「ななななんですか！？陽奈ちゃんがいきなり……」

美鈴が私から大きく離れた。

私はあまりにも大きな反応に驚きながらも一言言う。

「誰が子供だっ！」

とはいっても既に妖気を抑えているので小さい子が背伸びしているかのようにしか見えないだろう。

その後、日が暮れるまで話し続けた。

美鈴とは妖怪どうしだから話が合う。

中国から遙々訪れたが途中で力尽き、それを拾ってもらい、その恩を返すため長年の間働いていたらしい。途中から給料をもらい始めたが使っていないのであまりに余っているらしいが。

それはともかく中国にも妖怪はいるらしい。美鈴も妖怪なんだから他にもいたっておかしくない。

だがハクタクの話をするとう美鈴は妖怪ではない、と言い放った。私も知ってはいたが聖獣という種族らしく、ハクタクはあらゆる知恵を司るらしい。

その割には私の事は分からなかったらしいが……。

智音さんとは知り合いだった事にも私は驚いた。人外どうしだからよくある事らしい。

夜になった。

街からは人が消え、家々には明かりが灯り始めた。

「そろそろね」

パチエが呟いた瞬間、扉が開け放たれ二つの影が出て来た。

「パチエ、美鈴、おはよ〜」

今は夜です。

青い髪に紅い瞳で蝙蝠の羽が生えた少女と……、

「パチエ、その子誰？」

同じ紅い瞳で金髪、よく分からないが宝石のようなものを吊したような羽が生えた少女がいた。飛べるのか疑問だが。

「私の友達よ」

「遊んでいい？」

「いいんじゃないかしら」

「その前に自己紹介させて。私は白嶺陽奈。ちなみに陽奈が名前だから」

私が名乗ると青い髪の方が一步前に出た。

「私はレミリア。レミリア・スカーレット。悪い事は言わないわ。フラン……私の妹と遊ぶのは止めた方がいいわ」

すると金髪の方……フランと呼ばれた少女はレミリアのさらに前に立った。

「お姉様の言う事なんて聞かないでいいよ。私を地下にずっと閉じ込めるんだもん。今日はパチエから誰か来るって聞いてたから出て来たけど。あ、私はフランドール・スカーレット。フランって呼んで」

レミリアが後ろから声を張る。

「フラン！あなたは遊んじゃダメよ。そうやって……」

「お姉様は黙ってて。だいたいパチエも珍しく推してくれたんだもん」

「むう……、パチエ……大丈夫なの？」

レミリアがパチエに首だけを向ける。

「大丈夫よ」

私は何でこんなにも確認をとるのか今はまだ知る由もなかった。

遊戯と条件

フランに連れられ地下へ地下へと下る階段を下りるとそこには扉があった。

恐らく中から開けられないように扉に備え付けられていたであろう鎖や錠前は粉々に壊れ、扉を異様な雰囲気で強調しているかのようだった。

私たち二人はその扉を潜った。

部屋の中は閑散としていた。

ただ鉄の匂いがする紅に染め上げられ、ベッドと本棚、少しアクセントとして置いてあるぬいぐるみすらも、ただ不気味さを引き立たせるだけの小道具となっていた。

「陽奈……、遊ぼう？」

フランの浮かべた恍惚の笑みは私すら戦慄してしまった。

「パチエも言ってたしさ……」

——コワレナイヨネ？

フランから可視出来るか疑う程の狂気……いや狂喜が溢れる。

フランが手を開いて握った。

パン

「えっ……？」

途端、私の左腕が弾け飛んだ。

何かをされたか？ただフランが開いた手を握っただけのはず。

私はとりあえず左腕を回復させて様子を見る事にする。

「フラン、何をしたの？」

「ただ、きゅっとしてどかーん、ってしただけだよ」

訳が分からないが何かの能力の一端なのかも知れない。

この部屋の夥しいまでの紅の正体が血液だとすれば、フランには恐怖が纏わり付いているはずだ。

まあ、血じゃなきゃなんなんだろうかね。

当然の如く恐怖が部屋に充満していた。
フランだけでなく部屋にまで。

おいしくいただきましたよ。

私は自分の封印を強めてから充滿している恐怖を全部いただいた。

少し鳴咽したが大丈夫だった。

「フランは“ありとあらゆるものを破壊する程度の能力”を持っているんだね」

その恐怖をいただいた私はその能力に対応する手段が出来た。

フランが一瞬驚いた顔をしたがすぐさま表情を戻した。

「そうだよ。目をきゅって握るとその目のあった場所がどかーんってなるの」

ほえ……、怖いな……。

「だからね……」

私の左腕から何かが出て来るのが見えた。これが目なのだろう。それがフランに向かう。

「握ると……」

やばい……。

私は咄嗟に移動してフランの手を握った。

「あっ……」

私の左腕がまたもや弾け飛んだ。

「陽奈って……おバカ？」

なんだか空気が和んだ。

私たちは再び戦いを始めた。

しかし、それは先程までとは異なるもの。

能力を使わない事にした。

それはただ楽しむ事が目的。
これからは『遊び』だ。

「はあ……はあ……」

私たちは今床に伏している。

ただ二人で疲れたから止めただけ。

「こんな気持ち初めてだよ。あいつとは喧嘩ばかりだし……」

「あいつ？」

「お姉様のこと。あいつ、って呼んだら機嫌悪くするから。気を使うのも面倒臭いんだけど……」

フランが天井を見上げて呟いた。

その瞳はどこか淋しそうだった。

「私はね、この能力のせいで地下に閉じ込められた事になってるの。でも違う。私は物心ついた頃には能力の事を理解していた。ただ、不安定だった……」

私は狂った様に振る舞い、地下に閉じこもって軟禁されていたけど簡単に出了られた。

だけど出なかった。私はたくさんの命に感謝しているの。あいつは人をけなす。種族に囚われているの。

彼らがいなければ私は能力を使いこなせなかった。だけど私はあいつと同じ悪魔の血が流れている。

私という存在に怯えて、私が謝っても……騙している……ってえ……っ。私……は……彼らを……救えて……いない……っ」

「じゃあ何で死骸はないの？」

「あいづが……うるさいから……」

フランはいつのまにか泣いていた。

「みんな自殺しちゃうから……私は死体を破壊処理して血を貰う……。私は……殺していない……」

「フラン、本当にみんなそうだったの？」

「ううん……、たった一人だけ私を見てくれたよ……。私はすごく嬉しかった……けど……、寝て起きたら死んでいたの。私はあいつに聞いてみたら、あんな奴を何で襲わない、私が代わりにいただいた、って……。あいつは……」

そうか……、

「フラン」

私は歩み寄ってフランを抱きしめた。

「私じゃダメかな？毎日は来れないかも知れないけど絶対に忘れない。何年も会えなくなっても絶対にまた会う日まで。私はその人の代わりにはなれないけど、長生きだから離れてもいずれ会えるから」

私はフランを抱きながらフランの『孤独』という恐怖を少しずついただいた。

「ありがとう……陽奈……」

フランは泣き疲れたのかそのまま寝てしまった。

結局私はフランが起きるまで動けなかった。

どうしてか？吸血鬼の抱き着く力は半端じゃない。萃香とかよりはマシだがガツチリと掴まれた。

「陽奈、おはよお」

フランが目を擦りながら私に声をかけた。

「おはよう」

私はパチェとかが心配しているだろうな、と少し思った。正確にはレミリアと美鈴がおろおろしているのにパチェだけ大丈夫とか言うてそうだけど。

「ねえフラン、少し上に行っていいかな？」

「また来てくれる？」

「絶対に」

私はフランに約束をした。

「それで陽奈、お願いがあるんだけど……」

「ただいま……」

そんな訳で私は地上へ帰って来た。

「お帰りなさい……って陽奈!？」

パチエが驚くのも無理はない。

私が脂汗を流し、片腕を失い、血にまみれていたからだ。

「さすがに……厳しかった……」

ちなみにこれはフランからお願いされた『演技』だ。私が無傷で帰って来たら不自然に思われるから、と。

「私……明日もフランのところに行くからね……」

「強情ね。そんなにされたのに何がしたいの？」

「そうよ。フランに何されたかは知らないけど止めておきなさい」

レミリアに止められるが私は止めない。

「フランが何で遊びたいか、が一番大事だよ。私は他の妖怪より丈夫だから大丈夫」

「私は貴女には死なれたくないの。貴重な戦力を身内に殺されたなんて馬鹿な話は嫌なのよ」

レミリアが必死に私を留めようとしているのは分かる。

「ありがとう。でも断る。私は今度こそ本気でフランにぶつかる」

そろそろリボンの事を言及されるだろうから。

「なら準備しておくからレミィと美鈴の事なら心配しないでいいわ」

「ありがとう」

翌日、早速フランのもとへ向かう。

「フラン、起きてるー?」

私は大きなフランの部屋の扉の前で叫んだ。

「どーぞー」

フランから応答があったので私はお邪魔した。

あれ以来、何故かフランが私に抱き着くのが習慣になってしまっている。

安心するんだとさ。

「ねえ陽奈」

「ん？」

「何でリボンをずっと付けてるの？普通はシャワー浴びる時とかには取るのに美鈴が取ってないとか言うから不思議だなあ、って」

あの中国、覚えてろよ……。

それはさておき、私はフランの羽が飛べる原理を知りたいが答える事にする。いつかは聞かれるんだ。

「これは封印なんだよ」

「ふーいん？」

「これがあると本気で力が出せないんだよ。まあ、自分で外せるからあんまり気にしないで」

そこまで言うとなフランの目の色が変わった。

「あの時は手加減してたんだ……。一回本気になってみてよ……」

フ란の目は明らかに疑惑の色に染められていた。

自分の気持ちを踏みにじられる気がした。

自分が本気だったのに相手は手を抜いていた。これ程不快なのは吸血鬼の血が許してくれない。

「じゃあ一回だけ本気で遊ぼう？」

私は陽奈に聞いてみた。

陽奈が何故自分に枷をはめるのかが不思議だった。わざわざ自分の自由を奪う事をするなんて考えられなかった。

恐らく断るだろう。

余程のリスクがあるに決まっている。

「いいよ」

予想に反した言葉が陽奈の口から発せられた。

では何故封印しているのか。

気にくわなかった。

「ただし、気をしっかり持ってね。気を抜いたら死ぬかもよ」

何を言っているんだろう。

暴走でもしてしまうのだろうか。いや、それなら拒むはずだ。

「たぶん大丈夫かも」

私は少し強がりを書いてしまった。

まず陽奈は紫色のリボンを外した。

途端に溢れる魔力。

私も冷や汗をかいてしまう。けれどいくら魔力がたくさんあってもそれはあまり恐怖ではない。

だけどこの前、陽奈はたくさんの魔法を使って来た。つまり知識は十分にあるという事。たくさんの知識と魔力は恐怖以外のなにものにもならない。

もしかしたら赤いリボンでさらに魔力が上がるのではないのか？そう思うと怖く感じた。

けれど何故そこまで怖いのかはよく分からない。

陽奈がもう一つのリボンを外した時、私は急に危険を感じた。

ここにいてはいけない。

私は逃げようとしたが足も羽も全く動いてくれなかった。脚が震えて崩れ落ちる。

助けて。

怖い。

「あああああああ!!」

私はいつのまにか炎で出来た破壊の剣“レーヴァテイン”を陽奈に振っていた。

「ごめんね」

私の近くで声がした。

黒い髪と目が朱くなったロングヘアの陽奈の顔がそこにあった。

「ひ……な……?」

今までの陽奈とは違い、美鈴なんか比較対象にも成り得ない妖気に溢れ、逆に神々しく感じてしまう。
ただ、怖いのは変わりなかった。

私は本能的な逃走心と陽奈という存在の恐怖と安心の葛藤の中、意識を闇へと投げ出した。

私がリボンを外してしばらくするとフランが気絶してしまった。

なんか危なげな炎の剣を受け止めたのはいいのだが、そこまで私は怖いのかな？

私はとりあえずリボンを結び直してからフランをベッドに運んだ。

それからしばらくしてからフランは目を覚ました。

フランは私を確認すると抱き着いて来た。

「陽奈……だよね？」

「そうだよ」

私はフランをぎゅっと抱きしめた。

「ごめんね、陽奈。陽奈はみんなのために力を使わないんだね……」

私は何も言い返せなかった。

たしかに、みんなのためでもある。

けれど実は私のエゴも含まれる。

封印してなければ私は孤立して暴走してしまうかも知れないから。長年生きてきたが、だからこそ孤独は人を狂わせる事を知っている。

私が封印を施さなければ、紫や閻魔も尻尾を巻いて逃げてしまう。

それは私が独りになる事に等しい。

最善手を選んだ結果が今である。

「私は身勝手なんだよ……」

私はフランを撫でて言った。

今はフランには分からないだろうけど、いずれ知る事になるんじゃないかと思う。

それから数日、いつもはフランと遊んだり、レミリアの我が儘に付き合ったり、パチエの研究の手伝いをしていたが、今日は違う。

教会の奴らがやって来る。

私は（女だが）紳士な対応をしようかと思う。……いや、淑女か。

とにかく待ち合わせなどはないので街の教会に赴く事にした。

ちなみに昼間なので私が一人で行く事になる。

そもそも夜に吸血鬼を倒そうとする輩はいないだろう。太陽の苦手

な奴は昼間にこそ倒しやすいからだ。

久しぶりに外に出ると太陽が眩しかった。

しかし、私はあまり気にせず教会へと足を運ぶ。

私は向かいながら少し能力の開発を試みていた。

恐怖を部分的に集中させる、という事だ。

ちょうど吸血鬼に対する恐怖も得た事だし早速右手に集中してみる。
ミスして全身吸血鬼になってしまったらヤバイので右腕だけを日にあてた。

一瞬熱さを感じた後に見てみると紅い煙を出して手首より先が蒸発していた。手を日陰に引っ込めたら生えてきたけど。

他にも来たる教会戦に対してある程度は準備をしておいた。

教会にたどり着くと多くの馬車が停まっていた。装飾が多いのを見る限り主戦力は人間であり、騎馬隊などではない事が伺える。

そんな事も考えつつ私は教会の扉を開けた。

たくさんの戦力らしき人達が席を埋め尽くし、作戦会議らしきものをしていた。

・・・

「失礼しました……」

正直、気まずいので私はその場を去った。

「貴様、何者だ!!」

と、したくとも無理だった。

先程まで前に立っていた人物が私を呼び止めたからだった。

私は仕方なく足を止めて振り返った。

「普通はそっちから名乗るもんじゃないの?」

「貴様のような者に名乗る名があるとでも? 人外が」

ばれてました。

「へえ、分かるんだ」

敢えて挑発してみる。

「私は分かるんだ。何せ親が人外に殺されたからな……」

「お気の毒に……。もしそいつが生きてれば殺しに行くよ?」

「もう殺した。……ところで貴様は魔女か?」

専ら判断材料は今は昼間な事と人外な事なんだろうか。

「違うよ。ちなみに悪魔（吸血鬼含む）でもない」

「では何だ?」

「大陸東から来た人外。人外って魔女や悪魔だけじゃないんだよ? 世界は広いの」

相手は、ならば……と、話を続ける。

「何をしに来た。関係がないなら関わらないのが道理であろう?」

「知り合いの魔女と悪魔を助けに来たんだよ。つまり、私はあんたらの敵。今、宣戦布告する。妖怪である私、白嶺陽奈は教会を潰す」

「ほう、敵ながら礼儀があるな」

「ああ、うん。私を倒すまでこの街の悪魔狩りや魔女狩りを止めるという条件を受け入れて欲しい。」

「それは出来ん。こちらに得がない」

「あるよ、相手は私だけ。人海戦術で押し潰せる」

「そんな悪魔の契約にのってはダメです!!」

突然、割り込んで来た声。多くの人の中から一人立ち上がって反論した。

「私は悪魔じゃない、って。どうせ漏れがあるとか言うんでしょ？私の出す条件は私一人で相手をする代わりに私を倒すまで全力で私を殺しに來いって事だけ。私は小さな女の子だよ？分が悪いとは言わせない」

私はソイツを睨んだ。

その後、この交換条件は吞まれ、翌日から戦いが始まる事となる。

教えてあげよう。

本当の恐怖を。

遊戯と条件（後書き）

懲りなくまだ続きます。

まあ、もうプロットは出来ているのでそんなには時間は掛からないと思います。

ただ、咲夜の話をつ入れるかは考えておりません。あの年齢不詳のPA……メイドさんの話は考えてはあるんですけどね。

撤退という名の引越し

教会に宣戦布告した後、私はまっすぐ帰った。

どうやら私たちの事を見ていた人がいたらしく帰り途中に頑張れとか言われ、いくつか食べ物を頂いた。

貰うのは構わないが私とパチエは食べなくてもいいので私のお腹に入るかは分らない。

が、この街の人たちは教会に出て行って欲しいのは分かった。

私は期待に応えようと心に決めた。

翌日、パチエたちに見つからない様にこっそりと抜け出した。

みんなが起きるまでに済ませてしまおう。

「どこに行くんですか？」

美鈴が私を呼び止めた。
起きていたのか……。

「ちょっとコンビニ行ってくる」

「えっ？」

私は美鈴が戸惑っている間に疾駆した。

「ちょっと……ええ！？コンビニって何ですか？……待ってください
いよ！？どこに行くんですかー！？

案外、美鈴の足は速かった。

私は先日約束した街の外れに着いた。

目測で千を超える程の人間がそこにいた。

「あのー、すみませーん。先日宣戦布告をした者ですが、どうぞか
かって来てくださーい」

大声で大群に叫んだ。

それをきっかけに私に大群が迫って来た。

私は魔法で土を隆起させ、足止めを試みるものの、土が砂場に作る
山くらいしか出来なかったので諦めて空に逃げた。

なんで魔法がまともに発動しないんだろうか。

試しに炎を放とうとしたがマッチの火くらいの弱いものが点った。

魔法は使いものにならないけど私は彼らを倒す事が目的で殺す気はないので魔法以外での攻撃は難しい。

人間だと死んでしまうから。

相手は私を殺せばいいが、私は相手を殺さない。戦意を喪失させるのが目的。

明らかに前者の方が容易だ。

人間相手に手加減がどれほど必要かはおよそ理解しているものの魔法に頼れない今、霊術と妖術と神力に依る力と自身の妖怪としての身体能力でそれが可能なのは殆どない。

霊術は人にはあまり有効ではない。

他はオーバーキルしてしまう。

そんな考えをしながら空中で待機（霊力で）しているとバリスタの矢が飛んで来た。

反応が遅れたせいでその（雨傘くらいある）矢は私の脇腹をえぐり取って行った。

そして、その痛みで私は墜落した。

おかしかった。

いつもなら妖怪としての回復力で血は止まるはずがどうにも傷が塞がらない。

神力を使いとりあえず治すものの回復効率が悪く、また、痛みが消えなかった。

しばらく剣や槍などの攻撃をかわしながらどうしようか考えていた。

現状を改善したいがどんな原理で魔法が使いにくいのか分からない。

魔法を困難にする術を破られる恐怖を操ろうにも、絶対的な自信があるのか知らないがそれが感じられない。

それに避けて続けたが剣や槍などの武器、盾や鎧にまで高度で緻密な破魔の術がかかっていて、仮に魔法を使っても防がれていただろう。

結局選択肢に魔法はなかった訳だ。

と、なるとやっぱり妖怪パワーを炸裂させて殺さない程度に……。

いや、力技は最終手段としておいて。

まずは攻撃手段を無くそう。

私はリボンを外してから空中へ飛び立ち恐怖から得た『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』で相手の全武器の“目”を取り出して握り潰した。

途端、あちこちで金属の碎け散る音が響いた。

きゅっとしてどかーん、の感覚が何となく分かった。案外、気持ち良い感覚だ。

だけど悦に浸っている場合ではない。

攻撃手段は激減したものの攻撃の意思はまだある。

武器がないくらいでは覆らないものが彼らにはあるはずだ。

だからその気持ちをへし折る。

「奴はじつとしている！今が好機だ。討ち取れー！」

指揮官らしき人が突撃の合図を出した。

だが、させない。

私は押さえ込んでいた恐怖を一気に解放した。これは妖気をばらまいていると同義で普通の妖怪なら命に関わる行為だろう。

でも私だと小匙一杯掬う感覚でもたぶん人間相手には多い。

ずっと過去に都さんが自殺しかけた程度だ。大妖怪でもそれ程なのだから人間の精神力ならば、本能ならば確実に壊れる。

さじ加減は変えたものの数人は自殺してしまうだろう。

だからやりたくなかった。

けれどやってしまった。

不自然な程にこの場が静まり返った。

大半は気絶してしまっている。

残りは自殺と発禁後に放心状態。

見るに堪えない光景なのは明らかだ。

「あ……ああ……。な、何をした!？」

どうやらたったひとりだけ耐えたみたいだ。

気絶も発禁も放心もしていない。

「何って……そう言われても……。それより凄いね。その精神力は人外レベルだよ」

私は軽く拍手した。

「そ、そんな事……い、言われても嬉しくはない!」

「だからさ、君を人外にしてあげるよ」

私は“火に対する恐怖”を妖怪よりちよつと多い分用意した。

「本来殺されるはずだったんだから死なないだけマシだと思えば？
まあ、実験なんだけどね」

「やめ……止めろ……止めてくれええええええ！」

「嫌だ。悠久の時を人から外れて生きなよ」

私はそれを彼の肩に触れて流し込んだ。

私は自分で何をしているんだろう。

目の前にはたった今まで人間だった者がいる。

今は……妖怪だ。

「どう？自分が散々痛み付けて来た人外と同じになった気分は」

「力が漲る。これならば貴様も殺せそうだ……」

そんな発言をしたので私は必死に笑いを堪える。

「無理だつて。だいたい私を殺しても何も変わらないよ？それより教会とやらにばれるだろうし。君が殺されて、はいおしまい、つてなるよ」

「貴様みたいに力を抑えて変わらぬ生活を送るさ」

「そんなすぐに出来ると思ってるの？元人間なのに」

今の彼の實力なら小妖怪にも餌にされるだろう。

それに対して私は、仮に紫くらいの大妖怪が十人くらい束になっても勝てないと思われる實力。

天地すら近く見える程に實力に差がある。

「やってみせるさ。貴様を倒してからぐぼあ……」

イラッとしたから殴っちゃったZE☆

（妖怪としては）ゆっくりやったんだけど反応出来ていない。

「私、もう帰るから。君の相手をするのも馬鹿馬鹿しくなったし」

「ま、待て！」

「黙れ、雑魚妖怪。500年は修行しろ」

私はそのままこの場から去った。

私のキャラじゃなかったなあ……。

ちなみに放置された方々がどうなったかは知らない。

「パッチェー、たっだいまー」

私は元気いっぱい扉を開け放った。

「うるさいわ。レミイが起きちゃうじゃない。だいたいどこに行ってたのよ……」

眠そうに目を擦りながらも応えてくれるパチェー。

「もう起きたわよ。陽奈は昼間から元気ね」

そして、レミリアは起きちゃいましたか。

まあ、とりあえずレミリアの言葉はスルーして……

「ちょっと教会潰して来た」

「美鈴からはコンビニとかいう場所に行くとか聞いたわよ」

この時代にコンビニなんてあったら大騒動だ。

「それよりも陽奈、貴女、本当に教会を!?!」

レミリアに肩を揺すぶられる。

吸血鬼って力が強いから幾ら子供と言えど……、吐きそうになる。

「ちょっと……レミリア、き、気持ち悪い。す、ストップ……」

レミリアは止めてくれた。

「すまなかったわね……」

それから教会の事について何故一人で向かったのか等をしつぽり搾られた。

ところで問題はここからだ。

私は教会の戦力を大幅に減らしたが本部はまだ倒れてはいない。

だからといって潰す訳にもいかない。

それこそ宗教戦争になり、さらに多くの犠牲者が出る。

私も全能なんかじゃないからパチエたちは守れるだろうが、他の方々は無理だ。

偽善なのかも知れない。しかし、それは理由を伴っていなくもない。ただ、目の前の友を助け、一般民にも被害が少なくなるようにしただけ。

だから最後にする事がある。

「パチエ、レミリア、引越ししよう」

「教会は陽奈が倒したんでしょう？」

レミリアの疑問も分らない。

「全部は倒せてないよ。全部来た訳じゃないし。だから館ごと引越しちゃおう」

「「はあ!？」」

ええい、顔が近い！

「あのね、ここに確実にいない事を示す為にあの目立つ建物も動かすの」

「どうやって動かすのよ。私の知識を持ってしても不可能よ」

「まあ、とりあえずやるから着いて来なよ」

「無理よ」

レミリアが梃子でも動かんばかりに拒む。

「なんでさ」

「今は昼よ。私を焼きたいのかしら」

忘れてました。

そして夜、私たちは館の前に立っている。

「じゃあ始めるよ」

私はリボン（赤）を外してからスキマを開いた。

大きな大きな、それに館を飲み込ませた。

「はい、出来た」

二人が口を開けて啞然としている。

館のあった場所がただの平地に早変わりしていた。

ちなみに紫のスキマと私のスキマは別物だから私が許さない限り紫は入れない。

まあ、私は紫のスキマに（する気はないけど）侵入出来る。莫大な

妖力で無理矢理こじ開ける形になるけれども。

ともかく、私はこれから逃げ場を与えなければいけない。

まあ、私の家にでもとりあえず招待するとして、近辺探索して館を設置しようと思う。

「というわけなんだよ、パチエ」

「どういう訳よ」

「いや……」

私はパチエに私の家にとりあえず居候してもらって……（略）を話した。

「でも問題があるんだよね……」

「そうね」

レミリアは分からない様子で首を傾げていた。

「陽奈の家は海の向こうなのよ。レミィや貴女の妹のフランは渡れないでしょう？」

吸血鬼は流れる水は渡れない。

海は穏やかであろうとなかろうとも海流、つまり流れがあるわけで当然該当する。

そして日本は島国だ。海を渡るしかない。

方法が思い浮かばなかった。

吸血鬼とは実に厄介な種族だと思う。

傲慢でプライドが高く、水がダメで日光がダメで……あげたらキリがない。

「貴女、失礼な事考えてたでしょ」

「いや？」

「まあ、いいわ……。一つ提案よ。私たちを館同様に運ばないんじゃないかしら。あれなら水の上は渡らないはずよね」

「よし、それでいこう」

私は早速スキマを開いた。

「フランも呼ばなきゃいけないわ」

「私が呼んで来るから先に行ってて」

「任せたわ」

「フライン、引越すよー」

私が部屋に入ると熟睡していた。

「ああ……うん……」

まあ、このまま部屋ごとスキマに入れちゃおう。

「というわけで、パチエはどうする？」

パチエと小悪魔はまだスキマに入ってなく、入らずに飛んでいくか否かを聞いた。

「じゃあお願いするわ」

「わ、わたしは……陽奈様の手を煩わせる訳にもいきませんので……」

「パチエはもう入っちゃったけど？」

「私は陽奈様にご同行致します！」

かくして小悪魔は私と飛んでいく事になった。

「ねえ、小悪魔」

「は、はい、何でしょうか？」

「私って……子供っぽい？」

私は小悪魔に愚痴を零した。

フランは馬鹿正直に言うだろうから話にならずレミリアとパチエは笑うだろうし美鈴はどうでもいいので、小悪魔が適当だと思ったからだ。

「は、はい……いえ、陽奈様は長生きしてらっしゃいますし、小さくて、あどけなくて、撫でると気持ちよさそうにしてくれますし、かわいらしいですし、若干天然色もありますし、背伸びしているようにも見えますし、そのうえ髪型がツインテールですし、すやすや眠る姿は天使のようですし、服と少し大きいようで袖から手が出しきれていませんし、肌も餅肌で柔らかいですし、肌のキメもありますし、陶磁器のような汚れも知らない白いお肌ですし、小枝のように細い手足でいらっしゃいますし、見た目がプニっとした独特の丸い身体のラインで抱き着きたくなっちゃいますので十分子供っぽくないかと思……ハッ！」

「小悪魔の気持ちはよく分かったよ」

ように子供っぽく見えると。

「い、いえ、あ、あの……その、すみません！」

「謝らなくてもいいよ。本心が聞きたかっただけだから」

というか、いつそこまで私を観察したんだろうか。少し犯罪臭がする気がする。

「で、でも、陽奈様は気が長い方だとは思いますよ。年齢の事も気になさらないようですし」

「まあ、ね。妖怪は年齢を気にしたらキリがないでしょ」

「気にしてる方もいらっしやいますけどね」

「まあ、人それぞれだし」

「妖怪ですけどね」

「愚痴ったらすっきりしたよ、ありがとう」

「はい、こちらこそ」

口ではそう言うものの、あとで小悪魔を問い詰めようと決心した。

久しぶりに帰宅した私はまずスキマを開いた。

「レミリア、問題は？」

「なかったわ」

「ここも久しぶりね。まだ本はあるのかしら」

「いつもの部屋にあるよ」

「ここが陽奈さんの家ですか？意外と広いですね」

「一時期はいっぱい人がいたからね。そうそう、美鈴はあまり外に出ない方がいいよ。ここら辺は魔法植物が活発だから」

「はい……」

探險しようと思っていたのかすっかりしていた。

「結構愉快な人たちを連れて来たわね」

「人に愉快だなんて失礼だよ……。って紫!？」

「そうよ。最近スキマを開こうにも貴女の場所が圏外で……。はあ……。とっても暇だったから式の教育が終わっちゃったわよ」

「そ、そう……」

スキマにも圏外ってあるんだ……。

「ねえ、紫。館一個分の土地がどこかにない？」

「あるわよ。湖の向こうに」

「案内してよ」

「等価交換よ。何かくださいな」

紫には簡単には頼み事出来ないな……。

「何が欲しいの？」

「貴女の知恵よ。式への力のシフトがうまくいかないのよ」
教育だけは終わったのか。

「構築式の写しは？」

「もちろんあるわ」

「んじゃ、確認しておくから案内して」

「分かったわ」

紫から写しと筆を貰ってから私は紫に着いて飛んでいく。

見てみると無駄な部分に浪費されている形だったので効率化を諮るだけだった。

そんな事をしながらも目的地に着いたので、紫に式の写しを返し、館を設置して、レミリアたちを引越しさせて、フランにお別れを言ってから私は帰路についた。

撤退という名の引越し（後書き）

小悪魔の暴走の巻でした。

えっ……違います？

これでとりあえず一段落つきます。

でも次回は帰路から始まりますけれども。

妖怪小町と悪魔の世界と

レミリアたちと別れてからしばらく、私は空をのんびり飛びながら森にある自宅へと向かっていた。

ふと見ると森の近くに黄色いかたまりみたいなのが見えたので、気になって私はそこへ降りた。

辺り一面の向日葵畑だった。

稀に妖精が悪戯したりなどとかわいらしいものも見えたが、何よりも絶景だと思った。

「気に入ってくれたかしら？」

背後から声がした。

若草色の髪と目をした、シャツに赤いチェック柄の服の上に羽織り、同色のチェックのもんぺを履いた女性が日傘を差して立っていた。

「ここはあなたが？」

「ええ、そうよ」

「綺麗ですよね」

「そうね。それよりも貴女、ここには怖い妖怪が出るらしいからお逃げなさい」

「あなたは？」

「私はいいのよ」

そのまま女性は手を振ってにこやかに見送る形をとった。

「私も並の妖怪なら追い払えますから」

「あら、強いよね」

私はこの時違和感を覚えていた。

目の前の女性は何かを押し殺しているように見える。

「どれくらい強いのかしら」

私は膨大な妖気を感じ、慌てて結界を張った。

「あら、人間の割にはなかなか強いじゃない」

女性の日傘が結界でその動きを止めていた。

「それほどでも、っと」

私は距離をとって結界を崩した。

「あなたがその妖怪だったんですね」

「そうかも知れないわね」

ふふっ、と笑うと一瞬で私の背後に回って傘で横薙ぎにしてくる。

私はそれを屈んで避けて、代わりに霊力を籠めた掌打を繰り出す。

しかし、女性は寸のところで手首を掴み、そのまま握った。

ふと力が抜けたので振りほどき私は再び距離をとる。

「……丈夫ね」

「そうかな」

「貴女、名前は？」

「白嶺陽奈。そっちは？」

「風見幽香よ。全力で握ったはずなのに……、貴女本当に人間なのかしら」

「違うって言ったら？」

「どちらにせよ、愉ませてちょうだい」

幽香からの妖気が更に膨れ上がった。

紫と同等かそれ以上だ。

「じゃあ、私も」

私も少しだが妖気を出す。

「人間じゃなかったのね」

「人間だったらもう100回は死んでるよ、その殺気だけで。ねえ、私は戦うのとか嫌なんだけど」

「たかが中級妖怪程度に拒否権があるの？」

途端に殺気が更に増えた。

「ない……か……。じゃあ、私の本気を頑張って出させてみてね」

私がへらへら笑うと日傘が私を縦に割らんと振って来た。

速い！？

私はそれを避け、更に距離をとる。

「何故、全力でぶつからないのかしら」

「やれば分かるよ」

「虚勢じゃないわよね」

「さあね」

再び私たちは動き出した。

先に動いたのは幽香だった。

既に私に向けられた傘には大量の魔力が集まっていた。

「喰らいなさい」

その先端からとてつもない雷光が迸しり、私を襲わんとする。

それは圧倒的魔力による暴力。阻むもの全てを飲み込み、私を喰らおうとする。

まさかこれほどのものが飛んでくるとは思わなかったので防御も間に合わない。

咄嗟に右手に魔力を籠め、受け止めようとしたが、普通に考えて雷光は水のように手を翳しただけで止められる訳もなく、私は飲み込まれてしまった。

「あっけなかったわね……」

私は白嶺陽奈という妖怪に少し期待をしていた。

妖怪でありながらも霊術で私からの初撃を防いだのだから。

更には、その霊術で私を攻めていた。

そして私の放った魔法に当たる時に魔力の流れを感じた。

私は惜しい妖怪を殺してしまったのかも知れない。まだ強くなる可能性を潰してしまった。

もう跡形もない。

私はその場を去ろうと背を向けた。

「どこに行くの？」

どこからか朱い尾長鶏が飛んで来た。

それが私の傘に触れるとあっという間に焼失させた。

「これで武器はなくなったね」

私は目を疑った。

先程の妖怪が、服装が少し変わったが確かにそこに立っていた。

自分でもびっくりした。

小悪魔から貰った服は消し飛んだけれども、下に着ていた着物もどきのような本来着ていたもののおかげで助かった。

私の妖気に長い間触れていたために鎧のようなものになっていたのだろう。とはいっても物理的な衝撃は服なので防げないであろう。

「少し本気になってみる。あれにはびっくりしたよ」

「今頃？初めからそうしてくれればよかったのに」

「唐突だけど近くに魔法植物の巣窟あるでしょ？」

私は紫のリボンを解きながら話す。

「魔法の森の事？それがどうかしたのかしら？」

「あれの原因、私なんだ」

リボンを解いて魔力を解放する。

そのまま流れるように夥しい量の刃を作って飛ばした。

幽香は大きく避けてかわした。

「かかった!!」

私は札を投げそれに更に魔力で構築式に上乘せをして発動した。

「多重五行封陣!!」

幽香に不可視の糸が絡み付き、動きを束縛する。

陰陽術（霊術）と魔法の木火土金水の陰と陽を循環し、組み合わせたオリジナルの拘束術だ。もっとも制御する分しか霊力は残らず、術を解くと空っぽになるほどの大技だが。

力が完璧に循環され構築された糸は仮に勇儀が全力で抵抗しようとも切れないだろう。私はその糸（まだ10本程が限界）を自由に操れる。

「何よ……。これくらい!……っ!!」

「お話をしようよ」

そのまま空中に張り付け状態にした。

「こんな屈辱っ! お前なんか絶対に殺してやる! ぶっ殺してやるっ!」

「吠えてるのはいいけどさ、私は元々花が綺麗で見ただけなんだけど。なんで幽香に襲われなきゃいけないの」

「うるさいっ！死ね！今すぐ死ね！」

「口が汚いと嫁に貰ってくれる人がいなくなるよ」

「う、うるさい！お前だってそうだ！」

「いや、私は既婚者だけど」

幽香の表情が固まった。

「お、お前なんか神綺様にやられてしまえー！」

「誰？」

「魔界の神よ」

「あら、スキマじゃない」

紫がスキマから上半身だけ出していた。

「名前で呼んでくれないかしら……。まあ、いいわ。幽香、貴女は選んだ相手が悪すぎるわ」

「貴女の知り合いかしら？」

「白嶺陽奈、彼女は数少ない大妖怪の一人よ。私も勝てないもの、貴女も勝てる道理はないわよ」

「個人情報と言わないでよ。秘密にしてたのに」

「それでも納得出来ないわ」

「陽奈、もう少し本気を出してあげなさいよ。ぼろ雑巾にされれば気が済むんじゃないかしら」

「なるのは私じゃないわ!」

私はその言葉に少し怒りを覚えた。

紫に境界を弄られているのも分かるが流される事しておく。

幽香を自由にしてから私はリボンを結び直した。

「解いたって事はやるのね?」

「武器の日傘も私が燃やしちゃったから勝てるかなあ、と」

「その魔力……、宝の持ち腐れじゃないわよね」

「当たり前じゃん」

「いくわよ」

「どうぞ」

私たちは再度ぶつかった。

「当たり前っなさいっ！」

「嫌だよ！」

幽香が無茶苦茶殴って来る。

「武器は燃やしたのに」

「私が武器だけに頼る訳無いじゃない！」

幽香の拳が私の頬を掠った。

「危なっ！」

掠った頬が少し切れる。

一発喰らったらミンチ確定じゃん。

一発毎の威力が高すぎる。

……威力？

「幽香、何か能力は持ってるの？」

「『花を操る程度の能力』を持っているわ。実に戦いに関係ない能力よ」

つまりアレだ。勇儀同様にはならない。

私は封印を弱め、妖気を最大に解放した。

「いくよ」

「何よ、目が朱くなった程度で何か変わるのかしら？」

幽香の空中からの蹴り。普通ならば大木をも吹き飛ばすだろう。

だから私は

「捕まえた」

“威力”を操り、受け止めた。

厳密には運動エネルギーを操った訳だが。

妖気を解放した分の頑丈さと威力を落とされた蹴りの攻撃力ならば小妖怪が消し飛ぶ程度だろう。

目が朱くなる程度となると大妖怪か中妖怪か曖昧な辺りまでは強くなる。

「放しなさい！」

私は幽香の撃った雷光の魔法を模倣して、そっくりな威力でお返しした。

ちなみに“威力を操る”事は物理的な事にしか適用されず、魔法な

どは無理だったりする。

閑話休題。

幽香はアレを喰らってもピンピンしていた。

「少し痛かったわよ」

「それはどうも」

「褒めてないわ」

それから更に続いた戦いも遂に決着がついた。

「幽香、もういいよね」

「まだ……、まだよ！」

私は徹底的に無力化していった。

肉弾戦は威力を操り、魔法は模倣して相殺する。

私の方が魔力は多いため、先に幽香が不利になる。更に幽香は猛攻するものの私には打撃は効かない。

幽香の消耗戦となっていた。

当たり前の様に体力も魔力も尽き、妖気も弱々しくなった幽香を私が押さえ込むのは容易だった。

「降参しなよ。負けを認めるのも強さだよ」

「お前みたいな奴になんか……」

「中身だけじゃなくて全身をボロボロにされたいの？ マゾヒストなの？」

「ち、違うわよ！……もう降参するわ。また今度リベンジさせてちょうだい」

どうやら諦めたようだ。

「紫、勝ったよー」

「アイツなら帰ったわよ」

・・・。

それからしばらくして幽香とんだかんだで打ち解け、神力で回復させた後に魔界の神綺という人物の元に案内をしてもらう事になっ

た。

「それで、どうやって行くの？」

「こうやって魔力を……」

なんか変わった魔法陣が出来た。

「すると扉が出来るわ。人によっては違うけど私は通れればいいと思ってるからこれで十分だと思うわ」

人が入るくらいの魔法陣が出来ていたが、これが扉らしい。

「ほら、行くわよ」

扉を潜ると、そこは魔界だった。

障気が酷く濃く、魔力の海を漂っているかのように膨大な魔力で満ちている。

どこか懐かしい気もする。

「この環境で涼しい顔してるだなんて凄いわね。慣れないと厳しく

ないかしら」

「なんか懐かしくて」

「懐かしい？ 変わってるわね」

「失礼な」

「陽奈は何歳よ」

「失礼な」

変人と言った揚句に年齢まで聞くだろうか。

「そうよね。ごめんなさい。余りにも子供っぽいから」

少し頭にきた。

「幽香よりは生きてるよ。私から見たら幽香は生まれたばかりの赤ん坊だよ」

「なっ……、なんですって！ 私だって数千は生きてるわよ！」

幽香は怒りで顔が真っ赤になっていた。

「私にそれだけ吠えれば十分。まだ私は年の功で勝ってるけど幽香ならすぐに私を抜けるよ」

「……あんた何歳なのよ」

「幽香の100倍以上は生きてるよ」

「はあ！？それじゃあ陽奈は神話時代より前に生まれてる計算じゃないのよ」

「そうなんだ」

それは知らなかった。

「でもこれからお会いする神綺様はもつと長生きらしいわ」

幽香が足を止めた。

「ここが魔界の最奥で神綺様のいらっしゃる所よ」

「ちなみに幽香は会った事あるの？」

「ないわ。だから私はここまで。まだ会いたくないもの。あくまで噂を聞いただけよ」

「えっ……？じゃあ何で？」

「つべこべ言わずに行きなさい！！」

幽香に蹴られて私は奥に突っ込んだ。

「痛た……」

私は盛大に俯せで滑り込んだ。

「あら、お客さんかしら？」

声が出た方を向くと淡い紫に近い髪を片側だけに偏って結い、赤い衣を着ている私より見た目が少し年上な少女がいた。

「お邪魔してます」

私は土を払いながら答える。

「何用なの？」

「幽香に頼まれて神綺って人を倒しに」

「あら、幽香ちゃんが……」

「それで神綺さんはどこに？」

魔界の神様って言われてるから悪魔みたいな様相なのを思い浮かべる。

「自己紹介をした方がいいわね。私の名前は神綺。貴女の探してい

る魔界の神様。ごめんね、私の見た目が想像を裏切っている」

目の前の少女が正に神綺だった。

「あ、私は少しくらいなら心は読めるのよ。長年神様やってるもの
私は読めません。」

「貴女の名前は聞かないわ。どうせ私が消すから。幽香ちゃんを倒したんでしょ。だからここに連れて来られたんじゃないかしら。そんな危ない奴は放っておけないわ」

神綺がいきなり魔法で弾を私に撃って来た。

私は咄嗟に相殺させようと魔法を撃つ。

が、その弾は私の魔法を簡単に打ち破って私を襲った。

さすが魔界の神だ。魔法においてはエキスパートだ。

「何のつもり？ 私は平和主義だから戦いは好きじゃないのに」

「知らないわよ。だいたい幽香ちゃんを倒した妖怪が戦い嫌いだなんて変な話じゃない？」

「そうなのかな？」

私は神綺からの魔法の嵐を避けながら言った。

「余程の実力がないとこの攻撃は避けられないはずよ」

あー、さいですか。

「だから本気で相手をしてあげる」

これで本気じゃないのか疑った。

神綺の背中から大きな黒い蝙蝠のような羽が生えていた。

さすが魔神。第二形態ってどこですか。

「貴女もそのリボンを外しては？それで自身を封印してるのは分かってるわ。そんな状態で勝てるんでも？」

「あちゃ、ばれてたか……。本当に外していいの？」

「それ程の脅威には成り得ないだろうし、構わないわよ」

「その言葉、後悔しないでね」

私はリボンを取ってスキマにしまった。

臨戦体勢に入っただけだ。まだ抑えている。

「何も変わってない？」

「いや？これから」

私は徐々に妖気を出してゆく。

それに比例して神綺の顔から余裕が消えてゆく。

「どうしたの？怖い顔して」

「……貴女は何者なの？」

親の仇のように睨まないで欲しい。

「いや、妖怪だけど」

「そうよね……。ところで何で力を出し惜しみするの？一気に来てもいいのに」

「じゃあ甘えさせて貰います」

私は一気に全開状態にする。

髪と目が朱く染まる。

「えっ……？」

そんな声と共に神綺がいきなり座り込んでしまった。

「足が立たない……。何で？足が震えて立てない……」

「だから言ったのに……」

「名前……」

「うん？」

「名前を教えて。私は貴女には勝てないから聞かなきゃいけないわ」

「どうして勝てないの？」

「貴女が怖くて……もう腰が……。それに……」

「それに？」

「貴女の名前を知っているかも知れないから」

昔会った事があっただろうか。

「貴女の名前はもしかして陽奈……ではないでしょうか」

「うん。私の名前は白嶺陽奈だけど？」

「白嶺？名字がある？」

「白嶺って名字は最近付いたけどね」

「陽奈……人間たちとの戦いに終止符を打った妖怪とは貴女では？」

「えっと……？何年前の話かな？」

どうしてそんな話を知ってるんだろう。

「数億年前よ」

「まさか聞くけど……紅蓮とか都さんとか知ってる？」

「紅蓮様と都様？それじゃあ貴女は陽奈様？」

「まさかあの時代の生き残り？」

神綺は徐々に目に涙を浮かべ始めた。

「はい！陽奈様、私はあの時の小妖怪の一人です。陽奈様が倒れた後に私は見知らぬ力……魔力でこの世界を作り、神となりました。今では妖力はこの身には残っていませんがたしかに太古の昔に貴女と戦っていた妖怪でした！」

それから私はリボンを付け直し、神綺と一緒にお茶していた。

「夢子ちゃん、一番いいお茶持って来て！」

「神綺様……、こちらは誰ですか？」

神綺が夢子と呼ぶのはメイドらしく、金髪碧眼の神綺のメイドで神綺が言うには魔人最強らしい。神綺には敵わないらしいが。

「私の憧れでありながら絶対な方よ」

「はあ……」

「早くお茶！」

「は、はい！」

夢子は慌てて奥に向かった。

今いる場所は神綺の家。館だけど。

「すみません、無躰で」

「いや、いいけど……」

「お茶です」

夢子がお茶を置いてゆく。

「すみません、粗茶ですが……」

「最高級じゃなかったの!？」

「神綺様……。はぁ……」

話の内容は、人間たちとの戦いの話から魔界の外の話まで尽きる事はなかった。

妖怪小町と悪魔の世界と（後書き）

タイトルは

妖怪小町Ⅱ幽香

悪魔の世界Ⅱ魔界

という訳です。

さすがに神とか入れると神綺が連想出来てしまうので。
夢幻館？何それおいしいの？

博麗とは（前書き）

一部、独自解釈などありますがご了承ください。

博麗とは

魔界から帰って数年、久しぶりに人里へ行くと、巫女が人に囲まれていた。

「ねえお兄さん、アレは？」

私は近くの男の人に聞いた。

「ああ、山の上の博麗神社ってところから来たらしくてな、妖怪退治を承けたりお守りを買ったりしてるんだ。昔はこの里では寺子屋で簡単な護衛術教えてた人がいたけど、いなくなったからね。えっと……誰だったかな……」

「白嶺陽奈、じゃない？」

「そうそう……。何で君が？」

私は自分を指差して言った。

「本人だから」

啞然としている彼を放っておいて、私は少し妖気を出しながら巫女の前にまで到った。

「子供の妖怪？」

巫女の服としては前衛的で、赤いスカートに赤い洋服らしきものを

着ていて、腋を出して白い袖だけが二の腕付近から手首までを隠しているような、とても巫女とは言えないが巫女っぽいような服装をしていた。

「お守りのお札一枚ちょうだい」

「変な妖怪ね……」

私はお金を渡してお札を受け取った。

私は筆を取り出して少し手を加えてから巫女にお札を差し出した。

「売ってあげる」

「はあ？何言ってるのよ」

半ば呆れた様子でお札を手にとったが、眺めている間に表情が真剣な目付きに変わっていった。

「何なのよ、これ」

「強化してみた」

「貴女は妖怪よね？」

「そうだね」

「何で里の人たちは平気なのかしら？」

「私が無害なのは周知の事実だから」

私たちのやり取りを見ている野次馬の中には、私の事を知っている人も幾らか見えた。

「私は博麗霊菜、今代の博麗の巫女よ」

「私は白嶺陽奈、こんななりをしてるけど大妖怪だよ」

「紫より弱そうね……」

「だってさ、紫」

私は後ろを向いて喋った。

「あんた、どこ向いてるのよ」

「陽奈にはばれてるのね……」

紫がスキマから出て来た。

「本当にいたわね……」

里の人たちは新たに妖怪が出た事に動揺してしまっている。

「霊菜、場所を変えましょう？」

「しょうがないわね……。陽奈が何で紫の事を分かったのかも気になるから聞かせてちょうだい」

三人で空を飛んでしばらくすると神社が見えた。

里の人たち……、目の前で人が飛んでも驚かないなんて……、いずれ妖怪見ても驚かなくなるんじゃないかな……。

「あそこが博麗神社よ」

すぐく見覚えのある神社だ。

「ねえ紫、ここって」

「そうね、貴女と界人の愛の巣ね」

そんな言い方じゃなくても……いいんじゃないの……かな？

「あらあら、顔が赤いわよ」

「う、うるしい！」

うう……、紫は絶対わざとやったんだ……。確信犯だ。

「話が読めないわ。説明してちょうだい」

「神社に降りてからでも遅くはないでしょう？」

私たちは神社の茶の間で時期でもない干し柿を貪りながら、薄い茶を啜っていた。

白湯と余り変わらない程に薄い……。

「それで陽奈は博麗と関係あるのかしら？」

「私は記憶にないけどね」

ああ、お茶が薄い。

「でもここは貴女と界人の愛の巣なのは変わらないわよ」

私はお茶を噴き出した。

「こほっ……。紫、本当なの？」

「ふふっ、そうよ。貴女と界人が……」

「言うなー！」

「二人は愛し合っていたものねえ」

「ううー、これ以上言うなー！」

呂律が回らないじゃないか……。紫め、後で覚えてろよ……。

「こほん、それで紫、説明してくれるんでしょ？」

ありがとう、霊菜、君に後で玉露を贈呈しよう。

「そうだったわね。まず一番の要点を言うと、霊菜は陽奈の子孫よ」

「「はあ!？」」

私と霊菜の声が重なった。

「どうということよ！」

「そういうことよ、霊菜。『白嶺』の読み方を少し変えてみなさい」

白↓はく

嶺↓れい

白嶺↓はくれい⇨博麗?

「えっと……? 分かったけどさ、どうしてこうなったか説明してちょうだい」

「そうね……」

紫の長い話を要約すると

こんな山中の神社に好んで来る人なんていないため、白嶺の巫女たちは老いてから子を授かる事も多かった。

そしてある時、子供が生まれて間もなく他界、子供は里の者に一旦

引き取られ、しばらくして神社へ帰ってから、神社に書いてあった『白嶺』を『はくれい』と読む。

そして更に時が経ち、『はくれい』と言う名は聞いたが字を教わる前に親が他界し、『白嶺』という文字も色あせ見えなくなっていて、その子供は里で学んだ末に『博麗』という字をあてた。

という事らしい。

「その調子だと『博麗』もいずれ消えそうね」

「大丈夫よ、貴女がしっかりとすれば。実を言うと貴女の親までは妖力が少なからずあったのよ。けれど貴女で遂になくなったわ。先代までは自己の妖気で霊術が阻害されていたけど貴女からは違う。その妖気で阻害され発揮出来なかった分の博麗の術を完全に発揮出来る可能性があるわ」

紫が言いたい事は分かる。

体内の妖気で阻害されていた分、普通より強いものを放つ必要がある。

しかし、それが阻害されなくなったら少なくとも彼女らよりは強くなれる可能性がある。修行次第だが。

では、私は何故抵抗がないのか。

彼女らと違い、妖気を認識し操作出来るからだ。霊力を使う時に妖力を出力しなければいいだけ。

もっともこの方法は清明さんに教えられた方法だからロストテクノロジーに近い。

話がそれた。

「信じられないわ。私が、博麗が妖怪の子孫だなんて」

霊菜が愚痴をこぼした。

妖怪退治をして来た一族が妖怪の末裔だなんて滑稽な話にも程があるからだ。

しかし、紛れも無い事実なんだろう。

「じゃあ、証明出来ればいいのね」

「それなら納得してやるわよ」

私としては神社の存在だけで納得出来るが、霊菜はそうもいかないらしい。

「貴女たちが戦えばいいのよ」

私としては不本意だが霊菜と戦う事になった。

「いくわよ……」

霊葉は静かに言う。針を放って来た。

私は針を一本だけ掴んで、他は避けた。

「破魔の針だね。これは刺されば痛い」

「当然よ。貴女は妖怪でしょう？」

続いて様子を見ていると札を投げて来た。

私が少し避けると追い掛けて来たので私も札を投げて撃墜する。

「かかったわね。退魔陣！」

私の足元に結界の構成式が展開された。
設置型の結界らしい。

私は結界が出来る前に先程の針を式の線の一箇所を正確に刺した。

「あー、綺麗だねー」

「嘘……でしょ……」

そこは要であって、断たれたら式が崩れる点。

恐らく咄嗟に仕掛けたであろう構成式は私から見たら稚拙なものであったからだ。

ウィークポイントにダメージを喰らった式は綺麗に光の粒子となった。

「見本を見せてあげるよ」

私は小さな結界を自分の周りに張った。

生憎だが霊菜ほど霊力がない。だから緻密さと効率で勝つしかない。

「形は綺麗ね。でも力が足りないわ」

「私は妖怪だからね。霊術は適してないよ」

「とどめをささせて貰うわ。……『夢想封印』」

霊菜はそう呟くと霊気が虹色の輝く珠を模り、霊力となったソレは私に襲い掛かる。

私の張った結界をたやすく打ち破り、私の身を火傷に近い感覚で焼く。

「まだまだあるわよ」

そんな珠が残り七つ。

「もののついでよ、『陰陽玉』！」

私に向かって放たれたはずのそれは神社へと飛んで行き、

スコーン

そんな乾いた音をして境内にいた紫に直撃した。

「貴女は妖怪よね？」

「何で遠くの紫に飛んで行ったか、でしょ」

「いたた……、これを作ったのは陽奈だからよ。自分を襲う道具なんて作らないじゃないのよ」

紫が霊菜に陰陽玉を投げ渡す。

が、軌道を変えて

スコーン

また紫を直撃した。

紫は陰陽玉、博麗の秘宝と呼ばれるものの事を伝える為に私たちを戦わせたらしい。

「嫌でも信じるしかないわよ。すまなかったわね、紫」

霊菜が何度か実験をして痛々しい程に陰陽玉に襲われた紫はとても

不機嫌だった。

「本当よ。意外と痛いだよ、それ」

「出力は試作品の二割くらいだけどね」

最初作った時は中妖怪までなら一発昇天していた。

「試作品は五倍も強かったの!？」

霊菜が聞いてきた。

「出力の差だから攻撃力なら10倍くらいはあったかな？」

「何で抑えたのよ」

それは簡単な理由だ。

「危ないから。試作品は私の霊力を全部盗んで界人の、まあ私の夫な訳だけど、霊力を枯渇ぎりぎりまで奪って行ったんだよ」

神力注いで霊力を保たせたのは製作秘話だが。

「霊菜なら……、九割は奪われるかな」

「それなら……」

「そして制御も難しくて私の両手をことごとくえぐり取って行ったよ。だから私に攻撃しないように式を組み直した部分もあるんだけどね」

霊菜の顔が面白い程に青ざめた。

「霊菜が望むなら組立直すけど？」

「遠慮しておくわ」

相変わらず顔色は酷いままだった。

しばらく神社でお世話になった後に私は人里へと向かった。

それから数ヶ月分の食糧をまとめ買いする。程度で言う私の財布が空になる程に。

それらを全てスキマに放り込む。

「なんだ、陽奈ではないか」

「あ、智音さん久しぶり……」

私は話し掛けられたので向いて見てから言葉を失った。

「どうした？」

「いや、お腹……」

「子供だ」

マヂですか？

「おめでとう、生憎何も贈れないけど」

私は空の財布をひっくり返す。

「気持ちだけでも十分嬉しいぞ。ところであんなに食糧を買ってどうしたんだ？」

ああ、それか。

「野暮用に」

「そうか。まあ、言わなくてもいいが。時に陽奈、お願いがあるのだが」

「変な事じゃなければ」

「この子が生まれたら寺子屋にまで手が回らないから任せたい。授業方針はある程度私が作ろう。だから頼む！」

手を叩いて懇願される。

「それくらいならいいけど……」

問題はあんまりない。

「では、今度寺子屋へ来てくれ」

私は智音さんと別れた後に洞窟に入った。

「おや、ここからは地上の妖怪は立入禁止だったはずだよ？それとも私の能力でぐちゃぐちゃの肉塊になって体液を啜り取られたのかい？」

「そんな無闇に能力を使わないの」

「あはは、冗談だよ」

彼女は黒谷くろだにやマメ。

病氣（主に感染症）を操る程度の能力を持っているが彼女の性格上、多用はしない。

能力とは裏腹に結構明るい性格をしている為に一部ではアイドル扱いされていたりもするとか。

ちなみに土蜘蛛らしい。

「毎度ご苦勞様って思うよ」

いつだったか交わした、地底への物資運搬をしている訳だ。

「そういえばキスメは？」

キスメはいつもヤマメという釣瓶落しの娘だ。

「水を汲みに行ったよ」

「ふーん、何で？」

「ここって少し日光入るじゃん。だから陽奈からの物資から野菜を育ててるの。ほら、私がいれば感染症の心配ないし」

土壌汚染もなければ水質汚染もない、と。

「もうちょっと光が欲しいから穴を広げたいけどね。落盤したら嫌だから」

「キスメって確か鬼火を使えたよね？」

「光が弱くてね……。あ、そうだ。どうせ、さとのり所まで行くんでしょ？今日の分の収穫を持って行ってよ」

グイッと様々な単色野菜が渡される。

緑黄色はないみたいだ。人参はあったけど。

「じゃあ、よろしくねー」

私は手をヒラヒラ振ってスキマに野菜を放り込んでからこの場を後にした。

私が旧地獄にある街道へ繋がる橋に差し掛かると緑の目をした少女が睨んで来た。

「ああ、妬ましい。地上に行ける貴女が妬ましい」

取り敢えず無視して橋を渡った。

街道にていくつか喧嘩を売られたが無視をして、やっと、さどりのいる地霊殿にたどり着いた。

「少し遅かったですね。まあ、地上での交流も大事でしょうから責めはしません」

「まずは地上からの食材を」

「帰る時にはヤマメに礼を言っておいてください」

「はあ……」

先に色々言われてしまった。

「すみませんね。今日は一杯やりますか？」

「なら入れとくれよ。ついでに陽奈、喧嘩してくれ」

「勇儀、我慢してください、陽奈は嫌がっていますよ」

「じゃあお願いだから喧嘩してくれ」

「何で？」

「陽奈と戦った事がない奴らが地上に出せってうるさいからさ。見せ付けてやって欲しいんだ」

「それで静かになるかな？」

「少なくとも自分はもう本気の陽奈との戦いは御免被るね」

こうして急遽、地底での試合（死合）が開催された。

結果は私の単独優勝だった。

本気を出したら怯えて気絶する奴らばかりだった。

「勇儀、これでよかったの？」

「あ、ああ。それよりお願いだから妖気を抑えてくれないかい？」

「ごめん」

まだリボンを結んでいない事を忘れていたようだ。

「これで奴らも当分は熱を冷ましてくれるだろうからね。陽奈には感謝するよ。だから喧嘩しないかい？」

「お断り致します」

しばらく地底でくつろいだ後に私は洞窟へと再び帰り、ヤマメに敬礼を伝えてから地上へ戻った。

そういえば今は西暦でいうと何年なんだろうか？そう思い、私は京都へ飛び立った。

どうやらかなり進んでいて、江戸幕府が倒れていた。

さんざり頭が闊歩している。

私の記憶が正しければ、これからは科学の時代。私たちの様な妖怪などという“幻想”は消え行く。

妖怪を初めとして、魔法も神も聖獣も吸血鬼も、それらが全て消えてしまう。

どうにかして護らなければいけない。

あの幻想の集まる場所を。

明治17年の博麗大結界（前書き）

区切りがいいので短めですが更新を。

原作の花映塚の時点で二回目の大結界異変で60年おきに起きるものなので、120年。ちょうど（結界を張った年を元年として）幻想郷の第百二十季なので120年前に結界が張られた事に。

そして頒布されたのは2005年の夏のコミケで、そこから120年前、1885年は明治17年になります。

意図的かと思われますね。

という事で話の名前が決定しました。

明治17年の博麗大結界

私は科学の発達に感じた危機を回避しようと、早速行動を始めた。

しかし、生憎だが私の家には必要な道具がない為に博麗神社にお世話になってる。

「あんた何を書いてるのよ。もう半年は作業してるじゃない」

霊葉が呆れながらも聞いて来た。

「ん、倫理結界を作ってる」

「はあ！？何てものを作ってるのよ」

まあ、驚くのも無理はない。

物理結界なんて可愛く見える程に倫理結界は難しい。

その中に新たな世界を構成して倫理を作り上げる事で使い方によっては完璧に遮断出来るそれは存在は知られていても誰も行う気がないからだ。

何故なら、そんなもの頻繁に作れないし、更には余程の事がない限り来世はなくなるから。広範囲において恒久的に世界を改変する事は明らかに危険な事で、無間地獄行きもあるとか。

と映姫さんから聞いた事がある。

つまりは限定的範囲で短時間ならば許される訳で、私の使う『五行封陣』は対象範囲にだけ魔法と霊術が合致するという倫理結界を用

いていたりする。

さて、そんな訳で私は三年程掛けて完成させた。

簡単に説明すると結界外の非常識を結界内の常識とするものだ。

ちなみに組み込む要素に関しては紫に智音さんや幽々子などと相談し、更には映姫さんに（私がとある条件を呑む事によって）許可を貰った。

これで準備はほとんど揃った。

そんな訳でこちら辺一带（私が知らない間に『幻想郷』と呼ばれていた）を取り囲む倫理結界を張る訳だが、当然ながら反対派もいる。まあ決定事項だし、一回張っちゃえば相当な実力がない限りは出る事も困難だ。

だいたい反対派は隔離する利点を分かっていない。

私は何よりも過去の過ちを繰り返したくない。

これから科学技術が発達するに当たって凶悪な科学兵器も開発され

るだろう。

私なら大丈夫だとして例え紫や幽香であろうと耐えられない。当時の妖怪と現在の妖怪は根本的に違うから。

人間は近代化に伴って殊更に人外を退けようとするだろうから隔離、つまり一般世界から存在を消さない限りはいずれ狙われる。

そこまで考えての事だ。

ちなみに大妖怪とその一派は一部を除いて賛成派だ。ちよっとオハナシしたけれど。

唯一、天狗の大將の天魔は酔い潰したが。

それで結界を張るのだが私には無理だ。

霊力が足りない。

そこで幻想郷随一の霊力とその制御力を持つ博麗に頼む、という紫の提案を採用した。

一応、制御は負けないと信じたいが。

しかし、当の博麗霊菜は乗り気ではなく、説得の為に様々な条件を出された。

その後の結界維持の供給源と結界の管理を博麗が一任する代わりに、結界の修復などは私と紫がする事、それから博麗神社に最低限の生活環境を整える事、その他いろいろ。

結界の修復などは作った私が適任だろうから文句はないが、生活環境とは足元すくわれたかと。

具体的には、上下水道の完備と夜の明かりの設置、それからある程度の冷暖房。

最低でもそれらが神社内に施される様に結界に組込めと言う。おかげで一年無駄にした。上下水道は組込めなかったから後になるが。

「博麗が維持するんだから名前は博麗大結界でいいわね」

「作ったのは私んだけど……、もういいよ。これ以上何かを要求されたくないし」

私は結界を起動させる。

霊菜が起動をしないのは結界維持の力のライン接続とその他諸々の力を残す為だ。

出来る限りの効率化をしたが、それでも霊菜の霊力を殆ど奪って行くだろうから私が起動する。

私であれば妖怪だから霊力が枯渇しようとも死ぬ事はないからだ。計算上、私の霊力でぎりぎり足りるはず。

結界の構成式を敷くのは博麗神社の地下。

博麗が管理するのだから当然なのだが、神社が龍脈（地中の気の流れの特に集中している主脈のようなもの）の上にあったのも大きな

理由の一つだ。

神社の地下深くまで何か杭状のもので貫かない限りは大丈夫だろう。

「霊菜、準備はいい？」

「いつでも大丈夫よ」

私は残りの霊力を全て使って、霊菜にラインが回る様にする。

「結構……来るわね……」

霊菜には安定するまで我慢して貰わなければいけない。境界とか操っての軽減も出来ない。いくら曖昧にしようとも絶対量を変えたら失敗するし、替わる先になるであろう私はもう無力だ。結界の定義を曖昧にしたら崩れてしまう。

「頑張れ☆」

「なんか妙にむかつくわ」

「御賽銭10円」

「精一杯頑張らせて貰うわ」

明治のこの時代、10円は大金だ。

しかし、私の手持ちはそんなにない。

「出来たわよ、10円寄越しなさい」

私は50賤渡した。

「設備費差し引いておいたから」

「ふざけんじゃないわよ！」

「霊菜、ここは山の上でしょ。水はどうやって工面すると思う？私が残りの少ない神力の一部を使って地下水脈を引っ張って来るの。それしか方法はないの。本来ならもっと貰いたいくらいなんだけど」

私は態度を大きくし主張させていただく。

ふざけてるのはあんただ。

「あんた神だったわけ？」

霊菜が呆気にとられた様な顔で聞いて来た。

「昔は。今は信仰はゼロだけど」

「残念ね」

嫌みっぽく言われた。

「一晩でその信仰してくれてた人たち全員が仏になったんだよ？霊菜にはこの気持ち分かる？答えなよ！！分かるの！？分からないなら彼らを嘲笑うな！！」

「……ごめんなさい」

「分かればよろしい」

その後、私は半年かけて設備を設置したのはもはや余談だろう。

結界が無事に張られ、次にする事は反対派を何とかする事だ。

紫や幽香は殺し回っているが、そんな事したくない。

私は血生臭い事は嫌だからだ。

幽香は殺しを愉しんでいて、会った時の表情が気持ち悪い程に爽やかな笑顔だったのは覚えている。

紫は基本的にスキマに落として何かものにゆもにゆしているらしい。出て来た妖怪たちの死んだ目を見ると……、紫のスキマには死んでも入りたくはない。

私の場合、基本は説得だ。

いつかは人間に勝てなくなってしまう事を、その危険性を分かるまで語った。

証拠を見せろと言われた時にはさすがに困ったが、白玉楼で座談会みたいなのを開き実際に都さんと紅蓮に語って貰ったりもした。けれど、どうしてもダメであった時は魂にまで恐怖感を刻み込んだ。忘れないようにしっかりとじっくりと……。

そうして結界を張ってから十余年、とりあえずは騒ぎが落ち着いた。

久しぶりに白玉楼へ行った時、妖忌がいなくなっていた。

そして、妖夢が代わりに幽々子を世話していた。

「妖夢、妖忌はどこに？」

「先代は……行方を眩ませました……」

「えっ？」

「いつの間にかいなくなっていたのよ？ 自覚が足りないのかしらね」

「ゆ、幽々子様、それはないかと……」

「そうかしら？ あ、妖夢、お茶入れて来てちょうだい」

「みょん……」

妖夢がとぼとぼと厨房へ向かって行った。

「妖夢には悪い事したわね……」

「さすがにちょっと厳しかったんじゃない？」

「そうかも知れないわ」

そう言った後、幽々子は少し声色を変え、声量を落として口を開いた。

「……実は妖忌は自分から出て行ったのよ」

「それって……？」

「自分がいては妖夢は成長出来ない。自分にも妖夢にも甘えが生じてしまう。だから自分と、何よりも妖夢の為に、と言い残して出て行ったわ。当然、私は止めたけれど、彼を引き留める事は叶わなかった……。もし、彼に会ったら伝えて欲しいのよ。私と妖夢は大丈夫、って」

しばらくして妖夢がお茶を持って来た時には私は白玉楼を発っていた。

冥界（白玉楼）へと続く階段を下っている最中に懐かしい気配を感じた。

「どこから？」

「楼からでございます。陽奈様は以前よりも可憐になられましたな」

「うん、ありがとう」

白玉楼の元庭師、魂魄妖忌がそこにいた。

「でも私は成長してないし……」

「御心配なさらずに、以前よりも色々と大きくなっておられますよ」

「本当に!?!」

「はい」

案外自分では気付かないものだね。さすがに数世紀で少しは成長したか。

「まあ、それで本題だけど……、妖忌は幽々子と妖夢の事を後悔してないの?」

「大丈夫です。幽々子様と妖夢を信じておりますから」

その目は強い意思の色で染められていた。

「陽奈様」

「ん?」

「幽々子お嬢様と妖夢をよろしくお願いします」

「りょーかい!」

私は背を向け、再び階段を下り始めた。

「そういえば妖忌、幽々子から伝言が……」

私が思い出して振り返ると妖忌の姿はなかった。

「存じております」

そう聞こえたのは幻聴だったのだろうか……。

雪は積もる

また幻想郷に冬が訪れた。

「にしても……」

「うん、降りすぎだよね……」

今、博麗神社にいるけれども昨日は粉雪だったものが、一晚経つと猛吹雪だった。

一寸先は白。

そんな言葉が浮かぶ程だった。

「霊菜、お茶ちょうだい」

「無理ね」

私は洩々台所に向かい、蛇口を捻る。

私の行った工事によって神社には上下水道が完備されているので、里のように水をひいたり汲んでくる必要はない。

そろそろ溜まったかと思って見てみると水が出ていなかった。

仕方なく、魔法で水を作ってから温めてお湯を作った。

「はい、お茶よ」

「私が用意したんだけどね」

それでもお茶を注いでくれるだけ、まだ良識はあるのだろう。

「ところで水が出なかったけど」

「水源が凍っちゃったのかしら？」

それはないだろう。

地下水は地熱と地下にあるという関係上、あまり温度が変わらないはずだ。

「ないとは思うんだけどね……」

「いや、霊菜は正解よ」

ぬっと紫と……恐らく式の藍であろう人物が出て来た。

「何よ、何しに来た訳？」

「暖を取りに来たわ」

「家に帰きなさいよ」

「それが……無理なんです」

藍（仮）が残念そうに呟いた。

「何で？」

「ああ、はい。……申し遅れました。紫様の式をしている八雲藍と申します。それで何故かと言いますと寒すぎるんです」

「神社内は温かいから分からなかったでしょうけど」

紫は私から湯呑みを引ったくり、中身を縁側から外に捨てた。

「紫、何するのさ」

「二人とも、見なさい」

お茶が投げられた先にはやや緑がかった氷が一つ。

「信じたかしら」

私たちは何も言えなかった。

「見ての通りよ。人里はハクタクが原理は知らないけれど歴史を一時的に書き換えるとかで難を逃れてるけれど時間の問題よ」

「そして、お気づきかと思いますが人為的なものです」

藍が補足する。

確かにこれだけの豪雪、自然災害な訳がない。けれどこんな事が出来る人も妖怪も思い浮かばない。

毎年、冬になると顔を出す奴は心当たりがあるけど自然を振曲げる様な事はしないだろう。

「じゃあ、そいつをぶった倒せばいいのね」

霊葉が縁側に向かうが、それを紫が制止する。

「この雪の中、外に出たらあつという間に雪だるまよ」

「うっ……。陽奈、あんた長生きしてんでしょ？ 天気くらいどうにかしなさいよ」

そんな無茶な……。

「さすがに私でも天気は操れ……。るね……」

昔、神様やってた時に取り込んだ恐怖に『天候』があつたよ……。

「晴れにしてみるけど無理かもよ」

「何でよ」

「餅は餅屋、所詮私の場合は副産物みたいなものだから本当に天候を操れる妖怪とかいたら負けるかも知れないって事」

「いいからしなさいよ」

私はゆっくりと青空に変えてゆく。

「晴れたわよ。じゃあ行って来るわ」

「待ちなさい」

またしても制止する。

「文句ある訳？」

「あるわよ。見なさい」

日光が反射してキラキラと……、ってダイヤモンドダスト！？
そんな馬鹿な……。

「陽奈は天気は操れたけど気温は低いままよ。このままじゃ出た途
端に氷像に早変わりよ」

「じゃあどうするのよ」

「陽奈が行けばいいのよ。貴女は芸術に早変わりするし、藍には任
せられない大異変だし、私は眠たいから、陽奈が適任よ」

「ちょっと待って、紫の理由が不純過ぎる」

「じゃあしょうがないわね」

「無視された！？」

「すみません、流してください」

藍に労りの視線を向けられた!？
なんかショックだ……。

「落ち込んでいるところ悪いけれども行っちゃい♪」

ふと感じる浮遊感。

下を見るとスキマ。

「ちくしょー、紫、覚えてろー!」

「忘れておくわ」

私は捨て台詞とともにスキマに自由落下した。

ボスン、という擬音とともに私は雪煙をあげて背中から雪に落ちた。

スキマを抜けると、そこは雪国だった。

いや、雪しかなかった。

「あら、誰かと思えば……」

「あ、レティ」

彼女はレティ、レティ・ホワイトロック。白い髪に白い肌、白い帽

子を被り、その青い目で雪に埋まった私を見ている。青と白の服はこの季節には似つかわしいの一言。

毎年冬になると出て来る妖怪で『寒気を操る程度の能力』を持っているが自然に流されるままがいいらしい。

また、妖怪らしく残忍な面もあるが基本的には人がいい。だが、

「誰だったかしら？」

もの忘れが激しい。

冬の短い間にしか外に出ず、夏は特に無力な為に春から秋は日の当たらない所にこもっているという。だから、あんまり覚えていないとか。

「まあ、いいわ。貴女妖怪でしょう？ ちょっと付き合ってくれない？ 今、力が漲ってるから少し暴れたいのよ」

理不尽な。

大きな大きな氷の塊が私に飛んで来る。その大きさは賽銭箱4個分くらいかな？

「何これ無理ゲーでしょ」

それが数百個。

それが不規則に飛んで来る訳で洒落にならない。

私はどうしようもないので避けようと考えてるが止める。全方位に視

界いっぱいの水塊。

水には火だが、この気温で火が起こるのかすら怪しい。いや、起きるけれども火力が上げられないだろう。

それならどうするか。

逃げればいい。

スキマの中に。

再びスキマから出て、見ると私のいた場所が氷山になっていた。

レティ……、それ普通は致命傷になるから。

絶対覚えてるでしょ。

「いつの間に出て来たの？」

後ろを向くと（水の）鈍器を振りかぶったレティが……、

「さようなら……」

突然過ぎて避けられなかったが、来るはずの衝撃がなかった。

「思い出したわ。貴女、陽奈ね」

腕を振り切った状態でレティが固まっていた。しかし、その手に凶器はない。

「やつと思い出してくれた？」

「そうね、氷が割れなきゃ忘れたままだったわ」

以前会った時に同様に殴られた事があったが、運よく氷（鈍器）が赤いリボンに当たり、妖力を使って固めていた為に粉々になった事があった。

大妖怪に成り立てくらいのレベルであれば触れた部分が消し飛ぶ代物だ。一介の妖怪が妖力をかき集めた物なんて一瞬で霧散する。

あの時のレティは、戦う気が削がれた、とか言っって、それで終わったのだけだ。

「思い出してくれたならさ、ついでにこの大雪に原因知ってたら教えてくれない？」

「ついでじゃないと思うけど……。そうね……。私は犯人じゃないわよ。ただ、私に近い存在が犯人なのは何となく分かるわ。ただ寒い方向に向かえばいいんじゃないかしら」

「ありがと。ほんのお礼だけだ」

私はレティに“寒気に対する恐怖”を与える。レティを構成しているものだから純粋にレティの力になるはずだ。

「貴女……、こんな事出来たのね」

「まあね」

別れを告げてから風上（寒い方向）に進んだ。

しばらくふよふよ飛んでいると日傘をさした赤い服の影と白づくめの影が目映った。

「貴女が犯人なんでしょう？」

「そうだよ」

「お花たちが死んじゃうから止めてくれないかしら？」

「ボクに勝てたらね」

白い方はよく見ると、この寒さなのに純白のワンピースを着ていた。

それにしても彼女は幽香に喧嘩を売ってしまった。

「あら、随分自信があるのね」

幽香から殺気と妖気が噴き出す。

「君には負けないよ？ボクも伊達に生きてないもん」

「うるさい餓鬼ね……。止めないなら、とっとと消えなさい！！」

幽香が少女に傘を叩き込む。

「餓鬼って言った？じゃあ君はおばさんかな？」

その強烈な一撃を、ふわっと跳ねて避けた。

「おばさん？誰に対して言ったのかしら？」

「君だよ。そんなに短気だと老けるよ？」

「シニナサイ……」

幽香の手に魔力が集まりスパークし始める。

「消し飛べ！！クソヤロウ」

「嫌だよ」

幽香が放ったそれは少女に届く前に氷の塊となって重力に従ってそのまま碎けた。

「君はボクには勝てないよ」

「そうね……」

幽香が虚しそうに口にする。

「私はどうせ貴女に勝てない。私の一撃を防がれて、もう生きてゆく価値なんてあるのかしら……」

……幽香がこんなにも沈んでゆくなんて。

私が打ち破った時には、強者との出会いから嬉々としていた幽香がたったこれだけの事で落ち込むだろうか。

「幽香!! しっかりして」

私は幽香の元へ行き、肩を揺さ振った。

「ダメよ、陽奈。私なんてどうせ貴女にも勝てない雑魚なのよ。せめて桜の花みたいに優雅に散ってしまいたいわ……」

「幽香は強いよ。何で強い相手に出会ったのに喜ばないの? 幽香らしくないよ」

「何故だか分からないけど……、凄く気分が落ち込んで勝てる気がしなくなって……」

「いいよ、幽香。私があいつを倒すから、その私と今度戦おう。私に勝てればあいつよりは強い事になるんじゃない?」

「そう……ね……」

ふっ、と幽香の目が閉じて、気絶してしまった。

「幽香に何をしたの?」

「あはは、子供がいたの？」

「話を聞け、ヒヨッコ」

「むう、それはいただけじゃないな。子供にヒヨッコとか言われたくないよ」

「言われたくなきゃ幽香に何をしたか教えてよ」

「しょうがないな。ボクは『あらゆるものを冷やす程度の能力』を持ってるんだよ。水とか空気とかだけじゃなくて概念とか感覚も冷やせるの。その延長で凍らせる事も出来るんだ。それで心を凍らせちゃった訳。分かった？」

「はい、質問」

「どーぞ!!」

「氷とか操ってなかった？」

能力と関係しないじゃないか。

「出来るに決まってるじゃん。ボク、雪女だよ？ 種族として当然の能力だよ」

なん……だと……。

驚愕と同時に私の雪女のイメージも音をたてて崩れた気がする。

白銀のロングヘアーに白い瞳、アルビノではないだろう雪の様に白い肌と半袖のワンピース。雪女だから大丈夫なんだろうけど……、寒々しい格好だ。

それはとにかく、彼女は種族の能力と個人の能力を持っている訳か。

「それで君は？」

「白嶺陽奈、一人一種族の妖怪。幽香とは友達……かな？」

「そーいうの聞いた訳じゃないんだけど……、まあ、後で聞くよ。
名乗られたからには名乗らなきゃね。ボクの名前は六花^{りっか}、錦六花だよ」

「じゃあ、六花。今すぐこの大雪を止めて」

「何で？楽しいじゃん」

本気で首を傾げている。

「六花は子供じゃないんでしょ？生まれてから何年も生きてて思慮分別がまだつかないの？」

「うゝ……」

「見た目は私の方が子供なのに……」

私は嘆息する。

「うあああああ！もういいよ！！戻せばいいんでしょ！！」

「分かればよろしい」

急に温かくなってきた。とはいっても比べるとだが。徐々にだが温

かくなって来たので紫に丸投げするでしょう。

「そういえば少し偉そうな事言ってたけど何様なの？ 年上は敬えって言うじゃん」

雪を雲にして、さらには私が気温を上げるために火の球を空に浮かばせておく事を紫に命じられて、六花を道連れにしている。

「じゃあ私を敬ってよ」

「なんでボクが君に敬うの？ ボクはこう見えても還暦を還暦の回数に迎えてるんだよ」

「私が小妖怪か中妖怪だとしたら幽香に消されてるよ」

ちなみに幽香を家まで運んだが、幽香の家と花たちは幸運にも無事だった。

「本気出すとどれくらい？」

「魔界の神が戦意を失うくらいかな」

「ボクにはよく分からないんだけど……」

「鬼より強いって言ったら？」

「なにそれ！？君、そんなに強いのか？」

六花が目を丸くした。

「でも、年上な証拠はないからね。ボクだって馬鹿じゃないんだから」

チツ、上手く話を逸らそうと思ったのに……。

「じゃあいいよ。私、何歳に見える？」

人間換算で、と付け加える。

「8歳に」

「せめて十代には見えて欲しかったよ……」

私は自分の二つの小さな丘を見て溜息をついていた。

「だって……、君は子供っぽいし……」

「こども……」

「そんな雪原の様な胸、哀しいだけだし」

私の心に氷の槍が……っ。

「しかも小さいから喚いても怖くないし」

私の心に氷の刃が……っ。

「言動が見た目に反して大人っぽいけど背伸びしているように見えるし」

私の心に氷の（略）。

「それにさ……」

止めて！私の心の体力はもうゼロよ！！
ライフ

「それで！……私は妖怪だから見た目と年はあまり関係ないよ」

「そうやって話を聞かない様にするのも子供っぽいしさ。ボクの方が妖気もあるじゃん」

「今なんて？」

「ボクの方が力があるじゃん。口ばかりだけど、それなりに力を示されないと信じられないよ」

論より証拠、かな。

「一つ、忠告するよ。精神が弱いと死ぬからね」

私は封印を少し弱めて、出来る限り妖気を解放した。

「目の色が朱くなったけど、まだボクの方が上じゃん。やっぱり口だけか」

そうかい、そんなに怖いもの知らずか。とは思うものの、これでも紫や幽香と近いんだけど……。

「赤いリボン着けてるでしょ？これは封印してるの。昔、私の力に危険を感じて封印を促されたから」

私は赤いリボンを解いて、少し本気を出す。

視界に映る黒髪が朱く変わった。

「えっ……？何？身体が……」

「動かない、でしょ？」

更に圧を上げると六花は遂には足も立たなくなって、座り込んでしまった。

「何で？ボクの足が動かない……。こ、来ないで……」

鳴咽までし始めたので、妖気を引っ込める。

「分かった？」

「うん……。ねえ、その君に封印を促した人物って……誰？」

「清明……で分かる？」

「あの平安の！？」

「そう、それ」

「まさか清明の後継人候補の封獣使いとか誰だか知っていたり!？」

「たぶん……、それ私の事だね」

六花が足を止めたらしく見てみるとorzの形になっていた。

「ははは……、ボクはそんなのに喧嘩を売ったのか……」

軽く自嘲的になっているようだ。

「ところで封印ってどれくらい強いのか？」

「あまり勧めないけど……、着けてみる？」

私はリボンの封印を一番弱い状態まで下げてから渡した。

「うわっ……、これじゃあ人間より力が出ないよ」

「その状態で一番弱いんだけどね」

六花がそれを触れても大丈夫な事にびっくりだけど。

それだけ彼女は強いのだろう。

六花からリボンを返して貰い、改めて結い直した。

「なんか君に挑もうとしたけど止めるよ。人里でのんびり暮らすさ」

「まあ、その前に幻想郷のみんなに謝ろうね。私が仲介役を受け持つから」

そのあとに、各地を回って謝罪をして、雪が消えた後に智音さんに里を戻して貰ったりと事後処理をしたが、智音さんのハクタクパワーと私と紫が境界を操ったり、六花の家を人里に建てる話をしたり、その間の六花の居候先を決めたり……。

そうして完全に騒動が治まったのは、ふきのとうが芽吹き始めた頃だった。

雪は積もる（後書き）

レティって雪女の一種らしいですね。

でもおっとりしている感じがしたので活発なキャラを勝手ながら追加させていただきました。

さて、先日（2010.11末頃）確認した所、この小説（駄文？）が総合評価1,000ptに達していましたので、少しばかり変わった形で次回を作っております。挿入話というか閑話ですが。書き溜めはありますがそちらを優先するために時間がかかるかも知れません。

しかし、アレです。

まあ、詳しくは活動報告を出します。

製作秘話（前書き）

今回はキャラクターの製作秘話です。

物語ではありません。

別に見なくてもいいという方は次回までお待ちください。

違った形で書くと宣言しましたが、これは物語ではないので除外してください。

製作秘話

・白嶺陽奈
しらみね ひな

この小説の主人公です。始めから陽奈という名前が着いていました。

名前に關しては皮肉や意味がしつかりと付けられております。

『恐怖』という暗いイメージを持つ者であるのに名前と性格は太陽な、敢えて逆方向をとる形にしました。

また『陽』という漢字は男性を指しますが陽奈は女性です。奈、には反語の意味が含まれていて、「男であろうか、いや男ではない」という意味ともとれます。

また、陽奈は妖怪の祖、つまり原初ともいうべきでしょうか。そのために陰（性別）と陽（名前）を組み合わせた、いうのもあります。

『白嶺』という名字ですが『はくれい』の当て字でもあります。ハクレイ酒造様に同名の商品があります。ちなみに米酒。

また、『ヒナ』という音はかわいらしいという意味と幼いという意味を持つ『雛』と掛けてあります。

髪の毛や目の色が変わるのは、何か目に見える変化が欲しいと思った時にドラ○ンボー○を見まして……、色は名前に合わせました。

本当は陽奈を、ちゃん付けで呼ばせたいんですよ。でもそんなキヤラがなかなかいませんから……。

能力ですけど、最初は何でも出来る形にしようかと思いました。

『あらゆるものを創造する』だとか。

それだと近代兵器作って一方的虐殺なども可能ですから、それはそれで楽しいかとは思いますが、蹂躪と毒殺で、はいおしまい、では面白くありません。

ではどうしたか。

そこで経験値です。物事経験なしに成功するのは困難です。だから面白いんです。ただ何でもありの最強にしてしまうと紆余曲折が少し減ってしまうかと思いました。そこで最初から何でもする事が出来ない、つまり工夫が必要であったり困難を乗り越えないといけないようにしました。

ですから陽奈は最強というよりはチートです。何でも出来るようになる可能性はあるけれど全ては陽奈次第です。

ちなみに陽奈が子供っぽくなるポイントは決まっていますが、それはまた別の機会に。

・紅蓮^{ぐれん}

若干天然の入った鬼を作りたかったんです。特に名前には意味がないです。

実は結構重いキャラであるのに設定は特に長くないんです。

ちなみに鬼としての身体能力は歴代最強だけど頭が歴代最弱なので。

まあ、その程度です。

・都 みやこ

紅蓮とは対称的に理知的にしました。あと陽奈の保護者みたいな存在を、と思いましたが……、何で殺してしまったのか……。

まあ、冥界にいますが。（やっぱり死んでますね）

彼女の能力はある意味チートです。武器（兵器）限定で霖之助の上位互換です。名前と使い方と技術が付与されます。

少し勇儀と被るんですよ、キャラが。口調を姐さん風にしたら勇儀ですからね、ぶっちゃけますと。

・錦六花 にしきりっか

急遽作られた幻想郷で最初の異変の犯人です。

雪女を出したかったのと、時間稼ぎです。

こちらは名前について考えてあります。

『六花』という言葉は雪を意味します。私は更に雪にはかわいらしいイメージを持っています。

また、自然の厳しさを形にしたものでもあります。雪崩や吹雪で遭難、屋根から落ちて来た雪で圧死、凍結した雪で滑って転んで、という事故も毎年あるんです。

時に残酷な面も妖怪にはぴったりののでは、と思って雪の異名を用いました。

『錦』は特に意味はありません。

しかし、由来はあります。雪女の伝承が新潟県の現在の小千谷市にあります。そこで小千谷市のものを用いる事にしました。

小千谷市には新潟銘醸株式会社様の本社があります。そちらの商品に『越の寒中梅 山田錦』がごございます。山田錦は米の品種ですがお酒の名前にも使われているので、まあ、いいか、という感じで拝借致しました。

余談ですが、新潟といえバ米ですが、やはり新潟出身ですので旅行先などのご飯は少し劣って感じてしまうんですよ。

・白嶺界人
しらみね かいと

陽奈の旦那です。

『白嶺』は前述通りです。

『界人』には世界（陽奈）と契りを結ぶ人、という意味合いを込めました。

再登場の現時点ではありません。

彼の両親は幼い界人がいるのにも関わらず二人で妖怪退治に行ったり、という設定があったはずなんですが……、スキマの奥底に吹き飛んだようです。

・白嶺^{しらみね ちか}知佳

陽奈と界人の愛の結晶（笑）。

半人半妖ですのでステータスがおかしい事になっていますが、界人という熟練の霊術使いと陽奈というチートな原初の妖怪との子供ですので、そこの妖怪よりは遥かに強いです。

また、知佳の時に博麗の妖怪には容赦ない性格が表れ始めます。

ですが、無惨にもルーミアによって心を闇に吞まれてしまいました。

かみしらさわ ともね
・上白沢智音

ハクタクです。慧音同様のポジションにいます。

名字は慧音同様にワーハクタクをもじっていますが、彼女は純粋なハクタクです。

名前には知恵を意味する『智』を用い、残りは慧音に合わせました。

言わずもがな、慧音の親族にあたります。これは気付いていたかと思います。

彼女が半分ハクタクであるならば……、これ以上は書けません。

しんぶんのつくりかた

どうも、清く正しい射命丸しゃめいまるです。

今日は天魔様に命を受け、新聞という情報誌を作る事になりました。記念となる初めに取り上げるのは、この幻想郷で噂になっている白嶺陽奈という妖怪を取り上げたいと思います。

早速里へ赴き話を聞いてみましょう。

「なんだ、妖怪か……。団子食うか？」

里に降りたらお腹が空きまして……、

「すみません、今回は仕事で参りましたので」

営業スマイルという奴です。仮にも取材相手ですから不快な思いはさせてはいけません。

「そうかい。なんか手伝えるかい？」

「とある人物についてお話を伺いたいです」

「誰だい？」

「白嶺陽奈です」

「ハハハ、そうかい。陽奈ちゃんの話なら幾らでも聞かせてやるぜ」

「よろしくお願いします」

「じゃあ団子食ってけ。お嬢ちゃん別嬪さんだからタダにしてやるよ」

私は有り難くいただきます。

機嫌が悪いと丁寧に応えて貰えないかも知れません。

「では彼女の事について、そうですね……人柄などを教えて貰えませんか？」

御主人は凄く楽しそうに語ってくれました。

途中から周りの方々も話をしてくださいました。

里の皆さんは彼女に対して好印象の様です。

子供っぽいのに頭が良くて、加護欲にもかられるらしいです。

「皆さん有難うございました」

次は彼女の友人がいるという寺子屋へ向かいましょう。

ゴスン

あやや、寺子屋の外まで響く鈍い音が聞こえました。喧嘩でも起きたのでしょうか。

早速見てみましょう。

「妖怪がなんのようだ？」

私が入って来るのが分かっていたのかの様に戸が開けました。

「私は射命丸文しゃめいまる あやと申します。何も敵意などはありません。白嶺陽奈についてお話を聞きたいんです」

「そうか。悪意はないようだな。まだ授業中だからよかったらどうだ？陽奈も教鞭を振るいに来るんだぞ」

お、思わぬ収穫です。

彼女が親しまれている理由にはこんな事にも関係があつた訳ですか。

「お言葉に甘えて参観させていただきます」

「まあ、その年で受ける気もしないよな。邪魔はするなよ」

授業が終わると子供に囲まれてしまいました。

あやや、困りましたね……。

「さて、陽奈の話だったか？」

「はい。この度情報誌……新聞というのですが、それを発行するに当たって取材をしたと思いました」

「新聞か、幻想郷にもあった方がいいな。陽奈についてか……」

ここでの収穫は、子供に好かれている事、教育が上手な事、彼女は博麗神社によく行く事、そして何よりも、彼女は普通の妖怪ではない事、でした。

これは大きな収穫です。

これは彼女の秘密を暴きたくなって来ました。

さて、次は博麗神社に向かいましょう。

「ここは……どこでしょうか？」

たしか私は神社に向かい、何かに当たって意識を失った……？

「起きてたのね。大丈夫よ、怪我はなかったわ」

博麗の巫女ですね……。ではここは博麗神社ですね。偶然ですが目的は果たせそうです。

「ごめんなさい、陰陽玉で訓練していたら当たってしまったようで」

「いえ、構いません」

あくまでも怒ってはいけません。……まあ彼女も謝っていますから許しますけど。

「それで何しに来たのよ、二人とも」

「あらら、ばれちゃったわね」

あやややや!?! どうして妖怪の賢者と呼ばれる八雲紫がここに!?!

これでは私もいつ取って食われるかわかりません。

「では私はこれで……」

「待ちなさい。何か用事があるんでしょう?」

さすが、八雲ですね……。

「実は新聞を創刊するにあたって白嶺陽奈について調べて来いと言われまして……」

「新聞って何よ?」

博麗には分からないですか……。

「個人に配る『かわらばん』の事よ」

「面白いのかしらね……」

「面白くするんでしょう？」

まさにその通りですね。

「陽奈の事だったわね。別にいいわよ」

「私も構わないわ。陽奈の恥ずかしい過去まで教えてあげるわ」

「八雲……、貴女も悪ですね」

「よく言われるわ」

ここでの収穫はとんでもない事でした。

彼女の末裔が……、とこれは他言してはいけませんでした。博麗大結界を作ったのも彼女でした。神社の周りの森で目撃されるルーミアを封印したのも、博麗の秘宝である陰陽玉を作ったのも彼女でした。

そして、何よりも出産経験には驚きました。これはスクープです！！

話によるとルーミアという例の妖怪が最も長い付き合いらしいです。次は森を散策した後に、八雲に進められた白玉楼へと行く事にしましょう。

「わはー」

果たして彼女なんでしょうか……、生まれたばかりの様にも感じる弱さです。

「あの、すみません、貴女はルーミアという方でしょうか？」

「そーなのだー」

「陽奈さんの事について……」

「そーなのかー」

「あの……、聞いてますか？」

「そーなのかー？」

話を聞いてくれません……。

「たしか……、しゃめーまるかー？」

「はい、そうですけど……、なぜ？」

そこでルーミアが一つ溜息をつきました。噂に聞いていた性格には合わない表情をしました。

「私が知らない訳ないでしょう？ 射命丸文さん。私は闇を操るから闇があればいいの。ところで陽奈の事だったかしら？」

「えっと……、二重人格か何かですか？」

「違う違う。さっきまでの芝居だから」

ルーミア、恐ろしい子……っ！！

「私は陽奈に封印されて本来の力を発揮出来ない。だから、子供っぽく弱そうに振る舞えば……、って訳」

何でしょうか……、見た目はたしかに幼いですがそれでいて醸し出される妖艶さが自然過ぎます。

「他にはありますか？」

「物凄く強かった。たぶん、八雲くらいじゃ天地がひっくり返っても勝てない。だって八雲と私は同じくらいの実力だから」

「恨んだり……」

「しているけど、私が悪いもの。陽奈の事、どこまで聞いた？ 貴女が博麗神社に行ったのは見たけど。子供の事は？」

「聞きました。早くして亡くなったとか」

「陽奈の愛娘を私が殺したものだ。その様子だと博麗の事も聞いたんでしょう?」

「はい」

これは……、あまりにも大きな収穫ですが書いてはいけない事に分類されますね……。

「じゃあ、もう私から話す事はないから」

「ありがとうございます」

「しゃめーまるー、またねー」

程なくして白玉楼に着きましたが庭師に分かりました。

「何の用だ、妖怪!」

「ここで白嶺陽奈の話の聞けると聞きましたから赴きました」

「陽奈様の……?」

「よぉ〜むぅ〜、お客さんが来ているはずよ〜」

やけに間の延びた声が奥から聞こえて来ました。

「くせ者ならいらっしゃいます！」

「じゃあくせ者でもいいわよ」

「幽々子様!？」

「では、おじゃましますね」

「みょん……」

白玉楼の主である西行寺幽々子さんは八雲から話を聞いていたそうです。

「ごめんなさい、妖夢ったら誰彼構わず切り捨てようとするのよ」

「しませんよ!？」

「では、早速……」

「私から話す事はないわ」

私は耳を疑った。

「彼女の事なら最も良き理解者がいるから紹介するわよ」

「お願いします」

「と、言うわけだから妖夢」

「はい」

「切り捨てなさい」

「はい」

そのまま妖夢さんが刀を抜いて振りました。

もちろん、私は避けます。

「ちょっと待ってくださいよ！何でそんなに躊躇わないんですか！？」

「幽々子様の命だからです」

「しょうがないじゃない、彼岸の閻魔の所に行くなら死んだ方が早いわよ」

「勘弁してください！だいたい幻想郷の彼岸は生身でも行けますから！」

私は飛び逃げました。あんな所、命がいくつあっても足りません。

「ねえ妖夢、烏って美味しいかしら？」

「普通は好んでは食べませんよ」

聞かなかった事にしましょう。

「……だいたい貴女は長く生きているのに……」

彼岸に無事に着いたら閻魔に説教されてしまいました。

「まあ閻魔ちゃん、これくらいにしてあげてーや。わざわざ説教されたい奴なんておらんからな？」

閻魔のお姉さんなのでしょうか、少し大人びた女性が助けてくれました。

「……、射命丸文さん、ここは本来は生者は来るべきではありませんせんからね」

「はい」

「それで何の用なん？」

「実は白嶺陽奈の事について新聞の記事を書こうと思ひまして。そもそも新聞の用途は分かっていますが創刊ですから話題を提供すべきかと思ひましたので」

「陽奈さんの事やな。あの娘はな、あんさんよりも年上やで。知ら

んかったろ？」

「あんなに小さいのに……ですか？」

「私らより年上なんやからな」

「うむ」

隣にいた鬼も肯定しました。

「失礼ですが、お歳は……」

「死んでからは数えてへん」

「同じく」

死人に口なし、だなんて嘘だったんですね。

「せやな、死んでから一億は経ったんやないか？」

「もっと経っている」

一億以上ですか。

「って……、えっ……？」

何だか軽くとんでも発言しましたよね。

「一億以上生きてて何故あんなにも力が小さいんですか？何度か会った事があるんですが怖さこそ感じたものの力はあまりありません」

でしたよ？」

当時書いた手帖は失くなりましたが。

「その時は髪留め着けとらんかった？」

「はい、赤と紫の二つの布で髪を結っていました」

「陽奈さんは赤い方で思い切り自分を封印しとる」

また変な事をしてますね……。

「嘗めたらあかん。ルーミアっちゅう奴知っとるか？」

「はい。彼女が封印を施したので大妖怪から小妖怪程度になったと」

「陽奈さんも同じ封印やで。ただし、ルーミアっちゅう奴より何十倍も強い封印や。まあ、陽奈さん封印の強さを逐次変えとるらしいけどな、最低がそれくらいや。本人は気付いとらんけどな」

「軽く見積もってもルーミアさんの十倍ですか」

「そやな。まあ、閻魔ちゃんが教えてくれた事なんやけど……」

閻魔が……ですか。

「もう一つ、陽奈は俺より強い」

鬼の方が口を開きました。

「あの貴方は……」

「俺の名前は紅蓮という」

「では紅蓮さん、貴方の实力は……？」

「知らん」

「私が知つとるで。幻想郷の鬼が束になっても勝てへんくらいや」
彼はどれだけ強いんですか!?

「他には……」

「まだあるけどな、仕事とかいろいろな事情があつてな、言えん事もいっぱいあるんやけど……」

「お願いします」

しかし、これ以上に得られたもので有益なものは彼女の家の場所くらいでした。

特に向かう場所もないので、伺う事にしましょう。

途中、人里に立ち寄りました。

お腹が空いただけです。

半日あまりも飲まず食わずでしたから、少しくらい食べちゃいましょう。

定食屋を探している途中、白のワンピースを着た女の子が重そうに大量の野菜を運んでいました。

「手伝いましょうか？」

「あ、助かるよ。半分だけ持って欲しいんだけど」

「半分だけでいいんですか？私は妖怪ですから案外力はありますよ」

「ふーん、ボクも妖怪なんだけど」

「そ、そうですか……」

私は荷物を半分程受け取りました。

「な、なかなか重いですね……」

「そうかな？だいたい君って烏天狗の射命丸って名前じゃなかった？ボクの事、覚えてないの？」

……………。

思い出しました。

彼女が山に来て、謝罪をした時に案内役を私が天魔様から頼まれた
んでした。

「貴女も……白嶺陽奈について何か知っていたら教えてくれませんか？」

「ボクから話せる事はないよ。ただ、あのおばさんよりは強いって
事かな？」

「あのおばさんとは？」

「うーん、幽香、って呼ばれてたね」

幽香とは、あの幽香ですか。

程なくして、彼女もとい六花さんの家に着きました。

「ありがと、きゅうり一本あげるよ」

「あ、ありがとうございます」

河童にあげておきましょう。

「ところでこの野菜は何に使うんですか？」

「まあ、見てれば分かるよ」

彼女が大きな蔵のような建物に案内してくれました。

「これを入れて……」

大量の野菜を全てそこへ押し込みました。

「えい!!」

一気に寒くなりました。何があったのでしょうか。

「こうやって野菜を凍らせれば春夏秋冬いつでも新鮮なのが食べれるんじゃない？」

「凍っているんですか？」

まるで氷室ではありませんか。

「凍ったきゅうりで釘が打てるよ。やってみる？」

「しません」

なんだかんだで腹ごなしも済ませ、彼女の家へ向かいますが、用事を頼まれて立ち寄るべき場所が出来ました。

「綺麗な向日葵です」

「それは嬉しいわ。それで烏天狗が何の用かしら？」

嗜虐趣味を持つと噂の風見幽香がいました。

「聞きたい事と伝言です」

「何を聞きたいのかしら？」

「白嶺陽奈の事です」

「陽奈の？」

「はい」

「いいわよ。彼女は花も好きなの……そう私と気があったのよ。それで戦ってみたのよ。だけど彼女には敵わなかったわ。案外涼しい顔をして私と互角に戦ってくれたわ。戦い方が、そう、私のような争い事が少し好きな相手を楽しませる戦い方を知っていたわ」

彼女が若干ながら顔を上気させ始めました。なんでしょうか、見た目は普通の女性なのですが、戦いを語る時にくねくねしないで欲しいです。

「それだけね。陽奈に伝えて欲しいのよ、また戦いましょう、って」

「はあ、分かりました」

果たしてその返事を受けるのでしょうか。

「で、伝言って何かしら？」

「おばさん、ごめんね。と雪女の六花さんからです」

「次会ったら消す、と伝えてくれないかしら」

「は、はい……」

もの凄い表情でしたね……。阿修羅が見えました。

さてはて、魔法の森にたどり着き上空から彼女の家を探していますが見つかりません。

何だか森が歪んできたように見えます。

ふらふら……しますね……。

「知らない天井です……」

いつの間にか意識が落ちていたようです。

私は布団に寝かされていました。

服も脱がされ、代わりに寝巻を着ていました。

「ここはどこなんでしょうか……」

私はとりあえず部屋から出ようとする、部屋の戸が開きました。

「あ、起きた？」

そこには白嶺陽奈、本人がいました。

彼女の話によると、魔法の森の植物の花粉やらでやられたと思われる私を偶然見つけ、家で介抱してくれたとか。

服に関しては、幻覚作用のある成分が含まれた花粉が付いていたので、その処理をしてくれたらしく、すぐに返してくれました。

「何で魔法の森の上空なんて飛んでたの？」

「貴女に用事があったからです」

「私に？」

「新聞の取材をしたいと思ひまして」

「私、何か犯罪とかしたっけ？」

「異変を解決しましたね」

「それで取材を？」

「まあ、はい。そういうことにしておきましょう」

もう面倒ですね。

「えっと……、今まで聞いてきたもので信じられないのばかり聞いたんですけど……」

「えっと……、例えば？」

私は今まで聞いた内容で特に信憑性のないものを聞いてみました。

「一番聞きたいのは……、年齢です。失礼なのは分かっています」

「ああ、それは疑うよね。私は真正銘、年齢はババアだよ。紫とか幽香とかも私から見ればまだまだ赤ん坊みたいなものだよ」

「八雲とは大違いですね……」

「紫にババアっていうと、ね」

彼女がおもむろに髪を解き始めました。

「紫に対する不満を聞いてあげるよ。言ったらいくらかスツキリするでしょ」

「八雲が見てたり聞いていたりするかも知れませんが、仮にあつ

とも言えませんよ」

「ああ、大丈夫。紫が干渉出来ないように境界をいじっておいたから」

今何と？

「境界を……いじる、ですか？」

「そうだけど」

「それはスキマ妖怪である八雲の特権のほうでは……」

八雲以外には出来る訳ありません。

その妖怪の力を操る事は、その妖怪を操るにほぼ同義です。

「紫に出来るなら私も出来る……逆かな？まあ、私もスキマは開けるし、境界も操れるよ」

「意味が分かりませんよ」

「私は『恐怖を操る程度の能力』を持っている。そして妖怪、特に紫や私のような一人一種族の妖怪の存在の根源は“恐怖”って言えば分かるかな？」

私は分かってしまいました。

彼女は『他の妖怪の力を使える』ということ。

「一介の妖怪には大きすぎる力ではありませんか？」

下手をすると妖怪を消滅させるのも容易な力です。

「ああ、そうだね。私は普通じゃないらしいから」

自分の事を異常というのも何か痛々しいような気がします。まるで

「口だけの妖怪退治屋のようです、か。確かにそうかも知れないね」

心を読まれた!？

「私は覚妖怪おんいにも会った事があるから。……私は普通の妖怪じゃないって事からだっけ」

「はい」

「私は一番最初の妖怪なんだよ」

たぶんね、と彼女が付け加えました。

「証拠ならあるよ。ハクタクが頑張っても私の歴史を見る事が限界だって事」

それが本当だとしたら……。。

「でも私は相手が望まない限り極力戦わないんだよ。だから安心していいと思う」

「他には何かありますか?」

「文が倒れたのは私のせいなんだよ。ごめん」

「な、なんですか！？唐突に」

魔法の森の仕業じゃないんでしょうか。

「魔法の森が出来たのは私のせいだから」

「もう……どれだけ規格外でも驚きませんよ……」

もう溜息しか出ません。

「出来ない事はないんですか？」

「いっぱいあるよ。例えば……、文の能力は使えないよ。烏天狗という種族としての能力じゃないから。私は災害レベルの暴風は起こせるけど、そよ風は出せない」

確かに暴風を恐れる方はいますが、そよ風を恐れる方はいませんね。

「他にもあるけど、私が汲み取るのは負の感情だけだから人を安心させる事までは出来るけど、能力だけじゃ幸福は与えられないよ」

「応用出来なければ……、傷付けるだけなんですか」

「そうだよ」

その後も、ぽつりぽつりと少しずつでしたがお話をしてくれました。

私は八雲に対する愚痴なんて完全に忘れていました。

「そういえば文って新聞の作り方は分かるの？」

「新聞は作り方とかあるんですか？」

新聞という言葉と用途は知っていますが新聞自体は見た事がありません。

「私が教えてあげようか？」

「是非、お願いします」

わざわざ陽奈が教えてくれるならば甘えましょう。

それから山へ帰り、新聞を作り始めました。

万人が読むものですから個人の癖字ではダメなようで、読みやすい字で記さなければならいらしいです。

そのために判を押すような形で一文字ずつ組み合わせて金型にはめ、文字をいれなければいけない、と陽奈が言っていました。どうやら凸版印刷という形式らしいです。

そのためには様々な大きさの文字を彫った金属の判を作らなければ

いけないようで、万人が読める程に綺麗な字を手本にして作らなければなりません。

その見本を書ける人を探し、書いてもらうのには多くの時間がかかりました。

今回、必要な分は陽奈が魔法で作ってくれましたが、専用の部署を作った方がいらしいです。

あとは構成も大事だそうです。

確かに新聞の意義は事件などの真相を告げるものですが、淡々と書いてあるだけでは面白くありません。

そこで関係する情報を特集として取り上げる事で読者も増えるらしいのです。

今回は大雪異変を主な記事として、陽奈の事の特集として作る事になりました。

「文、新聞の名前はどする？」

「新聞は新聞では？」

「ただ、新聞、って題字だと読む気もなくなるでしょ」

それもそうですね……。

「決めました」

一文文。ぶんぶんまるしんぶん新聞一

大雪異変の真相とは？

先日、ここ幻想郷に歴史的大雪の観測があった。しかし、この異常気象は人為的なものである事が判明した。

現在、里で店を営んでいる雪女の錦六花が今回の犯人である。動機は特にないようで今回の異変は彼女の自己満足から生まれたものであると判明。彼女は自分の否を認め、謝罪の念を表明した。

今後は店を営みながら里のみんなと交流して里を守っていききたい、と彼女は語る。

また、事件を解決したのは白嶺陽奈であり、彼女もまた妖怪ではある。彼女が語るには、風見幽香という花の妖怪も解決の為に錦六花に挑んだものの、惜敗。その後駆け付けた白嶺陽奈が見事に打ち破り、この異変は収束した。

特集…白嶺陽奈に密着取材！彼女の過去を探る！！

……………。

こうして私の初めての新聞作りは無事に成功しました。

しんぶんのつくりかた（後書き）

という訳で文視点からでした。

特集の『……』は脳内補完してください。

そうです、文は最初のうちはパラッチとかマスゴミではなかった訳です。という勝手な解釈から作ってしまいました。

前回あたりの後書きの件、期限などはありませんのでご自由にどうぞ。

買ったものは食べ物だけ

私は久しぶりに里へ向かった。

以前は智音さんが子供を産んだ時に寺子屋を任せられた時だったっけ。

今回は食糧が尽きたただけだ。また買い溜めをしておかないと。それから資材も買わないといけない。

本格的に家の一部を魔法の森の休憩所にする計画を実行し、葉までは出来たが、休憩所に必要な雑貨、座布団やら布団やら机に椅子など、が未だにない。

ちなみに魔法の森の木は何か（幻覚とか）起こる可能性があるので資材などには適さない。

庭の雑草がマンドラゴラなんて可愛いものだ。私の家は奥地にあるのでまさに魔窟の中心だから、もっとヤバイのが生えてくる。

そんな理由から人里へ降りたが、人が驚きもしない。私は仮にも妖怪だし空から飛んで来たというのに

「陽奈ちゃん、今日はどうしたんだい？」

と、普通に里の人が話し掛けて来る。

見た目が化け物じゃない限り驚かないんじゃないのか？

私はそもそも人を襲わなくてもいいから問題はないけど、妖怪のほ

とんどはそうではない。

人間を食べなくとも襲わなければ生きていけない。
それが妖怪の本能だ。

ちなみに私にもあるようで、以前境界を思い切り操ったら少しだけ殺人衝動が出た。

そう、少しだけ。

それは別にしておいて、数年くらい人里を散策していなかったので、どこに何があるのか分からなくなっていた。

基本的な場所は変わっていなくとも若干の変化はあるからだ。

「そこのお兄さん、食べ物買いたいんだけど店の場所が分からないから教えてくれませんか？」

「ん、何だ？陽奈ちゃんじゃねえか」

「お会いした事ありましたっけ？」

「昔、巫女さんと村で一悶着あった時に見たから先生に聞いたただけだよ。やっぱり妖怪なのかい？」

私は軽く頷いた。

「食べ物……か、今年是不作だったからな……」

「そうですか……」

じゃあ半年くらいはご飯なしかな……。

「そうだ！一つだけ最近出来た店があってな、そこにならあるかも知れねえ」

私はなぜか肩車をされて連れて行かれた。

「いらっしゃーい、……って君か。本当に子供だよね……」

堂々と掲げられた看板には『氷屋』としか書かれていない。そして、店主は六花だった。

「肩車されて嬉しいの？」

「正直に言うとは微妙な気分だけどね」

「嫌じゃないんだ」

「あー、否定出来ない。お兄さん、降ろして」

私は降ろして貰ってから彼にお礼を言って別れた。

「先生の所にも立ち寄ってやれよー」

「分かったー。ありがとねー」

「……子供っぽいね」

六花が呟いたのはすっかり聞こえたが無視しておく。

「ところで六花、食べ物を買いに来たんだけど」

「お客さんとして来たんだ。ボクに用事とかじゃなかったんだね」

「まあ、ないことはないよ……。幽香からの伝言が」

「天狗から、次会ったら消す、とは聞いたけど？」

そう、幽香と花について談笑していた時に少し話題になって頼まれた。

ちなみにまだ戦ってはいない。文の新聞に書かれていた、誰よりも強い力を持つ、という言葉で（私はもちろん、そこを編集するよう頼んだが、仮にも編集長の文には逆らえなかった）感化され、次回へ持ち越したからだ。

「幽香がね、少し寒くても咲いてくれる花を知らないかしら、って」

「カタクリとかトリカブトとか？」

前者はともかく後者は……。

「ボクの住んでた所の近くの山にあったよ？でも幻想郷の外だからね……」

「ボクが行くしかないか……」

「私が行くしかないか……」

「「えっ？」」

「妖怪なのに幻想郷から出られるの？」

「「えっ？」」

「どうして六花は出られるの？」

「ボクは雪女だよ？ボクの親戚はいっぱいいるから、伝承とかもいっぱいあるんだ。だから外に出ても大丈夫なんだよ。君こそどうして大丈夫なの？」

「私は『恐怖を操る程度の能力』を持ってるんだけど、つまりは恐怖が私の糧な訳でどこでも大丈夫なんだよ。まあ、そもそもこの幻想郷を覆ってる倫理結界も境界も私がしたようなものだし、封印を強くして極力抑えれば人間みたいなものだから」

結局今度、一緒に行く事にした。

「それで何が欲しいの？野菜から魚まで何でもあるよ。あ、魚は外で仕入れたんだけどね」

魚か……。

「オススメは……鯨の肉一塊だよ。凄く高かったんだ」

店の奥から取り出して来て、ゴンと机に乗つけた。人の顔くらいの大きさはあるだろう塊はカチコチに凍っていた。

「あと、鮪に鮭に鰹も……」

「ねえ六花」

「なに？」

「魚……売れてないんでしょ」

「……うん」

幻想郷は地理的に海から離れているために生魚はまず届かない。魚といっても燻製や干物などの加工品だ。

もちろん小さな川魚程度の大きさならいいとして、鮪や鮭といった大きな魚はまず捕れないために調理方法が分からない。料理に使えないのだから買う訳がない。

「それじゃあ鮭を一匹いただくよ。私は鮭くらいなら捌けるし」

鮪は無理だ。昔、姿焼きにして食べた事はあるが、まともに料理するならそれなりの技量と道具を要するからだ。

対して鮭は辛うじて普通の人でも捌ける魚だろう。

「鮭は捌けるんだ」

「まあ、一応ね」

「じゃあさ、給金出すから同じ要領で他のでっかい魚も捌いてくれない？ボクも手伝うからね、お願い！」

こうして非公開解体ショーを店の奥で数日の間やり続けた。もちろん三食飯ありで。

ひなはまくろをさはけるようになった。

六花から給金代わりにいくらか食べ物を受け取り、スキマに放り込んでから私は寺子屋へと向かった。

久しぶりに教鞭でも振るってみようかな……。

ドゴン

ガゴン

痛そうな音が二つ響いた。

私が入ると二人の銀髪（白髪？）子供が撃沈していた。

「智音さん……、久しぶり」

「ああ、久しぶりだな。今日は寺子屋は休みだぞ」

じゃあ何でいるんでしょうか。

「その二人……、大丈夫なの？」

「大丈夫だ。片方は娘の慧音だ。大きくなったろう？」

智音さんと似たような服を着た小さな女の子（撃沈中）を指差して言う。

私が以前見た時は赤ん坊だったが随分成長したようだ。私より大きいだろう……。

「私の娘だぞ。しかも手加減は……もうしなくとも大丈夫なくらいなんだ。そろそろ起きるだろう」

「起きていますよ、母上」

額をさすりながら呆れた顔で慧音が立って、こちらを見ていた。

「ほら、陽奈に挨拶をしろ」

「上白沢慧音です。どうぞ御見知りおきを。母上、これでよろしいですか？」

「55点だ。もう少し上品に」

「母上こそどうなんですか！」

「確かに智音さんには礼儀の教育は出来なそうだね」

「失礼な……、陽奈こそ出来るのか？」

私は欧州へ行って来て学んだ（パチエや美鈴に仕付けられた）ある程度は出来る。

「じゃあ、服装は相応しくないけど」

私は少し息を吐く。

「皆さんご機嫌麗しゅうございます」

私は優雅に一礼した。

「……陽奈、教えてくれ」

「母上ばかり狡いです」

「私は心配されていないのか？」

最後に放たれた声は先程まで倒れていた少女だったが、どうにも聞き覚えのある声でもあった。

「智音、どうした……ん……」

「智音さん、私は幻覚でも見てるのかな？」

白い髪に赤い眼、聞き慣れた声。

「妹紅……、なの？」

「陽奈……だよな？」

旧友、藤原妹紅がいた。

十世紀程ぶりに会った妹紅は……何も変わっていないように見えた。

「大変だったんだぞ？見世物にされたり、雪山で遭難したり、妖怪に殺られたり退治したり。何回死んだかなんて覚えたいないくらいだ」

「私だって子供産んだり、閻魔から説教されたり、結界作ったりで……」

「子供！？陽奈、お前……アレ来てたのか？」

「アレって？」

「その……アレだよ。男にはない月一の……」

「ああ、s……むぐう」

「止める、はしたない」

妹紅が私の口を塞ぎ、やれやれと頭を振った。

「ふはあ。ごめんごめん。来てなかったら子供出来ないでしょ」

「そうだな……。……それであの行為はどうだったんだ？」

「「それこそはしたないわ！！」」

智音さんが妹紅を取り押さえて頭突きをした直後に私が蹴り払った。

「い、いくら不老不死でも……痛いんだ……ぞ……」

どうやらお休みになられたようだ。

しばらくして妹紅たちと別れ、私は帰路についた。

「お帰りなさい」

「ああ、うん。何でいるのかな？」

「殺り合う為に決まってるじゃない」

なぜか幽香が私の家でくつろいでいた。

「殺すのは……止めようか。次がなくなっちゃうから」

「それもそうね。さあ、始め……」

「待った。場所は移動しようか」

「じゃあ改めて行くわよ」

結局移動した結果、魔法の森の入口付近、ペンペン草が生えている程度の場所に落ち着いた。

「いいよ」

私はリボンを外し、スキマにしまった。

途端、幽香の姿がぶれたかと思うと背後から横薙ぎに傘が振るわれる。私はそれを屈んでかわした。

幽香は傘を振った力を利用して中段回し蹴りを繰り出す。私は幽香の払われた脚に手をつき身体を跳ね上げ、そのまま踵落としをした。

「あら、やるじゃない」

私の足は簡単に幽香に受け止められる。そのまま私は地面へと投げ付けられた。転がって衝撃を殺し幽香に手を翳して魔法で巨岩を飛ばす。

しかし、幽香の元で止まったかと思うと、大きな音がして亀裂が入って砕けていった。

「やっぱり岩は殴るものじゃないわね」

軽く手を振りながらも呟いた。

「今のうちに……『五行……』」

「何度も同じ手は喰らわないわよ！」

幽香が構築式を傘で穿ち、式を霧散させた。幾ら強力な術であろうと発動前に壊されては何とも出来ない。

「それじゃあ……『封魔陣』……！」

「温いわ」

幽香は傘を開いて術を防いだ。

「食らいなさい」

そのまま傘の先端に魔力が溜まってゆき、火花を散らし始めた。

「『マスタースパーク』……！！」

この前よりも格段に太く強い雷が私を飲み込まんと迫る。

私は同様に魔法を放ち相殺する。

「傘からじゃなくても撃てるのよ？」

私の背後で幽香が微笑んでいた。

しかし、その手には傘に集められたものよりも遥かに膨大な魔力。

「傘は凹だった、って事？」

「ご明答♪」

私は背後から猛烈な雷光に飲み込まれそうになった。

今度は同じようにはやられてなるものか。

「凍れ!!」

私はその雷を凍らせて無効化した。

「何を……したのよ。それ以前に誰なのよ、貴女は」

幽香が攻撃を止めた。

「陽奈は黒髪だったはずよ」

「私は眼と髪が朱くなるんだよ」

「でも!……っ、貴女が防いだ術は陽奈のものじゃないわ!!」

明らかに取り乱している。トラウマか何かなんだろうか。

「幽香、よく聞いて。私を相手にする事は全ての妖怪を相手にする事に近い事なんだよ。私は花も境界も闇も操れる。本人には及ばないけどね」

「何よ……それ」

幽香の声が落ち込んでゆく。

「最高に楽しいじゃない!!」

狂気に瞳の色が変わる。

呼吸もままならない程の殺気が襲う。いや、私は出来るけど。

私は対抗して相応の殺気と最大の恐怖を解き放つ。

「妖怪の根源、思い知れ!」

幽香の脚が震えているが構わず、私は踵落としを繰り返した。

「負ける訳には……いかないのよ!!」

幽香が消える。

あの恐怖の中で幽香は動いたのだ。

横から幽香が拳を飛ばして来たので私はそれを受けようと身構える。すると、幽香の姿が消え、見失ってしまった。

刹那、後頭部に重い衝撃が走る。

視界が歪む。

その時に背に重い蹴りを入れられ、私は地面に倒れ伏した。

「陽奈、私は貴女が怖いわ。だからこそ、負けたくないのよ」

私の背に足が乗せられ、幽香は力を込めた。

「うあああああああ」

体中が潰されるような痛み。それだけでも私の意識は途切れそうになる。

「もっと……啼きなさい!! その可愛い声で助けを懇願きなさい! 私の勝ちを認めなさい!」

私の背中に傘が刺さる。幽香はそれをさらにねじこむ。

「あら? ……どうしたのかしらっ!」

「……っ!」

ぐしゃり、と不快な音がした。

私の左腕が踏み潰された音だった。

「次はこっちかしら?」

私の右腕にも足をかけられる。

「ゆっくりと啼きなさい……」

まるで痛みを刷り込むように徐々に力が込められてゆく。腕が悲鳴をあげているのが分かる。

やられてばかりではられない。

だが、痛みは更に私を襲い、思考を邪魔する。

傘が私に更にねじこまれる。

腕が折れる。

その痛みだけで私は声とならない叫びをあげる。

「ゆう……か……、もう折れた……けど……」

折れてしまった腕にかけている足の力は弱まる事を知らないようであつた。

「まだ壊れてないわ♪」

幽香の意識がそちらへ向いている間に、私は痛みを堪えて神力で左腕を全快にし、幽香の傘の目を握り潰す。

傘が壊れた所でその傷口もすかさず治癒した。

それが済むと私の腕が踏み潰された。

「また傘を壊してくれたわね」

「そう……でもない……と、勝ち目が……ない……だろうから……ね……」

「消し飛びなさい」

幽香の両手に魔力が蓄積されてゆく。

「何度も食らうか!!」

私は放射線を操り、幽香の片腕に集中させる。

「くっ……」

その腕は血を噴き出して崩れ落ちる。

その一瞬に足の力が抜けたので、私は抜け出した。

内臓はいくつかやられたようで私は少し血を吐いた。

痛みを我慢して闇を操り剣にして握り、幽香に切り掛かる。

幽香はそれを避けたが甘く、脇腹をかすった。

「対して強くないじゃないの、ソレ」

「それはどうかな？」

さらに闇を操り、幽香の身体を侵食させる。身体の中からも外からも幽香の身体を闇が喰らう。

幽香の表情が苦悶なものに変わった。

「私はもっと痛かったんだよ」

「だから、何よ!!」

幽香から妖気が更に溢れ出る。それが闇を掻き消した。

「相手の痛みを知らなきゃ強くはなれないよ」

私は地を蹴って幽香に向かう。

「あれ？」

だが、視界が反転して転んでしまった。

「やっと効いたわね」

身体が痺れ始める。

「なに……を……？」

「私の能力で毒のある花粉を出す植物を咲かせておいたわ。私は花の妖怪だから花粉は効かないのよ。貴女がもう少し強い妖怪なら大丈夫だったかも知れないわね」

マウントポジションを取られた。ただし私の腕に圧を加え、力が入らないようにして。それだけでもかなり痛い。

「今度は逃がさないわよ」

幽香が拳を合わせて振りかぶった。

もう少し強い妖怪なら、か。

私は一瞬で幽香を押し退けて逆にマウントを取った。

「なっ……!？」

「悪いけど私の勝ちだよ。敗因は振りかぶった事だね」

現在、3割程の妖気を更に2割あげた状態にまで解放した。

それだけで幽香を圧殺出来る。

私は拳を振り下ろした。

幽香の顔のすぐ横に。

「いつになったら貴女に勝てるのかしら」

「あと十世紀くらいじゃない？」

簡単な治療をして、戦闘後のティーブレイクをしている。

幽香が一口飲んでから溜息をついた。

「今の陽奈を見てみると、とても同一人物には見えないわね……」

「それはどういう意味？」

「今の妖気や殺気を考えると戦っている時の貴女は別人、って意味よ。そのリボンのせいもあるんだろうけれども、それでも異常だと思っわ」

また、一口。

「幽香もよくそれだけの殺気と妖気を抑えられるよね」

「貴女とは絶対量が違うじゃないの。最後のアレはさすがに多過ぎるわ」

「全開じゃないんだけどね」

「やっぱり……。薄々そうじゃないかと思ってたわ……」

そういえば、と話題を変える。

「幽香に戦い方を教えて欲しいんだけど」

「それは勝者の台詞じゃないわよ」

「幽香の戦いのセンスがずば抜けてるから、って理由があるんだけど」

私は茶菓子をつittedく。

「でも貴女に負けたのは事実よ」

「それでも今の幽香なら神綺にも勝てるんじゃないかな？神綺は恐怖で崩れたからさ」

「そう……。いいわ、陽奈を弟子にとりましょう。ただし、ここにはない花の種を持って来たらよ」

「タダではない、と」

「当たり前よ。それに貴女にいつか勝ちたいもの。悪いけど、どこかの神にはいずれ踏み台にでも使う事にするわ」

それから私はたまに幽香の元へ訪れる事になった。

その後、幽香が神綺を倒しに行くのはまだまだ遠い未来のこと。

博麗結界の緩み

郷の亥癸なる年、皐月の桜の花の咲きたるは何ぞ奇しざらん事とはなき事か。

夏のある日の事だ。まあ、外の世界なら春だが。

読書が日常と化して来た日々になつたのはさておき、集中して読む事が出来なかった。

外が妙に騒がしい。

この時節、魔法の森は徐々に活発化してゆくのだが今年は様子が少し違った。

雪解け時にしか見ない様な植物が未だに踊っていた。

植物といえど心辺りがあるので、私は家を飛び出した。

「知らないわよ。ただ、力が漲ってくるわね」

花といえば幽香だろうと思って聞いたが、違ったらしい。

「ありがと。幽香は原因とか分かる？」

「そうね……、私は特には分からないわ」

「じゃあ分かったら連絡ちょうだい」

「分かったわ。ところで陽奈」

「ん？な……、危なっ！」

幽香が突然日傘（三代目？）を私に振り払っていた。

「折角力が漲るんですもの。戦っていかないかしら？」

「嫌だ、って言ってもやるんでしょ」

「分かっているじゃない♪」

しょうがないけど、私には戦う気はないので奥の手を使う。

「幽香、本気でいくよ」

「来なさい」

私は幽香の鳩尾に一発だけ拳を入れた。

「かはっ……!?!」

「幽香、どうしたの?」

私が細工をしたからだが、幽香へのダメージは大きいはずだ。

「陽奈、何を……したのかしら? 力が……出ない……」

「ご馳走様でした、とでも言えば分かるかな? 卑怯な手だけど容赦はしないよ」

「まさか……私の……」

「幽香の力をいただきました、ってね」

所詮妖怪なのだから主な力の源は“恐怖”だ。

では、それが断たれてしまえば?

妖怪が自力で妖力をゼロから作り出せるかという答えは否。呼吸をする時に酸素をほとんど横取りされたら苦しくなるだろう。

私は幽香の力になるはずのものの大半を横取りしたのだ。

「邪魔をしたら……消すよ」

「では……退いておくわ」

「ありがとう」

私は幽香に一割増しくらいで力を返した。

「これは……？」

「餞別だよ。じゃあ、またね」

「また……ね。そうね、次はやりましょう」

「分かった、約束する」

上空から見て、里の近く……、凄く桃色です……。

今は葉桜の季節のはずだ。けれども桜の花が咲き誇っている。

「変だろうか？ 私は分からないんだが」

妹紅が横から赤い炎の羽を広げながら飛んで来た。

「里の者は気にしていないんだがな」

更に横に智音さんもいた。となりには慧音もいるが。

「たいしたことないんじゃないのか？」

妹紅が呟く。

「大有りよ」

にゆる、と紫が更に横から出て来た。

「どうした八雲」

「あら、ハクタクじゃないの」

「説明しろ」

「せっかちねえ。詳しくは博麗神社で話をするわ。スキマで送ってあげるからいらっしゃい」

じゃあ私も便乗しようかと、スキマにご一緒しようかと思ったら

「ごめんなさい、陽奈。このスキマは4人用なのよ」

「嘘だっ！」

閉め出されてしまった。

「じゃあ私が一緒に行ってやるから」

「ありがと、妹紅……」

博麗神社にたどり着くと紫たちが既に着いていた。

ぱたぱたと神社から小さい影が出て来た。

「おきゃくさんだー」

博麗の巫女装束ではあるが小さいと思う。

「お母さんはどこかしら？」

「おとりこみちゅーだよ。けっかいがふあんてーだからってゆってた。ゆかりおねーさん、どーしてー？」

「おねーさん、か。そんなに若くもないのに。若作り？」

「陽奈には言われたくないわ。紹介しておくわ。この子は今の博麗の子供の霊華よ」

「このひとたちだれー？」

「私のお友達よ」

「よろしくおねがいします！」

ぺこり、と会釈をされた。

「私は白嶺陽奈。よろしくね、靈華ちゃん」

「うん。よろしくね、陽奈ちゃん」

私たちは簡単に握手をした。手の大きさはあまり変わらない。

「陽奈ちゃんですって、ハクタクさん」

「私は名前は智音だ、八雲」

「何で違和感がないんだ……。紫ちゃんは違和感しかないのに……」

「人間の割にはよく言うわね。死にたいのかしら？」

「もう死に飽きてるな」

靈華の母は生来病弱な身だった。そのかわりなのか歴代最高の靈力を持っていた。しかし今回の異変は彼女を大きく疲弊させている。

うん、見れば分かる。

「大丈夫？」

「はい……。母から聞いております。貴女が陽奈さんですね」

「あー、うん。母親って……霊菜？」

苦しそうな顔をして言われるとな……。

「はい。結界に何かあったら紫さんに頼むように、陽奈さんに頼むように言われました……」

「そうか……。分かった、じゃあ力の供給を止めて休んでて」

「それでは結界が……」

「私が持たせるから」

「でも一介の妖怪である陽奈さんには結界は扱えないはずです。博麗しか使えないように出来ていると……」

「そうだよ。陰陽玉と同じ様にしたんだもん」

「まるで貴女が作ったかの様な言い方ですね……」

彼女の表情が歪んだ。

「そうだけど？」

飄々として答える。

「貴女は何者なんですか!？」

“元”この神社の巫女よ、そうでしょう?」

いつの間にか紫が話に入って来た。

「でも……」

「博麗神社が博麗神社になる前の話よ」

「意味が分かりません……」

「ここはその昔、白嶺神社と呼ばれていたのよ。その時の巫女で陰陽玉の製作者が陽奈よ」

「だから、早く休んで。私なら大丈夫だから」

「紫さんが真面目な顔で言ったので信じます」

私は神力で結界を維持する。

次に紙を取り出して、結界の式を書き起こす。

これから式の上書きをするのだ。

力を式に接続して分かったけれども完全に私のミスだった。

龍脈を用い、力の循環を行う面は問題がなかった。しかし範囲や角度を意味する事に干支を、それらの循環に五行の陰陽からなる十干を用いてしまった事が大きな誤りだった。

確かにこれで力の循環などは完璧になる。が、永続的とは言えない。それらが完全に一周する六十年目、つまり幻想郷の還暦が“終

わり”を意味する形となってしまう。

今年を過ぎれば、また“始まり”として結界は機能するが、“終わり”と“始まり”の境には“無”が存在し、その間には結界は消える。

一瞬でも結界が消えれば、外の世界の“非常識”に巻き込まれ、妖怪などは大半が消滅する。

式の無駄な機能を省き、新たな循環経路を作らなければならない。

しかし、循環経路に何を用いるかが、どう用いるかが問題だ。

干支も十干もそれぞれ陰陽のバランスはとれているが、それぞれの数からして全体的には陰の流れだ。

ここに奇数、つまり陽の力が入ると力の傾きが弱くなり、術が弱まる。

そこで、方角を意味する力に四神を追加する事にする。

これならば偶数、つまり陰であり、また龍脈の力も効率よく利用出来る様になり、負担も減る。

四神には青竜、白虎、朱雀、玄武がそれぞれ東西南北を守護し、またそれぞれが春秋夏冬を意味する。

更には中心は黄竜こうりゅうが守護をする。

黄竜を含めると五行との繋がり、つまりは十干との繋がりが強くなり、数的には陽となるが十干という陰の力を増幅するはずだ。

「どうかしら？」

紫が様子見に来た。

「まあまあ出来たけどね」

「相変わらず陽奈の作る式は真っ黒よね」

そう、複雑過ぎて真っ黒だ。実際のよりも小さいのだから当たり前だ。

「これから拡大して印を結ぶの。あくまでも下書きだから」

私は手を動かしながら説明する。

「私はこれから用事があるから霊亜の事は頼んだわ」

「霊亜って誰さ」

「霊菜の子供で霊華の母親よ」

てっきり火竜かと。何考えてるんだ、私は。

「じゃあ、よろしく頼むわね」

紫はスキマに入って行った。

さて、私も続きをしますか。

私はスキマを潜って冥界に着いた。

「幽々子はあるかしら？」

「紫、助けてちょうだい！亡者がいっぱい」

やっぱりか。確認の為に来て見れば……。

結界が弱まる事は外の世界との繋がりが強くなる事と同義。だから外から亡者も、そして生者も幻想郷へと迷い込む。

「幽々子、頑張ってちょうだい。閻魔に話をしに行ってくるわ」

「じゃあ、この人たちも一緒に！！」

「分かったわよ……」

私は数人の亡者を連れて白玉楼をあとにした。

「閻魔はあるかしら？」

三途の川に降りた私は渡し守に尋ねた。

「四季様はお取り込み中だ」

「その件で話があるのよ。お願い出来ないかしら」

出来ればあの小さい閻魔には会いたくはないのだけれど幻想郷の一大事ですもの。

「私は忙しいからな」

「船の上で寝転ぶのがかしら」

「なっ……いつもと違って四季様に頼まれているんだ。忙しくなるから回数を減らして、かわりにたくさん運べと」

あら、閻魔が多忙過ぎるだなんて意外ね。

「じゃあ、どうしようかしら……」

「本当に急用なら送るよ」

「あら、大丈夫なの？」

「一歩で着くよ。私は『距離を操る程度の能力』があるから千里も一歩も同じなのさ」

「四季様、客です」

「客……？まあ、いいでしょう。では小町、次は23分42秒後に船を」

「はい」

渡し守が返った所で……

「貴女が来ると思っていました、八雲紫」

読まれていた。

「では原因は……知って？」

「幻想郷の還暦が原因です。結界が一巡し、新たに幻想郷が生まれ変わります。とはいっても、既に白嶺陽奈が対策を済ませました。60年毎に季節問わず花が咲き誇り、死者も増えたりはしますが、結界は大丈夫でしょう」

「では、大丈夫なのね」

「はい」

安心したわ。ここがなくなってしまうかと思うと……。

「八雲紫……、貴女は幻想郷を愛していますね。どうか、そのままでいてください」

閻魔が優しく語る。

「覚えておくわ」

無事に結界の引き継ぎが終わり、息抜きをしていると紫が帰って来た。

「どこ行ってたの？」

「閻魔の所よ。もう、大丈夫だと聞いたわ。貴女のおかげで」

「そうか……、よかった」

紫が嫌いな閻魔の所に行くだなんて。

「お疲れ様。そして、ありがとう、陽奈」

紫が頭を下げた！？

「熱でも……あるの？」

「な、ないわよ……。素直にお礼を言っちゃいけないのかしら？」

「紫らしくはないけど……。ね。こちらこそ」

その後、紫はこの異変について幻想郷中（一部除く）に伝えたりし
い。

博麗結界の緩み（後書き）

最初の文は

幻想郷の60年目、五月に桜の花が咲いているのは不思議ではない
とは思わないだろうか。いや、幻想郷であろうとも不思議であろう。
という意味になります。

フラワーマスターの指南

紫から聞いた話によると未だ花は容赦なく咲く様だ。ならば、彼女もまだ大丈夫なはずだ。

「幽香、いる？」

「随分と早いわね……」

「ごめん。もう解決した様なものだからさ、暇が出来ただけど」

幽香の顔が凄く輝いて見えた。

「今回の異変は60年に一回起こる事らしいよ」

「そうなの……。今はそんな事よりもやりましょう？身体がうずうずしてるのよ」

「よし、来い！」

「でも、我慢するわ。貴女の戦い方を見る為に」

えっ？

「陽奈は弟子入りするんでしょう？私は守りに徹するから妖気を解放しないでかかってきなさい」

「はあ……はあ……」

まさか、一発も当たらないなんて……。

「何故か分かるかしら？」

「分からない」

「攻撃が予測しやすいのよ。フェイントの一つもなかったじゃない。貴女はただ単純に力だけでねじふせていただけよ。少なくとも肉弾戦の実戦経験はあまりないようね。昔から相手を圧殺しかしていなかったんじゃないかしら」

幽香の指摘は、まさにその通りだった。

「返す言葉もないよ……」

「そこで、よ。貴女の戦い方に一番適したのがあるわ」

「それは？」

「“受け”の戦いよ」

「受け？マゾヒスト？」

幽香が困った様に額に手を当てる。

「違うわよ。自らは攻めないの。相手の攻撃を避けて、反撃をする。そんな戦い方よ。陽奈は柔術は使えるかしら？」

「まあまあだけど」

「柔を基本として実戦的に練習するのよ。その為には……次の特訓をしようか」

いつの間に始まっていたし。

「ほら、当たるわよ」

「見えてるから！」

「身体が動いていないわ！」

「動かしてるよ！」

幽香の特訓。ただひたすらに避ける事だった。

「魔法も入れるわよ」

ただでさえ厳しいのに……

「ただし、魔法は相殺しても構わないわよ」

私は避けて相殺してを何度も繰り返した。

とりあえず当たらない事が大事なんだろう。

「じゃあ、一時休憩ね」

半日程経って、ちょっと遅い昼ご飯の時間になる。

いくらかかすった為に頬などが少し切れてしまったが直撃はしていない。

幽香も黙り込んでいる。

「幽香、何か作ろうか？」

「いや、いいわ」

また黙り込む。

「あの……幽香？」

「そうね、そうよ」

あの……何がですか？幽香さん。

「まずは貴女の得物と得意になりそうな形態を言っておくわ」

「うん？」

何を言い出すのでしょうか？

「陽奈、貴女は気配を消せたり出来るかしら？」

「何年生きてると思ってるの？出来るに決まってるじゃん」

「じゃあ決まりね。貴女は暗殺が一番向いているわ。その為には小太刀が、ナイフや最低でも毒針は必要ね」

「いや、暗殺する必要ないからね、私は」

「いや……分かってるわよ。でも本当よ？その小ささを活用すれば……」

「……小さい？」

「まさか……、気にしていたのかしら？」

「大丈夫だよ、幽香。私はぜんぜん怒ってないから。ちょっと向日葵焼いて来ようかな、としか思っていないから」

幽香から殺気が滲み出る。

「貴女を殺しても止めるわよ……」

「私は殺されないから。そんな能力が太古の時代についちゃって」

「つくづく反則よね、貴女は」

私でも反則だと思うが、あくまでも即死に限る能力だ。
衰弱や自殺などには働かない。

「自分でもそう思う」

「それで、私に暗殺を？」

「そうよ。とは言っても能力を使えばすぐだからあまり必要ないでしょう？けれど貴女は能力が使えなかったらどうするのかしら？」

そういえば、幽香は戦闘において能力を（ほとんど）使っていない。

「能力や身体能力に頼るのもいいけれど、頼らないでどこまで戦えるか、が最後を決めるわ。暗殺と言ったものの正確には暗殺はしないだろうから超接近戦よ。能力を使わずに私を超えてもらおうわ」

はい？

「なんだって？」

「始めるわよ」

どうやら聞く耳は持ってくれないようだ。

「こんがり焼けたわね……」

「誰のおかげでこうなったと!？」

幽香が途中から狂った様に攻撃を始めたからマspaに直撃した。

「でも、陽奈は丈夫よね……」

「嬉しくないよ!」

マspaを連発して、それが全部直撃。私じゃなければ消し炭も残らない。

「まあ、それでも強くなったんじゃないかしら?」

「そうだね……、うん」

「ところで今日は帰るのかしら?」

いつの間にか日も暮れている。

「泊まっていく?」

「幽香の家には？」

「それ以外にどこがあるのよ」

こうして、幽香の家で今晚はお世話になる事になった。

「陽奈、ご飯よ」

「意外な献立だね」

今日の献立は

ご飯、味噌汁、何かの肉、サラダ。

「何が意外なのよ」

「いや、幽香が野菜を食べるなんて。肉食主義かと思ってた」

「失礼ね。私は花がまだ咲きたいって言ってるから咲かせていて、花も生命には違いなから殺さなきゃいけない時もあるじゃない。そういうのをいただいているのよ。供養みたいなものね。だから…、食事前の挨拶には感謝を込めるのよ」

「「いただきます」」

幽香って根はいい人なんじゃないかな、とか、そんな気がした。

「そういえば、これ、何の肉？」

「熊をちょっと狩って来たわ」

あ、意外とおいしい。

しばらくして……。

「陽奈、お風呂沸いたわよ」

「幽香が先に入れば？」

「私は後でいいわ」

私はお言葉に甘えさせてもらった。

「ふやふや、いいお湯だ」

一人くらいしか入れない湯舟に柚子が浮かんでいる。私はのんびりとくつろいでいる。

柚子……、食べていいかな？

「陽奈、入るわよ」

なん……だと……。

幽香がお風呂に入って来た。

その肢体は全ての無駄を省いたかの様に引き締まり、しかし、肉付きの良い、非の打ち所もないような身体をしていた。

ただし、私が一つだけ気に入らないものがあるが。

「詰めてちょうだい」

「入らないってっ！」

「こうすればいいのよ」

「むぎゅう……」

幽香の胸に抱かれて膝の上に座らされてしまった。

その豊満で柔らかいソレが……キニクワナイ。

「なんだか陽奈もこうして見ると子供みたいよね」

「うるさいよ、このデカチチ」

「心外ね。でも大丈夫よ、陽奈。貴女の小振りなものも肌も十分に綺麗よ」

幽香がそのままさぐるように弄って来た。

「やめっ……くすぐりたいよ……」

私は後ろに手が回らずに反撃が出来ない。

「肌もすべすべで汚れを知らない絹の様ね」

なんか小悪魔に同じ事を言われた記憶が……。

「本当に可愛いわ」

更に頭を撫でられた。

「んっ……。もう……。止めてよ」

「その割には気持ち良さそうね……」

「ゆうかぁ……。やめてってえ……」

なんか力が抜けていく様な気がするくらいだ。

「鬱陶しいかしら？」

「んーん。きもちいーよ。なんかね、からだのちからがぬけるよう
なかんかくなの。ふわふわぁ、って」

「陽奈、不自然なくらいに素直ね……」

「そーお？」

陽奈はいつでも素直だよ。

「ねえ、ゆうかぁ。陽奈……いつもとちがう？」

「違う……。違うわ。陽奈はこんなに子供っぽくはないわ」

「じゃあ陽奈はびょうきななの？」

「そんな訳ではないはずよ。でも何かおかしいわ」

陽奈はおかしいのか……。

陽奈のどこがおかしいんだろう？

「陽奈のどこがおかしいの？」

「ほとんどよ。貴女はそんなに舌ったらずで子供っぽいかしら？ 退行しているわ」

そんなわけないとおもうけどな……。

「少し能力を使ってみなさい」

「うん」

陽奈はのうりよくをつかってみるけど、どうにもうまくいかないな

あ。なんでだろう？

「ぜんぜんつかえない……」

おかしいよ、陽奈、なにかおかしいよ。

「ふえ……ふえええん……。つく、ひつく」

「陽奈が……泣いた？」

「ゆうかあ、陽奈は……ひつく……どうすればいいのお」

「とりあえずお風呂から出ましょう」

「うん……」

陽奈は幽香にだっこされて、幽香はあったかかった。

お風呂から出て、髪なども乾かし、あとは寝るだけだ。

「陽奈、大丈夫かしら？」

「えっ、何が？」

「お風呂の時の事よ。あれは……なんなのよ」

「なんなんだろうね」

私でもよく分からない。

「まあ、それで、あの陽奈を見て分かった事があるのよ」

「それは？」

「貴女の弱点よ。今まで撫でられたり抱きしめられたりした時に力が抜ける感覚がしないかしら？」

そういえば、と私は頷く。

「それは安らぎや和みといった感情を与えるもの、言い換えれば：
…、恐怖を和らげるものじゃないかしら。それが貴女自身に被った時に貴女は弱体化してしまう。違いかしら？ 貴女が子供っぽいと言われる所以は恐らくソレよ」

ルーミアが知佳に入ってた時、抱き着かれた時に刺された事もこれが原因なのかも知れない……。

子供は恐怖を和らげる行為で安心して落ち着く。私は落ち着くと同時に弱体化してしまう、と。

そして、妖怪として弱くなるから退行する、と。

「明日、それも試してみましよう」

「いや、試したくない」

こうして幽香からの修行も一段落つき、私は久しぶりに帰宅した。

フラワーマスターの指南（後書き）

陽奈の子供化の条件が発覚しました。

本当はもう少し後の予定でしたが幽香さんが見付けてくれました。

姉妹の繋がり

咲き誇っていた花がなくなってきた、少し寂しくなり、無事に異変が収束したのを感じた。

そんなある時、久しぶりに幽香と特訓して帰って来ると

「お帰り、陽奈」

パチエがいた。

「何でいるの？」

「それは……レミィからの頼みで妹様と久しぶりに遊んで欲しいらしいの」

「まあ、たまにはいいか」

館——紅魔館こうまかんというらしい——にたどり着くと美鈴が門の前にいた。

「あ、美鈴、久しぶり」

「陽奈さん、お久しぶりです。お嬢様から聞いておりますので。パ

チュリー様はお嬢様の所へ、陽奈さんは妹様の所へ行ってください」

「分かったわ」

パチエはふわふわと中へ入って行った。

「あれ？陽奈さん、どうかしたんですか」

「館の構造分らないんですけど」

館を運んだりはしたものの、向こうでは小屋の中で過ごしていた為に入ってはいない。

「そうでしたね」

美鈴が手を何度も叩いた。

するとメイドの妖精が数人飛んで来た。

「妹様の所に案内をしてください」

一様に首をフルフルと横に振った。

「こわい」

「こわいよ」

「半ば恐怖を感じるので断りたい」

「はぁ……、では私が案内しますから門番よろしくお願いしますね」

「わかった」

「わかったよ」

「了解した」

なんか、やけに賢そうなのがいた様な気がしたが突っ込まないで
こう。

「では、ごゆっくり」

美鈴が下がって行った。

相変わらず大きな扉だ。

私はゆっくりとその扉を開けた。

「誰？」

「久しぶりだね」

「陽奈！？本物だよね！？」

フランが飛び付いて来る。

私はしっかりと受け止めて抱きしめる。

「パチュリーがね、何回も何回も陽奈の家に行ったけど、いなかった

たって帰って来るんだよ？だから、陽奈に裏切られたんじゃないかな、って思っちゃってたんだよ……」

「私は理由もなしには裏切ったりしないよ」

私はフランを撫でながら言う。

「フラン、聞いて。これからもし私がフランを裏切る様な行動をしたとしたら、それは本当に裏切る訳じゃない、って覚えていて。たぶん、私は何か企んでいるはずだからね」

「うん、分かった」

「ありがと、フラン」

私はやや乱暴にフランを撫でた。

さて、フランと遊ぶと言われても簡単な事ではない。二人で出来る遊びなんか限られたもので、さらにはフランは頭の回転が速いので頭脳系はすぐに勝負がついてしまう。

運も強い為に勝負事は負け知らず。さすがは運命を操る吸血鬼の妹だと感心してしまう程に。（ゲームにおいて）決められた運命すら（たぶん能力を使っではないだろうが）たやすく破壊してしまう。

ポーカーやったら50連敗した。
じゃんけんしたら78連敗した。
コイン投げしたら17連敗した。

たぶん、無意識のうちに概念すら破壊してしまっているのかも知れない。

また、本をたくさん読んだせいとか、知識量も半端ない。レミリアがいらないと言った本のおこぼれを貰ったり、パチエから本を持って来て貰ったりと、暇さえあれば本を読んでいたらしい。

更に後で聞いたが、紫が面白がって館の図書館に幻想郷の外からあらゆる本を贈呈^{おしつけ}するが、それらをパチエがフランに横流しする為、余計に拍車をかけている。

陰でレミリアが格好付けて難しい言葉を間違って使うのを笑ったりはしているらしい。嫌な妹だ。

それでだ。何をするのかというと

「うーんと……こうかな？」

フランが手を握る。

すると私の手に集まっていた魔力が霧散する。

「うん、成功したね」

「やった！」

ぴよんぴよん跳びはねて喜ぶフラン。

何をしていたかというと、能力の研鑽だ。

今までフランは“物体”を破壊していた。

しかし、それ以外でも破壊出来るのではないか、と思った私は自らを被験者として能力の研鑽をさせる事にした。

先程フランが行ったのは魔力の“集約”という“現象”を破壊した。力を感じ取り、それを魔法として使えない様に破壊した訳だ。

「次は何を壊すの？」

状況によつては危ない言葉がフランの口から出る。

「そうだね……、難しいけど概念を壊してみようか」

「概念？」

小首を傾げるフラン。

「さっきと似た様な感じだけど、ちょっと難しいよ。今度は目に見えなかったり、感じたりとか出来ないのが対象だから」

「ふーん。どんなのがあるかな？」

その前に、と私は遮る。

「壊すものがあるかを考えなきゃダメだよ。たぶんだけど『壊れたという結果』は壊せないから壊れたとしても逃げ道があるものじゃないと。例えば『白嶺陽奈が妖怪である』って事を壊したら私はどうなる？」

「うーん……、分からない」

「じゃあ、『白嶺陽奈にレミリア・スカーレットの能力は有効』って事を壊したら？」

「あいつの能力が陽奈に効かなくなる」

「じゃあ、逆に『白嶺陽奈にはレミリアの能力は効かない』っていうのを壊すと？」

「また、効く様になる。つまり……、逆でも成り立つのを壊せばいいんだね」

「そうだね」

フランは賢い子だね、うん。

私が妖怪ではない、というと、では何なのかという新たな事実が必要になる。

しかし、能力が有効かどうかなどは、“ある”か“なし”かのみだ。

私は生来、妖怪な為に『私が妖怪である』事実を壊す事は出来ないだろう。

あくまでフランの能力はONとOFFの切り替えを無理矢理行う事しか出来ない訳だ、悪魔だけに。

「でもさ……、見えないものからどうやって『目』を取り出すの？」

・・・。

「そ、それはさ、その、うん、イメージとか？」

「考えてなかったんだね」

「はい、その通りです」

うっかりしてたZE☆

「あ、たぶん出来た」

「何をしたの？」

「『陽奈はいずれ死ぬ』って事」

フランに不死にされちゃったZE☆

「って何やっちゃってくれちゃったりしちやってるの!？」

「落ち着け」

私の右手の小指が弾け飛んだ。地味に痛い。

「陽奈は長生きしてるんだから不死でも問題ないよ」

「大有りだよ!」

私は指を神力で生やしながら叫んだ。

この世の法則は曲げちゃいけません。

「問題があったら『陽奈が不死』って事を自分で壊せばいいじゃん」

後で映姫さんに叱られたのは言うまでもない。

「さっきまではさ、私の能力を磨いてたけど陽奈は自分の能力でどこまで出来るの？」

一休みした後、フランから質問された。

暇さえ潰せばいいのか。

それにしても私の能力か……。

「考えた事もなかったな……」

「じゃあ、今度は陽奈の番だね！」

フランが楽しめるなら、いいか。

「でも、陽奈の能力を聞いてないよ？」

「私は『恐怖を操る程度の能力』を持ってるんだよ。人が怖いって感じたものを作り出したり使ったり出来る」

「うわっ、あいつのよりも酷いね……」

レミリアは所詮運命だしね……。

「話を進めるけど……、吸血鬼が苦手なものも全て再現出来るよ」

「……なんだっけ？」

「日光とかじゃない？」

「そういえばそうだね」

フラン、忘れちゃダメでしょ。

「そういえばさ、陽奈は吸血鬼ってどこまで知ってる？」

「世間一般的なレベルかな？物語とかの」

「ふーん、そうなんだ。陽奈って恐怖を操れるんだよね。吸血鬼に対する恐怖も当然持つてるよね？」

「あー、うん。自分に少し軽目に付与してみたらそこだけ吸血鬼になったけど」

そこまで言うとなフランがニヤリと笑った。

「それを最高まで私にしてみて？」

意味があるか知らないけれど、言われた通りにやってみると、フランの威圧感はかなり上がった。

「うん、成功っばいね。力を抑える練習しなきゃ」

「何があつたか説明よろしく」

吸血鬼として強くはなったのだろうか。

「陽奈の知らない吸血鬼の事を教えてあげるね。陽奈は始祖と真祖の吸血鬼って知ってる？」

「えっと……ブラド・ツェペシュ？」

「ブー、外れ！あれはただの人間だよ。ブラム三世っていう何千の
人を串刺し刑、ツェペシュにした事で串刺し公、つまり、ブラド・
ツェペシュって言われる様になっただけ。本当は誰かは分かってな
いんだ」

「ドラキュラ伯爵は？」

「あれはただの作り話。ブラム・ストーカーって人が書いた物語だ
よ。吸血鬼でも鏡には映るんだよ？」

「じゃあ、真祖とか始祖って？」

ますます分からない。

「始祖は初めて吸血鬼になった人で真祖っていうのは始祖と同じ力
を持ってる人。始祖は普通の吸血鬼と違うんだって」

「例えば？」

「雨に当たっても平気だったりするんだよ。あと、間違っ
てなければ……」

「なければ？」

「陽奈、外に行こう！」

「今は昼だからダメだよ！」

止められなかったZE☆

吸血鬼って力が強いよね。

「ビバ、太陽！！」

フランがそう叫んで飛び出して行った。

あれ、おかしいな？フランが太陽の下ではしゃいでる。

「陽奈、ありがとう。陽奈の力で私は真祖になれたみたい！」

「まさか……、日光が平気？」

「そうだよ。……あー、でもこの事は隠しないとダメだよね」

「レミリアが五月蠅いだろうね」

まさか、フランがこんなにも賢いとは……。

「あ、陽奈さんじゃないですか。お帰りですか？………ってあれ？妹様？」

美鈴に見付かりました。

「美鈴、この事は何かあってもお姉様には内緒だよ」

「……………は、はい！」

美鈴が目を眩っていた。

「何やってるの？」

「え……、妹様の事ですし、何かあるかと……。お嬢様は貴女の事を癪癪持ちと言っていましたし」

「しないよ。だって、理由がないじゃん」

「え、あ、はい。ありがとうございます」

美鈴が少し困惑気味になっていた。

「陽奈さん、どういう事ですか？話がまるで違うじゃないですか」

私に小声で話し掛けて来た。

フランは庭を駆け回っている。

「レミリアの話のフラン態度は本人が言うには芝居らしいよ」

「し、芝居ですか!？」

「癩癩持ちだなんて嘘っぱち。下手するとレミリアより気は長いだろうね」

美鈴が驚くのは分かる。芝居には見えないし。

「凄すぎますね……」

「だよね……」

私たちは同時にため息をついた。

それから私はフランと部屋に戻り、また能力について考えていた。

「今度、パチェから本を持って来て貰おうよ。意外と他人のって参考になるかも知れないし」

もうフランがレミリアより大人に見える……。

「そーいえばお腹空いたなー」

フランがベッドに腰掛け、バタバタと脚を振りながら、そんな事を口にした。

「血……だったっけ？」

「最近トマトだけどね……」

まあ、吸血鬼に喜んで血を差し出す人はいないよね、うん。

「だからさ、陽奈の血をちょうだい♪」

「私、妖怪だけど……」

「別に人の血じゃなくても問題ないよ」

「そうなんだ……」

「だから、……くれるよね？」

私に上目遣いで顔を紅潮させ目を少し潤ませて頼んで来た。その紅い瞳に吸い込まれそうだ。

私はそのお願いに頷いた。

その瞬間、私の首にフランが噛み付いた。

フランの鋭い犬歯が私の肌にプツリと刺さると、そこから全身に甘い痺れが駆け回る。

「何……この感覚……」

その甘美な刺激は私の理性を犯してゆく。

そう、アレの快楽に似た様なものだ。
性的快楽に。

「フラン、ストップ！」

「ふえ？何で？」

「ヤバイって、これ！」

「ああ、ごめんね。吸血鬼に直接血を吸われてると性的な悦に陥る、とか本に載ってたのを忘れてたよ」

知っていてやったらしい。

「でも、陽奈の血がおいしくて……」

再度、上目遣いで私に訴えて来る。

「うっ……、そ、それでもダメ！」

「陽奈には魔眼は効かないか……」

「魔眼？」

「吸血鬼の力の一つで相手を虜に出来るの」

吸血鬼って、怖いね。

「もう、いいや。きゅっとしてドカーン！」

しかし、何も起こらない。

「何をしたの？」

「『陽奈が血を吸われると性的な悦に浸る』って事を壊したんだよ。だから……」

「あー、もう。そんなに飲みたいなら飲ませてあげるから！」

翌日から当分の間、食事を増血メニューにしたのは言うまでもない。

夜になるとパチュエが呼びに来たので、フランと別れてレミリアの元へ向かう。

フランが色んな能力を持った人についての本を読みたがっていた事を伝え、レミリアの部屋の前でパチュエと別れる。

ちなみに美鈴はご飯を作っているらしい。

「入りなさい」

扉の向こうからそう告げられ、私は部屋へと入った。

「フランの相手をありがとう。けれど、どうしてそこまでしてくれるか教えてくれないかしら？」

「それは……、楽しいから」

うん、特に理由はないんだけどね。

「フランについて……楽しい、って事よね？」

「それ以外に何かあると？」

「本音を言いなさい」

「嘘はついてないよ。強いて言う事なら、脅されてる、って言えば、とフランに言われたけど」

フランは他人を近付けずに傷付けない方法をとったのだ。それが正しいのかは分からないが、傷付けないのは確かだ。

「何を企んでいるのかしら？」

「何も？」

険悪な空気が流れ始める。

「ご飯ですよー」

その空気を美鈴がぶち壊した。

美鈴のせいで険悪なムードで食事が進む。

「あの……、どうしたんですか？」

「何でもないわよ」

不機嫌そうに声を発しながら口を進めるレミリア。

「何でもなくはないけどね。……あ、おいしい」

私はため息を吐きながらも舌鼓を打つ。

「まさか……妹様の事ですか？」

「……………ええ、そうよ」

「妹様は……もう出してもいいと思います」

美鈴がゆっくりと語る。

「貴女に何が分かるの？」

「私には分かりません……。ただ、陽奈さんはお嬢様より妹様を理解しています」

「フランの何が分かるのよ！陽奈は何の繋がりもない妖怪にしか過ぎないじゃないの！」

「繋がりとは……あります。陽奈さんは妹様の大事な友達です。そして、妹様を受け入れた唯一の、いえ過去にもいたかも知れません……、しかし、妹様はお嬢様よりも陽奈さんに信頼を寄せています！お嬢様は妹様に向き合いましたか？」

「黙りなさい！！」

「いいえ、黙りません。お嬢様を正すのも私の仕事だからです」

美鈴が机を掌で叩く。

「「陽奈^{さん}はどうなの！？」」

「えっ？私に振るの！？」

突然の事で少し驚いた。

「お嬢様と妹様についてどう思っているんですか？」

「それは……」

私も言葉に詰まる。

「もういいわ。陽奈は帰りなさい。美鈴はクビよ」

「クビ……ですか。私は構いません。けれども私は館からは離れる事は出来ません」

「何故？当主の私が命じたのよ」

「私は……、お嬢様には仕えていないからです。スカーレット家に仕えているからです。そう、貴女の父も祖父も私におっしゃりました。家族の総意なしでは私は解雇させない、と。私は妹様、いえ、フランドールお嬢様が出て行けと言わない限りは留まらせていただきます」

美鈴は言い放った。

「私は食事が済みましたので……、陽奈さんの食べ終えた食器も一緒にですが、この場を離れさせてもらいます」

美鈴が食器を慣れた手つきで片付けてゆく。

「ただしレミリアお嬢様、貴女は私を解雇したので貴女の世話は致しません。する義務だけでなく権利すら、もう私にはありませんから」

そう言い残して美鈴は食堂から去った。

食堂は美鈴の最後の言葉を響かせるかのように静まり返っていた。

「レミリア……」

「陽奈、貴女まで……」

「怖いんでしょ、この状態が」

私は確かにレミリアの周りに渦巻く恐怖が見えた。哀しく重い恐怖が。

「何を怖がるのよ……」

「それは……孤独だよ」

「孤独……?」

「寂しいし、苦しいし、怖いでしょ?それが孤独の与えるもの」

「それが……何なのよ……」

「フランがずっと感じていたものがソレだよ。あとは自分で考えれば、すべき事はすぐに分かるんじゃない?」

私もレミリアを残し、食堂から去った。

それから、フランの元へ戻ると美鈴もいた。

「むむむ……、妹様はお強いですね……」

「美鈴、早くしてよー」

二人で将棋をしていた。

状況を見ると美鈴がこれでもかとかばかりに負けていた。

「むむ……、参りました」

「やったー、勝ったー！」

「まさか5分程で負けてしまうとは……、さすがですね……」

「陽奈に今日教えてもらったんだー。ねー、陽奈♪」

「あ、いたんですか」

「さっきね」

「お嬢様はどうなさっているでしょうか……」

美鈴が呟く。

「たぶん……、悩んでる」

美鈴が立ち上がった。

「やはり、私はお嬢様の元に戻ります。妹様、またお相手をお願いします！」

扉を閉める事もなく、美鈴は飛び出して行った。

「うん、じゃあねー。…………お姉様は頼んだよ」

最後の言葉が小さくて聞こえにくかったが、そんなに刺のない言葉ではあっただろう。

姉妹の繋がり（後書き）

フラン強化してしまいました……orz

なんか美鈴がカッコイイ！とか感じました。このカリスマがいつまで続くやら。私は美鈴が案外好きなので残念なネタキャラにはさせません。

終わりが汚いですが紅魔館はひとまずですが一応終わりです。

次回は閑話にしないつもりですとも。

早く魔理沙出したい……。

ある夏の昼下がり（前書き）

遅くなりました。

プロットの時系列の矛盾解消に時間が掛かりました。

10年程ズレていましたね……。

しかも書いている途中に気が付いたので書き直し、置換を行っていた訳です。

以上で言い訳は終わります。

ある夏の昼下がり

私は今、結界の外にいる。

そして世はまさに戦争ムードだ。

相手は大国アメリカ。そう、後に太平洋戦争と呼ばれる戦争。

それで何故、私が外にいるかといえば答えは簡単だ。

地球上使用された最凶兵器、大量殺戮兵器を阻止する為だ。あんな嫌悪の感じる恐怖は、もういない。

私は恐怖を吸収するが、同時に多くの嘆きや悲しみも受け止めてしまふ。やはり私の精神にも負担が大きい。

特に悲しみは、まるで怨念の様に私の中を木霊し続ける。

未だに私の中ではえーりんの時代の巻き込まれた人たち、さらには中性子爆弾の犠牲になった者たちの負の感情も渦巻いている。

つまり、原爆を叩き壊す。

被害をなくす。

それが目的だ。

日本が降伏しなくなるかも知れないが、そんな事は知らない。

しかし、問題が一つある。

私は放射線などは留められるが爆発は抑えられない。

出来るだけ秘密裏に行いたいので、魔法を大々的に使う事は出来ない。

威力を出来る限り下げる、という方法もあるがそれだけだと難しいだろう。

スキマに入れる、とすると、数年間はスキマの中にフォールアウトが発生するだろうし、大気汚染も計り知れない。
洒落にならない。

特に誰かを入れる予定はないが、被爆してしまう。

爆発させない様に受け止めて、宇宙でばらすか。……でも宇宙行つて大丈夫かな？

妖怪でもさすがに生身は危ないよね……。

でも、そうするとどうしようか……。

数日経って、私は今、広島県産業奨励館付近上空にいる。私の記憶が正しければこの付近の病院上空で爆発するはずだ。

私が四方を目を凝らして見ると、一機の飛行機がミサイルの様なものを抱えているのが見えた。妖怪の視力に感心しつつも、私はそれ

が、かの有名な――いやこの世界では有名にならないかも知れない――爆撃機（B-29）エノラ・ゲイであると確信した。

投下前に止めるという手もあったが、それだと後々面倒事（投下失敗⇨原爆はどうなる？）になる気がしたので、私は別の方法、いや、数日考えた末の答えを実行する事にする。

そんな考えに浸っていると、遂にそれは機体を離れた。

私はすぐに移動し、そして爆撃機が急旋回した時、それをやんわりと受け止める。

このまま宇宙に放り投げようか。ふとそんな考えに陥ったが亜音速でないとダメだからその衝撃で爆発する。

という訳で当初の予定通りに運ぶ事にした。

そんなこんなで2日飛んで、太平洋のど真ん中だ。

ここなら捨ててもあまり問題はないだろうが、捨てたら捨てたで別の問題が発生しかねないので処分する。

方法は簡単だ。起爆すればいい。

私は周囲に頑丈な結界を張る。そして更に倫理結界で固める。

そして私はソレを起爆した。

強烈な光と音とともにメガトン級の力が私に襲い掛かる。

けれども水爆をくらった時よりは遥かに弱いと感じた。それでも目茶苦茶痛い。それでも死ぬ気配のない妖怪ボディに万歳。

身体の露出部分がずたずたに焼かれ血が噴き出しているが、神力で回復……、って……

「神力が回復してる？」

とりあえず身体を（治すではなく）直し、放射線を霧散させた。

おかしい。

私への信仰は数千年前に消えたはずだ。

なのに何で信仰が流れて来るんだろう。

私は神様パワーを研究した事はないので、信仰は感じ取れるが、具体的には分からない。

諏訪子とか神奈子は信仰から願いを読み取っている様なそぶりもあったが、私は出来ないから分からない。

一仕事終えた私は帰る途中で酷く嫌な感じがした。

粘着質で離れない様なヘドロの様な感覚。

私はその正体を認めたくなかった。

すっかり時差やら何やらを忘れていた事に気付く。
さらにはもっと大事な事も。

長崎の原爆だ。

私は完全に忘れていた。

拒否したい恐怖と負の感情が私の中で嵐となり、そのまま暴れる事を止めようとしなない。

経験した事はあっても、あの時よりも数が桁単位で違う。

私は耐え切れずに意識を闇に放り投げた。

暗い……。

ここはどこだろう。

いや、知ってる。

ここはどこでもあって、どこでもない。

暗闇の海へと落ちる堕ちる。

私に纏わり付くのは、なに？

受け入れたくもないのに私の身体に容赦もせずに入り込む。

その身に起こる事は怖い反面、歓喜している自分がいる。

やめて。

やめて。

いない。

ほしい。

ちょうだい。

嫌だ。

沈む沈む闇の彼方へ。

私は誰？

私は私だ。

否、私は畏れ。

分からない……。。

目が覚めると知らない天井が私を俯瞰していた。

寝間着に着替えさせられ、私は布団の中に寝かされていた。

ここ、どこ？

純日本家屋らしい。

それよりも気になるのは私の状態だ。

リボンもしっかり私の朱い髪を束ね、封印がかかっている。

封印が弱まったのだろうか。

いや、むしろ少し強いくらいだ。

それでも封印しきれていない。

そうだ、私は恐怖に吞まれて……。

しばらくすると襖が開いた。

「陽奈様、起きましたか……」

ふう……、と彼女が息を吐く。

「紫は？」

「紫様は疲労からお休みになられております」

彼女は八雲藍。紫の式だ。とするとここは紫の家なのだろう。

「疲労？」

「はい。貴女を抱えて来て、私に預けてからすぐに倒れる様にお休みに」

「紫がそんなに疲れるだなんて……」

「私も信じられませんでした……。いきなりスキマに身を投じ帰って来るとボロボロでしたから何かがあったのでしょうが……。妖気の残り香からして陽奈様としか思えないのです」

私が！？

「私は何にも覚えてないけど……」

「では、紫様がお目覚めになるまで待ちましょう。何かお持ちしますね」

そう告げると藍はどこかへ向かって行った。

しばらく待っていると藍が雑炊を持って来た。

「自分で食べられますか？」

「そもそもお腹空いてないけど」

「紫様から頼まれた訳ではありませんが、相当疲労されてるご様子ですので食べてください。式とは云え私も妖怪です。貴女の妖気の乱れは分かります」

私が疲れてるから乱れていると。

違う。

しかし私のお腹はきゅうと鳴いた。やっぱりお腹は空いていたらしい。

「じゃあ、いただきます」

私は少し微笑む藍から受け取った。

それを口に運びながら尋ねた。

「私の服ってどこにある？」

「洗濯しました」

「紙袋が入ってなかった？」

「薬らしいですけど、使用期限が切れてましたから処分してしまいました」

なんてこったい。

八意印の薬が……。

「ちなみに使用期限が200年くらい前でした」

「マジで？」

「マジです」

私が驚愕していると藍からさらに疑問が飛んで来た。

「ところで陽奈様、あの薬はどのような効果があるのですか？一つ拝借して調べましたが今まで見た事のないものばかりが入っていました。少し舐めてみましたが目眩がしましたので気になったのです」

が……」

「私の暴走した妖気を一般妖怪程度に抑える薬だよ。たぶん成分は劇薬ばかりだと思う」

あのえーりんがまともな材料で作るとは思えない。

「そうなんですか……。薬師を教えてくださいませんか？」

「うん、それ無理」

どこで生きてるか分からないし。

「そうですか……。続けて悪いですが紫様が参りました」

「あれは貴女なの？」

紫はお茶を啜りながら私に問う。

「ごめん……。記憶にない。紫が大変だったのは分かるけど」

「そうよ。外の世界で何をして来たのかしら？ 貴女には関係ないでしょう？」

「あるよ。あの恐怖が博麗大結界ごときで防げると？さすがに無理だよ」

「あの恐怖……………、原子爆弾ね。何故貴女が知っていたかは聞かないけれど…………、貴女でも受け入れたくない恐怖はあるのね」

紫が珍しい、と呟く。

「正気を失って、あんな状態になるのを知っているなら嫌がるに決まってるでしょ」

「あら、どんな状態になるのか分かっているのね。記憶がないんじゃないのかしら？」

まあ、確かにそうだね。

「直前の状態から推測くらい出来るよ」

「そう…………」

「あの…………、陽奈様はどの様に…………」

藍には疑問だったらしく聞いて来た。

「今みたいに髪と目が朱くなって恐怖を辺りにばらまきながら狂い回る、といったところかしら？私も危なかったわ。世界が軋んでいたわよ。私みたいに自分の空間を持っている者たちが気が付いたら協力して止めたのよ」

アレ…………？予想以上にヤバかった？

「私が境界を出来る限り操ってある程度無力化、魔界の神を筆頭に力技で押さえ込んで花の妖怪が完全に無力化したわ」

幽香と神綺に後で何か贈ろう。

「もう暴走しないでちょうだい」

「私もしたくないよ……。あの状態だと近くの小妖怪程度なら消し飛んじやうし……」

紫と藍が思い切り私から引いた。

「二人なら大丈夫だよ」

「そうですか……」

「さらっと言わないでちょうだい……」

それからある程度回復した私は映姫さんの所へ向かった。

理由はたくさんあるのだが、困った時には閻魔頼みだろう。

「という訳なんです」

「省き過ぎです。一から説明してください。暴走の件以外で話があるのでしょうか？」

さすが閻魔だ。よく分かってる。

「私の封印の件で来たんだ」

「そんな事ですか……」

そんな事とか言われてため息まで追加された。

「純粹に力が強くなっただけです。封印を強めれば良いだけではありませんか……」

「いや……、もう無理なんですけど」

現在、最大の封印掛けているにも関わらず髪が朱いとは、もうどうしろと。もちろん、それでいてしっかりと自分でも抑えている。

「そうですね……、そうならば何か策は……」

「妖術を使つとけばええやん。陽奈さん人間に化けるの好きやろ？」

「あー、好きって訳じゃないけど……。まあ、それもありか」

使い方は知っているが何億年と使っていない。最後に使ったのがえーりんの家に訪ねた時のはずだから。

私は変化の術（仮）を使ってみる。

「どう？」

「せやな……、変わつとらん。別の打開策探さんとダメやな」

こほん、とわざとらしく映姫さんが咳をした。

「では、私がどうかしましょう。まず、処置をしやすいようにリボンを解いてください」

私は従ってリボンを外す。途端に抑え切れない妖気が溢れ出す。

「少しばかり職権を濫用していますが……、貴女を仮監査処分とします。その為の処置として無意識的に発する妖気のほぼ全てを封じ込めます」

やあ、と手に持った棒（？）が振るわれた途端に一気に妖気を失った感覚があった。

「貴女を罰した訳でなく、罪を犯すのを予防したまでです。……という事にしておきます。殆どを封じ込めたとは云え、それでも八雲紫、風見幽香、錦六花の妖力を足した程はありますので力の扱いには注意してください。あとは貴女が自前で封印をすれば元通りでしょう。それと、あくまでも無意識での放出を封じ込めただけです。意識的に出そうと思えば簡単に出せてしまいますので留意してください」

私は軽く頷いてから再度封印をかけた。

うん、大丈夫だ。髪も黒に戻った。

「ありがとう、映姫さん」

「いいえ、仕事ですから」

「生涯初の始末書ですね……はあ……」

「閻魔ちゃん、手伝ったるから、な」

「すみません、ありがとうございます」

ある夏の昼下がり（後書き）

なんで殴って壊したか？結界で隔離して遠隔爆破すれば？と思ったでしょう。花火感覚なんでしょうね。それくらい丈夫なんですよ、たぶん。

いきなりそんな描写を……と思ったのなら最初辺りを読み返してください。

さて、次は異変です。

闇の帳

夜、月、明るき陰放ちたり。しかども、一日、陰消え、闇、夜照らしにけり。

妖の力は月の陰とともに輝き増したり。しかども陰消え、妖の力が衰えにけり。

遂には日の陰までも闇に飲まれりけり。

ある日の事だった。

いつもの様に家で読書をしていると、どさりと背後で音がした。

何かと思って振り向くと紫が伏していた。見るとかなり衰弱している様で、今すぐにでも看なければいけない。

私はとりあえず紫を（増築した時に作った）部屋のベッドへ運んだ。

「すまなかったわね……」

紫にお粥を食べさせていると謝られた。

「突然来たのには理由があるのよ」

「暇潰しじゃなくて？」

「なら、こんなに弱らないわ」

確かに、今の紫は妖気が弱々しい。恐らく私の家に来たのでほとんど力を使ってしまったのだろう。

「何があったの？」

「はぁ……」

紫が、これだから、と言いたそうな目で私を見る。

「貴女、何ともないの？ほとんどの妖怪は私の様に衰弱してるのよ」

「どうして？」

「外に出れば分かるわ」

「いや、窓あるから」

私はカーテンを開いて外を覗いてみる。

「うん、夜だね」

「今は昼よ」

・・・。

「まちで？」

「マジよ。誰かが昼の太陽も、そして月までも隠してしまったのよ」

「月がないから弱ったと」

「そうね。鬼や天狗といった妖怪は大丈夫らしいけれど、一人一種の妖怪はほとんどが虫の息かそれに近いわ。私ももうスキマを開けないくらい……」

紫が少し空を切る様に手を動かし、それからお粥を口へ運ぶ。

「そこで、貴女に解決を頼んでいいかしら」

「私に？」

「鬼は地底にいるし天狗は警戒態勢、自由に動ける大妖怪は貴女だけなのよ」

「靈華は？」

「人里で揉みくちにされてるわ」

ご愁傷様です。

「それで、何かしらの情報は掴んでるんじゃないの？」

「当たり前よ。黒幕は既に確定しているわ」

「誰？」

紫は軽く息を吸い直してから言った。

「闇を操れる妖怪よ」

私は森から出て空を見る。

そこにはとこしえの闇。

仮に犯人が彼女だとしても引っ掛かる点がいくつかある。

私は強力な封印を施したはずだ。それによってここまで力を引き出すのは不可能。

さて、どうしたものか……。

そう考えながら歩いていると、視界がいつの間にか真っ暗になっていた。

妖怪は暗くても目はきくはずなのに、だ。

「……………」

何か聞こえた。

「……………あ……………♪」

私は耳を凝らしながら、その音源へと向かう。

「…み……………たい…♪」

どうやら誰かが歌っているようだ。

「貴女と二人で…♪」

相変わらず視界は黒一色だ。

「いただきます」

突然歌が止み背後から声がしたので慌てて結界を張る。

「誰？」

「防がれた!?!」

背後の相手は歌っていた声と同じだった。

「驚いている所悪いけど、私は先を急いであるから目を直してくれない?」

「せっかくの人間を手放すと思う?」

相手が妖怪なのは分かった。けれど……、関係ない。

だいたい私が人間って……、ああ、いつも通り隠してたか。

「残念ながら私は妖怪なんだけど……」

「なら、余計に嬉しいよ。今は大妖怪でも弱ってるし。人間よりもおいしいかは別にして、食べれば力がつくもん」

「じゃあ戦って通してもらうしかないの？」

「あなたが私に勝てるならね。目が見えないで私に勝てると思うの？」

相手が幽香じゃなければ勝てると思う……。

「返事がないね。じゃあいくyへぶう……」

喋ってる間に近寄って地面に叩き付けておいた。

「な、なんで場所が!？」

私が相手の背中を踏みながら言った。

「妖気だだもれ」

「しまった!？」

もう何だろう、この虚しさ。

「命までは取らないからさ、名前を覚えてくれない？」

「私の？私は夜雀のミスティア、ミスティア・ローレライ。そういうあなたは？」

「白嶺陽奈」

「しらっ……、えっ、嘘でしょ!？」

私の視界がクリアになった。

「す、すみません。あなたが白嶺陽奈だったなんて知らずに……」

突然ミスティアが何故か私に謝って来た。

「私、何かしたっけ？」

「あなたは八雲より強くてフラワーマスターとも互角で……、と仲間の中では相手にしたくない妖怪NO.1なんだけど。何でもフラワーマスターを踏んで虐めていたとか……」

「あれ……、見られたんだ……」

いつかの戦った時のアレだろう。

「だから私を見逃して!!」

「見逃すもなにも……、どうこうする気はないからね」

機嫌を損ねたからぶっ殺す、とか考えてる誰かと一緒にしないで欲しい。

「え？」

「うん」

「そうなんだー」

「そうなんです」

ミスティアと別れてからしばらく歩いていると人里にたどり着いた。

「誰だ！………って陽奈か」

「あ、妹紅、久しぶり」

「相変わらず能天気な奴だな」

「失礼な。異変の解決をしているというのに」

「それなら智音が行ったぞ。妖怪と違って力はそこまで落ちないらしいからな」

あ、さいですか。

「って……、危険じゃん！」

「何でだ？」

「昔、私が殺されかけた奴が異変の犯人なんだって！ 智音さんじゃ勝てないかも知れない」

「な、なんだってー」

わざとらしい反応をありがとう。

「ふざけてないで追い掛けるよ」

「それは激しく同意したいがな、智音がどこに向かったのか知らないんだ。それが分かるのか？」

「ごめん、分からない」

詰んだ……。でも、このままでは智音さんが危ない。

「大きい妖気を探せばいいじゃん」

そんな時に第三者の声。

「里のみんなったら……私に質問したって解決しないのに。ねえ、陽奈ちゃん」

「靈華？」

「久しぶりだね」

前会った時よりも大きく成長した霊華がいた。

「なんだ、陽奈と博麗は知り合いか？」

「12、3年前にね。私ってほら、記憶力あるからさ、陽奈ちゃんの事も覚えてるの」

「それは顔見知り程度だろう……」

妹紅が呆れていた。

「そんな事より異変の解決だよ。陽奈ちゃん、妖気は感知出来るよね」

「もちろん」

私がどれだけ妖怪をやっ来てたと。億はいつてる。

「じゃあ、妖気の集中している場所を探して」

「大きいのを探すんじゃないくて？」

「確かにそうだけど出来る？私は幻想郷の広さじゃ厳しいかな、っ
て思っただけだなー。漂っているのが集中しているのを探す方が
楽だし」

つまりは調べるなら特定の傷を探すよりも凸凹から探せば楽だって

事だろう。例えにくいけれど。

「出来るよ」

「じゃあお願い」

私は彼女の妖気を探る。

犯人は彼女以外有り得ないから。

程なくして見つけた場所へ向かう。

ちなみに妹紅は里を守るとか。

という訳で二人で向かっている。

「あれは……？」

目の前で闇が渦巻いている。

「今回の犯人だね」

靈華の疑問に答える。

「もう来ちゃったのかー」

闇の中に佇む小さな影。

「何でこんな事をしたの？ルーミア」

「えっ……？ルーミアなの？神社の近くにいた？」

霊華は驚いている様だ。

「私が小妖怪だと思ったの？博麗霊華。私は陽奈に封印されていたのよ」

されていた？

見るとリボンがなくなっている。

私と同じ現象が起きているのか、封印前よりも格段に妖気が増えている。

下手な大妖怪よりもルーミアは強い。だからこそ何とか争わずに解決しなければいけない。

「どうしてしたかって？ふふっ、陽奈は変な事聞くのね。理由なんて後付け。したいからするの」

「じゃあ、私も理由なんて特に抜きで異変の解決の為にルーミアを倒す……！陽奈ちゃん、私がどれだけ成長したか見てて！」

霊華がルーミアに突撃する。

「相手にならないわ」

向かって来た霊華を寸で避け、そのまま首を掴んで持ち上げた。

「貴女は博麗の巫女と云えども所詮は人間でしかないのよ。博麗の巫女で良かったわね。命は取らないであげる」

そのまま霊華を捨てる様に投げた。

私はそれを受け止めた。

「霊華、大丈夫？」

「こほっ……、ちょっと首が痛い……かな？」

「よかった……。さてルーミア、覚悟はいい？ 本当は穩便に済ませたかったけど……霊華に手を出したから……、灸を据えなきゃね。どうせ口で言ってもダメそうだし」

私はルーミアの方に向き直る。

「ええ、陽奈。私が勝ったら封印を最低でも緩めさせてもらおうよ」

出来ればするな、か……。

「断る!!」

「まあ、貴女を倒しちゃえばいいのよね」

ルーミアからさらに妖気が溢れ出す。

「封印がなくなってから妙に力が出るのよ」

「それは私も同じなんだけど……、どうやってあの封印を？」

私は不思議に思っていた。どうやって封印を打ち破れるのか。

「ちょうど新月の日の夜に天候が悪化したおかげと偶然で、一瞬だけ完全に幻想郷から光が消えたわ。私はその時を逃さなかった。闇を最大限に利用して封印の力を全て喰らったの」

力が尽きた封印は封印ではなくなったと。

「タネ明かしは済んだし、さあ、始めましょう？」

「そうだね……。霊華、見てる？」

「うん……」

「面倒見切れないから自分の身は自分で守ってね」

「うん。陽奈ちゃん頑張って！」

「分かった、ありがとう」

私は抑えていた妖気がある程度開放する。

「準備はいいかしら？」

「そっちこそ」

互いに睨み合う。

「全てを飲み込む深淵の闇、思い知らなさい!!」

「太古からの恐怖、魂まで刻み込め!!」

闇の帳（後書き）

バトルとは切り離しましたので少し短めに。

誰もが一度は考えるルーミアによる異変。次回もやります。

初めの文は

夜、月は明るい光を放っている。けれども、ある日、光は消え、闇が夜を照らしたのだ。

妖怪の力は月の光が輝くにつれて大きくなってゆく。しかし、光が消え、妖怪の力は衰えてしまったのだ。

そして遂には日の光までもが闇に吞まれてしまった。

陰Ⅱ月光なんですけど調子を合わせる為に日光も陰にしていまいました。

黒に交わば黒

私とルーミアは向き直る。

先に仕掛けたのはルーミアだった。

ただ単純な踵落とし。私は難無く避けた。

ドンッ

避けた先の地面がクレーターになった。

ナンデスカ、コノイリヨクハ？

そんなに呆けている場合ではなかった。

足元が急に凹めば当然バランスを崩す。その間にルーミアは次の攻撃に移っていた。

「潰れろ」

闇で出来た空も覆う程の鎚。

それが私に振り下ろされた。

後に残ったのは拡大されたクレーター。

それを空から眺めるルーミアと私。

「ふう……、危ないな」

「気を抜いていいのかしら？」

私の背後に迫る黒。

私は割と本気で右腕で肘鉄エルボーを喰らわせた。

「ガッ……っ！」

そして盛大に吹っ飛んでいくルーミア。錐揉み回転である。

呆気ない。そう思った。

「あはは……ははははは」

背後から笑い声。見るとルーミアが不気味に笑っている。

「何かおかしいの？」

「私に触ったわよね？ 人に何かを聞いている余裕なんてあるのかしら？」

ルーミアが手を開いて、握った。

ぐしゃり

心地が悪い音とともに私の右腕がスプラッタ。

完全に盲点だった。

闇はあらゆるものを浸蝕し、その圧倒的力で全てを押し潰す。

質量はないのに無限の質量を持っているという矛盾を兼ね備えている、つまり、感覚としての闇（主に暗いと感じさせる）だけでなく、闇を生み出す環境（光を遮断する事）すら操れる事になる。

光は圧倒的重力からは逃げられない。

ルーミアは徐々にだが『闇を操る程度の能力』から『主に闇を操る程度の能力』に変わっているのではないだろうか。

下手すると負けるかも知れない。

……………そもそも勝敗の判断基準を設けていない。

「ねえ、ルーミア」

「何かしら？」

「勝ち負けはどうやって決めるの？」

「相手を戦闘不能にするか降参させる、ではダメかしら？ 私は言っただけよ。最低でも封印を弱めてもらう、って。今の貴女があの吸血鬼のせいで死なない事は承知なのよ」

「何で知って……」

「闇はどこにでも存在するのよ」

せんせー、ここにストーカーがいまーす。

「どうせ勝ち負け関係なく封印されるなら封印に条件を付けるのが
適当よね」

「そんなに封印緩めて欲しいんだ……。なら真剣にやらなきゃね」

「当たり前よ」

ルーミアが手を翳すと、その手に闇が集まり大剣を象った。

「それは？」

「私の愛剣、ストームブリンガー」

ドン、と地面に突き刺される。

ルーミアの背丈程の真っ黒な大剣。重厚さは感じられるものの、その色は光の反射も許さない黒だ。

「これ、ほとんど切れないのよ」

「意味なくない？」

「そのかわり……」

ルーミアが剣を木に向かって振るった。

「叩き切るのよ」

その木は粉微塵にされた。

「あの……、私、大丈夫かな？」

めっちゃ冷や汗出て来た。

「死なないんでしょう？」

にっこりと笑う。絶対幽香と同類だろ。そう思いながら、とりあえず手は回復しておく。

「いくわよ」

今度は私に振り下ろされた。

結界を集めに張ったはずだが、簡単に碎かれてしまったのでとりあえず横へ避けた。すると、剣を制止させ横薙ぎに切り替えられる。

「危なっ!!」

剣を支えとして身体を反そうと手を触れるとさらに手が闇に浸蝕される。

この剣……触ったらマズイ。

慌てて体勢を立て直し、闇を払う。

これは……触らずに勝てと？

「どうしたのかしら？防戦一方じゃないの」

「対等じゃないくせに……っ、よく言うよ」

「作戦よ。今まで陽奈が戦闘不能になった状態を見た事がないもの」
そう言いながらもさらに激しく片手で剣を打ち付けて来る。

「幽香同様に……」

ルーミアへの恐怖の供給を断ち切って……

「出来ないわよ。闇への恐怖は博麗大結界すら飛び越しているわ。
そんな膨大な大河をせき止められるの？」

ルーミアの源は闇。その根本は他よりも広く、強い。

「突っ立てると叩き潰すわよ」

本日二度目の巨大な鎚。

何度も同じ様にはいくものか。

「マスタースパアアーク!!」

幽香直伝マスタースパークで消し飛んでもらおう。

「本命はこっちよ」

「えっ？」

背後から声がした瞬間、私の身体が剣に貫かれた。

「呆氣ないわ。本気を出さずに負けるだなんて馬鹿ね」

私はその言葉が耳に入らなかった。いや、入ってはいたが認識出来なかった。

どろどろとした何かが私の中で混ざってゆく。

ダメだ。マザルナ。

無情にも混ざってゆく。

いくら不死にされているとはいえ、生命の危機には変わりはない。理性では抑え切れない生存本能が、妖怪の本能が私を呑み込む。

相手を襲え、喰らえ、そして力にしろ。

私はそれを拒否し続ける。しかし、確実に理性が失われてゆくのが分かった。

「ルーミア……、逃げて……」

「私は貴女に勝ったかまだ分からないもの。だから嫌よ」

「負け……でいい……から……」

「そんなの嫌よ」

まあ気持ちも分からなくはないが。

「それでも……お願い……だから……」

そしてルーミアの返事を聞く前に私は吞まれた。

陽奈が私に逃げる様に懇願して来ていた。

確実にストームブリンガーを陽奈の身体に刺したにも関わらず、陽奈は話し続けているので勝ちなのか分からない。

納得のいく降参はしてないし、戦闘不能かは不明。

お願いだから、と言ったきりずっと黙り続けている。

ふと、陽奈が無言でリボンを外し始め、外したそれをどこかへしまった。スキマとかいう場所なのはだいたい分かる。

それからゆっくりと剣を身体から抜いて、滞空した。

私はただ呆然としていた。

陽奈の形をした何かを見ていると錯覚していた。

「っ!？」

突然、陽奈の存在感が変わった。

朱い目と髪は見慣れているものの、可視化する程のどす黒い妖気を

纏っていた。

逃げなければ、と本能から警鐘が鳴り響く。

「私と戦うんじゃないの？私を楽しませてよ」

恐ろしく響く声。

陽奈の声だ。

けど、陽奈の台詞じゃない。

陽奈は戦いを心からは楽しまなかった。

「いくよ」

陽奈が呟いた瞬間、私の左腕が砕けたかのような状態に変わった。

「次は足を壊してあげるよ」

この力は……、あの吸血鬼の妹のものだ。闇を介して覗いていたが、いざ直面すると……、厄介極まりない。

私は剣で陽奈を止めようと切り掛かる。

ミシッ

「危ないなー。こんなもの壊しちゃおう」

陽奈は手でそれを掴んで防いでいた。

そしてそのまま握り碎いた。

闇だけで作った剣だからまた作れる。

けれどあの果てしなく無限大の重さの剣を片手で受け止める陽奈が怖くなった。

一本では足りない。

私は再度ストームブリンガーを右手に、そして再生した左手にモーンブレイド―ストームブリンガーの姉妹剣で少し見た目は違うものの同性能の剣―を握りしめた。

そして陽奈に接近、乱舞する。

けれど回避され、時には碎かれ、有効打を与える事が出来ない。

「そろそろ攻撃するかな」

回避しながら手に妖気を溜め始めた。大技ならばと私は大きく下がる。

「うーん、技名とか考えておけばよかったかな？まあ、いいか」

そんな拍子抜けな言葉とは裏腹に放たれたそれは視界いっぱい黒い妖気の奔流だった。

咄嗟に闇を拡げ、盾の代わりに全身を包んだ。

けれども関係ないと言わんばかりに闇を吹き飛ばして私を巻き込ん

だ。

外傷は……ない？

そう気を緩めた瞬間だった。

「うっ……」

思わず呻いてしまう。

あらゆる病気や痛みを体感している、としか表す言葉がない程の錯覚。そう、錯覚だ。分かってはいるが身体があるはずのない痛みに反応していた。

意識すら失えない。

声にならない声だけをあげ続けた。

朦朧とする景色の中、陽奈が近付いて来たのが分かった。

それからふわりと私の前に舞い降りると

ぽすっ

私を襲っていたすっかりと痛みが消え、糸が切れた人形の様に私に倒れて来た。

戸惑いながらも受け止めると規則正しい呼吸音が聞こえた。

「疲れた……のかしら？」

しばらく私はそのまま陽奈と一緒にいた。

「んう……、あったかい？」

「あら、やっと起きたのね」

目が覚めるとルーミアの腕の中にいた。

「私は……寝てたの？」

「そうよ。私の前に来た途端に倒れるんだもの」

あんまり鮮明に覚えてはいないが、断片的に思い出して来た。

私はあの後自分で自分が分からなくなって、考えている事とは裏腹に、自分の身体が欲している事に忠実になってしまっていた。

意識的に妖気を解放して、一撃一撃に並の妖怪分以上の妖力を込めてルーミアに圧倒的大差を付け、あらゆる恐怖を凝縮した黒い妖気の奔流をルーミアに浴びせ、動けない所までとどめを刺そうと近寄って……、それから覚えていない。

ただ、自分でも驚く程に身体が自由だった。思った通りに身体が動いたのはよく覚えている。

「陽奈？」

「えっ？ ああ、何？」

「私の負けよ。ひと思いに封印してちょうだい」

「でも何か腑に落ちない所があるというか……」

あれが私なのかどうか……。

「それでも私は確実に負けているわ。完全にとどめは刺せたのに刺さなかったじゃない。だから私の負けよ」

「納得は出来ないけど？」

「そうよ。確かに陽奈は降参紛いの事をしたけれど私を守る為でしょう？ それは降参とは認めないわ」

ルーミアは私が“暴走していた”のが分かっているのだろうか？ いや、知っているのだろう。

「それに……いつもの陽奈じゃなかったもの。私は今の、普段の陽奈に勝ちたいのよ」

「まあ……、あれもたぶん私の一面なんだけど……」

ルーミアが顔をしかめた。

「意思はあったというの？」

「一応自分で考えて行動してたよ。思考が戦闘^{バトル}狂^{ジャンキー}みたいな感じに傾いてたけどね」

「なんで……」

「ツケが返って来たんだよ……。生まれてからまともに……取って喰う様な事を目的に人を襲った事をしなかったから……。死に際になつてさ、初めて素の妖怪の面が現れた、って感じ？」

「今までずっと……。それに比べて私は……。いいわ、陽奈、私の人が辛うじて襲えるくらいまでに封印してちょうだい！」

「とは言われても……。そこまでの霊力はないし……」

「そもそも妖怪で人並みに持っているのがおかしいわ」

それは重々承知です。

「それはともかくさ、力が足りないんだって」

「そうね……。何か代わりに使える力はないのかしら？」

霊力の代わりねえ……。ない事はない。

「その顔はあるんだけど使いにくい、って感じね」

顔に出ていたらしい。

「あー、うん。使い慣れないし……」

「ならお得意の式を使えばいいじゃない」

「得意なんじゃなくて最大限に発揮出来るだけだから」

札とかを使う場合は、既存の術の殆どが妖怪を感知する事を発動の鍵にしている為、私が使うと暴発する。

だから、その為に予め手を回す必要があるので力を十分に注ぐ事が出来ない。

かといって、オリジナルの術を使うにしてもそんな都合のいい事はなく、複雑にすればする程霊力も持って行かれるのは当たり前。

私が境界やら封印やらを弄って妖怪として反応されなくするのも、それに意識を割く必要があるからダメ。

ならば発動の鍵が感知式でなければと思うが、そもそもそれらは弱い牽制用レベルだし、式も単純で、どう頑張っても小妖怪の撃退くらいまでしか創作が出来ない。

そんな理由から私は好んで式を使う。私にとって霊力を扱うのは主力にはなり難い為に多用はしないからだ。

「まあ、いいわ、さあ」

「待って、そんなに早くなんて出来ないから」

そして、式を作るのは簡単ではない。

「数日時間をちょうだい」

「まあ、それもそうよね」

「そういえば霊華は？」

「帰ったわよ」

「そう……。やっぱり気に食わないわ」

家で紫に事情を説明、しばらくルーミアも泊める事にした。

ちなみに紫が気に食わない理由はルーミアがいる事。

「うるさいわね、スキマババア。黙って寝てなさい」

「誰のせいで……っ」

明らかに互いに敵意を丸出しにして睨み合っている。

「貴女を闇に落としてあげましょうか？」

「スキマツアーに案内して差し上げましょうか？」

「「やってみなさいよ!」!」」

火花を散らしながらも結局は互いに行動していない。

まあ、仮に行動したら家主が黙らないけど。

とりあえず、妖気を解放して……

「……黙ってろ、ガキども」

「「すみませんでした!!」」

うるさくて集中出来ない。

それから数日が経って式は完成した。

ルーミアも闇を少しずつだが引っ込めていった為、外は日の光が差していた。

「弱くなったからって理由で死ぬんじゃないわよ」

「死ぬ訳ないじゃない。それにまだ封印すらされていないのよ? そっちこそ、式に任せっきりでダラけて弱くならないようにしなさい」

よ」

「余計なお世話よ」

「そっちこそ」

相変わらずな様だが二人は笑い合っていた。

数日前まで犬猿の仲だったのに……。

「まあ、一生会えないとかじゃないんだからさ、二人とも気を抜いて」

「「それもそうね」」

なんだコイツら気持ち悪い。

「それでこれからルーミアに封印を施す訳だけど……、紫に少しお願ひがあるんだけどさ……」

「何よ」

「私が幻想郷の外と繋がる様に境界を弄れないかな？」

「何でよ」

「作ったけど……、私の霊気を全て霊力に使っても全然足りないくらいで……、その……、神様の力、まあ、神力を霊力の代わりに使うから……、何でか知らないけど外で私への信仰があるから保険みたいな感じで繋げて欲しいんだけど……」

「やっぱり陽奈は神様なのかー？」

「まあ、一応そうなるね」

何故ルーミアが聞いて来たのかは不明だがスルーしておこう。

「貴女が自分で境界を弄ればいいじゃない」

「そこまで気が回らないから頼んでる」

「どこまで複雑な式なのよ……」

「説明しようか？まずは……」

基本的なルーミアの妖気を抑える

感情的なルーミアの妖気を抑える

闇を操り難くする

闇の中での視界を悪くする

第六感を鈍らせる

妖気での身体強化にリミットをかける

ルーミアの食欲を抑える

殺気も抑える

筋力諸々身体能力を抑える

自己治癒能力を低下させる

身体的耐久性を低下させる

高度な感知の術にもルーミアが弱いと錯覚させる

ルーミアだけでは式を外せなくする

あらゆる術から式を守る

リボンを媒体として式を圧縮する

e t c ……

「凄いわね……」

「私はそれで生きられるのかー？」

「ルーミアは封印すると小妖怪か中妖怪程度になる予定だけど」

「そーなのかー」

やけに脳天気だな……。

「で、紫は手伝いしてくれるの？」

「勿論よ」

私たちは博麗神社のある山の麓の森の少し開けた場所に移動した。

私の家では狭いので式が描けない事に加えて、魔力に満ちた魔法の森という環境では魔力的干渉が考えられるからだ。

私は予め作っていた式を（さすがに面倒なので）霊術を駆使して地

面に掘った。

直径5 m程の円の中に正確にびっしりと文字や曲線や記号が書かれていて、その中心には一人分の小さな円がある。

「じゃあルーミアは真ん中の円に、紫は円から十分に離れて」

私は二人が移動したのを確認してからルーミアにリボンを髪に結ぶ様にと渡す。

ルーミアがリボンを付けたら紫に境界を弄って貰う。

少のだが信仰が流れて来たのを感じたので少しずつ式に力を注いでゆく。一気に注ぐとパンクしてしまうのでゆっくりと。

ほのかに光を放ち始めたら次は一気に力を注いで発動させる。

恐ろしい程に神気を奪われてゆくのが分かる。それを全て靈力に互換させているのだから靈力換算ならば鬼や博麗の巫女でも奪われ過ぎて卒倒する程であろう。

そんな式が一層強い、しかしどこか優しい白い光が視界を埋め尽くした。

一際輝いた後、光は徐々に収まり、完全に消えるとルーミアが立っているだけであった。

それから……、ルーミアは放浪する範囲をかなり狭めた。力もそんなに出ないので広範囲を徘徊する気もないらしい。

のんびりと今後の妖怪ライフを満喫するとかなんとか。

お前は現役退いたスポーツ選手か、と突っ込みたくなったが。

もうこんな異変は懲り懲りだ。

願わくはもう異変があらん事を。

そのような『まだ異変が起こるフラグ』を立てながら、私は帰路に着いていた。

黒に交わば黒（後書き）

終わると思っただか！！

まだ続きます。

彼女の存在を忘れちゃいけませんから。

とある獣の場合

「じゃあ私は犯人を探しに行くから慧音を頼むぞ、妹紅」

「智音こそ無茶するなよ」

「母上、無理はなさらないでください」

「ああ、分かっている」

里の守護者としても犯人を突き止めなければな。

「はぁ……はぁ……」

身体が重い。

しばらく探していたが見つからず、さらには身体が鉛の様に重く感じられた。

やはり……限界か……。

残りの力を振り絞り、里へと帰還した私は

「早かったな、智音」

「もこ……う……」

そのまま倒れた。

目覚めると布団に寝かされていた。

「大丈夫ですか、母上」

「慧音か……」

私は起き上がる事も出来ず、霞んだ視界で娘を見つめた。

「今、皆さんを呼んで来ますので」

「慧音、待て……」

「はい」

「大きくなったな」

私は娘を久しぶりに撫でた。
小さな頃はよくしたものだ。

「いきなりどうなさって……」

「済まないが皆を呼んで来てくれ。最後に話したい」

「最後……ですか？」

「ああ」

私もそろそろか……。

娘が妹紅と陽奈と、何故か八雲も連れて来た。

「智音さん、何があったのさ！」

陽奈が私に聞いて来た。彼女が異変を解決したのは少し前に娘から聞いていた。

「貴女……、まさかとは思うけど……」

どうやら八雲は気付いた様だ。

「そうだ……。私はもう永くない。慧音を身籠る少し前からだが私の力は、存在は衰え、身体も衰弱していった。私はそれを能力で隠していたんだ。けれども力が衰えるにつれて隠せなくなり……。この様だ」

「そんな……。母上が……」

「慧音！嘘だろ！？」

二人の顔すらぼやけてしまっている。

「残念ながら……。現実なんだ」

「じゃあ、私は帰るね」

「私も帰るわ」

「ちょっと待てよ！」

「いや、妹紅、いいんだ」

「慧音が言うなら……」

陽奈と八雲は私たちだけにする為に帰ったのだろう。その心遣いだけで私には十分だ。

「さて、妹紅。お前は慧音と共に里を守ってくれ。あの子は私と似て無茶をするからな。そして良き友であってくれ。人間は一人じゃ生きて行けない。慧音も半分はお前と同じ人間なんだ。慧音を任せろ」

「ああ……、任された」

「そして、慧音……」

「はい、母上」

娘が妹紅と替わり枕元へ寄って来たのを確認してから口を開いた。

「お前も……妹紅と里を守ってくれ。そして無理にとは言わないが私の後を継いで欲しいんだ。寺子屋も任せるからな」

「ですが……」

「大丈夫だ。今のお前なら、な。別に私に少しくらい劣ったとしても問題はないんだ。お前はしっかりやれる。自信を持って」

私は娘の頬の涙を指で拭った。

「せめて、私の前ではもう泣かないでくれ」

「はい……」

私は娘のしっかりとした顔を確認するとそのまま眠りについた。

気が付くと私は河原に立っていた。いや、正確には漂っていた。

「おや、珍しい客だねえ。ほら、こっち来な」

渡し守の死神が私に話し掛けて来た。

「すまないな」

「あんた珍しいね。死人に口無しって言うんだけどねえ」

「私は人間じゃないからな」

私は船に乗った。

「本来は仕事をサボりたいんだが……」

彼女は小さく溜め息をついた。

「じゃあどうして私を？」

「ハクタクがそろそろ死ぬから必ずすぐに連れて来い、って上司命令だよ、上白沢智音、だったか？あたいは小野塚小町ってんだ。これからよろしく頼むよ」

驚いた。既に知られていたとは。

「とはいってもすぐに別れるだろうがな」

そうこうしている間に彼岸に着いた。

「四季様はここから真っ直ぐ行けば建物があるから中に入って鬼から番号札を貰いな。しばらくすれば呼ばれるから、そしたら番号札を渡して入るといい」

「丁寧にありがとな」

「これもあたいの仕事だからね」

しばらく進むとあった建物に入り、中にいた鬼の元へ向かった。

「番号札だ」

「確かに受け取った」

「ところで「ついいか?」

「何だ？」

「お前から陽奈の妖気の残り香がかなり感じられる」

「まあ、知り合いだからな。君は……」

「紅蓮だ」

「紅蓮は陽奈の何なんだ？」

「旧友だ。生前世話になった」

「生前？」

「気にするな、数億年前の事だ」

「そうか」

そこまで私たちが話していると一人の女性が来ていた。

「紅蓮、今日は終わりや。先にあがっていいで」

「すまないな。では彼女を任せた。おそらく小町が頼まれた人物だ」

「そうなんか？ こまっちゃんはまだ当分の間は仕事せえへんな……」

「俺が叩いて来よう」

「そか、任せたで」

私は彼らの会話を黙って聞いていたが、あの死神が些か不安になって来た。鬼に叩かれて大丈夫なのか、と。

同時に自業自得だとも思ったが。

「待たせてすまへんな。智音さんやったか？私は都っちゅうんや」

「こちらこそ。都も紅蓮も小町も、これから旅立つ私に自己紹介をする意味はあるのか？」

「陽奈さんには世話になったからや。だから陽奈さんの知り合いにも親切にすべきやと思うとる」

「そうか。ということは都も陽奈の知り合いなのか？」

「都も、ちゅうんなら紅蓮は言うたんやな。陽奈とは死に別れたんや、数億年前に」

「陽奈はどれだけ長生きなのかはよく分かった。出来ればもう少し陽奈の事も知りたいな」

陽奈の膨大な歴史には興味があるからな。

「心配せえへんでも後で教えたるで。せやから早う閻魔ちゃんのところに行ってき」

私は都の言葉に若干違和感を覚えながら奥へと促された。

「有罪！断罪！地獄行き！次の方！」

閻魔がそんなのでいいのだろうか……。

「名前を言いなさい」

「上白沢智音だ」

「分かりました。貴女は後回しです。待合室に戻って待っていてください」

私は言われた通りに戻った。

待合室が私だけになった。

「どうして私は後回しなんだ……」

「お答えしましょう。貴女に旅立って貰うのは我々として惜しいのです。ですから、まあ貴女に最終的の意見に従わざるを得ませんが

……」

閻魔が一枚の紙を取り出した。

「ここで働きませんか？」

後に渡し守の死神が

「四季様が増えた」

と言っていたとか。

とある獣の場合（後書き）

これにて異変は終わりです。今回はずっと智音視点でした。

苦勞人、魂魄妖夢（前書き）

いや、妖夢が自機になるらしいので。

はい、書きました。

苦勞人、魂魄妖夢

私の名前は魂魄妖夢。白玉楼の庭師にして剣士の半人半霊です。白玉楼の主である西行寺幽々子お嬢様に仕えています。

私の祖父である先代、魂魄妖忌が失踪して以来、私が一人でお世話をしております。

これから話すのは私の身に降り懸かった奇妙なお話です。

ある日、私は冷蔵庫の中身を見て絶望しました。

「空っぽですね……」

昨日買った食料が全てなくなっていました。幻想郷では珍しい海の魚もたくさんありましたのに。

ここ最近、冷蔵庫に限らず食べ物忽然となくなるのです。

先代ならどうやって切り抜けるでしょうか……。

「とりあえず買いに行きましょう」

今なら朝市もやっているでしょう。

「いらっしゃーい。妖夢ちゃん、またお魚かな？」

「はい。また海の魚でお願いします」

私はいつも通り、生鮮食品店で魚を買います。このお店は冷凍して売ってくれるのでありがたいです。

「いつもボクの店を最員にしてくれてありがとねー」

「いえいえ、こちらこそ。ところで先日いただいた鮪という魚は切り身でしか売っていないんですか？」

幽々子様も絶賛していた魚です。何故、切り身でしか売ってくれないのでしょうか……。

「うーん、一応あるけど……、一匹250万くらいだね」

「な、なんなんですか!？」

余りにもぼったくりです。そんな魚一匹にしては高価過ぎます。

「君さ、鮪知らないでしょ」

「はい、お恥ずかしながら……」

「しょうがないな……、ちょっと待ってて」

六花さんが店の奥に姿を消してしまいました。

私がしばらく待っていると、抱えられない程大きな魚を六花さんは持って来ました。さすがは妖怪、力持ちです。

「これが鮪。捌くには特殊な技術がいるんだよ」

……こんなに大きいのが鮪なんですか？

「これで普通の大きさだからねー。ちなみにあの切り身って陽奈が切ってくれたのだからね」

「そうなんですか……。では陽奈様に教えて貰う事は出来るでしょうか？」

「たぶん大丈夫じゃないかな？」

「じゃあ陽奈様の家に向かうので荷物預かって貰えますか？」

「いいよー。ちょうど切り身も少なくなってきたし、よろしくー」

私は六花さんに食べ物を預け、魔法の森へ向かいました。

魔法の森に着きましたが……、

「とっても危なそうです……」

噂に聞いた通り森からたくさんの奇声やら悲鳴の様な音がして、怖くて入れません……。

空から探す為に空へ飛びます。

「なかなか見つかりませんね……」

森が歪んでいますし……。あれ？森って歪むでしょうか……？

「はっ！」

いつの間にか気絶していた様です。それにしてもここはいつたい……。…。

知らない天井ですね……。

「お礼を言わなければなりませんね……」

ガラッ

「あ、起きてた？」

「陽奈様!？」

「うん? そうだけど。妖夢が空から降って来てビックリしたよ。どこぞの烏天狗みたいだよ……」

ここって陽奈様の家なんですか……。

「そうだ! 鮪の捌き方を教えてください!」

私は土下座しました。

「いいけどさ、どうしたの? 唐突に」

「幽々子様に味わって貰いたく……」

「幽々子っていっぱい食べるもんね」

「そうですよ……って本当ですか？」

「えっ? 知らなかったの?」

「はい。最近食べ物忽然と消えたり……」

「うん、幽々子が原因だ」

まさか……でも……

「幽々子様がそんな事をするとは思えません！」

さすがに幽々子様でもそれはないはずです。

「それじゃあ覗いてみよっか」

陽奈様が空に手を滑らせて紫様の様にスキマを……

「スキマ!?!」

「あー、私も開けるの。ほら、見てみなよ」

スキマの向こうに幽々子様が見えます。

「よおーむうー、どこー？お腹空いたわー」

私を探しながら台所を漁っている幽々子様がありました。

「妖忌はこれを防ぐ為に半霊で見張って料理してたし、食材も残らない様に大量に作ってたからね……。普段も屋敷への不審者と台所への不審者の気配を察知してたし」

せ、先代って……。

「じゃあとりあえず六花の所に行こつか。鮪ってそこにしかないし」

「あ、はい」

六花さんの所で鮪の解体（捌くよりこちらの方が適当です）を習い、私は鮪とともに白玉楼へ帰りました。

「幽々子様、帰りました！」

「よーおーむー、ごめんなさーい。ご飯作ってえー」

「はいはい、今作りますから」

「ふう……たくさん作りすぎましたか……」

船盛に刺身にそれから炒め物に……。

「幽々子様、出来ましたが運べないのでこちらへ来てください」

「わかったわー」

ふよふよと幽々様がいらっしゃった。

「いただきます」

「「ごちそうさまでした」」

私は食器などを片付けます。まさか船盛を食べ切るだなんて……。

「そういえば幽々子様、今まで食事が少なくすみませんでした」

「そおーよー。今日くらいがいいわ」

「はい。朝昼晩に間食二回に夜食を付けますから。ただし……、漁
つたりつまみ食いする毎に減らしていきますので」

私は皿洗いが終わって手を拭きながら忠告します。

「うっ……分かったわ。妖夢ごめんなさい……」

「ああ、ちなみに材料は減ったらすぐに分かりますからね」

これ以来、幽々子様のつまみ食いは少なくなりました。

そして食べ物もそんなに減らなくなりました。

ものはだいじに（前書き）

異変です。なんだか長引いてしまつてあと数話は続くかも。

ものはだいじに

世は流れ、万の物が跋扈せば数多なる物々打ち捨てらるる。然れば物々畏れに因りて妖きものになるなり。

私は外の世界で買い物を楽しんでた。服装を見た目相応のものにしてみたらずに笑われ、むかついたので紫も連行する事にして。

まず花屋へと赴き、幽香へのお土産に種をいくつか購入する。お金は紫の財布（何故か持っていた）から拝借した。

次にデパートで様々な文房具を購入した。これは寺子屋の為。紫も快くお金を出してくれた。

「外の世界も……変わったわね」

紫が唐突に呟いた。

「これからもっと変わるよ。今では考えられない様なものも出来る様になる」

「その根拠は？」

「長年の勘？」

「年寄り臭いわよ」

「そっちこそ胡散臭い」

私たちは笑い合った。

しばらく通りを歩いていると明らかに時代遅れ——いや、この時代なら時代遅れではないのかも知れない——なバンダナを巻いたり、変にスカーフとか付けてる奴らに声をかけられた。

「ねえ、そこのお嬢ちゃんたち、ナウい俺らと……」

「お断りしますわ」

「同じく」

こういう輩はいつの時代でもいるのだ。

「その小さなお嬢ちゃんも固い事言わずにさ、ねえ」

「君らって親子？姉妹？」

「友人ですわ。私たちを誘ってどうなさりやがるのですか？」

あ、鍍金が剥げて来た。よく見ると、微笑む紫のこめかみに青筋がうつすらと見える。

「私たちの年を考えてほしいよね……。ねえ紫」

「君は紫っていう名前なんだ。可愛い名前だね」

更に紫の青筋がくつきりしたのが見えた。私ですら悪寒が走ったくらいだから紫には鳥肌ものだろう。

「君らって何歳なの？」

なんか失礼な奴もいる。

男は4人、こちらは2人。

「私は永遠の16歳よ！」

痛いよ、見てて痛いよ、紫さん。

「私はだいたい10くらいかな？」

ゼロを8つくらい鯖を読んでおく。

「俺は黒髪の方が好みだなあ」

「俺は金髪のねーちゃんだ」

私たちはたじろいだ。

「あの……、私が好みって……、幼女性愛者？つまりロリコン 紫は見た目よりは相
当年くってるし」

「そうですね。陽奈が言ってしまったのだけれども、私はもう貴方
がたには相応しい年齢ではありませんわ」

ごめん、紫。お願いだから顔を引き攣らせないで。

「ですから、年若い陽奈を今のうちに手込めにするのはいかがかし
ら？」

えっ？

「そうだよな、割と大人しいし」

「状況を理解出来る頭もあるようだしな」

「そうですね。秀才な友を持つのは実に誇れますわ。ですから経
験も積ませるべきだと思いますの」

おいおいおい、待った。何故紫の話を鵜呑みに……、境界を操られ
てますね、はい。

経験？何の経験だよ……。

「普段は清楚でも時にははしたない女性も浪漫じゃありません？小
さいうちに仕込めば……」

・・・

ナニの経験？

いやいやいやいや、私は今後誰とも寝る予定なんかないし、生涯界人だけと思ってるし。

「ただし、簡単に友人を渡す馬鹿ではないですわ。これから質問を一つしますわ。その答えによっては私もお手伝い致しますわ」

「いいぜ！」

紫が口を少し吊り上げたのが見えた。何か企んでいる顔だ。

「貴方を食べていいかしら？」

「いいぜ、やってみろ。俺が食べてやるぜ」

彼の生涯は幕を閉じた様だ。

彼は性的に捉えた様だが、紫は比喻でもなく食べる事だ。

「ありがとう。さて貴方たち、私たちは妖怪、つまりは化け物なですよ。食べるというのは私のお腹に入って貰う事。騒いでも無駄よ。周りの人は私たちを認識出来ない」

境界を弄ったのだろうか。男たちが何をしようと影響も出ない。

「最後のチャンスあげるわ。陽奈をこれから一分以内に捕まえられたら逃がしてあげる」

なんで私なのかなあ……。まあ、逃げますか。

ぶっちゃけ飛んだら余裕でした。

男たちは敢え無くスキマへ。

「陽奈、スカートの中が見えてたわよ」

「ばっ、ばか！早く言ってよ」

ああ、恥ずかしい。

またしばらく紫に着いて歩いていた。

「どこに行くの？」

「じきに分かるわ」

紫は私に付き合う代わりに私をとある場所へ連れて行きたがったので従う事にした。

「ここは？」

「老舗の道具屋よ。この主人に頼まれ事があるの」

うん。道具がたくさん無造作かつ整頓されて置かれている。

「ごめんください、店主はいらっしゃるかしら」

「あ、はい。おられますので少々お待ちを」

紫は10代前半くらいの眼鏡を掛けた子供に事を伝えた。いや、果たして子供か。

「紫、さっきの子供ってさ……」

「ええ、半妖よ」

そう、妖気が微弱ながら感じられたのだ。

「まだ妖怪が残ってるってこと？」

「そうなるわね。それより、どうやら店主が来たみたいよ」

奥から大柄な男性が出て来た。

道具を運んでいるうちになったであろう逞しい肉体は思わず見取れてしまいそうになった。

「八雲さん、そのちっこい餓鬼は誰だい？」

存外失礼なおっさんである。

「友人ですわ」

「ではこいつも妖怪か？」

「そうですわ」

「ちょっと、紫、説明してよ。なんで妖怪やら何やらこの人は知ってるの？」

既に忘れられているはずなのに。

「それは彼が幻想に関わってしまったているからよ。道具というのは忘れられてゆくものもある。それを回収するのが私の役目。放っておくと妖怪になってしまうわ」

そういえば昔に唐傘お化けを見た覚えがある。

「それじゃあ幻想郷に持ち帰るはいいとして、どこにそれを置いておくの？」

「今までののは私の家の倉庫に入れてあるわ」

のは、って何だ、のは、って。

「そこで何か置き場所がないかしら？」

「家にはない」

「そうよね……」

どうやら紫の目的は妖怪を増やす事らしいから私の家ではダメだ。魔法の森の比較的奥地な為に魔力的な影響は計り知れない。当然、行く末は妖怪ではない何かになるであろう。

「まあ、後の事は後で考えろって。ほら、お嬢ちゃん方、あがりな」
おっさんに促され、私たちは店の奥の居住スペースへと足を進めた。

「そういえば嬢ちゃんの名前を聞いてないな」

お茶を出されてすぐに名を聞かれた。

「私は白嶺陽奈。こう見えても紫よりも長生き」

私は少し誇らしげに胸を張った。虚しいのは分かるけど……ね。そこ、小さいとか地平線とか言うな。

「嘘言うなって。近所の餓鬼といい勝負だろうが」

がはは、と彼が笑う。その気持ちは分かるが素直に受け止めたくはない。

「陽奈は嘘は言ってますわ。言う必要もなく、意地も張りませんわ」

「いや、意地は張るけど。ああ、あれか、紫は胡散臭いから見た目より老けて見えるのかも知れないね。見た目は若いのに……」

「そうだよな。黙ってりゃ別嬪さんなのにな。勿体ないよな、ちびっ子」

彼はうんうんと頷きながら口に出す。

「勿体ないよね、やっぱり。あと、ちびっ子言うな」

私も彼同様に頷く。

「……話がそれていますわよ」

少し曇った声で不機嫌に呟いた。

逃げたか。

「そうだったな。陽奈ちゃん……でいいかい？ どうして連れて来られたんだ？」

陽奈ちゃん……か……。このおっさん面倒臭そうだし……。妥協するしかないか。

「あ、うう……。陽奈ちゃんでもういいや……。紫の目的は心を読んだりしない限り分からないから。どうして私を？」

私は紫に尋ねた。

「貴女の言動が気になっていたのよ。本気になる前に必ずといっていいくらい、周囲の小妖怪に気を配っているわよね。近くにいと消滅する、と」

「ああ……、確かにそうだね。弱い妖怪ってさ、恐怖そのものに近いかから私の本気を出そうとすると周囲の恐怖と一緒に引き込んだじやって存在を危なくさせちゃうんだよね……」

昔、人間との戦争前に一回しちゃったおかげで戦力が減少した苦い経験がないことはない。鬱陶しい雑魚を掃除するのにも使ったけど。

「詰まるところ、逆の事をして妖怪を増やせないかしら？」

「人間を妖怪にしたことはあるけど……、ものは分らないよ。でも、仮に出来てもしない。私がやると能力持ちになって幻想郷のバランスが崩れかねない」

能力持ちの存在がたくさんいるのはよろしい事ではない。能力持ちは種類にもよるが使えるカードを余計に持っていることになる。

そんな者たちが一つの集まりに増えれば、天秤の如く、一瞬でバランスが危うくなり、とちらかが危うくなる。ましてや、妖怪というピラミッドの上部を増やすわけでよいことではないのは明らかだ。

「それは……、陽奈が教育すればいいじゃないの」

「嫌だね」

私はお茶を啜りながら断固拒否した。

「能力持ち、と言ったわよね。弱い能力ではダメなのかしら？」

例えば、ラップ音を出すとか、と紫が付け加えた。

「そこまで紫が言うのも珍しいね。じゃあいくつかの道具はやってみようか」

「あら、ありがとう」

「ただし、報酬をいくらか貰うよ」

「現金ね、貴女」

紫には言われたくはない。

「で、話は済んだかい？」

そういえば、おっさんがいたな。

「はい、全て引き取らせていただきますわ」

「そりゃあよかった。ところで一つ見てほしいのがあるんだ」

私たちは促されて倉庫へ移動した。

「これだ、これ」

持ち出されたのは木製の箱だった。

「こいつは俺じゃ扱えねえ。気を強く保たないと危なくなるくらいヤバイ雰囲気滲み出てるんだ」

見る限りはただの箱だ。

「開けるぞ？」

箱が開かれるとその考えは吹き飛んだ。

溢れんばかりの狂気に禍々しい程に極上な恐怖が、そして妖怪に匹敵する程の妖気を持つ美しい刀があった。

おっさんの顔には玉の様な汗が浮かび始めた。紫ですら気を張っている様子だ。

「おじさん……？名前を聞いてなかったけど……、無理しないで蓋を一回閉めてくれない？」

蓋持つてるのは彼だから。

彼は無言で蓋を閉めてから大きく息を吐いた。

「俺は霧雨明夫^{あきお}っていう。さっきみたいにおじさんとも呼んでくれ。それよりも二人とも……、これをどうにか出来ないか？」

「私は無理ですわ。貴方ほどではないにしろ気を張らないと吞まれそうでしたわ」

紫があっさりと手を引いた。

「じゃあ……、私か」

「陽奈ちゃんは大丈夫だったのか？」

「びっくりしたけどね」

私は置かれた箱の蓋を再び開ける。ただし、結界を張ってだが。

「これってかなりの業物だね？」

「村正とかいう奴らしい。坊主が言ったんだ、間違いねえ」

村正って……まさかね。

「坊主って……さっきの子？」

「ああ、あの餓鬼は森近霖之助っていつてな、見た道具の名前と用途が分かるっちゅう能力があるらしいんだ」

「ふーん、それは便利だね」

私は刀を改めて見る。

村正といえば妖刀として名が広く知られている。業物の中の業物で使い手は負ける事がなくなるという程に。けれど血を吸い過ぎたの

か恐怖を孕み、いつしか持つ者が死を運ぶ様になったという代物だ。狂気が私を侵そうと絡み付くが全然効かない。ぬるい。

そして染み付いた恐怖。……美味しそうだ。思わず舌なめずりをしてしまう。

「刀を相手に舌なめずりって……、陽奈ちゃん正気か？」

スルーしておこう。

「この刀って私が引き取るけどいいよね」

「引き取ってどうすんだ？」

「力をいただく？だって……美味しそうだもん……」

ああ……、待ち切れない。

「それで無害になるならいいけどな」

「なったら譲るし。私には勿体ない代物だからね」

都さんあたりにでもあげれば使いこなしてくれるに違いない。けれど狂気も取り除かなきゃいけない。

「さて……」

私は改めて箱と刀を見る。

お札で中がびっしりと埋め尽くされていて、まるで緩衝材のようだ。

「陽奈、まさか……。やめなさい！」

紫は気付いた様だが耳を傾けずに刀を手取る。

。。。

「結構やばい……。紫、結界張って……」

「無事……。なのね」

「いいから張ってよ。これからリボン外すから」

「分かったわ」

ゆっくりと片手で赤いリボンを解き、片手では刀を握る。

紫が結界を張った様なので私は結界を自壊させる。

「ねえ紫、私にはこれ長くて使える訳ないよね」

「え、ええ……」

私の身長は八割はあるんじゃないだろうか。実際の刀って意外と長くて重い。加えて業物のこれだ。丈夫に作ってあるのか妖怪レベルに身体を強化しなければ私には持てない。

ちなみに私の地力は抑えると人間の八歳未満だった気がする。認めたくはないが。いつもは数割妖怪レベルだが外に来るからという理

由から妖氣を一厘ほどに抑えていたのだが、どうにも見た目相応より非力になってしまふ。たぶん握力とか6kgぐらいかも知れない。

余談はさておき、絶賛狂気に侵食されている。

「紫、ちよつと暴れるから」

「分かったわ。強度をあげればいいのね」

さて、狂気を飲み込みますか。

結界を強くしてから陽奈がしばらく黙ってしまった。私は不安でし
ようがない。あの狂気は陽奈でも耐えられるかどうか分からないか
ら。

「ふふっ……ふふふふ。あはははははははははは」

陽奈の笑い声が響いた。

狂った様に笑いを止めずに濁った瞳で私を見つめた。

「ねえ、紫。コイツ、私を操ろうとしてるよ。あはははははは、笑っちゃうよね」

結界越しでも感じられる狂気。それに呑まれない陽奈はいつたい……

…。

「操れると思ってるの？ やってみなよ。私にはただの刀に過ぎないからね。ふふふふふ…、あはははははははははは」

……陽奈も狂ってないかしら？

「ひ、陽奈？ 大丈夫？」

「あー、うん。正気は保ってないけど無事だよ」

言ってる意味が分からない。

「狂気は狂気で飲み込むのがいいかなって、ね」

どうやらこの狂気は陽奈のものらしい。

「もういいよ。十分食べたしね」

陽奈が自らのスキマに刀を放り込んでしまった。

「陽奈ちゃん、何を食べたんだ？」

「んー？ ……恐怖♪」

陽奈の笑顔はとっても爽やかだった。

さっきは狂ってましたね、私。

私はフランと違って狂気をあんなに器用に操れない。狂気に慣れていないから少し狂ってしまう。自分から狂気を出すのは辛いものだ。

「じゃあ帰るわよ」

「え、ああ、うん」

「じゃあな、また来てくれよ。陽奈ちゃんみたいな子供なら大歓迎だ。もちろん、八雲さんもな」

「ええ、また」

私たちはその後、魚を大量に買ってから幻想郷へと帰った。

魚は何に使ったか？

もちろん全部六花の店に卸した。

そんなこんなで紫の家である。

「藍、茶はいいわ。手土産でも用意してあげなさい」

「紫様、そんなに時間の余裕がありません」

これは紫に藍を押し付けたのは失敗だったかもしれない。
おそらく全部任せっきりと見た。

「紫、自分の家の仕事くらいしなさい」

「なによ、幽々子だって……」

「幽々子は紫と違ってしっかり仕事はしているからね」

自由奔放な幽霊の管理は割と面倒臭いらしいし。しかも死人に口無し、相手の主張は明確には分からないから余計に大変だろう。

「そ、それよりも倉庫に案内するわ」

「ここよ」

倉庫よりは蔵が正しいだろう。

「妖怪になっても無害そうな扇子とかから頼もうかしら」

紫がどこからか取り出した鍵で南京錠を外しながら言う。

「たくさんあるから探すのも手伝ってちょうだい」

「はいはい」

程なくして倉庫の扉が開いた。というか鍵を付けすぎでは……。

「何よ、これ」

「どうかしたの？」

私が紫に続いて見ると倉庫が空っぽになっていた。

どっきり大成功？

先日、紫の家の倉庫から大量の道具がなくなった。誰がどこにどんな目的でというのが全く不明。

「証拠はないかしら……」

「残り香があればいいんだけどね……」

妖怪が犯人ならば妖気が漂っているし、人間なら霊気があるはずなのだ。どんなに隠蔽しようとも二人で境界を操ってまで調べれば分かるはずなのだが、まるで痕跡がなかった。

「ねえ紫、道具って歩くっけ？」

「いくら幻想郷では外の常識が通じないとはいってもそれはないわ」

「だよね」

私はいくつか予想をしたのだ。その一つを紫に聞いただけに過ぎない。

「証拠隠滅が完全に来る能力とか？」

「里にいるわよね」

「慧音はそんな事をしないけどね」

そんな事したら私が頭突きをかますが。

「原因不明ならどうしようもないわね……」

「証人はなし……か……」

二人で溜め息をついた。

さて、完全に行き詰まってしまった訳でどうしようもなくなった私たちは調べ回る事にした。誰か知っているかも知れないという一縷の望みに賭けたい。

紫はどこに行ったか知らないが、私は紫が行かなそうな場所に向かう事にする。

という訳で初めは人里へ向かった。

「けーねー、いるー？」

寺子屋にアポなしで入り込む。休み時間なのは分かっているさ。

「なんだ、陽奈か。ちょうどよかった、これから武道の授業なんだが、指南役をしてくれる妹紅の相手をしてくれないか？」

そう言われて竹刀を渡された。

「えっ……？」

「どうせ暇だろう？よろしくな」

慧音に持ち上げられて、何故か寺子屋にある道場にいる妹紅の前に立たされる。

「妹紅、陽奈と一戦してくれ」

「的が小さくて面しか入らないぞ」

「私は面が妹紅に入らないんだけど……」

こんな事やってる暇ないのに。

「じゃあ乱戦でいい。本当の戦いを教えてやれ」

「「分かった」」

私たちは同時に竹刀を投げた。こんなものいりません。どうせ真剣でも壊れるし。

「あー、妹紅？私は用事があるから速攻するよ」

「私だって放浪している時は専ら肉弾戦だったからな。陽奈には負けないさ」

慧音が子供たちを少し離れさせた。

「じゃあ始めてくれ」

その言葉を聞くや否や、早速妹紅が向かって来た。

「燃えろ！」

火を纏った拳とともに。

「ちよっ……、危ないから！」

咄嗟に、軽く拳を受け止めてから勢いを利用して私を視点にして妹紅を投げてから、叩き伏せて脚を軽く踏んで骨を折って足を動けなくしてから、両足で手の平を踏んで地面に固定し、妹紅の腹に座ってマウントを取ってから、顔に両手でマスターパークをぶっ放した。

「陽奈」

「ん、なに？ けい……」

慧音に立たされて、両肩を掴まれた。

ドゴン

「うゝあゝ……」

頭突きされた。

「やり過ぎだ」

「私だったからいいものを……、一回死んだぞ」

妹紅が再生していた様だ。

「いや、反射的に……。幽香だとあれでも避けるから追撃がいるんだけどさ……」

「道理で……」

二人に溜め息をつかれた。

「それで道具の行き先が不明と」

「あ、うん」

改めて二人に話をしたのを慧音がまとめた。

「歴史を見れば何とかなるが今日はちょうど十六夜だからな……」

「私も残念だが分からないな」

慧音は半獣だからハクタクの力は満月じゃないと使えないらしい。
今日が十六夜ならば昨晚が満月ということになる。

「一日遅かったんだね」

「力になれずにすまないな……」

「いや、二人ともありがとう」

私は一旦引き返す事にした。そんな訳で家に向かうのだが……、

「陽奈ー、さがしたのだー」

ルーミアがいた。魔法の森の前に、だ。

「どうしたの？」

「森から追い出された。付喪神どもが攻めて来て……、博麗神社が拠点にされちゃった……」

「それは本当かしら？」

にゆるりと紫が顔を出した。

「陽奈には嘘つかないわよ、ババア」

「そうだったわね、ちび餓鬼」

「「ふんっ！」」

相変わらず仲が悪い。

だが構ってはいられない。

彼女の言葉が真実ならば由々しき事態だ。

「二人とも喧嘩してないでさ、ね。紫は先に行ってて。私はルーミアからもう少し聞きたい事があるから」

「分かったわ」

紫が再びスキマに身を投じた。

「それで聞きたい事って？」

「敵の規模かな。だいたい何者か……は予想がついてるけど……」

「あのババアは負けるわよ、たぶん。そうね……、敵は5つ。能力持ちだけでたくさん。の道具を持ち運んでいたわ。何に使うのか不明だけど……。ああ、それと博麗の巫女は幸い留守よ」

「ありがと。紫が負ける訳はないと思うけど急ぐ事にする」

「一つ言い忘れてたわ。私の能力は効かなかったの」

そう告げてルーミアは去って行った。

私が神社上空付近に着くと、一筋の雷光が空に消えていった。

「あれは……」

間違えなければマスタースパークだ。だが、幽香の力ではない……。

光が消えると人影が一つ地面に落ちていった。

「紫!？」

私は急いで飛んで、ぎりぎりで紫を受け止めた。

「大丈夫!？何があったの？」

「ひ……な……? あいつらは……危険よ……」

ずたぼろの紫が指差す方向には少女が三人いた。

「紫をこんなにしたのは君ら？」

「あたしは手伝っただけー」

「あかりさんに同じく」

「私がした……。正当防衛……」

三者三様の答えが返って来た。

「取り敢えず自己紹介といこうか。私は白嶺陽奈。君らを退治しに来た妖怪だよ」

「あたしは小田原あかり。一応提灯お化けなんだぞぉー」

浴衣の様な着物の十代半ばに見える紫短髪黒眼の少女が懐中電灯を振り回しながら言った。

お前は何故提灯じゃなくて懐中電灯を持っているんだ、と突っ込みたくなった。

「次はわたくしですね。箒木^{ははきぎ}はたきと申します。どうぞよろしくお願いいたします」

三角巾を着け、Tシャツに半ズボンのおっとりした感じで橙長髪橙眼の少女が箒を持ちながらお辞儀をした。
明らかに箒です、ありがとうございます。

「水野きさらぎ……」

最後に無表情な銀長髪碧眼の（博麗とは違って）普通の巫女っぽい服装の、しかし色は白と青の少女が、手に持つ手鏡を見つめながら言った。

名前か名字か分かりにくい。

「自己紹介も済んだし、あたしらの邪魔するならきさらぎちゃんが容赦してくれないよー」

「たまにはあかりさんも動いてはどうですか？」

「いつもと一緒に……」

ざっ、と水野きさらぎが前に出た。彼女だけは他の二人と別格だ。道具の妖怪なのだろうけど大妖怪クラスととれる。

「そいつは年齢不明、最大霊気諸々不明、『恐怖を操る程度の能力』があるから注意してねー。あと、リボンが封印の一種らしいから触ったら危ないかも知れないよー」

「分かった……」

……私、何も言っていないよね？

「そんな怖い顔しないでよー。種あかしをすると、あたしの『明るくする程度の能力』で見たんだよー。ある程度なら対象の相手の正体とか明らかに出来るんだー。もちろん暗闇も明るく出来るよー」

情報が読み取れる能力か……。それと今のルーミアなら能力が効かなかったも納得がいく。封印がなければ話は変わるだろうけど。

それでも完全ではないらしい。たぶん相手との力量差で程度が変わるのではないだろうか。

「よそ見……」

水野きさらぎが一瞬で私の懐に入った。そして拳を一発。

私はそれを受け止めたものの勢いが殺せずに打ち上げられた。

「とどめ……」

追撃に放たれる極太の雷。

「甘いよ！」

私はマスパで相殺して距離を詰めた。

「はたき、加勢……」

「分かりました」

いつの間にか後ろにいた彼女に箒で叩かれた。痛くはない。

無視して正面に猛攻する。相変わらず背後から箒でビシバシ叩いて来るが痛くはない。

「そんなものの……？」

段々と相手の動きが増して来た。防戦から稀に攻撃を挟む様になって来たのだ。
さらに一発が重くなってゆく。

「はぁ……どうして……」

体力の消耗が激しく感じる。

「いきますよ」

ドカツ、と腰を箒の柄で叩かれた。

すごく痛い。

思わず腰をさする。

「さよなら……」

その時、頭から石畳に踏み付けられた。

「弱い……」

ぐりぐりと足で地面に押し付けられる。

「何で……そんなに……」

「簡単です。私が『払う程度の能力』で貴女の妖気を削ぎ落として、きさらぎさんが叩いただけですよ」

「私は『映す程度の能力』で向日葵畑にいた妖怪の力を自身に反映させたに過ぎない……」

つまりは幽香と同等の力の持ち主と弱くなりながら戦っていた訳か。

「意外と丈夫だねー。きさらぎちゃん、踏み抜いちゃえ！」

「分かった……」

分かった……、じゃないよ。絶対重傷だよ。しょうがないから封印を緩める事にした。

私が頭を反らすとそこに足が減り込んでいた。

「危ない危ない……」

「避けられた……」

私は次が来る前に距離をとった。

「妖気が増えたー！」

「驚き過ぎではありませんか？ 先程倒した方の御友人であるなら実力を隠していても自然です」

「そっかー！」

コントっぽいのをしているが無視しておこう。

「まずは……提灯お化けから灸を据えてあげるよ」

私は“火に対する恐怖”から火炎を生み出す。

「ひいっ！」

「紙ってよく燃えるよね」

その火炎は蛇の様に彼女へと向かう。

彼女の顔が一瞬で恐怖に歪んだのが確認出来た。
道具の頃には紙であったのだろう。

「させない……」

突然割り込んだ陰に炎を防がれた。

「大丈夫!？」

「大丈夫……」

なかなかしぶとい……。

「よそ見をされていていいのですか？」

真上から箒が迫る。

「気付いていたよ」

私はそれを掴んで、ぶん投げた。

「隙が出来た……」

再び懷に潜り込まれたので、投げたエネルギーでそのまま回転蹴りを繰り出す。

「さすがに経験は幽香ほどではないんだね」

人が違うのだからそこまで同じではないのだろう。

「みんな、手伝って……」

私が蹴り飛ばした彼女は二人に鏡の光を反射させた。

途端に二人の雰囲気が少し変わった。

「何をしたの？」

「彼女たちにも例の妖怪の力を反映させた……」

……幽香三人？

洒落にならない。

「分かった。うん、もう分かった。面倒だし」

私はいいい加減リボンを解く事にした。

「遊びは終わりだよ」

指向性を持たせた恐怖を莫大な妖気とともにぶつける。

途端、彼女らは糸が切れた人形のように倒れた。

「まだやる？」

「予想外……」

「「きゅう」」

たった一名、意識がある様だ。

「でも……、お膳立ては済んだから……」

ふと、彼女の妖気が小妖怪程度になった。

「取り敢えずは戦う必要はない……」

足止めの理由は結局分からなかった。

神社へ入っても既にもぬけの殻であり、外に出ると彼女らもいなくなっていた。

ここで何をどうしてしていたのか、それはまだ分からなかった。

結局分からないまま、私は帰路に着いた。

博麗神社から山を下るのだが、日も暮れ始めた様なので歩いてのんびり帰る事にした。たまには妖怪らしく月の光も浴びておきたい。

「♪」

私は即興の曲を口ずさみながら整備されていない参道を進む。いつ失くなったのか覚えていない靴を惜しみながら、素足で砂利道を歩くと、痛いものの何か落ち着いて来る。

うん、草履でもいいから履こう。

前方に明かりが見えたので里が近いのだろう。里の人たちは里にいろ限りは襲われないので夜更かしするものが少し増えた気がする。

そんな事も考えながら歩いていたが、突如として光が消えた。目が慣れず、しばらく視界が暗い。

その時だった。

首筋に何か冷たいものが這った気がした。気のせいかと思ったが首筋が何かで濡れていた。

振り返るも誰もいない。探っても引っ掛からない。となると……

ぬるり

「ひう！」

生暖かいねっとりした様なものが私の服に背中から入り込んだ。そしてそのまま這いまわる。

「んや……、うう……。あ、そこは……。だ……。んんっ！」

こそばゆくてぬるぬるして、だが抵抗しようにも力が入らない。

「んあっ！……ふにゃあ！………あれ？」

ふと、おさまったので私は後ろを見た。

「驚けー！」

正面にあるのはでっかい目玉。

「……」

「……」

「いやあああああああああ!」

私はらしくもない悲鳴を上げたと思いながらも意識が吹き飛んだ。

目を覚ますと記憶にない天井が目映った。

「師匠、目が覚めたんですね!」

私が師匠?

「えっと……、誰だっけ?」

「わちきの事を忘れたのですか?」

わちき……、師匠……、うーん思い出せん。

「こ、これで!」

青髪オッドアイの彼女は目玉と長い舌がある紫色の唐傘を取り出した。

「……」

「思い出してくれましたか？」

「あんたが犯人か！」

小屋の中で大きな殴打音が響いた。

「痛い……」

「痛くしたの！」

今、少し広い部屋で今回の事件の関係者たちを正座させている。

痛い、とか言ったのは唐傘お化けの多々良小傘。

そのほかに、提灯お化けの小田原あかり、化け箒の箒木はたき、鏡の宿神の水野きさらぎ、そして、鍵の付喪神である金髪黒眼の要一かなめい門、いずれも少女。

事の真相は紫が道具を集めた点にあった。

道具は九十九年で付喪となり得る。要一門がちょうどその年となり、付喪として目覚めた。

そして彼女は『鍵を操る程度の能力』により、道具の山から仲間になり得るものにきっかけを作ってあげて、彼女らを目覚めさせ、倉庫の鍵を開けて持ち出した。

しっかり施錠した後、箒木はたきが『払う程度の能力』で証拠を消しながらさ迷う。

途中、向日葵畑に寄ったりもしたが相手にはされない。

さ迷い続ける事数刻、唐傘お化けに出会い、目的もないので彼女の目的に助力する事に決めた。

そして、事件の全ては多々良小傘が私（何故か師匠らしい）を驚かせる為の膳立てに過ぎなかった。

と、いう事らしい。

「大事にならなかったからよかったものの……、今後こんな事したら……、分かってるよね？」

彼女らは一斉に首を横に傾けた。

「言っておく……」

一人を除いて。

水野きさらぎは意外と聞き分けがいい様だ。
私は彼女に後を任せて紫の家へと向かった。

「たのもー、紫はいるー？」

ドンドンと戸を叩いた。

「陽奈様でしたか。紫様は眠りやがっております」

藍が紫への辛辣な言葉とともに出てくれた。

「あ、はは……。……溜まってる？」

「いいえ、あの怠惰でいざというときしか何もせずに家事から結界の管理まで私に押し付けて博麗の巫女とよく酒盛りに行ったりする紫様への不満なんてない訳がない訳がないじゃないですか」

・・・。

「全力で叩き起こして来るよ」

「ありが……、こほん、お気をつけて」

こんなダラけているからババアとか言われるんだよね、たぶん。

「げほっ、げほっ、……うげほっ、……な、なにをするのよ」

布団に潜っている紫の腹に、それなりに重い一撃をくらわせ、おかげで涙目になっている。

「紫に用があってね」

私は事の顛末を紫に説明した。

「なら、放っておきましょう。元々は妖怪勢を増やすのが目的で道具集めをしたのだから別に気にしないわ。勝手にしてくれるなら私も楽が出来るし、一石二鳥よ」

たしかにその通りだ。彼女らはそれほど害悪な存在でもないのだから放置していても問題はないだろう。

「じゃあ一応釘を刺す事だけは私がしておくとして……、ときに紫さん？」

「な、なによ」

「仕事をしろ」

私は紫に恐怖を軽くぶつける。もちろん、スキマを弄れなくするのは当たり前。

「ぜ、全部、藍がしてくれてるわ」

紫はそっぽを向いて口を尖らせた。

「藍にさせた、じゃなくて？」

「そ、そんな訳ないじゃない」

「式の術式を少し弄らせてもらうから」

「ちょっと待ちなさい！」

「嫌だね。藍が可哀相だし」

藍の術式に私の力を組み込む様にして紫の支配力を減少。本来なら判断力などが低下するが、素体が九尾の妖狐だから問題はない。私の指示にも従う様には少なからずなってしまったものの、そこま

で強制する気もないし、善意で頼みを聞いてくれる程度の事しかする気はないので、今までと変わらない関係を保てると思う。

「藍、大丈夫？」

「はい、むしろ少しすっきりしました」

「もし紫がダラけてたら言ってね。力の供給増やしてあげるから」

「ありがとうございます。でも私では何をされるか……」

まあ、仮にも従者が主人に手をかけるのは望ましくはないが。

「それなら私を呼べばいいよ」

「分かりました」

力のラインが繋がっているのだから簡単な意思くらいであれば交信が出来る。紫と藍ほどではないが、一言で済むレベルであれば問題はない。

仮にも紫は幻想郷の管理人なのだから自覚を持つてほしいところだ。私は博麗大結界内にいなくとも何の問題もないが、紫も含めて妖怪は存在が危ぶまれるのだから怠ってほしくはない。

今後とも博麗神社には危害が加わらない様に何か対策を立てなければいけないと思う。

結界の陣がそこにあるのもそうだが、幻想郷に唯一存在する神のいない、妖怪退治をする神社なのだから。

そこには大きな意味があるのだから無下には出来ない。

神社の巫女を含め、人は死んで産まれて変わっていくけれど、私たち妖怪、それと受け継がれた――決して博麗に限らない――血筋は変わらない。

変わらない私たちが変わるものを見守らなければいけない。

そして変わるべきでないものは防がなければいけない。

それが出来るだけの力が私たちにはあるのだから。

今回の異変は紫の失態によるものが大きい。それは今後改めさせないといけない。

どっきり大成功？（後書き）

異変終了。

当分は異変がない予定です。

ただし、予定は未定。

普通の少女

始まりは紫の一言からだった。

「陽奈、道具屋の子供が生まれるわ」

「あの霧雨さんち？」

「そうよ」

「でも珍しいね、紫が興味を持つなんて」

「ときに陽奈、奥さんを見た事あるかしら？」

「そういえばないね」

既婚者だったのも今知った気がするし。

「身体が弱いだよ。つまり……」

「危険ってこと？」

「そうよ」

「なら、助けようよ!」

「助けたいのはやまやまだけどダメよ。私たちは幻想なの。人間一人を救って幻想でなくなってしまうば……どうなるかしら？」

幻想の存在が危うくなる、ってことは分かってる。一つの因果から無視出来ないまでに広がってしまう。それは分かっている。

「でも見殺しには出来ないよ」

「じゃあどうすればいいのかしら？」

「私が要になる。本当に幻想なら外では語られないでしょ？でも例えば萃香、酒呑み童子とかは外でも語られてる」

「とはいっても現代に直接関わってはいないわ。貴女はそれを犯そうとしている。それくらい分かるでしょう？」

頑なに紫は拒む。

理由は分かるよ。分かるけど。

「つまりは外と幻想郷で共存するものを他にも作ればいいんだよね」

「ええ。でも支障がない様な場所があるのかしら？」

「一カ所あるよ」

「どこなのよ」

「博麗神社だよ」

博麗神社は博麗大結界の要であり、境界にある。その不安定な位置

を安定させればいい。共存という形で。

「……というわけ」

「……もう好きにきなさい」

私は外に飛び出してから急いで霧雨家へ向かった。

着くと店は開いていた。

「いらっしやい、……陽奈ちゃんか」

「久しぶり。紫から聞いたよ、子供が生まれるって」

「でもな……」

おじさんの顔が少し曇った。

「その奥さんを助けに来たんだよ」

「本当か!？」

「それで奥さんは？」

「……奥の部屋だ」

この時代、病院で出産が普通なのに珍しい。

「俺は行けないんだ……」

「何で？」

「男子禁制。男は立入禁止だ」

あ、さいですか。

でも考えれば分かるか。

私の前世（？）では旦那さんも一緒に手伝うスタイルもあったしなあ。

まだないのか。

そういえば、もし同じ世界なら……、

「陽奈ちゃん、早く行ってくれ」

「うん、そうだね。出産って辛いから早めに行かないとね」

「なんか出産を知っている様に聞こえるんだが……」

「出産経験ありますから」

おじさんの口が塞がらないくらいに開いていたが気にせずに先に向かった。

「子供は帰りな！」

産婆さんと医者に追い出されてしまった。

奥さんの顔を見たが、あの症状は見た事があった。現在では未知の病なのだろうが過去になかった訳じゃない。

未知というよりは症例が全ては合併症に過ぎないだけだ。何故か治らないのではなく、治ってもすぐに罹ってしまうのだ。

顔とともに感じたものの、やはり霊気の極端な不足と循環が悪い事。

身体が弱いのは霊気が十分に行き届いてない事に由来する。

免疫などは正常だが働きが弱かったりする。

現代科学では解明不可能だ。

「母体が危険なんだよ！」

私は再び侵入した。

「それ以上邪魔すると母体も……」

「うるさいヤブ医者！ どうせ薬漬けにして体調をどうにかするしか出来ない癖に！」

「しょうがないでしょう。子供がどうこう出来る病では……」

医者が私を制そうとする。

「あー、もう。私が全部やるから」

「経験もないのにどうすんだい」

次に産婆が突っ込んだ。

「出来るから！」

「駄々こねるんじゃないよ！子供産んだ事ない子供に何が分かるのさ」

「さっきから子供子供って……、いいから出ていけ！」

私は二人を引っつかんで強制退場させ、扉を閉めて結界で遮断した。

「あの……、貴女は？」

奥さん（仮）が口を開いた。

「明夫さんに頼まれてね。私は白嶺陽奈。ところで陣痛は？」

「今は少し……ううっ……」

「今治して、ついでに産んじゃおうか」

「え、はい」

私は彼女に手を触れる。

「いくよ」

私は倫理結界を展開した。

「イメージして。自分の中で絡まった糸が解けていく感じで……」

「むー」

目を一生懸命に閉じている。

私は倫理結界を維持するだけだ。この中なら痛みを考えなければ痛みはない。けがを負っているとそれを意識してしまうが今回はそうでもないし、痛みが退いている時だったから没頭してくれるだろう。

「はい、出来ました」

「じゃあ次に元気な子供を産もうね」

程なくして産まれた子供は女の子で魔理沙と名付けられた。

その後、お詫びをしたり後を任せたりしたが、産婆さんに

「どこで教わったんだい？」

と、聞かれて困ってしまった。

「秘密だよ」

「生意気なガキだね」

「まあ、認めるよ」

でも、どうにかなった。

それから成り行きで魔理沙の教育係（ちなみに給与あり）にされて
数年が経った。

魔理沙には俗にいうお嬢様教育をしているのだが、

「なあ、陽奈ちゃん、どーすればいいんだ？」

口調がヘンテコになった。

「口調を慎ましくしなさい！」

「いーじゃねーか、どうすればよろしいのですか？、なんて私には
似合わない。だいたいこの口調は陽奈ちゃんと親にしか使わない」

魔理沙は表と裏をはっきりとさせていたのだ。素の自分は身近にし
か晒さない、とか言っていた。

なのに魔理沙はまだ五歳くらい。

なにこれこわい。

普通の魔法使い見習い

ある日の事である。私が魔理沙とテレビを見ていた時だった。

「なあ、陽奈ちゃん」

「どうしたの？」

「魔法って……、あるのか？」

何を唐突に、と思ったが、見ているのは魔女っ娘アニメである。

私にとっては数億年振りで懐かしみがある。割と男女ともに人気があつたからなあ、これ。

「なあ、あるのか？」

魔理沙の問いに、はいそうです、とか答えられない。ここは幻想の許されない世界だ。幻想郷とは違う。

「あると思う？」

「うん、きっと」

「どうして？」

「私は陽奈ちゃんが怪しいと思うんだ」

「私が？」

待て待て待て待て。私は魔理沙が生まれてから一度も使ってないぞ。

「だって、こーりと親父で二人掛かりでしか持てない様な重い荷物を軽々と持ち上げているのを見たからな」

こーりんとは香霖という例の森近霖之助という少年の屋号であり、魔理沙は彼をこう呼んでいる。

そんな事より、あれを見られていたとは。

品物を入荷したのはいいがとにかく重かったので、私が手伝いをした時があったのだ。

「陽奈ちゃんにはそんな力はなさそうだし」

「き、気のせいじゃないかな？」

私は目を泳がせまいと必死になるが、冷や汗はだらだらである。

「そう……なのか？」

「う、うん、きっとそうだよ」

「おーい、陽奈ちゃん、荷物運びを手伝ってくれないかー？」

その時、おじさんから頼みが聞こえてきた。

頼むからその先は言わないでくれ……。

「重さが200kgくらいあって陽奈ちゃんしか運べないんだ」

あー、どうしよう。

「陽奈ちゃん……、それは本当か……？」

「そ、そんな重いなんて無理だって」

やばい、冷や汗が止まらない。

「そうだな。陽奈は私くらいの年だろうもんな」

「おーい陽奈ちゃん」

おじさんがまだ呼んでいる。

「ごめん、魔理沙。ちょっと行ってくる」

「私も着いてくぜ」

「そういう訳で、魔理沙には隠せないからね」

「だぜ」

結局、魔理沙の手前、おじさんが口を滑らせたのが決定打になってしまったのだ。

私はもう隠す事を諦めて、荷物を運んでいる。

「親父は知ってたんだよね？」

「魔理沙、お前には店を継いで欲しい。現実以外に見初められてほしくないんだ」

確かに、小さい頃から目の当たりにしたら憧れてしまうかもしれない。子供は他とは違う力に憧れるものだ。

「じゃあ、陽奈ちゃん、魔法ってのはあるのか？」

魔理沙は私に尋ねるが、私は答えられない。だが、魔理沙は納得しないだろう。

私は荷物を置いてから、魔理沙に言った。

「私はね、妖怪っていう存在なの。魔理沙やおじさんよりもずっと長く生きている。そんな私は魔法を使えるけど、人間には分からない。だからって魔理沙には人間でいて欲しい」

「俺は魔理沙には諦めて欲しい。先日、霖之助が俺の所に別れを告げに来た」

「香霖がか？」

「あいつは半分妖怪だ。だからいずれは……。だが魔理沙は違う。もう……いなくならないでくれ」

霖之助は私に幻想郷について聞いて、旅立った。魔理沙に悪影響を与えないようにと。

「すまないな、親父、それは出来ない。陽奈ちゃんだっていずれは帰るんだろう？なら、私は一生一度かもしれないチャンス逃したくないんだ」

魔理沙は強い眼差しでおじさんを見ていた。

「そう……か……。なら、お前はもう家の人間としては認めない！出ていけ！」

「ああ、分かったぜ。陽奈ちゃん、手伝ってくれ」

「ああ……、うん」

その時の魔理沙は少し目が潤んでいた。

「じゃあな、親父」

魔理沙は私のスキマに入っていた。

「陽奈ちゃん、話がある」

「ん？」

「魔理沙を頼んだ……」

「素直じゃないね。“人間”として認めない、だなんて。私はおじさんが魔法について調べているのは知ってたよ」

眉唾物から何から何まで、ね。

「何が言いたい」

「魔法使いは人間が大成するのは難しい。ましてや魔理沙には才能がない。それも可能性に入れての言葉だった、よね」

おじさんは険しく顔を変えた。

「魔理沙は任せて。立派な“魔女”にして見せるから」

無言の彼を背に、私はこの場を去った。

私は外の博麗神社から幻想郷へと入った。

空気がおいしい。

「誰よ、あんた」

声の主を探すとそこには魔理沙くらいの歳の巫女服の子供がいた。
博麗の巫女服ではない。

「あら、陽奈じゃない。お帰りなさい」

「何よ、紫。知り合い？」

突然現れた紫に驚きもせずに淡々と言葉を吐く子供。

「ええ、彼女は私の友達よ」

「そう。……夢想封印！」

突如として虹色の霊弾が私を襲う。博麗直伝の夢想封印だ。

私は咄嗟に距離を離し、追っ手を阻む為に策を巡らせる。

「しょうがない……、封魔陣！」

私は簡単な結界を張った。

「なっ……、あんたも博麗なわけ？」

「いいや、私は白嶺陽奈。ただの妖怪……じゃないかな？」

「私は今代の博麗の巫女、博麗霊夢よ」

「随分若いなあ」

「母親は3年前に死んだらしいわ。紫から聞いたのだけれども」

「気にしないでいいわ。人間はいずれ死ぬもの」

やけに淡泊な性格をしている子供だ。

「それで？あんたは何者なわけ？場合によっては退治するわよ」

「止めておきなさい、霊夢。貴女は陽奈には敵わないわ」

「何だよ。小妖怪にも満たない気配じゃないの」

「現在私に勝てない貴女が私より遥かに強い陽奈に勝てる道理はないわ」

「なっ……」

「それじゃ、私帰るね」

「ちょっと！待ちなさいよ！」

霊夢が叫んでいるがシカトして家へと向かった。

家に着いてからとりあえず魔理沙をスキマから外に出した。

「ここはどこなんだ？」

「私の家だよ。なんと築数千年！」

「そんなことより魔法を教えてほしいぜ！」

「まだダメだよ。準備がいるから待ってて」

私は書斎（というより図書室）に行っていくつかの本を取ってきた。

「まず注意してほしいんだけど、この家からは出ないこと」

「なんでだ？」

「ここは魔法の森っていう場所の一番奥なの。普通の人には毒の空気があるから勝手に出たら死んじゃうよ」

「わ、わかったぜ……」

魔理沙の顔が少し青くなった。

魔力慣れやらしていないと厳しい環境で障気が溜まっていたりもし、て洒落にならない。妖怪も何人か墜落したくらいだから、余程だ。

「ああ、私と一緒になら大丈夫だからね」

「本当か！？わかったぜ！」

魔理沙と出る時に結界を張ればいいだけだ。

「それじゃあ魔理沙、魔法について教えるね」

「おう」

「まず、これだけは言っておく」

私は魔理沙を真剣に見詰める。

「か、顔が怖いぜ……」

「魔理沙には魔法の才能はない。だから辛い道になると思う。それこそ血の滲む様な努力が必要だよ。それは覚悟して」

魔理沙は小さく頷いた。

「じゃあ、魔理沙にぴったりの魔法を探す所から始めようか」

結果として、魔理沙には星魔法が適していると判明した。

星魔法は天文的影響が大きく、時には条件のみでも発動する魔法だ。しかし、条件が合わなければ失敗する魔法でもある。

また、汎用性も高く、強い効果が認められるのも多い。

そして何よりも、努力が実を結ぶ魔法だ。

欠かさずに観測を行い、一定の効果のルールを見つけ出し、それらを組み合わせる。それによって非常に優れたものになり得る。

「……っていうのだけど、どう？」

「それにするぜ！」

「それじゃあ私に出来る事はここまでだね」

私は星魔法に関する本を全部持ってきた。

「残念ながら、私はあまり詳しくないの」

私は現在五行魔法を使っていて、星魔法は専門外だ。

「まあ、一応、本の内容程度なら覚えてるけど、研究したわけじゃないから」

「わかったぜ。なら手伝ってくれ」

「もちろん」

とりあえずは魔理沙を居候させているが、いつかは独立させたい。

というわけで、

「魔理沙の家を作ろう」

何だかんだで半年頑張ってもらったのだ。そろそろ私は魔理沙には離れてほしい。

「私の家か？」

「そろそろ私の助けも要らないだろうしね」

「そう……なのかな？」

「大丈夫だよ」

魔理沙は、魔法といえば箒で空を飛ぶぜ、とか言っただけで箒で空を飛べる様になったので、1人で人里までも行けるだろう。

それにある程度魔力も身体に馴染んだらうから、魔法の森もそこまで害はない。

努力だけでここまで半年で達する魔理沙はある意味天才かもしれない。

「それでどこに作るんだ？」

「魔法の森の入口付近はどうかな？」

「でもそんな広間はないぜ？」

「なければ作る」

それから建設予定地に行って、大々的に（敢えて魔法で）焼き払い、そこに家の基礎石を（敢えて魔法で）打ち込んだ。

「す、すごいぜ」

「さて、ここからどうしたい？」

「どうするって？」

「幻想郷には、ガス水道電気などのライフラインはないのは分かるよね？」

「ああ。でも陽奈の家にはあったよな？」

そうなのだ。実は我が家は既にシステムキッチンであり、コンセントもあったりする。

人間の技術とか言ったら河童が奮闘してくれた。だが、エネルギーを作っているのは私なのだ。

仮に外の世界であろうとも私の家の様な僻地まではライフラインは供給されない。

「私の家にはテレビはなかったでしょ？それに電話も。つまりはそういうこと」

「堪えられないぜ……」

その為にも、魔法を使えばいい、とは言わないでおく。

「まあ、お風呂くらいなら作るし、魔法灯くらいなら作ってあげるから」

魔法灯とは魔力を灯りにするマジックアイテムで、魔法の森ならば空気中の魔力で恒久的に点けられる。そして意外と明るい。

そんなことはさておき、魔理沙は不満が多い様だ。

だが諦めてもらうしかないのだ。

「魔理沙、魔法と生活水準、どっちを選ぶ？」

「……魔法」

私は汚い質問をした。実際は魔理沙に両方取らせるのも不可能ではなかった。

私は問うたのだ。

幻想に生きるか否かを。

「陽奈、家を作ろうぜ！」

「そうだね。じゃあまずは里で材料を仕入れなきゃ」

里で木材を調達して、再び戻った時には日が傾き始めていた。

「陽奈ちゃんって意外と人気なんだな」

「意外とはなにさ。これでも幻想郷のパワーバランスの一角を担ってるんだから。しかも私は人間を襲わないし」

「陽奈ちゃんって、妖怪、だったか？」

魔理沙が確かめる様に聞いて来たので私は頷いた。

「ちょっと力を見せてみてくれよ」

「だーめ。絶対に魔理沙が泣くから」

「泣かないぜ」

「いや、泣く。神でも仏でも泣きわめくから、たぶん」

まあ、気絶するかもだけど。

「それでもだ。一回見てみたいぜ」

「そんなに言うなら……、一回だけだよ」

私はゆっくりと力を解放する。但しリボンはつけたままだが。

徐々に魔理沙の顔が青くなっていくのが分かった。

「止めようか？」

私が尋ねると、物凄い勢いで首を振ったので私は力を再び抑えた。

「陽奈ちゃん、何なんだぜ……」

とある少女の話 前編（前書き）

今回、主人公はでてきません

とある少女の話 前編

私は何の為に生きているのだろう。

ただ、人を、人ならざるものを殺す為？

いや、違う。

でも、それしか分からなかった。

私の一日は街道から始まる。

路地裏から何気ない顔をして、食べ物や、金になる物を盗む。

路地裏が家である私には奪うという行為はあまりにも危険であった。

人の目を欺く手付きを得たり、物価を調べたりもした。

今日の目標は長らく目を付けていた赤髪の男にした。羽振りがよいようなので財布をいただく事にする。

私は目を閉じて意識を集中させる。

音が消え目を開けると、私以外のものの色が失われ、誰も微塵も動かない。

私は時間を止められる。

それこそが今まで生きていけた由縁なのだ。

けれども長持ちはしないので私は早速拝借して、その場を去った。

路地裏に駆け込み、成果を確かめる。うん、思った通りだ。財布には大金が入っていた。

「おい、ガキ」

男の声が背後から聞こえた。

「そこのお前だ、銀髪の」

確かに私の髪は銀髪だ。この髪には嫌悪を覚えるがなかなか綺麗だ
と思う。

「聞いているのか!？」

私は反射的に身を跳ねさせるも、後ろを向いた。

「どうやって俺の財布を盗んだ？」

彼の発言は私には聞こえていなかった。

確かに私は時間を止めて盗んだのだから。

暗がりでも分かりにくいが先程の相手であることに間違えはなかった。

「私は……、盗んでなんかいない」

精一杯声を捻り出すも震えてしまった。

何かが違う。彼は私とは存在が違う気がした。

「まあいい、それくらいくれてやる。但し、方法を教えたらな」

途端、私の前後に炎の壁が立ち塞がる。時を止めても熱いものは熱い。私は逃げ場を失った。

「早くしないと呼吸もままならなくなるぞ」

どうやら彼が壁を作った本人らしい。そんな事、出来る訳がない。

けれども、もし私みたいに何か力があるのならば？ いや、違う。私は……

「時間を……止めて盗んだ……」

「時間を……？……そうかそれは面白い」

何が面白いのだろうか。

「おいガキ、選べ。このまま薄汚い真似をして死ぬのか……、俺について来るのか」

「何を……」

「気に入った。お前の力が俺の目的には必要だ。その力、役立てたくはないか？」

私は小さく頷いていた。

連れて来られた場所は大きいけど殊更に目立ちほしくない屋敷だった。

「そういえば名前を聞いてなかったな」

「名前？」

「そうだ」

名前……、そんなものは必要なかった。捨てられたその日から……。

「名前は……捨てた」

過去とともに捨てた。だから名前はない。

「そう……か……。これからは必要だ、何かと不便だからな」

「名前が？」

「そうだ。あくまでも呼び名であってあだ名みたいなものにするがな。お前が本当の名前をもらった時の為に本当の名前は付けない方がいいだろう」

「分からない……」

男の言葉の意味が分からなかった。

「これから、お前を『花』と呼ぶ事にする」

「花？何故……？」

「なんとなく、だ。まあ、これから挨拶回りだ。一緒に住む家族みたいなものだから仲良くな」

私は中へと引っ張られていった。

「お帰りなさい、師匠！」

「その子は？」

中へ入ると私よりも少し年上だろう女の子が二人駆け寄って来た。

1人は活発そうな子で紫の髪と目をしていて髪を後ろで一括りにしている。もう1人はブラウンのショートに黒い目で頭の右側から小さな角が……、

「ば、化け物！！？」

「そう、化け物」

ブラウンヘアの女の子は表情も変えずに口にした。

「俺から紹介しよう」

私はとりあえず落ち着こうとした。

「こっちの紫のがマグノリア、茶色いのがカリビアだ」

「よろしくー！」

「握手」

何故カリビアさんは私に反論とかをしないのだろう。化け物とか呼ばれたらさすがに怒るはずなのに。

「不思議そうな顔してるな。2人ともお前と同じで捨てられたりしたんだ」

「どうして……」

私は聞きかけて口を押さえた。

「んー？知りたそうだね。貴女も同じなら私たちに教えてよ。それが条件だよ」

「気にしないから大丈夫。慣れた」

私は自分の事を口に出し始めていた。

——あれは私が物心ついた頃だったのだろうか。私が知っている母は恐怖に染まった目しかしていなかった。違うかもしれないけれども、私はそれしか知らなかった。

名前は忘れてしまった。

気が付けば悪魔と呼ばれていたから。

生まれ持った銀の髪に、時を操る能力。ただそれだけで私は化け物にされた。

私はそれから満足に喋れる様になってから捨てられた。それがせめてもの救いだった。それが最初で、たぶん最後の親心だった。

私が夜に眠ってから、朝起きると知らない場所に寝ていた。その事で私は泣けなかった。

またか、と。

私は帰らなかった。いや、帰れなかった。

だから1人で生きる術を編み出した。

時には媚び、時には能力を使い、時には自らを売り、時には化け物や人を殺し……。数えれば、きりが無い。

能力を使えば、絶対に逃げられた。ばれる訳もない。私が罪を犯した時間は存在しないのだから。

そして私は初めてばれて、今ここにやって来た。

「……という、訳です」

私は最後の方は泣きながら話していた。

「苦労したんだねー」

「過酷」

マグノリアさんは顔をぐしゃぐしゃにしながらも言葉をくれた。：
口調は相変わらずだったけど。

「大丈夫だよ、貴女はもう私たちの家族だから。捨てたりなんかしない」

マグノリアさんは私をあやすように後ろから抱いて撫でてくれた。

私は涙が止まらなかった。

けれど同時に一瞬で私の正面から背後にどうやって回り込んだのか不思議だった。

次にメグさん（マグノリアさんがそう呼んでほしいと言った）が身

の上を話してくれた。

「私はねー、魔法使いの名家の生まれなんだよ。当然私も魔女に成るべく教育をされてたけど、からっきしでさ、つまり落ちこぼれて奴？で、捨てられちゃったんだよ」

「魔法の使えない魔女……だった訳ですか？」

「そうそう。だから家にいた時から身体を鍛えていてね。まあ……野生の熊とか素手で倒したりは……したよ」

・・・。

「まあ、そんなこんなで今に至るのさー」

メグさんが遠い目をした。

……突っ込みたいけどダメな気がする。突っ込みを入れたら負けな気がする。

「突っ込みたいのはよく分かるけど、したら負け」

カリビアさんが表情一つ変えずに私に告げた。

「じゃあ私も話す」

次はカリビアさんの話だ。

「私は鬼というか巨人族に生まれた。けれども小さく、周りよりも

賢かったから捨てられた」

・・・。

「それだけですか？」

「周りと違えば追い出されるのは運命。私の仲間とは本能的にしか動かない。私は違った。効率性などを求めた結果、仲間と離れ、孤立し始めた。そして孤立した。つまりメグと同じで私も異端」

相変わらず表情を変えずに淡々と語った。

「そういえば、師匠の話は聞いたことないねー」

「ない」

「俺か？俺は人外を討伐する集団にいた人間だったんだがな、とある妖怪、まあ東方の化け物に化け物にされた。おかげで追放されて今にいたる訳だ。そいつは俺に……いや、なんでもない」

どうやら一番の事情持ちは男のようだった。

さて、私が家族の一員になってからしばらくして、この家族の仕事を知った。

何故、私が必要なのか。

俗にいう裏方、簡単にいえば殺しを仕事としていた。

時に化け物から為政者まで、あらゆるものが標的だった。

私の能力は有用だった。時間を止めて仕舞えば証拠は残らない。

私は能力や体術を研鑽し、また、男を先生と仰いで、それなりに毎日を暮らしていた。

私の能力は時間を操るものだったけど、それに伴って空間も弄れた。おかげで持てる荷物も増大した。

仕事も経験があり、そこまで難しくもなかった。

私が家族になってから数年経ったある日、とある仕事が無い込んだ。

それは東方にいる吸血鬼の討伐。

ただそれだけなら問題はなかった。

場所が問題だった。

忘れ去られた地、幻想郷。

世で忘れられたものを受け入れるという隔絶された地。そこは何でも受け入れるという。

しかし、甘くはない。

来るものは拒まず、されど去れぬ。

出るのはまず不可能。つまりはこれを受けたら最後の依頼となり、私たちは幻想郷に居続けなければならない。

「先生、どうします？」

「受けよう」

「し、師匠!？」

「理由は？」

「本来はこれが目的だったんだ」

それから先生は何故私たちを家族にしたのかを語ってくれた。

自分を化け物にした妖怪に復讐を。

その為に裏の情報が入りやすい様な組織を作りたかったらしい。

最終目標はその妖怪で、随分前から幻想郷に居るといいう情報を耳にしていたらしい。

吸血鬼の姓はスカーレット。

こちらにも先生には因縁があるらしい。

「今までお前らを巻き込んで済まなかった。無理に着いてこなくてもいい」

先生は私たちにそう告げた。

結果、私たちはみんな着いて行く事になった。
今頃離れられない。それが理由だ。

私たちは荷物をまとめて（私が持って）この地に別れを告げて、依
頼主の手配にあやかって東へ向かった。

とある少女の話 後編

東の地——日本に着くと私たちは驚きを隠せなかった。

平和を体現したかの様な国だった。

小さな犯罪などはあるものの、すぐに捕まったり、互いに遠慮し無駄な争いもあり起こらない。

そんな雰囲気なので私たちは観光してから幻想郷に行く事にした。

観光を存分に楽しみ、いよいよ幻想郷へ。

「ってどうやって行くんですか？」

「知らん」

「調べてある」

カリビアさん、さすがだ。

「誰かが能力を使えばいい。そうすれば幻想郷の管理人が拉致する」

・・・。

「拉致とは失礼ね。招待よ、招待」

そんな女性の声が聞こえたと思ったら足元に穴が開いて私たちは落ちてしまった。

落ちた先は湖だった。ちゃんとみんないる。

「たぶんここが幻想郷」

不幸中の幸いというのだろうか。

「今度管理人にお礼をしないといけない」

「さっきのが管理人？何で分かるの？」

メグさんがカリビアさんに聞いていた。

「能力も調査済み。幻想郷の管理人は八雲紫という妖怪。『境界を操る程度の能力』によって空間の裂け目を作る」

「お前……なんで知ってたのに俺に教えない？」

「必要がなかったから。それよりアレ」

カリビアさんが湖の向こうを指差す。

「霞んで何も見えないが……」

「私です」

「真っ赤な建物があるねー」

メグさん、カリビアさん、視力いくつですか……。

「目的地はそこだろうねー。スカーレットとかって名前だし」

そんな安直な。

「まあ、行くだけ行くぞ」

「どうやってですか？」

「泳ぐしかならう？」

「氷が浮いてますよ」

結果を述べると陸続きだった。

それにしても真っ赤な館だなんて趣味が悪い。目にも悪い。

「あ、お客様ですか？」

そう思考を廻らせていると門番をしていた中国風な女性が話しかけて来た。

「誤魔化さなくても結構ですよ。お嬢様が気紛れでも殺しに来た相

手を招き入れる様に指示なさいましたから」

驚いた。今回の標的は敵を招き入れるという。

「但し、通りたくば簡単なゲームに付き合ってください」

「ほう、それは？」

「まず、今、この館のメイドをしている妖精には暇を出してあります。あなた方には私を含めて戦ってもらいたいのです。そちらは4人ですのでこちらも4人で、一对一の決闘を……」

「いいだろう。負けたら相手の条件を受け入れるというのだろうか？」

「はい。それですみませんが、夜までお待ち出来ませんか？」

私たちはその条件を飲んだ。

夜になり、少し欠けた月がのぼる。

私たちに相手の4人ずつ、庭に並んだ。

「では、まずは自己紹介といこうか。互いにフルネームでな」

先生が話し掛けた。

相手は門番の人に、青い髪の女の子と金髪の女の子。前者はコウモリの羽みたいで後者は変な羽らしきものが生えている。それに加えて紫のパジャマみたいな服の女の子。

「あら、そちらから名乗るのが礼儀では？」

青い髪の子が先生に言った。

「そうだな。ではまずは俺からだ、生憎名前は数年語らずにいたもので忘れていたのだ。だから、まあ、アグニとても名乗っておこう」

先生って名前忘れたんだ……。

「今宵はようこそいらっやいました。私の名前はレミリア、レミリア・スカーレット。この館の主よ。あなた方が来るのを待っていたわ」

青い髪の子が言った。

吸血鬼だから小さいのかな？

「私の名前は紅美鈴です。まあ、門番が仕事の妖怪です」

門番の人が言う。

「パチュリー・ノーレッジ。魔法使いよ」

紫の人はパチュリーというらしい。

「ねえ、めーりん、早くしたいー」

金髪の子が門番さんに駄々をこねていた。

「妹様、もう少し待ってください」

それをなだめる門番さん。

「あの子はフランドール。私の妹だけど情緒が不安定で……、まあ遊べるって口実で連れてきたわ」

レミリアさんが代わりに説明した。

「ではこちらでも紹介をしていこう」

先生は私の頭の手をおいて撫でながら言った。

「まずは……、と言いたいがこいつには名前はなくてな、便宜上、花と呼んでいる」

私は小さくお辞儀した。

「私はカリビア・オルギス。オーク鬼の突然変異で生まれた」

カリビアさんのフルネームは初めて聞いた。

「次は私だねー。私の名前はマグノリア・ノーレッジ」

ノーレッジ……、パチュリーさんと同じ!?

「メグは私の実の妹よ、レミィ。……って何よ、みんな固まって」

「姉さん、姉妹でこれだけ正反対だと誰でも驚くよ。という訳で久しぶり、姉さん」

「ええ、久しぶり」

姉妹発覚にしばらく空気が固まったが、みんな取り直して、

「パチエの妹かー」

……一名除いて取り直して、対戦カードを決める事になった。

「では私から行ってもよろしいですか？お嬢様」

「ええ」

門番さん——美鈴さんが名乗りを挙げた。

「ならば私が行く」

カリビアさんが名乗り出た。

「いや、カリビアちゃんには悪いけど私に行かせて頂戴な。たぶん、ここで出ないと姉さんと戦う事になるしさ」

そこでメグさんがカリビアさんを止めた。

私は疑問に思った。メグさんはなぜパチュリーさんと戦いたくはないのかが分からなかった。理由は姉妹だからというだけではなさそうだ。

「勝負がつかない戦いは意味がないじゃん。だからここは私に行かせてよ」

「……分かった」

結果、2人はバトンタッチした。

「それじゃー、行くよー」

「はい、お願いします」

何だか試合の様に見える。いや、実際そうなのかも知れない。

動き出した2人は組み手をしているかの様に見えた。

互いの攻撃を受けては流し、流されては受けられて、なんというか……、綺麗だった。

「んー、さすがに疲れるねー」

「何故ですか？」

互いに打ち合いながらも器用に会話を始めた。

「遅すぎるよー」

私もそう思った。

本来メグさんの攻撃は私には時間操作しない限り目ではしっかりと追えない。

「やはりそうでしたか。では互いに準備運動は止めましょう」

「そだね」

途端、とんでもなく速くなった。

互いの体の軸はほとんど動かないというのに、それ以外は異常な速さだった。

なんというか……、すごい。

「勝負がつかないので攻めさせてもらいますよ」

一瞬虹色の軌跡が見え、その拳を受け止めたメグさんが止まった。

「痛っ!! くぅゝ、痺れるゝ」

メグさんが腕を振って叫んだ。

「それって中国武術の気功とかってやつでしょ? 骨まで衝撃くるから止めてよ」

「そういわれましても『氣を操る程度の能力』を扱う私の専売特許ですし……」

「分かったよ。頑張るから」

少し顔を暗くしたものの、すぐにまた互いに動き始めた。けれども少し違って、メグさんは受け流す事しか出来ないから苦戦している。

「受け流してもこれじゃあ……」

「そう言いながらも涼しい顔されたら落ち込みますよ」

メグさんは相変わらずだと思う。

辛そうな顔は見た事ない。

いつも余裕を持っているのかも。

「本気で殺しに来なよ。そんなんじゃ私には勝てないよ」

「そうですか。では……」

美鈴さんが距離をとった。

「せやあああああ!!」

そのまま先程までの動きなんか比べ物にならない程の速さで拳を繰り出してメグさんに突撃した。

私は時間を操って見えるけど、メグさんには見えているだろうか。

いや、見えていなかったのだろう。

鈍い音がしてメグさんが館まで飛ばされて壁をいくつか壊してしまっ

「メグさん!!」

私は駆け出そうとしたけど、先生に止められた。

「ダメだ。まだ負けではない」

「でもっ!!」

私は必死に先生の手をほどこうとした。

「ねえ……、もう茶番はいいよね?」

その時、メグさんの暗くて小さな、けれどもはっきり聞こえる声が響いた。

「茶番……ですか?」

途端に一筋の真っ白な光が美鈴さんまで伸びて、メグさんがそこにいた。

「私ってあんまり実戦で能力使う必要なくてさー、鈍ってなくてよかったよ」

メグさんが首を回して伸びをしながら美鈴さんに言った。

「ありゃ? 気付かなかった?」

「何に……ですか?」

「君の持つ妖気は最低限まで削ったよ。もう動くのも難しいはず。いくら『気を操る』事ができても所詮妖怪の君は妖気がなくなればまともには動けないはずだよ。人間の霊気みたいなものだからね」

メグさんが軽く小突くと美鈴さんはその方向に倒れてしまった。

「私の……負けですね。それにしてもどうやって？」

「私の『魔を破る程度の能力』を使って妖気を吹っ飛ばしたんだよ。妖気も魔に属するから有効だったんだよね」

「メグが何で魔法を使えなかったのか分かったわ」

パチュリーさんが呟いた。

「私は姉さんと戦えば互いに相殺を繰り返すだけで勝負はつかない。だからオリビアちゃんに変わってもらったの」

メグさんは美鈴さんを抱えてパチュリーさんの所へ行った。

「姉さん、この人は放っておけば回復するけどどうすればいいの？」

「小悪魔に運ばせるわ。それよりメグ」

「なに？」

「貴女も休みなさい。美鈴にしてやられてるわ」

「ちえー、ばれたかー」

メグさんがパチュリーさんに二の腕あたりまで袖を捲られると真っ黒な痣が出来ていた。

そして美鈴さんを抱えた小悪魔さんとともにメグさんは館に入って行った。

「次は私がいくわ、レミイ」

そう言ってパチュリーさんが前に出た。

「貴女は私が相手する事になった。成り行きで」

カリビアさんが対抗する様に前に出た。

「成り行きて……、貴女ねえ……」

「パチュリー・ノーレッジ。五行に加えて日と月の属性の魔法を操る。その東洋の思想を汲み入れた形態は小さな革命を起こし、また恒久的な魔力機関の研究に没頭しているという。間違いは？」

「……ないわ」

パチュリーさんが少し目を見開いてカリビアさんに言った。

「そして喘息持ち」

「……そうよ。悪いかしら？」

「別に」

「悪いけど昔より良くなっているの。最近運動をさせられたから」

「そう。それは良かった」

カリビアさんから妖気が溢れた。少し威圧感があるけど先生ほどではない。

「私も貴女がその程度で良かったわ。そんな温い妖気じゃ話にならないもの」

突如として視界を覆う程の火の球が現れた。

それをカリビアさんは手を振り払うだけで消滅させた。

「太古の昔、大陸を蹂躪した巨龍はあらゆる業火も意に介さなかったという」

その手は振り払う瞬間に黒い鱗で覆われていたのを私は確かに見た。

「……貴女、龍だったの？」

「違う」

この二人の対決、なんだか会話が多い気がする。

「貴女は何者？」

「オーク鬼」

「何故鬼らしくしないのかしら？」

「したくない。私は……、鬼だけど鬼でありたくない。他の奴らみたいに本能だけで動くのは私の理に反する」

「そう……、なのね。分かったわ。貴女をただの化け物としてみる事にする。種族として見られたくはないのでしょうか？」

「ありがとう。化け物には変わらない私にはありがたい。でも……」

ゆっくりとカリビアさんが歩き出した。

「決着は着けなければいけないから、感謝はしても手加減はしない」

「そう。ならば私も全力で相手をするわ」

パチュリーさんが何かを呼び出した。それは七色の水晶の様なものだった。

「それは？」

「これらは試作した賢者の石。私の扱う属性全てのアシストをしてくれる代物よ」

ふわりと浮いている賢者の石は淡く光っている様に見えた。

「これが私の本気よ。さあ、貴女も」

「そんな変化はいらない。素の私が一番慣れている。さっきのは遊

び。普通はあんな大きさでも避ける」

「では何故避けなかったのかしら？」

「外野がいたから」

「そう……、少しムカつくわね」

パチュリーさんが口を結んだ。

「さあ、いらっしやい。私は攻撃は得意じゃないのよ」

「受け？」

「貴女は何を言ってるのかしら？」

「責めと受けなら受け？なら私は責め？」

「黙りなさい！主に私を含めたみんなのために！！その腐った考え、更正してあげるわ！！」

私は何でパチュリーさんが怒っているかは知らないが、何となくパチュリーさんを応援したくなった。

いやいや、ダメだ。私はカリビアさんの味方だ。でも何か……、パチュリーさんについての方がまともな人間になれる気がしてならないなあ……。

「あの素晴らしさを知らないとは……」

「知らなくて結構！」

黄色っぽい石が砕けて、夥しい数の金属の砲身の様なものが現れた。

「喰らいなさい。セントエルモランチャー!!」

それらがバチバチと放電し始め、閃光とともに一斉に光線らしきものがカリビアさんに殺到した。

その速さは尋常じゃなくて、私が自動車とかいうものを止まって見えるくらいの遅さにしても目では捉えられなかった。

それらはカリビアさんを撃ち抜いてゆくけど、急所は外れていた。

そんな弾幕が止んだ時、カリビアさんの四肢は穴だらけになっていた。

「さて、吸血鬼でも中々に有効な技よ。貴女には効いているわよね？」

パチュリーさんが静かに言った。

けれどもカリビアさんは何も言わずに立っている。

「……やりすぎたかしら？」

そのままカリビアさんが搬送されて、次の戦いをする事になった。

どうやら痛みで気絶したらしい。

パチュリーさんは今後、あの光線みたいな技は封印するとか言っていた。
威力が高すぎるとかなんとか。理論上、船くらいなら簡単に壊せるとか。

カリビアさんは勿論負けなのだが、パチュリーさんの魔法により、すぐに全快した。友人の妖怪からの知識も相まって、この程度ならば問題ないそうだ。

その友人、何者なんだろうか。

まあ、無事だったからいいとして、残りは先生と私なんだけど……、

「くっ……、私の負けね……」

何故かもう先生が勝っていた。

「吸血鬼は燃えやすいな、話にならん」

非常に相性が悪かった様だ。

まあ、先生に素手で攻撃をしたら燃えるからね……。身体が濡れてたりすると当たるんだけど……。雨の日は無能なんだけど、そうじやなきやそれなりに強いんだよなあ。

だって、よくメグさんと能力を抑えて組み手してるし。

「……フラン、思い切り遊んでいいわよ」

「はい！」

で、私の相手はすごく楽しそうだ。

「先生、逝ってきます」

「あ、ああ、頑張れよ」

一応まだ2勝で、引き分けの可能性もある。私が負けたら引き分けになってしまう。だから勝たないと。

「私はフランドールだよ。フランって呼んでね」

「はあ……、よろしくお願いします?」

「じゃあ……、コワレナイデネ?」

ぞくり、と寒気が走った。

怖い。今まで味わった事がないくらいに身が震える。

私は咄嗟に時を止めた。

「ふう……」

私は一息吐いてから落ち着いて銀のナイフを設置した。時間が止まってるからこそ、設置ができる。

吸血鬼が相手だからこそ、銀製なのが活きてくる。

私は時間を元に戻した。

「危ないな―」

途端に粉碎音がナイフの数だけ聞こえた。

ナイフが粉々になって風に流された。

「何か奇妙な技を使ったよね。一瞬で目の前にナイフがあってびっくりしちゃったよ」

フランさん(?)が手を握った。

すると私の手に持っているナイフまでもが砕けた。

「私はね、『あらゆるものを壊す程度の能力』を持ってるんだよ。だから危ないものは壊さないとね」

吸血鬼の反応速度に、能力。主にナイフを投げる私には相性が悪い。

私は時間を止めて再度、今度は倍の数のナイフを設置する。

けれども全部壊されてしまう。

「今度はフランからいくよ」

いきなり私にぐっと近付いて、私の左手首と頭を掴んだ。

「あとナイフはいくつあるの？」

私の袖からナイフが落ちてゆく。

私が抵抗しようすると頭を強く掴んで、抵抗を止めれば掴んでいくだけだったけど、手首はそれなりに痛かった。

最後のナイフが落ちると左手首は解放されて、ナイフは全て砕かれた。

まだ、反対の袖にも、その他にもナイフはあるけど同じ様になるだろう。

「鬼ごっこしようよ。その方がお互い楽しいよ」

「鬼ごっこ？」

「フランが貴女を追い掛けるの。捕まったら負けね」

私は時間を止めて全力で逃げた。

捕まったら何をされるか分からない。

私は十分に走ってから距離を確認した。

「……変わってない？」

おかしい。さっきと同じ場所にいたなら、もう私の親指で隠れるくらいの大きさははずなのに。

私はもう一度、その位置を覚えてから動いた。

けれども距離は変わらない。

私は思い切って、見ながら下がることにした。

……大丈夫だ、動いてない。

「ふう……、……………っ!」

安心して、息を吐いた時、一瞬で距離が縮まった。

瞬きの間に移動した?

いや、でも体勢は変わってないし。

「ねえ」

「えっ?」

見間違いだろうか、普通に歩いて来た。

「お願いがあるんだ」

「えっ?」

何度、目を擦っても普通に動いてる。

「貴女 능력は時間を操れるんだよね、たぶん。なら、これはだれにも聞かれない。違う?」

「聞かれない……けど」

さっきの人とは全然違う人に見える。

子供っぽくなくて、落ち着いてる感じた。

「私に負けてくれない?お互いの為にさ。私はあいつ……ああお姉様のことなんだけど、あいつは嫌いだけどフランの大事の人なの。」

だから……、殺されたくない」

「だから負けろ、と」

「うん。すごく痛いけど、フランが治してあげる。陽奈……まあ友達なだけどさ、陽奈に頼んだりもして絶対に死なせない。フランがとりあえず治して、陽奈に仕上げをしてもらう。絶対に治るからお願い！」

土下座までされた。

やるしかないかな……。

「じゃあ……」

手筈はこうだ。

フランさんが私を戦闘不能なまでに破壊する（凄く痛い予定）。そしてとりあえず治して交渉を見届ける。それから本格的に治療。

私は時間を戻して数秒後に、一生分の痛みを味わった。

「引き分けね」

「そうだな」

そして話し合いの結果、互いに互いの条件を出来るだけ聞く事にな

った。

そんな事より手足が痛い。

「私からの条件は、その子を私にちょうだい？」

レミリアさんが私を指差した。

私を！？

「な、なぜ……」

私は頑張って声を出した。

「有用だからよ」

「俺は構わない。こちらの条件を飲めばな」

先生……。

「条件は？」

「我々をここにいさせてくれ。帰る場所がないからな。それと……」

「それと？」

「その子に名前をあげてくれ」

後日、私は呼び出された。

「済まなかったわね。まだ痛むでしょう？」

私は小さく頷いた。

「貴女の名前をずっと考えていたわ」

レミリアさんが窓の外を見た。

「そういえば昨日は満月だったわね」

「そうなんですか？」

「私たちはそういうのには敏感なのよ」

「そうですか」

「それで思ったのよ。貴女の名前は満月が終わっても衰えず、私に仕えてもらいたくて……」

「それで……、私の名前は？」

レミリアさんは私の方を振り替えてからゆっくりと私に名付けた。

——十六夜 咲夜

これが私こと咲夜とレミリアさんことお嬢様との関係の、そして私の始まりの話。

とある少女の話 後編（後書き）

本編で書かなかった事を。

アグニ

『火炎を操る程度の能力』

カリビア

『身を変える程度の能力』

ぶっちゃけるとレミィとアグニの戦闘はカットしました。

楽園の閻魔の休日（前書き）

彼岸組の日常を。

楽園の閻魔の休日

「映姫ちゃんおつかれー」

私が一息ついた時、ちょうど先輩がやって来ました。

ですが私にはまだ少し残っている仕事があるので帰れません。

「あの……、まだ仕事が……」

「いーよ、私がやっつくから」

「はあ……、はい、分かりました」

先輩はすごいです。

閻魔は二交代制で、ここ幻想郷も例外ではありません。幻想郷が出来た時はあまりの不評から閻魔が決まらず、私は上からの命令で就く事になりました。

ですが、先輩は自らの職務があるにも関わらず残りの一人に志望し、さらには現在では自らの職務をもこなすという事をしています。

「それにしても映姫ちゃんって働き過ぎじゃない？」

「い、いえ、その様な事はないかと……」

「仕事主義にも程があるよー？小町ちゃん程じゃなくてもいいけど

息抜きしよーね」

息抜きとは言われても私は精一杯やってはいます。息抜きをする時間がないので休みは満喫するタイプだと思ってはいるのですが……。

「先輩ほど私は優秀ではありませんので……。そういえば先輩って人里とかにあまり行きませんか？」

「あー、映姫ちゃん、私は一応死人だからね？」

先輩は死んでから出世した人物です。何でも素質があつたらしいです。

それでも採用されたのは幻想郷が今の形になる前です。そう考えると驚くべき才です。

「覚えている人などもういないのではないのですか？」

言い方は悲しいのですが、数世紀も前ですから、覚えている者も既に他界しているのではないのでしょうか？

「それがいるんだよー。私ってね、生前は半人半妖で、まあ妖怪にもおかー……母親の友人とかまだ生きてるし、妖怪の母親も生きてるし、私を殺した妖怪もまだ生きてるからねー」

母親をおかーさん、とでも言いそうになりましたよね？
そんな事よりも母親より先に死んでしまったとは……。

「親より先に死んでしまうのは……」

「そう大罪だねー」

裁判の判決は閻魔の一存ですが、もちろん基準はあって、その中でも親より先に死んでしまうのは大きな罪のはずです。

「私は親が親だけに例外なんだってさー」

「はあ……」

あまり深く追求してはいけない気がするので止めておきます。

「それよりもほら、交代だよ、交代！」

「は、はい」

「ついでに小町ちゃん起こしてきてね。智音さんと一緒にいいから」

河原に着くと相変わらず小町は寝ていました。

「いつも通りだな」

横にいる智音さんが呆れた顔をしていました。

ちなみに彼女は最近入ったのですが、上司命令で死後採用されたハクタクです。

「小町！起きなさい！」

「zzz……、もう食べられにゃい……」

最近眠りが深くなっている気がします。

「私に任せろ」

智音さんがいつも通りに彼女の頭を掴んで頭突きをしました。

余波だけで少し離れた私まで少し痺れるくらいで、当事者の周辺は軽く凹んでいます。

どうしたら頭突きにそんな威力が出せるのでしょうか？

「——っ!???」

小町は涙目で声も出さずに頭を押さえて転げ回っています。
私は喰らいたくないです、一生。

「小町!!」

「きゃん!………なななななんですか!?!」

直ぐ様転げ回るのを止めて彼女は私の目の前で正座しました。

「……痛くないのですか?」

少し心配な音がしたので聞いてみました。

「滅茶苦茶痛いです」

「ならば仕事をしっかりしなさい」

「嫌です」

「智音さん、もう一発」

「そうだな」

小町の背後にいた彼女は肩をがっしり掴みました。

「え、あ、じよ、冗談ですから、や、止めてくださ」

——ドッゴン

震度5弱ですね。

小町もしばらくは仕事をしてくれそうなので私も人里へ。
もちろん私服です。

「ここはいい所ですね……」

幻想郷のルールがそうしてはいますが、この里では人間も妖怪も等しい。みんなが手を取り合って生きています。

「ちょっと隣はいいか？」

「ん、はい」

私は団子屋にいたのですが、隣に誰か座りました。当然団子を飲み込んでから返事しました。

「よく見たら閻魔様ですね」

「貴女は八雲の……」

隣に座ったのは意外や意外、八雲藍でした。

「はい、お久し振りです」

「今は私も休暇中なので敬語でなくていいですよ」

「そうか」

「それで今日は何を？」

「夕飯の買い物だな。紫様はいつも通りだから……」

「それはそれは……。また伺いましょうか？」

八雲の式も大変ですね……。

「いえ、ストレスが貯まると私に振りかかるから遠慮したい」

苦労してますね……。

「まあ、でも最近陽奈様の助力もあってな」

「白嶺陽奈が？」

「おかげで少しは楽が出来て……」

それから私は彼女の愚痴を少しばかり聞いていました。

白玉楼の彼女もですが従者は苦勞するのでしょうか？

いや、八雲と白玉楼くらいでしょう。

今度根性叩き直しに行きましょう。

そういえばこうして何となく里を歩くのも久し振りな気がします。
普段は帰って寝るばかりでしたので。

「あ、映姫じゃん。珍しいね」

「誰かと思えば……、貴女ですか」

私が振り返れば本当に珍しげに私を見る白嶺陽奈がいました。

「何をしてるの？」

「何もしてません。休みを貰ったのです」

「ふーん、閻魔って休みはあるんだ」

「死神はないですが、閻魔は二交代制です。私が休みなら別の人がやっているだけです」

つまり小町は年中無休な訳で……、今度休みを申請してあげましょうか……。ですが代わりもいませんし……。

小町の部下を配属してもらえばいいのでは！？一人前になれば交代制にして……、いやいや、ダメです。さらにサボる可能性が高いです。

「別の人って……、どんな人なの？」

「私の上司なのですが……、尊敬に値しますね。その仕事能力といい、もう憧れですよ！」

「ふーん、映姫が憧れるって……」

「自らは冥界の情報管理局の長にして実質ナンバー2ですし、その仕事と幻想郷の閻魔を兼任してまでするのですよ！まあ、ですからヤマザナドゥというのは私だけの肩書きですが……、そんな事よりもそれはもう素晴らしくて！」

「す、凄いんだね……」

「そうですよ！」

「それでさ、名前は何ていうの？」

「名前……ですか？」

そういえば聞いた事ありません。私は先輩としか呼ばないですから……、えーっと……、

「いや、覚えてなければいいんだけどさ、もししたら知り合いかなあ、とか。ほら、たしか都さんと紅蓮もいるんでしょ？」

「あ、はい。彼らも凄いです。実に有能で助かるんですよ」

あの方々は先輩ほどではありませんが、それでも私よりも仕事が上手です。

「今度会いに行こうかなあ……」

「それはダメです。生者が冥界にそんなに軽いノリで来られては困ります！」

「冗談だって、ね？」

ね？、じゃないですよ。

「貴女は例外らしいですから特に咎めを受けないらしいですが、それでもその様な行動は出来るだけ控えてほしいのです」

「え、そうなの？」

「はい。何故か上からの命令で貴女は大丈夫らしいです。私は何故か知りませんが……、先輩なら知っているかも知れませんか……」

「じゃあ深く関わらないのがいいね」

「はい。まあ、本来死者は顕界には戻れませんが……、彼らを白玉楼に遣いに出した時に偶然出会うなら仕方ないと思いますよ」

私は少し始末書書かねばなりません、彼らも会いたがっていますから、どうかしてあげたいですね。

適当に理由を作りましょうか。

久々に気分も晴れたのでお土産（草餅）を買って私は戻りました。

「先輩、お土産です」

「映姫ちゃん、だよね？」

「それ以外に何か？」

「いい具合に垢抜けたって感じだねー。ちょうど待ちの魂をいなし休暇タイム！」

先輩が手をパンパンと鳴らすと智音さんに都さんに紅蓮さんがやって来た。

「草餅かいな、私好きなんや」

「俺もだ。陽奈に作って貰った事がある」

「ホンマか！？陽奈さんの手料理か、想像出来へん」

「陽奈は料理もそれなりに出来てたぞ」

むう……、休暇をするといつも白嶺陽奈の話になります。

「でもやっぱり味噌汁が一番おいしいよー」

そして、先輩は何故か家庭レベルまで知っています。もしかして先輩って……

「先輩、もしかして生前って白嶺陽奈と友人とかの関係があったのですか？」

「あー、んー？もっと親しい仲だったよ？」

「そうですか……。そういえば彼女と話をした時にですが、先輩の名前って何でしたっけ？」

「あー、言ってなかったかなー？」

「そういえば閻魔ちゃんは聞いてないんちゃう？」

「そう……。でしたっけ？」

配属された時に渡された書類には名前はあったとは思いますが……、忘れちゃったね……。実際聞いてはいないですし。

でも初めて会った時から、どうにも初めてではない気がしたんですよね……。まるで依然から知っていたかの様で……。

「あー、映姫ちゃんには改めて自己紹介するとしょーか。私の名前はね……………」

楽園の閻魔の休日（後書き）

おっと、映姫の上司については感想に書いても私はノーコメントで
すよ？

呼び出されて紅魔館

ある日、私ที่บ้านに帰ると小悪魔が玄関で待っていた。

「お帰りさないませ、陽奈様。お待ちしておりました」

「ん、今度はどうしたの？」

「重傷者が出ました」

紅魔館で重傷者か……。

レミリアやフランはまずないだろうし、小悪魔の様子からしてパチエでもなさそうだ。だからといって美鈴がそんなけがをする訳でもないだろう。

「とりあえず黙って来てもらえると助かります」

「あ、そう」

私は黙って着いていく事にした。

「あのさ、どうやったらこんな風になるの？」

「妹様がやんちゃしてくれただけよ」

図書館……ではなく空き部屋で私は銀髪の少女の容態を診た。

どうやら私の知らない間にメンバーが増えたらしい。

美鈴とパチエの妹が組手してたし。

「一応外傷は治したし、不十分ながら動く事は出来ているわ」

「そうみただけど人間なのによく生きていられるよね、これで」

酷いもので、両腕の骨はたぶんヒビがあるだろうし、内臓もぐちゃぐちゃだ。

「どうやらその娘、名前は咲夜というのだけれど、時間を操れるらしいのよ。それで痛みをどうのとか言っていたわ」

つまりはおそらくずっと能力を使っている訳か。

それじゃあ霊力もいずれ尽きてしまうだろう。

「でもさ、私だって専門家じゃないしたぶん治すのは……」

「出来ないの？」

「やればいいんでしょ、やれば」

私だってあんまり反則みたいな治療はしたくない。でもしなければ治らない。

まあ、あれだよ、神力で治せば一発だ。

「……ってあれ？」

「どうかしたのかしら？」

「神力が通りにくいんだけど」

人間には比較的通りやすいのに、妖怪並みに通りが悪い。

「彼女の能力のせいかも知れないわね」

そうなる解除は難しいのだろう。

痛覚を鈍らせているのであろうから解除はショック死に繋がる可能性が大だ。

私とて万能じゃない。死なせない様には出来るが死んでしまえば生き返らせる事は不可能だ。不死にしても戻せはしない。

しない……かな？

待てよ……、昔フランが私の不死性は壊せると言ったはずだ。

「パチエ、ちょっと待ってて」

だけど私は残念ながら概念の破壊なんてしたことはない。確実に出来るのはフランだけか。

そうなるフランを呼ばないと。

「小悪魔、フラン呼んできて！」

「え、あ、はい？嫌ですよ！？」

「だってさ、パチエ」

「私も嫌よ。だいたいなんで？」

そういえばそうだ。

フランⅡ狂人が成り立っているから行きたくはないだろうし、逝きたくもないだろう。

「しょうがない、私が全部やるよ」

別にフランを呼ぶのもいいが、パチエとかいるから憚られる。

私が地道に頑張るしかないさ。

「分かったわ。どれくらいかかるのかしら？」

「半月くらい」

ぶっちゃけると咲夜の霊力を回復させながら治さないといけない。彼女の霊力もそんなにないのだから。

「どうにかならないかしら？長すぎるわ」

「いや、この娘を人外にすればすぐなんだけどね」

でもレミリアは望まないだろうし。

彼女がレミリアの従者になったのは聞いた。あのレミリアの事だ。人間だから従者にしたのだろう事は想像に易い。

その時だった。

「しちやえばいいじゃない！」

フランが扉を蹴破って入ってきた。

「けが人がいるんだから静かにしようか」

私は扉を片手で受け止めて、とりあえず壁に立て掛けてからフランの頭を小突いた。

「あう……」

「妹様がどうして……？」

「そ、そうですよ！」

パチェが小悪魔と一緒に目を見開いていた。……仲いいよね。

「私が今度こそ壊さなきゃ♪」

フランが狂気を滲ませながら口を弾ませる。

「まあ、嘘はさておき、咲夜……だっけ？あいつにしてはまともな名前付けたけど……、私が約束したから。咲夜を死なせないって」

フランが真面目にパチエの目を見て言った。強い光が灯っているのがよく分かる。

「らしいからパチエは小悪魔と一緒にちよっと部屋から出て欲しいんだけど。どうやら私は必要みたいだし」

「うん、陽奈は必要だよ、私の考えた方法にはね」

「その考えてなに？」

「陽奈が咲夜を妖怪にしてから妖力とかで治してから私が妖怪である咲夜を破壊する」

その発想はなかったわけではないけど問題があるんだよね……。

「妖怪と人間って根本的な構成が違うから成功するとは限らないし、それに妖怪の時に治してもそれを戻すなら意味ないよ？」

妖怪となって治されても、治った事までなかった事になってしまうだろう。それでは意味がない。

「だから壊すんだよ？」

「うん？」

「“妖怪”である咲夜を壊せば“人間である”事実が残るから人間に戻るけど、それは『戻す』とは違うんだよ。壊す事は過去に干渉出来なくもないけどそれは進行していく事で過去にもならない事だってあるんだよ。仮想的な過去の破壊は現在の結果には反映されないし、それらには未来に干渉は出来ないから」

「ごめん、フランの言葉が理解出来ない」

「つまりは“この少女は妖怪である”事実の破壊はしないで“十六夜咲夜は妖怪であった”事実を壊すから大丈夫って事」

「ごめん、まだ分からない」

まったく吸血鬼の頭はどうなってるんだろう。

「凄く分かりやすく言うと、“妖怪”な部分だけ壊して、“治った”事はなかった事にならない様にするの。超限定的な破壊作業だよ」
つまりはよく分からないけど大丈夫なんだろう。

「で、どうするの？」

「何が？」

「何の恐怖を使って妖怪にするのかだよ」

「もちろんあれだよ」

フランがとあるものを指さした。

「なるほど」

さて、無事に咲夜の治療が成功し何だかあったけど特に問題がなく事が進んだので、私は里に寄ってから帰る事にした。

「じゃあまたね、パチエ、フラン、小悪魔」

ちなみにパチエと小悪魔には事後説明はした。

「そうね、もう少し頻繁に来てても問題ないわよ？」

「まったねー」

「パチュリー様ったら正直に言えがいいのに……、って痛いですよ、本の角で殴らないでくださいよ」

私は門に向かいながらもその様子を聞きつつ手を振った。

「あ、陽奈さんお久しぶりです」

「美鈴久しぶり」

そういえば今まで見なかったな……。この人門番のはずなのに。

「なんですかその目は……。仕事はしてましたよ。少し庭の手入れを頼まれていたので……」

「あ、美鈴、その人は誰？」

美鈴が話している最中に紫色の髪をした少女が通りかかった。

「あ、メグさん、こちらは白嶺陽奈さんです」

「よろしく」

「よろしくねー。ふんふん、妖怪なんだねー。あ、私はマグノリア、姉さんから話は聞いてるよ」

「姉さん？」

はて、覚えはないが。

「彼女はパチュリー様の妹ですよ」

「いやいや、こんなにアクティブな訳ないでしょ」

「まあ、姉さんとは似てないってよく言われるからね」

まあ、特徴とかは似ている気がするけどパチュエと違って身体はしっかりしている。

「ああ、名前は長いからメグでいいよ」

「私も陽奈でいいから」

私たちは握手した。

「ときに陽奈」

「ん？」

「手合わせしたいなーとか」

ああ、パチエと違って肉体派なのか。

「いやいや、殺しあいとかなら別にしてたぶん私は勝てないから」

「ふーん」

刹那、もの凄い速さの蹴りがとんできた。

私はそれを身体を引いて避ける。

「危なっ!？」

「どうやら実力はあるんじゃない」

咄嗟に避けたけどメグの目が好戦的になってる……。

「助けてめーりん！」

「私には無理です！」

「人でない！」

「妖怪ですから」

どうしてくれよう、この状況。

逃げてもいいけど面倒な事になるかもしれない。

「しょうがない、相手をするよ」

「ほんと？じゃあいつくよー」

もう面倒だし、あれでいいや。

「ますたーすぱーくー」

とてもやる気がないからマスパ一発で片付けよう。

「そんなもの効かないよ！」

「なっ!？」

その魔力の奔流の中を平気で進んで私のマスパを放った右手の手首を掴んで砕いた。

「……っ」

油断は出来ない。

マスパの中を平気でいるだなんてあり得ない。

「物騒な技使わないでよー」

「だからといって手首を砕くな」

「妖怪だから平気でしょ？」

「それでも痛いけどね」

のんびりと会話をしている様でそうではなく、メグのあらゆる攻撃を頑張って左手でさばいていたりする。

「よし、能力も使っちゃっていい?」

「あー、待って」

私は神力で手首を治した。

「ほえ……、すごい」

「そう?」

「うん、だから本気でいくね」

「いや、訳分からないし」

私がツツコミをいれる瞬間、光に包まれて今までにない速さで彼女が向かってきた。

私は妖気を思い切り解放して受け止める。

「ただ者じゃないねー」

「当たり前でしょ」

「でも残念だね」

私の身体から力が抜けた。
そしてそのまま膝をついてしまう。

「あれ？」

解放した分の妖気が全てなくなっている。

「どうかしたの？」

メグが怪しい笑みで私を見下ろしている。

「何をしたの……？」

「さあ、なんでしょー」

私はもう一度妖気を少し解放したが、彼女が私に手を翳して、その手から溢れる光が触れた瞬間に消えてしまった。

「不思議でしょ？」

「いや、だいたい検討はついたよ」

これは破魔の力だ。魔力や妖気を同等量犠牲にすれば削れる神聖な力だ。

それだけならば絶対量が多ければ問題は少ないのだが、霊気や妖気、神気に魔力と違い枯渇しても使えなくなるだけで生命維持に支障はない。また、絶対量は精神に依存する点がある事だ。

……と本に書いてあった。

参考書「よくわかる神聖な力」

もちろん我が家の本である。

これが真実なら私は不利だ。

触られただけで妖気や魔力を削られるし、もちろんその類いでの攻撃も打ち消される。

私の基本戦法が近接攻撃と遠距離からの魔法な為、もちろん彼女の力に負けてしまうだろう。

さて、どうしようか。

「検討ついたとか言ってるけど何でかな？」

「どうせ破魔の力だろうから、そうすると私と相性良くないな、って思ってるね。ほら、私は妖怪だから」

「そうだねー。まあ、能力は使わないと妖怪相手には厳しいからねー」

「そうか……、どうしよう……」

妖気と魔力は消されるし、霊力を用いた攻撃もそう強くはない。というか妖怪じゃないからあまり効かない。となると……アレしかないか。

「私は神になる！」

「何言ってるの？ 頭大丈夫？」

「ああ、うん。言いたかっただけ」

「とは言っても冗談ではないみたいですよ」

そこで美鈴が久しぶりに言葉を発した。

「まあ、その通り。私は大妖怪だけど、この国の古神でもあるからね。まあ、八百万の神に含まれるのかは知らないけど」

一応、寝ている間に神とされたり、最近信仰が復活したりする訳だ。

「私の力が効かないじゃん」

「まあ、頑張れ」

メグが先ほど同様の速さの拳をとばしてきた。

私はそれを受け流してから神力を込めた掌打を鳩尾に打ち込む。

「あれ？」

するともの凄い勢いで斜め45度にぶっ飛んだ。

「陽奈さん、やり過ぎです」

「……加減が分からない」

「その一厘程度で十分ですよ。神気は霊気より強いんですから」

「あ、そうか」

ついつい同じ量でやってしまった。

「うん、もう戦いたくないねー」

「本当にごめん」

どうやらあの後メグは人里に墜落したらしい。しかも寺子屋に屋根から突っ込んでしまい、修理はともかく頭突きをされたらしいが…
…、まあ今も頭に響くそうだ。

「いいさ、私は美鈴と一緒に組み手してるから」

「私まで巻き込まないでくださいよ!？」

そう言いながらも少し嬉しそうな顔をしている。

一人で組み手は出来ないからね。たぶん、嬉しいんだろう。

「うんじゃ、私は帰るね」

「じゃねー」

「またいらしてください」

私は今度こそ門をくぐった。

そして突然私の身体が燃えた。

とりあえず火を妖気で吹き飛ばしてから、周りを見回す。

「誰？私に恨みでもあるの？」

「ああ、あるさ」

突然私は背後に気配を感じたので慌てて距離をとった。

「どちら様？……っていう訳じゃないよね」

「ああ」

彼は小さく頷いた。

私は彼を知っている。何故ならば彼を妖怪にしたのは私だからだ。

そして私に対しての恨みも大きかったはずだ。

「それにしても……、昔の標的の所に居候しているとはね」

さらに言うと、レミリアたちが彼らに狙われていた標的であったはずだ。

「皮肉なのか？俺はもう人ではなくなったのだ。そして彼女らを殺す理由もなくなった。お前には感謝している所もあるな。おかげでこうしてまた会えた」

「なに？愛の告白かなにか？残念ながらお断りだからね」

「貴様の様な餓鬼に欲情なんぞするものか」

あ、そうですか。

「貴様を倒す機会が得られたという意味だ」

「ふーん、今からやる？」

「いや、遠慮しておこう。妖怪になったから分かるが貴様には敵いそうもない。まだまだ弱小妖怪だからな」

「じゃあなんで私を燃やしたの？」

「それで死んでくれたりすれば行幸、といったところか。一度やってみたかっただけだ。まあ、無理だったが」

「ふーん、ならいいや。また勝負したかったら連絡ちょうだいよ。暇なら付き合うからさ」

「鬱陶しいとか思わないのか？」

「うーん、少し感じるけどね、妖怪にとって退屈しのぎに勝るものはなかなかないでしょ？」

妖怪は精神に依存する存在である為に、精神の死は実際の死に深く関わる。

本当に何もかもすることがなければ考えるのを止めてしまうだろう。それが精神的に危うい状態であり、妖怪には致命的だ。

「そうなのか？俺には分からないな。まあでも理由は分かった。連絡はどうすればいいのだ」

「美鈴に聞いて」

「うむ」

それからようやく私は帰路についた。

呼び出されて紅魔館（後書き）

後で咲夜視点も書こうと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3505m/>

東方恐怖録

2011年11月3日12時03分発行